

大学評価と大学教授職

— 大学教授職国際調査〔1992年〕の中間報告 —

有 本 章〔編〕



RHE

広島大学 大学教育研究センター

大学評価と大学教授職

— 大学教授職国際調査〔1992年〕の中間報告 —

有 本 章 編

は し が き

高等教育は、戦後一貫して学生、大学、大学教員が増え続けた事実裏書きされているように、繁栄を謳歌している。例えば、1991年現在、大学514校、短大592校、大学生220万人、短大生50万人、大学教員12万6000人、短大教員21万人を数えている。それは、1955年時に比較して、大学2.3倍、短大2.2倍、大学生4.2倍、短大生6.5倍、大学教員3.3倍、短大教員3.8倍へと増加を遂げたことを意味する。しかし、このような量的繁栄の陰で大学を取り巻く社会環境の急速な変化が進行している。少なくとも1992年にピークの205万人を記録した18歳人口が長期低落傾向に転じると予測される中で、量的成長の時代は終焉を迎えようとしているのである。急速に膨張し、大衆化を遂げた高等教育は一転して「淘汰の時代」「冬の時代」に突入することを余儀なくされているのであり、この転換期には旧態依然とした大学観や大学経営ではなく、教育研究機能の見直しや大学組織の再検討が必要となることは必至である。

折しも、大学評価が高等教育政策の表舞台に登場し、文部省の省令（1991年）を以て、大学設置基準の大綱化と抱き合わされた形で各大学に自己点検・評価が義務づけられることになったのは、このような高等教育の構造変換と符合している出来事である。従来の大衆化過程でひたすら量的拡大を遂げ、見失いがちであった質的充実の問題がクローズアップされることになった。個々の大学はもとより、その舵取り役を自ら任じている教員ももちろん例外ではない。

かつて、ハロルド・パーキンが大学教授職（academic profession）をキー・プロフェッションと呼んだが、それは各種の専門職従事者の輩出機能を担う基幹専門職であるからである。しかも、この専門職の中の専門職には、特に教育・研究に対する使命、責任、自覚が社会から信託されている点にも特徴がある。しかし、大学大衆化の過程で、社会的威信を徐々に低下させ、社会的アカウンタビリティやレリバンスを十分果たしていないとの批判を浴びはじめた大学教授職は、今後一層厳しい状態に追い込まれようとしている。転換期の大学において、組織内部の再建と、大学の本来の機能の見直しをますます必要とし、それに失敗すれば、大学淘汰はもとより、大学教授職の権威や威信がさらに失墜する時点に直面しているからである。世界的に大学教授職の見直しと再生が問題になっているのは、このような状況に見舞われていることと無関係ではなく、キー・プロフェッションとしての真価が問い直される時代を迎えたと言わなければならないだろう。換言すれば、大学評価と大学教授職との関係がますます密接になると同時に、両者の関係が問われ、かつてないほど大学教授職の使命や役割に関心が払われる時代が幕を開けたのである。

本プロジェクトは、平成3年度学内特別経費の交付を受けた「大学評価と大学教授職に関する比較研究」（責任者 有本章）の報告の一部であり、他のプロジェクト「カーネギー大学教授職国際調査」（代表者 有本章）と提携し、その調査研究の一環として実施されたものである。サンプル方法や質問紙構成等は、国際調査をほぼ踏襲している。したがって、

それら調査結果が完了した時点で外国との比較検討が可能となるが、現時点では未完了であり、それは後日を期さなければならない。その意味で本報告は、国際調査全体に位置づけた場合、中間報告の域をでるものではないが、日本の大学教授職に関する素集計データを分析して報告する。

本プロジェクトの研究分担者ならびに研究協力者（*印）は次のとおりである。

関 正夫（広島大学・大学教育研究センター長/教授）

有本 章（広島大学・大学教育研究センター教授）

西川恭治（広島大学理学部長/教授）

瀬山一正（広島大学医学部教授）

稲田勝彦（広島大学総合科学部教授）

江原武一（京都大学教育学部教授）*

山野井敦徳（富山大学教育学部教授）*

金子元久（広島大学・大学教育研究センター助教授）

山崎博敏（広島大学教育学部助教授）

伊藤彰浩（広島大学・大学教育研究センター助手）

相原総一郎（広島大学・大学教育研究センター助手）

山内乾史（広島大学・大学教育研究センター助手）

阿曾沼明裕（広島大学社会科学研究科大学院生）*

小方直幸（広島大学社会科学研究科大学院生）*

研究分担者ならびに研究協力者の各位、ならびに本報告の分担執筆者の方々には、ご協力を感じしお礼を申し上げたい。さらに、本プロジェクトの実施にあたっては、各方面からご協力を賜ったが、次の方々や機関には格別ご高配を賜ったので、この場を拝借して感謝の意を表したいと思う。江原武一（京都大学）、奥川義尚（京都外国語大学）、馬越徹（名古屋大学）、加野芳正（香川大学）、香取草之助（東海大学）、坂柳恒夫（愛知教育大学）、新堀通也（武庫川女子大学）、大膳司（琉球大学）、高倉翔（筑波大学）、橋爪貞雄（岐阜教育大学）、藤村正司（新潟大学）、森川泉（広島修道大学）。北海道工業大学、東北大学、富士大学、慶應義塾大学（本部、日吉校舎、医学部、理工学部、湘南藤沢校舎）、国立音楽大学、東京家政大学、大阪電気通信大学、広島工業大学、西南学院大学、の各事務局。

なお、調査実施や集計の過程では、広島大学の大学教育研究センターやその他の部局等の方々から、ご支援やご協力をいただいた点にも、感謝する次第である。現段階で報告をまとめることには、種々の点で不備があると思われるが、上記科研（学内特別経費）の報告の一部でもあり、この領域の基礎研究が少ないこともあり、ひとまず中間報告として報告することにした次第である。忌憚のないご批判をいただければ幸甚である。

1993年3月15日

編者 有本 章

目次

はしがき

第一部 大学評価と大学教授職－理論的考察

- I 章 大学評価の視点と大学教授職……………有本 章…… 3
- 1 はじめに
 - 2 大学評価の定義
 - 3 社会的要請
 - 4 高等教育政策からの要請
 - 5 大学組織の論理
 - 6 大学の社会的機能と専門分野の論理
 - 7 大学教授職の論理
 - 8 大学教授の自己評価－本報告の意味
- II 章 大学教授職の現在……………山野井敦徳… 18
- 1 はじめに
 - 2 大学教授職の概念、役割及び研究対象
 - 3 大学教授職研究の接近法と研究者集団
 - 4 大学評価から見た大学教授職研究の現状

第二部 大学教授職国際調査の報告－日本編

- III 章 調査の意図と方法……………有本 章…… 35
- 1 プロジェクトの趣旨と概要
 - 2 質問紙調査の実施
 - 3 回答者の属性
- IV 章 仕事の状況……………相原総一郎… 41
- 1 はじめに
 - 2 時間配分と待遇
 - 3 学術活動の環境
 - 4 まとめ
- V 章 教育・研究活動……………相原総一郎… 49
- 1 はじめに
 - 2 教育活動
 - 3 研究活動
 - 4 まとめ

VI章	サービス	山内 乾史	57
1	はじめに		
2	サービスへの時間配分		
3	サービス活動を行った組織		
4	サービス活動に費やした全時間に占める有給サービスの比率		
5	サービス活動がどのような環境によって影響を受けているか		
6	サービス活動についての考え方		
7	どんな活動が定期的に評価されているか		
8	まとめ		
VII章	管理運営	江原 武一	64
1	はじめに		
2	管理運営の権限と大学教員の影響力		
3	管理運営に関する意見		
VIII章	アカデミック・ライフの国際交流	小方 直幸	72
1	はじめに		
2	国際的な学術活動の実態		
3	高等教育の国際交流に対する意識		
4	国際問題への関心		
5	まとめ		
IX章	大学評価	阿曾沼明裕	79
1	はじめに		
2	教員評価の現状について		
3	大学評価に対する必要性、現状、将来の展望に対する意見		
4	まとめ		
X章	総括と展望	有本 章	87
1	大学評価の重要性と大学教授職の役割		
2	大学教授職の自己評価－調査結果の特徴		
3	課題と展望		
付録			
1	質問紙調査の方法		
2	集計表		

図表目次

	＜表＞		ページ
IV-	1	仕事の時間	42
IV-	2	学位・資格の取得に費やす時間	42
IV-	3	大学教員の総収入	42
IV-	4	大学教員の給与の評価	42
IV-	5	給与改善の見通し	42
IV-	6	大学教員の各種の待遇の評価	42
IV-	7	大学教員の学生の評価	47
IV-	8	大学教員の満足度	47
IV-	9	大学教員の専門分野とキャリア観	47
IV-	10	5年以内に所属大学をやめる可能性	47
IV-	11	大学教員が所属大学をやめる条件	47
V-	1	担当する教育段階	50
V-	2	一週間あたり授業時間数	50
V-	3	受け持っている授業科目数	50
V-	4	単位認定のための要件	50
V-	5	教育活動に与える影響	52
V-	6	教育評価に関する意見	52
V-	7	学部学生の学力や実力に関する意見	52
V-	8	学部学生は何を学ぶべきか	52
V-	9	大学教員の研究活動の状況／過去3年間	53
V-	10	大学教員が交付された総額研究費／過去3年間	53
V-	11	交付された研究費の財源	55
V-	12	研究活動に与える影響	55
V-	13	学術活動に関する意見	55
VI-	1	社会サービスへの週当たり時間配分	57
VI-	2	サービス活動をどのような組織で行ったか	58
VI-	3	サービス活動に費やした全時間に占める有給サービスの比率	59
VI-	4	サービス活動がどのような環境によって影響を受けているか	60
VI-	5	サービス活動についての考え方	61
VI-	6	どんな活動が定期的に評価されているか	62
VII-	1	大学の管理運営に対する満足度	65
VII-	2	管理運営の権限(1)	67
VII-	3	管理運営の権限(2)	67
VII-	4	管理運営への影響力	67
VII-	5	管理運営に関する意見(1)	69
VII-	6	管理運営に関する意見(2)	69
VII-	7	学問の自由の現状	69
VII-	8	大学教員の仕事の定期的な評価	70
VII-	9	高等教育や学術政策に対する政府の関与	70

VIII - 1	大学教員の国際的な学術活動(過去10年間).....	73
VIII - 2	大学における国際的な活動(過去3年間).....	74
VIII - 3	高等教育の国際交流に対する考え方.....	75
VIII - 4	政府が重視すべき国際問題(最も重視すべきと回答した割合).....	77
IX - 1	定期的な教員評価の有無.....	79
IX - 2	定期的に評価されている活動の領域.....	80
IX - 3	定期的な教員評価の担当者(教育活動について).....	81
IX - 4	定期的な教員評価の担当者(研究活動について).....	81
IX - 5	自己点検・評価を省令化したのは良かったと思うか.....	82
IX - 6	自己評価によって社会の信頼を得る必要があるか.....	82
IX - 7	自己評価は定着すると思うか.....	83
IX - 8	他者評価は必要と思うか.....	83
IX - 9	専門分野の問題に関しては同僚評価が最適であると思うか.....	84
IX - 10	自己評価に関する取り組み状況(現在と5年後).....	85

<図>

IV - 1	大学の教育・研究環境の評価.....	44
IV - 2	施設、設備、人員の評価.....	45
V - 1	教育と研究に対する関心.....	50

第一部

大学評価と大学教授職 —理論的考察

I章 大学評価の視点と大学教授職

有本 章

1 はじめに

周知のとおり現在、大学評価が注目され、特に「自己評価」や「自己点検」は、高等教育や大学の動向をさぐるためのキーワードと化した観がある。文部省は「省令」（1991年）によって、大学設置基準の「大綱化」とワンセット化した「自己点検・自己評価」を要請するに至り、すでにその効力が始めている。全国の大学において自己評価委員会の設置等の改革が急速に進行しつつあり、大学の内部改革が未曾有の勢いで進行しているように見えるからである。こうして大学評価の問題が急浮上し衆目を集める事実は、省令の威力の大きさを物語り、外圧がないと動かないといわれる大学の体質を如実に示しているかもしれない。加えて、予想される18歳人口の長期減少傾向は大学のサバイバル戦略の重要な引き金として、そのような現象に一層の拍車をかけていると解される。もちろん一方で経済や政治を中心にした社会変化の影響がその背景につよく作用している半面、こうした外的要因のみで大学の活動が活発化しているのではない。大学本来の使命や役割が改めて問い直され始め、その社会的存在理由を吟味することが大学内部で模索される動きが顕著になりつつあることを、そのような現象の中に観測できるのもある。それだけ大学が社会の要請や期待に十分応えているか否かを大学内外で詮索される度合が増加したことを意味するはずであり、とりわけ、大学教授職（academic profession）の果たす役割が重要性を増しているとみて差し支えあるまい。

そこで、大学評価と大学教授職の関係を整理検討し、大学教授職の使命や役割を吟味する必要性がますます高まっていることが指摘できる。のみならず、実際にその検討を試みるのが課題となる。本稿は、この角度からの若干の試みを行なう予定であるが、そもそも大学の機能が教育、研究、社会サービス、国際交流、管理運営、等にまたがって広範であることや、大学評価の問題が包括する領域やそれに関する研究範囲が広範であることを勘案すると、そのことは容易ではない。すでに大学評価の問題に関しては先行研究も散見される（IDE誌、1984：慶伊編、1986：市川編、1987：喜多村、1989、1992：広島大学・大学教育研究センター編、1990、1991a、1991b：飯島・戸田・西原編、1990：喜多村・関・有本・金子、1991：新堀、1992b）。大学教授職に関する研究も徐々に蓄積されてきた（例えば、新堀、1965、1984；天野、1977；有本、1981、1987；山野井、1990など）。これらの研究を踏まえ、大学評価の視点と大学教授職の関係を包括的に論究することは必要ではあるとし、広範な内容にまたがるだけに簡単ではない。その意味で小論の手掛ける範囲は限定することとし、第1は標

記の主題と関わって大学評価と大学教授職の関係を研究する際の視点や問題点を若干検討してみること、第2は本報告の大学教授職国際調査と関わる問題を総論的に論じること、主眼をおくこと、とすることにしたい。したがって本稿は本報告の導入としての序論的考察の役割を果たすことになる。

2 大学評価の定義

まず、大学評価を俎上にのぼす以上、その定義は欠かせない。大学評価 (academic evaluation) は文字通りには「大学を評価すること」だが、ひとまず「大学の目的を効果的に達成する過程及び成果を究明し評価すること」と定義できる (有本：1990a)。このように定義すれば一見単純に見えるが、大学評価の構造自体は決して単純なものではない。そのことは、少なくとも評価対象の大学組織が「コングロマリット」といわれるように複雑極まりないばかりか、それを構成する専門分野、それを専攻する教授、彼らの所属大学、学界、さらには高等教育の国家システム、等への広がりを見界に入れると一層複雑さを増すことを考えれば自明である。加えて、大学評価の種類 (例えば、自己評価と他者評価)、評価の主体 (教授団、学生、管理運営者、理事、同窓会、スポンサー、政府、地方、市民、報道機関など)、評価者の養成、評価の場所、評価方法、評価時期、といった問題を詮索し、さらには、「評価の評価」や「評価の風土」まで論議を深めると一層複雑さを増すはずである。これらの分析や枠組みを考慮にいたした大学評価の視座や研究方法論は重要であり、体系的研究は当然欠かせないの言うまでもない。しかし本稿では以下の論述の中でその点に多少触れるものの、詳論は別稿に譲りたい (有本：1991a、参照)。

3 社会的要請

次に、大学評価は今日なぜ必要であるか、という問題がある。この問題もすでに論議されてきた (広島大学・大学教育研究センター：1990, 1991a, 1991b, 1992)。一般に大学は社会的制度である以上、大学評価は欠かせない。大学は社会的に規定され、①大学の社会的条件、②大学の社会的機能、③大学の社会的構造、の三側面を持ち、また、外的要因と内的要因によって規定されている。前者の外的要因は、主として①の大学の社会的条件に起因し、大学評価を要請する。その種の外的要因としては、大学をとりまく経済、政治、科学技術など社会環境の変化が想定されるが、それらとともに、あるいはそれらを踏まえて行われる政府の高等教育政策が重要であるはずである。特に今日の大学評価の導入の背景にはこの要因の関与する力があずかって大きい。他方、内的要因は大学の社会的機能やそれを支える組織自体の内部論理と関わり、②③と関係が深い。具体的には教育研究機能、専門分野、組織、大学教授職などの論理や要因の内的要請から大学評価が必要とされる。もちろん両要因は分析的には区別できても、現実には密接不可分の関係にある。

外的要因の社会的条件では、第1に経済的要因とかがかわる側面が大きい。社会的比重を高めた現代社会の中で大学が生成発展を期すには、当然ながら経済体系との関係を見無視できない。世界的にも1970年代から生じた国家の財政難は、大学の合理化やアカウンタビリティへの要請を次第に強めており、大学経営の見直しが論議され、組織の無駄を排して経済投資に見合った効果や効率を上げることが容赦なく問われる。日本も例外ではない。また第2に、情報化社会の進展は、情報や知識を生産し伝達する有力拠点の一つとしての大学の存在が一段と比重を増す時代に他ならない。「学問の府」が新時代に対応する力量を発揮するか否かは、その社会の命運を左右しかねない。その意味で大学の社会的責任が声高に問題にされるのは決して不思議ではない。関連して第3に、産業社会の成熟は生涯学習社会化を促進することも見逃せない。ライフサイクル全体を通じて教育、自己教育、学習が必要とされる時代の到来は、成人世代に開かれた再教育、リカレント教育、リフレッシュ教育、等の場としての大学が問われ、旧態依然とした授業、カリキュラム、施設、教員、職員では、成人の多様なニーズに応えられない。さらに第4に、交通・運輸事情の発展は、知識、アイデア、人材の流通性を促進し、必然的に国際化を押し進め、学者や留学生の移動を頻繁にするから、世界的に通用性、共通性、互換性をもたない高等教育システムや大学は競争力を失い、淘汰されざるを得ない。しかも第5に、産業構造のサービス化の進行は、大衆消費社会の出現をもたらし、消費者の地位や発言権の比重が増し、消費者主義の台頭を招来する。消費者、あるいは市民や学生による大学評価の時代が到来する（リースマン、1986；喜多村、1986）。これらの国際的な共通傾向に加え、第6に、日本では急速に進行する18歳人口の減少が拍車をかけ、すでに欧米でいち早く経験した、大学の量的拡大や大衆化の次に到来する質的見直しの時代に遅ればせながら直面している。量から質へのパラダイム転換が模索されなければならない。

こうして、緊縮財政、情報化、生涯学習体系、国際化、産業構造、人口、等々の種々の環境変化が、大学のアカウンタビリティ（社会的責任）を求め、社会に対する大学のレリバンス（適切性）を期待する度合を高めるのに伴い、大学がその種の要請や期待を見無視できなくなるのは必然である。国公立セクターはもとより、公其的性格を強めた現在の私学セクターも社会から背を向け「象牙の塔」に籠ることはできない。

4 高等教育政策からの要請

外的要因に関して第2に、高等教育政策の要請がある。これは大学審議会の答申を踏まえた文部省の省令によって次のように規定される。「第2条 大学は、その教育研究水準の向上を図り、当該大学の目的及び社会的使命を達成するため、当該大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行うことに努めなければならない。2 前項の点検及び評価を行うに当たっては、同項の趣旨に即して適切な項目を設定するとともに、適切な体制を整えて行うものとする。」（省令、大学設置基準の改正）

この政策の法的拘束力は、各大学が自己評価の制度化に踏み切る直接的契機となった点で少なくない。その証拠は省令の発令される直前と現在の動きを比較すれば一目瞭然である。直前における自己評価への組織的対応を尋ねた全国調査（広島大学・大学教育研究センター、1991b）によれば、自己評価制度が「設置されている」のは47校、回答を寄せた大学441校（回収率87.0%）の11%相当に過ぎない。「計画・検討中」は127校（29%）である。この段階では、「設置されていない」が267校（61%）と大半に留まっており、自己評価の委員会等を設置した大学は16校（全国の大学の3%相当で、国立10校、公立1校、私立5校）に過ぎなかった。省令後の現段階では、形式的には委員会等の設置率、等に変化が生じていると予想できるし、本報告の調査結果もその傾向を示しており、5年後はさらに一段と好転していると予想されている。しかし全体に大学評価は外圧で開始された印象は払拭できない状態に留まっており、大学教授の多くは、省令による自己評価導入には相当大きな不満を抱いている事実が調査結果から汲み取れる。その意味で、今後いかなる発展の経緯を辿るかは依然として不確かである。

5 大学組織の論理

外的要因と内的要因を接続する接点には、社会的存在としての大学制度あるいは組織には評価が回避できないという前提が存在する。つまり大学の組織的論理がある。これは今更指摘するまでもなく、大学に限らずあらゆる組織に共通する論理である。組織が社会的存在を企図するならば、経済的、政治的、教育的にそれを具現して行く必要があるからである。例えば、大学評価は誰しもその必要性を否定できない点を大学基準協会はその手引きで次のように明確に指摘している。「本来、どのような組織体であっても、その機能を正常に維持し、その結果に基づいて必要な改善などの施策を決定し、実行するという過程が不可欠である。このことは、教育研究活動を使命とする大学についても例外ではない。」（大学基準協会、1992、p.4）。

この組織の論理から見れば、大学評価は決して新しい試みでも、行動でもなく、制度的発展を遂げた大学の過去の歴史に証明されている事実である。つまり大学評価は、大学設置と設置後の基準設定の形ですでに問われてきたことが理解できる。それには、主として①チャーターリング（設置認可）、②アクレディテーション（適格判定）、③チャーターリング方式とアクレディテーション方式の併置、という3方式が存在する。今日、②は単独では存在せず、①と③が主たるタイプである。また、①のチャーターリング方式は、教皇、皇帝、国王の権威が衰退した近代以降では概して国家に肩代りされ、政府統制方式になっている（新堀、1977、参照）。

このような過去の慣行を想起するならば、現在の問題は、大学評価の是非論ではなく、これらの中の③の併置型実現の是非論になるに相違ない。この米国方式はチャーターリングに対してアクレディテーションに重点を置き、設置自体よりもむしろ設置後の水準維持

と向上を積極的にめざす側面に比重を置くため、不断の自己評価を制度化している点に特徴を見出せる。猪祥地米国においても単独では存在せず、チャーターリングとの併置方式になっているが、伝統的にチャーターリング方式を採用してきた国々から注目を集めている (Van Vught, 1992)。

ところで、アクレディテーション型を模索する点では、日本も例外ではないから、現在いかなる問題があるのか、また日本の大学教授職がそれと関わっていかなる問題を持っているかは興味ある主題であろう。accreditationは「基準認定」とか「適格判定」と訳されるように、基準や適格性を問題にする。基準認定には、「教育機関別基準認定」(institutional accreditation)と「専門分野別基準認定」(specialized accreditation)の二種類がある。この方式に関する詳細はここで論じる余裕がないので、先行研究に譲ることにする(例えば、天城・慶伊、1977：喜多村、1990：新堀、1992：喜多村・早田他、1992：Selden, 1960：Young, 1983、など参照)。いま問題なのは、世界的に注目されている当方式が、日本ではなぜ定着しないか、また、大学教授職がそれに如何に関与しているか、に限定される。というのは、この方式を導入し挫折、形骸化した後、再度見直す時期にきた現在、アクレディテーションの全体構造の制度化は困難としても、その方式の心髄ともいえるself-study(自己研究、自己点検)、あるいはself-evaluation(自己評価)を果して実質化できるか否かが問われるはずであるからである。大学の個性化、多様化、活性化によって従来の画一的、閉鎖的、無競争的な体質を脱皮するには、大学評価の中でもまず自己研究や自己評価が回避できない条件であると考えれば、一旦挫折しただけに再建は困難であり、かなりの条件整備が欠かせないことになる。

一つには、明治以来、先進国の学術水準を追求する過程で大学システムが国家の大学政策に組み込まれた結果、中央集権的官僚制化を遂げた、という歴史的経緯がある以上、その見直しが必要である。大学設置基準においてチャーターリング方式が発展し、しかも政府統制方式を色濃くした背景には、官僚制化が作用しており、戦後のアクレディテーション導入もこの構造に阻まれて成功していない。今回の規制緩和はこの構造の改善を志向する動きを示しているが、基本的には従来の構造の若干の手直しに過ぎない。後発国の合理的、功利的、効率的な観点から、中央集権を強化する政策はある意味で必要であったとしても、高等教育に対する政府の統制、監督、管理の強化は、大学内部に一方で必要以上の反発を誘発しかねない。実際、今回の調査結果では「重要な学術政策に政府が干渉し過ぎる」(45%)と判断している大学教授の割合はかなり多いのである。上述の通り、省令にも批判的である。こうした構造の中では、教員の自主性を抑制し、自己研究や自己評価を阻む方向に作用する空気がマンネリズム的に支配しかねない。大学団体主導のアクレディテーション方式が遅々として発達しないという帰結をもたらした原因の一端はそのような理由に存在するだろう。

二つには、大学風土の特質に注目する必要がある。官僚制化が大学の管理運営組織と呼応する過程で大学側からの自己評価が醸成できなかったのは、止むを得ない側面がある。

大学内部の風土や体質が官僚制化と無関係で発展することは困難であり、自己評価の風土や体質は十分醸成されないままに終始してきた。アカデミック・ギルド特有の「学問の自由」や「大学の自治」の論理を重視する伝統は徐々に形成された半面、後発産業社会の影響を強く刻印された「国家の大学」の性格を脱皮できないまま、大学評価の官僚制化が定着した。自主的に教育研究の基準を構築するギルド本来の本質的活動は十分に発達しなかった。政府統制方式の設置基準のみが重視され、以降の質的向上や基準構築過程を保証する装置は検討されないままに放置されたのである。設置認可よりも基準構築の過程に重点を置いたアクレディテーション方式が追加されることによって、大学内部からの質的水準の向上が機能するよう期待されたにもかかわらず、結果的には所期の理念は定着するに至らず形骸化した。大学の自主的参加を基調に発足した大学基準協会（1947年発足）も十分にその本来の役目を果たさないまま、しだいに「開店休業」の状態に陥ったのは、この大学の風土と無関係ではあるまい。

三つには、大学組織体の特徴を見直すことである。大学は官僚制が支配し易いとしても、それが大学の本質と馴染まないのも事実である。官僚制と「学問の自由」とは不断に緊張をはらむ関係にある。大学が本来「ルーズに組み合わされた組織」（loosely coupled organization）とか、「組織化されたアナーキー」（organized anarchy）、「屑籠」（garbage can）と言われるのは、大学組織体の特質を如実に示している。この中心には種々の専門分野（academic discipline）が存在し、それを媒介に集団の集合体としてコングロマリット（conglomerate）と化しているのである（Clark, 1983; Becher, 1989; 有本, 1989）。

「学問の自由」を標榜すること自体、相互干渉を極力回避する専門分野の性質や文化に起因しているのもある。専門分野には細分化し、独自の文化を形成する傾向があるが、これは一種の「タコツボ型」の閉鎖構造を形成する現象を潜在的に内包しており、結果的には大学教員の閉鎖的体質や風土を醸成する原因となる。しかし同時に専門分野は発明発見や未知の領域の開拓を志向するから、合理的、革新的、開放的な性質を内包しており、それは大学組織体の閉鎖的体質を改革する機動力になりうる。また、専門分野の発展は自ずから学際領域の開拓や、既存学問領域の統合を推進するから、必ずしも分化や閉鎖に傾くばかりではなく、拡大や開放を可能にする。自然科学、社会科学、人文科学で、その文化や風土が異なるのは、これら専門分野の論理から生じる。ベッチャーの分類に従えば、専門分野には「ハード・純粋」「ハード・応用」「ソフト・純粋」「ソフト・応用」の4つの文化がある（Becher:1987）。学問の内容、方法、哲学、雰囲気、研究スタイル、論文の書き方、研究者の養成、などはこれら専門分野の文化によって明確に、あるいは微妙に異なる。教育研究を主たる機能とする大学組織体はこのディシプリンという素材を抜きに成立しない以上、その性質と論理によっていやがうえにも規定されざるを得ない。そこに「非営利組織」（non-profit organization）たる大学の本質があるといっても過言ではない。

こうした力学が作用する世界では、企業や官庁に見られるトップダウン式の官僚制は馴

染まない。近代組織は、大なり小なり合理主義を追究し、官僚制化は回避できないとしても、専門分野の伸縮自在な性格を基調に成立する大学組織体では、専門分野の論理に根ざしたボトムアップ方式が必然的である。したがって、専門分野の最前線に存在する運営ユニットが自己評価の主体になることは理に叶っている。専門分野の論理は大学組織体全体に通用するが、実際には大学類型によって差異が少なくないと予想できる。研究大学とその他の大学では差異が生じるだろう。機関間の差異があるとしても、大学は総じて専門分野の論理や文化を担う機関であることに変わりない。学問の自由を追求し、権力の分権化を志向する。そこに強引にトップダウン方式を導入するとき、短期的には成功しても、専門分野の論理、ひいては大学本来の特質を喪失しかねないという、ジレンマに直面することになる。動きだした大学内部での自己点検・評価の試みは、このような専門分野に即して進行するはずであるから、混乱と時間を要することになるが、翻ってそれは成功への条件でもあろう。

6 大学の社会的機能と専門分野の論理

さて、内的要因の中で大学組織内部の機能に注目すると、大学の諸活動の基盤をなす知識に注目せざるを得ない。大学は知識の生産、伝達、消費の中、特に生産に大きな比重を置く以上、知識、上級知識、あるいは専門分野を抜きにしては大学を論議することはできない。大学組織の社会的存在理由を論議する根底には、専門分野を機軸に形成される諸機能が社会的に使命や役割を十分果たしているか否かが問われることに他ならない。そして、教育、研究、社会サービス、国際交流、社会選抜の各機能の具体的な見直しが必要であるとすれば、即ちそれは大学評価の必要性を帰結する。

大学は社会と無関係で存在できず、社会的条件によって規定される半面、社会的機能を遂行するという課題を担う。社会と大学の関係が密接度を増すほど、そのことは避けて通れない。ましてや今日のように税金、授業料、寄付といった社会からの投資、援助、理解によって大学が成り立つ時代には、社会の動きに的確に対応して行かなければ、大学はアナクロニズムに陥り、存在理由を喪失してしまう。むしろ、現代のような変動の時代には、大学は受身の立場に立つのではなく、社会を積極的にリードする側面が期待されており、その側面を強化し社会の変革に貢献することが期待されているのである。この観点から諸機能の点検と評価を不可欠とするはずである。

機能の見直しは、必然的に上述した専門分野の存在へと帰着する。それは、大学の扱う知識の性格に注目してみればよく理解できるはずである。知識の生産、伝達と関わり研究と教育と関わる以上、教育や研究という機能の見直しは即ち知識、上級知識、専門分野の見直しを意味することになる。そのことは、知識が過去の知識を踏まえるとともに、未知の知識を発明し、さらに社会批判や改善として機能している事実を注目しなければならない。まず第1に知識の伝達機能は主として教育機能であるが、教育は「保守的機能」のみ

ではなく、むしろ「革新的機能」の発揮が求められる。現在問題となっているのは、カリキュラム、授業方法、学習支援体制、専門教育と一般教育、教育の報賞体系、などの革新と評価の見直しである。日本の大学教授職は従来、この教育にたいする意識が弱い傾向を示してきた。今回の調査結果においても、その点は重要な課題として指摘されるはずである。

第2に、未知の知識の発明発見は研究機能である。これは知識の伝達よりも生産に関わるのであるから、学問や科学のフロンティアを開拓創造する側面である。科学社会学が開拓した学問的生産性 (academic productivity) の研究が指摘するように、専門分野の新陳代謝と再編成、あるいはパラダイム転換は不断に生じている。学界での研究評価が定着しているので、教育に比較して評価が発展している (新堀、1973；新堀編、1985；有本編、1986、1990a)。大学が研究の拠点である限り、研究の価値は極めて高い。しかし今日、研究パラダイム支配の中で、教育とのバランスのとれた評価が模索される段階に到達している。

さらに、第3に、知識による社会批判や改善の側面は社会サービス機能である。この機能は社会との接点が直接的であり、社会の大学への期待が高まる時代には、機能の有効性が問われる度合は一段と高まる。

専門分野を機軸にこれらの諸機能を大学が遂行するところに、大学の他の機関や組織とは異なる特徴が存在し、大学の社会的存在理由が発揮されると考えれば、今日のような転換期には、これらの諸機能が大学内外から吟味されるのは必至となる。

実際に諸機能を点検し、評価するには、具体的な領域と指標が必要である。すでに大学基準協会は、大学評価が次の12領域で必要なことを提起した。つまり、①大学学部などの理念・目的、②教育研究上の組織、③学生の受け入れ、④教育課程、⑤校地・施設・設備、⑦図書館、⑧学生生活への配慮、⑨管理・運営、⑩事務組織、⑪財政、⑫自己点検・評価の組織、である (大学基準協会、1992)。諸機能の点検・評価は具体的にはこれら領域の点検・評価を意味する。この項目を参考にすると、研究 (①②⑫) やサービス (⑫) よりも教育 (①②③④⑧⑫) の評価の比重が大きい。教育評価は広範であるが、特に教育課程や授業過程が重視される (IDE誌、1992a、1992b)。もとより授業の要素としては、教員、学生、カリキュラムが重要である。学生の学力や資質を高め、付加価値を与えるには、授業の中で適切なカリキュラムや教材を媒介に教員が力量を発揮することが期待される。教員の年間の授業計画をシラバスに整備すること、学生が教員の授業を評価すること、すぐれた授業の報賞制度、教員の任用や昇任に教育技術を考慮する慣行、教育技術や資質に関する新任教員対象の講習会、年輩教員の再教育、FD/SDの実施、等々が模索されることになる。

大学の諸機能の中で、今日、特に教育機能の見直し、点検、評価が重要性を高めているにもかかわらず、その主体である大学教授職においては教育への関与や生き甲斐は案外乏しい実情にあることが当面の問題である。従来、日本の大学教員は「教師」よりも「研究者」に比重を置き、教育よりも研究を追求してきた。全国調査を基にすると、大学教員が

生きがいを持つのは、研究 (52.7%)、教育 (32.6%)、学内の管理・運営 (5.6%)、社会サービス (2.0%)、等となっている (有本編、1991b)。この研究志向への傾斜は今回の調査結果と符合する。米国の教員が研究大学以外は概して教育志向であるのとは対照的な結果である。この傾向は、高等教育のエリート段階から脱皮していないことの証明ではあるまいか。大衆化段階の学生が変貌していることを看過しては、教育は成立しない。確かにキャンパスの学生の生態は遅々として変わらない側面はあるに違いない (潮木、1986)。だが変化するのもまた事実である。一般学生や不本意就学が増え、大衆化や多様化に拍車をかけ、1980年代後半から授業中の「私語」の多発が顕在化した状況がある (新堀、1992a)。それにも関わらず教員の意識や行動はあまり変化していないのである。高等教育のエリート段階の研究偏重型の伝統的教師像とそれと予定調和した学生像は、今日の状況では成立しがたくなっているのであるから、教員も相応の変化を遂げなければ有効な授業や教育は成り立たなくなる。

大学教員が研究に志向するあまり、自己の大学に対してはそれほど一体感を保持していない事実も注目すべき事実である。全国的に、「日頃の研究活動で、発展に貢献したいと思っているもの」は、自分自身 (35%)、専門分野の学会 (18%)、国際学界 (10%)、日本の学界 (7%)、所属大学 (6%)、等となっている (有本編、1991c)。この結果から見て、専門分野や学界へ志向し、所属大学へのアイデンティティは弱い。今回の調査でも、専門分野へのアイデンティティが強烈であるのに反して、所属大学へのそれは微弱である事実が判明した。「研究パラダイム」優勢の中で教育の影が薄い現象がそこに感知できるに違いない。大学教員の意識や行動の本音と現実の教育改革の必要性との間に横たわる抜き差しならぬズレが存在する以上、大学評価の推進に際して、研究と教育の価値葛藤の調整は教員個人レベルの問題であると同時に大学のシステムレベルの問題となることは回避できない。

7 大学教授職の論理

大学評価の必要性や重要性が高まりを示している現在、いくらそれを強調しても、その担い手である大学人が推進力をもたない限り進展は見られない。例えば、米国の大学で19世紀の後半という早い時点から大学評価の制度化をみた理由は、当時の欧州の学術水準との遅滞を教育研究の質的水準の向上によって解消する課題を意識し、それを自分自身の取り組みで解決することの必要性を痛感した、大学人の存在が大きいと思われる。アカデミック・プロフェッションの使命や役割が自覚されたことを見落とせない。米国の大学は1世紀をかけて、世界的に指導性の高い地位を構築することに成功した。ヘンリー・ロソフスキーは最近、世界の最優秀大学の3分の2から4分の3は米国に存在すると誇らしげに指摘している (ロソフスキー、1992)。こうした事実の背景には、19世紀後半から個々の大学の機関的、組織的活力を高めるために、大学教員が責任をもって自己研究に着手し、

自己点検・評価による各種活動内容の水準を維持し向上させる装置を機能させたことを抜きにしては説明できない（有本、1992）。

諸機能の見直しを手掛け、運営単位の講座、学科、研究所において専門分野の実際の運用を実現するのは、他ならぬ教育者や研究者としての大学人である。教育と研究の両方を同時に遂行する点が他機関と比較した場合の大学の特徴であり、持ち味であると考えれば、その遂行責任者は大学教授職ないしアカデミック・プロフェッションに他ならない。大学の本来の機能である教育研究に責任をもって自己評価を下し、責任をもって社会の負託に応えることが、大学の課題になっている時、大学教授職はその中枢に位置している。つまり大学評価の実質は、ピア・レビューを基調とした自己評価と相互評価が基本になるはずである。

大学内部の評価と外部の評価を組み合わせたアクレディテーション方式の大学評価は、内部評価を基調にし、大学教授職を主体とした大学団体による評価であり、ピア・レビューによる自己評価を基礎にしている。大学が知識の生産と操作を基軸に成立する機関である以上、知識、上級知識、専門分野の最先端を担う大学教授職が責任をもって教育研究の点検を行うことは合理的であるはずである。そこに自己点検の精神が存在し、自己評価の基盤が見出せるに違いない。ファン・フークトは「自己評価は知識の生産と伝達を担う高等教育の基本的性格と関わる。自ら先行する知識領域の質を判定できる最も適切な立場にあるのは、専門分野のエキスパート以外にない。自己評価は特定の専門分野では、外部のピアーを活用するのは、ピアー・レビューが学術過程の基本的側面であるからである。しかし自らが生産し操作する知識の質に対して究極的な判定を下し、責任を持たなければならないのは、あくまで大学内部の専門職である。」（Van Vught, 1992, p.271）と述べている。

こうして、大学評価は即ち大学教授職の問題となるが、その際、上述の大学風土と大学人自身の意識や行動や体質は表裏の関係にあることを想起するべきだろう。なぜ米国の大学教授職が自己評価に取り組み、日本の大学教授職はそれを躊躇してきたか。その理由の主たる部分は、大学教授職の自己像の問題に帰着するに相違ない。ケルズが指摘しているように、米国方式が発展した背景には、大学人自身が大学のことを真剣に考え、「自己研究」を推進する必要性が痛感されたからである（Kells, 1988）。それに比較して、わが国の大学教授職の意識や行動は最近まで十分醸成されたとは言えない。大学基準協会が曲がりなりにも設置され、国立大学協会、私学連盟、一般教育学会、等が大学評価の必要性を唱道した歴史は確かに存在したにもかかわらず、大学審が答申し、省令化が達成された後ですら、大学社会全体の風土、土壌、空気には依然として消極性が支配している。大学人の間に疑心暗鬼が走り、懐疑の気持ちが強く見られ、二の足を踏む状態が持続している。

このような状況の中で、大学教授職の使命、役割、責任の自覚は喚起されなければならないはずである。せっかく省令により、規制緩和の方向が打ち出されても、肝心の大学内部で、大学人がそれを有効に活用する意欲をもたない限り、省令の意図は実現しない。政

府による規制緩和が図られ、大学の自律性の拡大が比重を増せば、画一性や同質性よりも多様性や異質性に、統制よりも自由化に、それぞれ拍車がかけられ、機関間の質の向上を求めた競争が誘発され、それと同時に機関毎の自己点検は不可欠と見なされるようになる、という構図は確かに成立する。しかし、肝心の大学教授職が積極的に動こうとしない限り、大学内部からの大学評価は具現しないままに終わり、戦後改革の二の舞になるに違いない。

周知の通り現在、国内だけではなく、国際的な視点から、大学教授職の使命や役割が見直される時代を迎えている。政府が統制を緩和し、世界的に「国家統制モデル」(State Control Model)から「国家監督モデル」(State Supervising Model)へと方向転換が生じつつある(Van Vught, 1992)。この動きは英・米が1970年代から大学内部におけるFD(Faculty development: 大学教員の資質改善)運動の台頭を見たのを皮切りに、世界的に大学の見直しの動きが起こり、その後1980年代から90年代にかけて、FDやそれとの関連をもった大学評価の必要性が大学内外で世界的に問われる時代を迎えることになった(伊藤編,1990: 有本編,1991b)。こうして各国の大学教授職がFDの取り組みなど改革に乗り出している時、このような世界的動きの中に位置づけて日本の大学教授職の動静をみる視点を欠かせない。

その点、すでに意識上は積極性が現れている点に極力注目する必要がある。全国調査「大学教育の改善に関する調査」(有本編,1990b)によれば、大学教育の改善と活性化は必要とする教員が94%(867人中812人)もの多くに達していたのである。改善が必要であるとした回答者(812人)によって具体的には次の項目の順序で必要性が痛感されている。①「大学教員の資質の向上の必要性」(66%)、②「生涯教育機関としての大学の役割の増大(社会人学生の増加など)」(59%)、③「社会の情報化に対応したカリキュラム編成の必要性」(44%)、④「一般教育または教養教育の見直し」(42%)、⑤「外国大学との研究・教育交流の必要性」(40%)、⑥「学生(18歳)人口の減少に伴う大学生生き残りのため」(36%)、⑦「大学の自己評価の必要性」(32%)、⑧「大学入試改善との関係」(28%)、⑨「高校教育との接続の問題」(20%)、⑩「社会や大学からの大学教育批判」(20%)、⑪「外国人留学生の増加」(18%)。

この中で、大学評価そのものは、「大学の自己評価の必要性」であり、全体的にはそれほど重視されていないように見えるが、それでもFDの必要性や社会変化との関係での大学改革の必要性、とのからみで大学評価とりわけ自己評価が確実に意識されはじめている事実を読み取れるに相違ない。問題は、これらの意識が今後実際に自己評価を含めた大学評価の活動に如何に結実するかである。

以上から、大学評価、特に自己評価が定着するには大学教授職の自覚が期待される論理的必然性がある半面、自己評価を基軸にした大学評価の定着を可能にするのはかなり困難である、と言える。それは大学の価値葛藤の調整、大学組織の性格、大学風土やそれと関連した大学人の意識や行動の閉鎖性や保守性に起因する問題の見直しであるからである。FDの取り組み、大学や大学人自身を研究するシステムの遅滞は、困難な条件を物語る。

その意味で、今日必要とされる大学内部の改善や改革には、単なる大学教員や管理者ではなく、教師、研究者、社会への奉仕者、ゲートキーパー、といった役割や使命を統合したアカデミック・プロフェッション（大学教授職）としてのプロフェッショナル・アイデンティティ（専門職的自己同一性）がまず要請される時代が到来しているように思われる。

8 大学教授の自己評価—本報告の意味

大学評価の今後の展開を見届けるには、相応の時間が必要であるが、少なくとも大学教授職の動向が重要な鍵を握ることは自明であろう。結局は、専門分野を尊重し、個々の大学がその標榜する使命や役割をいかに適切に達成するかが問われることは必至であるから、その過程において、とりわけ大学教授職の自覚と取り組みが決め手になるはずである。現在、大学評価には疑心暗鬼や懐疑がみられ、省令による自己点検・評価の導入には批判的だとしても、改革への意識は徐々に胎動しており、曲がりなりにも全国の大学で、個々の大学の新たな使命や役割を改めて問い直し（上記大学基準協会の項目の①に相当）、改革を着手し始めたことは、大学人自らが「大学評価の時代」ともいうべき時代の到来を意識し、自覚しはじめた動きであるといえよう。

そのような時代に、大学評価と大学教授職の関係を研究対象に設定することは意義があるだろう。そのためには、まず大学教授の自己評価を問題にすることから出発するのは不可欠である。大学教授職や大学評価の現実を客観的に把握する作業が必要である。上述したように、大学教授は専門分野を軸に、講座や学科、大学、国の高等教育システム、に所属したり準拠している。そこには、一人の大学教授をいくら観察しても理解できない文化、風土、組織の問題がある。専門分野、講座、学科、システムの有機的に統合された集団、そこに存在する共通の価値、信念、責任、等から成り立つ文化が専門職には刻印されているはずである。パートン・クラークは「大学教授が専門分野と学科、特定の大学、そして国家システムにおける複数の構成員（multiple memberships）」になっている現象を「マスター・マトリックス（master matrix）」（Clark:1983,p.42）と呼称したが、そのような大学教授を全体的に把握するには、これら集団の文化や風土の研究が欠かせない。

本報告は、カーネギー大学教授職国際調査の中の日本の大学教授に関する調査を分析するところに主眼がある。この分析を通して、日本の大学教授職の文化や風土を彼らの意識や行動を手がかりに探ることにねらいがある。自己自身の評価を通し日本の大学の大学教授職のマスター・マトリックスを把握することを試みるのである。具体的には、大学教授職の過去、現在、未来にかかわる歴史的スパンと、現時点の自己を中心にした専門分野、運営単位、大学、社会（地域、国家、国際社会）にかかわる空間的スパンとの結合部分に生じる職業的社会化（professional socialization）を把握し、大学教授職の専門職的主体性（professional identity）、専門職的自己像（professional self-concept）を観察することになる。調査の範囲は全国規模に及ぶ。調査内容は、①仕事の状況、②教育・研

究活動、③サービス、④管理運営、⑤アカデミック・ライフの国際交流、⑥大学評価、等の広範な領域を包括する。内容分析には、主として①大学類型（研究大学とその他の大学）、②職階、③専門分野、の指標を使用する。これらの指標による分析を通して、専門分野、職階、機関類型の各集団や社会を基盤にした文化や風土の相違を読み取ることを試みる。なお、本報告はあくまで中間報告であり、素集計をできるだけ広範に把握する点に主眼を置くため、複雑なクロス集計の段階まで分析を深めていないが、今後その点を考慮した整理が必要である。上記国際調査の外国データが入手できた段階で別途なんらかの形で報告することになろう。

本報告は、上記の特徴、制約、課題があるが、現時点において、全国の大学教授職に関する実態調査によって大学評価と大学教授職の関係の現実を把握することを試みた点で十分意味があると思われる。特に本報告は、今後の大学評価の展開を高等教育システム、個々の機関、個々の大学教授職、の各レベルで考量、検討、計画するための一つの基礎資料を提供できるものと期待したい。

引用・参考文献

- 天城勲・慶伊富長編 1997 『大学設置基準の研究』東京大学出版会
- 天野郁夫 1977 「日本のアカデミック・プロフェッション」（大学研究ノート第30号）
- 有本章 1981 『大学人の社会学』学文社
- 有本章編 1986 『アカデミック・プロダクティビティの条件に関する国際比較研究』（大学研究ノート第66号）
- 有本章 1987 『マートン科学社会学の研究—そのパラダイムの形成と展開』福村出版
- 有本章 1989 「大学教授職の国際比較研究における専門分野の視点」『大学論集』第18集
- 有本章 1990a 「科学社会学の視点からみた大学評価」『大学評価—提案と批判』（高等教育研究叢書7）
- 有本章編 1990b 『大学教育の改善に関する調査研究』（高等教育研究叢書5）
- 有本章 1991a 「大学評価の研究と大学組織」『大学論集』第19集
- 有本章編 1991b 『FD/SDに関する比較研究』（高等教育研究叢書12）
- 有本章編 1991c 『学術研究の改善に関する調査研究』（高等教育研究叢書10）
- 有本章 1992 「アメリカの研究大学と学問的生産性—学科長調査による事例研究」『大学論集』第21集
- 飯島宗一・戸田修三・西原春夫編 1990 『大学設置・評価の研究』東信堂
- 市川昭午編 1987 『教育の効果』東信堂
- 伊藤彰浩編 1990 『ファカルティ・ディベロップメントに関する文献目録および主要文献紹介』（高等教育研究叢書4）
- 潮木守一 1986 『キャンパスの生態誌』中央公論社

- 喜多村和之 1986 『学生消費者の時代』リクルート出版
- 喜多村和之 1989 「大学評価の可能性についての考察」『大学論集』第18集
- 喜多村和之 1990 『大学淘汰の時代』中央公論社
- 喜多村和之 1992 『大学評価とは何か—アクレディテーションの理論と実際』東信堂
- 喜多村和之・早田幸政他訳 1992 『大学・カレッジ自己点検ハンドブック』紀伊国屋書店
- 喜多村・関・有本・金子 1991 『大学評価の理論的検討』広島大学大学教育研究センター
- 慶伊富長編 1986 『大学評価の研究』東京大学出版会
- 新堀通也 1965 『日本の大学教授市場』東洋館出版社
- 新堀通也 1973 「アカデミック・プロダクティビティの研究」『大学論集』第1集
- 新堀通也 1977 「アクレディテーションとアメリカの高等教育」天城・慶伊編、上掲書
- 新堀通也編 1984 『大学教授職の総合的研究』多賀出版
- 新堀通也編 1985 『学問業績の評価』玉川大学出版部
- 新堀通也 1992a 『私語研究序説—現代教育への警鐘』玉川大学出版部
- 新堀通也 1992b 「大学評価の理論的考察」『武庫川学院教育研究所研究レポート』第7号
- 大学基準協会 1992 『大学の自己点検・評価の手引き』
- 広島大学・大学教育研究センター 1990 『大学評価—その必要性と可能性』
(高等教育研究叢書7)
- 広島大学・大学教育研究センター 1991a 『大学評価—提案と批判』
(高等教育研究叢書15)
- 広島大学・大学教育研究センター 1991b 『大学評価の出発点—1991年全国調査から』
- 広島大学・大学教育研究センター 1992 『高等教育改革の新段階—大学審議会の答申を踏
まえて』(高等教育研究叢書20)
- 山野井敦徳 1990 『大学教授の移動研究』東信堂
- リースマン、D. (喜多村和之・江原武一他訳) 1986 『高等教育論』玉川大学出版部
- ロソフスキー、H. (佐藤隆三訳) 1992 『ロソフスキー教授の大学の未来へ』TBSブリタニカ
- I D E 誌 1992a 「授業計画と授業評価」332号
- I D E 誌 1992b 「大綱化と学部教育改革」336号
- Becher, T., 1987 "The Disciplinary Shaping of the Profession", in Clark, B. R.,
(ed.) *The Academic Profession*. University of California Press.
- Becher, T., 1989 *Academic Tribes and Territories: Intellectual enquiry and the
cultures of disciplines*. The Society for Research into Higher
Education & Open University Press.
- Clark, B. R., 1983 *Higher Education System: Academic Organization in International
Perspective*. University of Chicago Press.
- Kells, H. R., 1988 *Self-Study Process*, 3rd Edition. New York: MacMillan.
- Selden, W. K., 1960 *Accreditation. A Struggle over Standards in Higher Education*.

N.Y.: Harper and Brothers.

Van Vught, et. al., ed., 1992 *Higher Education Policy in International Comparative Perspective*. Center for Higher Education Policy Studies, University of Twente.

Young, K.E., et. al., ed., 1983 *Understanding Accreditation: Contemporary Perspectives on Issues and Practices in Evaluating Educational Quality*. Jossey-Bass Inc. Publishers.

Ⅱ章 大学教授職研究の現在

山野井敦徳

1 はじめに

前章では大学評価の視点から見た大学教授職と大学評価の理論について検討を重ねてきたが、ここでは、こうした理論的考察と同時に、つぎの第二部の大学教授職国際調査の報告（日本編）の領域とをふまえ、「大学教授職研究の現在」と題して大学教授職研究の実情について概観してみたいと思う。

こうした大学教授職研究についてのレビューについては、すでに、いままでの高等教育研究の動向のなかで幾つか評論されてきた。代表的なものとしては、「高等教育に関する文献解題」（天野・新井、1971年）、「日本の高等教育の現状」（新堀通也、1981年）、「教育社会学と大学研究」（江原武一、1989年）、「高等教育研究の動向」（有本章・金子元久・伊藤彰浩、1989年）、「大学研究の動向」（IDE、No.300、1989年）、などが挙げられる⁽¹⁾。

最新のレビューの目次を検討してみると、1. 高等教育の内容・方法（1）カリキュラムと教授法、（2）研究・研究体制、（3）大学評価の研究、（4）教師・学生、2. 高等教育の政策・制度（1）高等教育論、（2）高等教育の新動向、（3）高等教育財政と高等教育機関の管理・運営、（4）経済社会構造と高等教育、3. 社会と高等教育（1）学歴社会と入学試験、（2）諸外国の高等教育、（3）高等教育の国際化、（4）高等教育の歴史、から構成されている⁽²⁾。これらの目次構成から理解されるように、我が国の高等教育研究は、実に多岐多様にわたっており、研究の蓄積が窺われる。そのため、こうした高等教育のレビューは、大学専門機関の共同でしか出来ないような状況にあり、しかも、著書や論文など出版物すべてを評論することは至難になりつつある。上記の目次構成のなかで、大学教授職研究の評論は、とくに1.の（4）教師・学生のなかで述べられながらも、関連する分野は、教育、研究、管理・運営、社会的サービス、歴史、国際交流、評価などすべてにちりばめられていると言ってよいだろう。

このように高等教育研究が、曲がりなりに研究実績を積み重ね、領域の広がりを見せているということは、他方で、大学教授職研究の動向についての詳細な評論をするためには、その固有の領域を設定して検討する必要があるだろう。そのことは、同時に大学研究者の研究の専門化が進む一方、大学教授職研究がディシプリンとして曲がりなりにも成立しつつあることを意味するかも知れない。こうした動向の詳細については、最近では、「大学教授研究の構想」（山野井、1985年）、「大学教授研究のパラダイム展開」（山野井、19

90年)、「高等教育研究の回顧と展望」(広島大学大学教育研究センター、第21回研究員集会、1992年)において言及されている⁽³⁾。

いずれにしても、大学教授職研究のパラダイムやディシプリンが成立するかどうか、あるいは存在するかどうかの論議は別にして、曲がりなりにも大学教授職研究が成立するためには、固有の対象と方法論を確立してはじめて学問的市民権を獲得できる。こうした意味もあって、以下では、(1) 大学教授職の概念、役割及び研究対象、(2) 大学教授職研究の接近法と研究者集団、(3) 大学評価から見た大学教授職研究の現状、について述べてみたいと思う。

2 大学教授職の概念、役割及び研究対象

大学教授職研究は、端的に言えば、大学教授職、すなわちアカデミック・プロフェッションを対象とした研究と定義できる。アカデミック・プロフェッションという熟語からも理解されるように、そもそもアカデミック・プロフェッションの研究はプロフェッション、すなわち専門職の研究として、その端緒が開かれたと言われる⁽⁴⁾。その経緯については割愛するが、大学教授職研究において大事なことは、こうした大学教授職の概念の実質自体が、歴史的に解釈してきわめて相対的な概念であるということである。

そもそも専門職という概念は、明確な高度かつ専門的役割、組織的自律性、綱領への遵守などによって保障された高い威信を特徴としている。しかし、大学教授職が、医師、弁護士、裁判官など他の専門職と、最も大きく相違するのは、大学教授職の概念自体が歴史的に大きく変化することにある。

我が国の教授の語源、用例、職名の成立に関する日本教育史の数少ない研究も散見されるが、近代的な大学教授職の概念については、その経緯からして欧米の文脈のなかで位置づけられる必要がある⁽⁵⁾。上述のように大学教授職の概念が歴史的に相対的なのは、主として大学の機能に関する歴史的変遷と深く関わっている。J. ベンデービットが見事に描いているように、歴史的にみて大学が教育と同時に、研究の機能に従事するのは、周知のように19世紀のドイツの大学においてであった⁽⁶⁾。アカデミック・プロフェッション研究において、最初に最も体系的に展開したのは、L. ウィルソンであったが、大学教授職の基本的役割は知識の保存、伝達、革新であるとして、教育と研究の双方が媒介する知識の観点から大学教授の役割概念に接近した⁽⁷⁾。H. パーキンのように大学教授職を20世紀の鍵専門職と位置づける一方、D. ライトのように研究重視に志向された大学教授職の概念を規定する立場も現れる。彼によれば、研究に志向されない大学教授はアカデミック・プロフェッションの概念に該当しないと示唆する⁽⁸⁾。

しかし、第二次大戦後の米国にみられるように、世界の高等教育制度は大学の大衆化とともに、多様な威信をもった大学によって重層化した構造を展開した。大学は、もはや象牙の塔ではなく、社会に開かれた大学として機能すると同時に、C. カーが指摘するように、

急激に変化する産業化と大衆化の過程においてマルチヴァーシティ化した⁽⁹⁾。またM. トロウは大学の発展段階説の定式化による大学の成長と変化のなかで大学教授職も説明しようと試みた⁽¹⁰⁾。その結果、大学教授職の役割概念は多様化、多元化した大学の社会構造に対応していかざるを得ないと同時に、社会的サービスなどのような対社会的機能を内在化せざるを得ない。こうした高等教育制度と機能の発展過程にあつて、高等教育の制度的威信構造と大学教授職の双方の視点から大学教授の役割概念を最も総合的に論じたのは、T. パースンズである⁽¹¹⁾。彼は、大学の知的価値及び研究活動を測定するための制度的分化度 (SID-scale of institutional differentiation) の尺度概念を開発する一方、その視点から大学教授の役割概念を①教育、②研究、③管理・運営、④顧問的活動の4つに分類し、検証を試みた。

このように大学教授職の概念について検討してみても、大事なことは、その概念自体が歴史的に相対的な概念であると同時に、現象的には、高等教育組織の社会構造によって大学教授職の概念は相対化されることにある。したがって、大学教授職の概念は、大学の歴史と社会構造の両者から規制されることになる。後者の高等教育制度の社会構造については、上述のT. パースンズの場合、制度的分化度の視点から接近しているが、いままでの大学教授研究では、B. クラークにせよ、A. M. カーターやT. キャプロー=R. J. マッギーにせよ、制度的類型化（タイプ化）と制度的威信の側面から大学教授職の概念に接近する⁽¹²⁾。前者はクラークが国際比較の枠組みを見事に提示しているし、後者はD. L. バークがそれを威信の原理と称して、その重要性に着目している⁽¹³⁾。具体的には、研究を中心とするタイプの威信の高い大学院大学の大学教授職と教育を中心としたタイプの相対的に威信の低い高等教育機関の大学教授職とでは、その概念、役割期待は相対的に位置づけられることになる。

いずれにせよ、現在の大学教授の役割概念は、一般的には教育、研究、管理運営、顧問的活動などに収斂されるところとなるが、これらの大学教授職の概念は大学教授職研究の対象や領域と不可分の関係にあることが理解される。ただ最近の大学の国際化も欧米の大学からすれば大学にとって本質的に内在的なものだが、我が国のように地理的・文化的に障壁の大きい段階では大学教授の国際交流も我が国の大学教授職研究では独自の役割と意味を帯びてくる。本調査報告の第二部において、教育、研究、管理運営、顧問的役割の他に国際交流などの項目が付け加えられるのも、こうした事情による。このように大学教授職の概念と研究の対象、領域自体が歴史、社会構造、地域性など社会的文脈によって大きく変化する。

さらに、大学教授職の役割概念について検討して大事なことは、その概念自体が歴史的にあるいは社会構造的に相対的な概念であると同時に、大学教授職の役割概念を対象とした大学教授職研究は、単なる対象や領域を示すばかりでなく、T. パースンズの研究に認められるように、その背景にはそれなりの方法論が開発されている点にある。大学教授職の概念と大学教授職研究の対象や領域は、不可分の関係があるが、重要な点は、それらに付

随する方法論やアプローチである。本調査報告書は上述の大学教授職概念から派生する課題を研究の対象と領域にしているが、これらを国際比較という社会科学では一般的で普遍化した方法論で、とくに我が国の高等教育の社会構造を視野に入れながら接近している。ここでは、T.クーンのパラダイム論やディシプリン論の厳密な論議は、専門家による他の機会に譲りたいが、いままでの大学教授職研究の積み重ねが曲がりなりにも成立している背景には、上述したそれなりの固有の対象、他分野からの借用ではあるが、それなりに自家薬籠化した方法論、さらには共通の関心を抱き続けているそれなりの研究者の共同体などがあるからに他ならない。次節では、こうした大学教授職研究の方法論や接近法の概略について考察してみたいと思う。

3 大学教授職研究の接近法と研究者集団

さて、以上の展開によって大学教授職の概念、研究対象、領域は歴史的・社会的な高等教育の発達そのものによって規定された相対的なものであることを主張した。しかも、そうした概念、研究対象、領域は、方法論、接近法と関連づけられて展開されてきた。しかし、ここで大事なことは、こうした研究の展開は高等教育の発展段階や歴史、あるいはその社会構造と厳密な意味で必ずしも一致するものではない。換言すれば、高等教育における大学教授職研究は、個別的な研究者のエポック的な優れた研究業績によって、研究対象への接近法が確立してくる。クーンは自然科学とくに物理学の事例から科学革命のパラダイム論を提唱したが、このパラダイム論の基本は研究対象にどう接近するか、その物の見方・考え方のテキストになる古典的、教科書的業績にある。そうした教科書となる接近法だからこそ、それを信奉する科学者共同体や通常科学の存在が重視されてくる⁽¹⁴⁾。これに類似した例としては、社会科学にも相対的にはあるが見い出せる。一例を挙げれば、社会学における社会階層の研究は、そもそも人類学、社会、文化人類学から出発して現在では文化人類学的アプローチとして社会科学一般に共有化された接近法になっている。その詳細は紙幅の都合で割愛するが、要旨は大学教授職研究において、その現状に言及するためには、こうした大学教授職研究のパラダイムを整理しておく必要が是非ともあるだろう。

いずれにしても前置きが長くなったが、では、大学教授職研究においてパラダイムの系譜をどのように整理したらよいのだろうか。筆者は以前に、大学教授の社会学的研究の諸パラダイムと題して、アカデミック・プロフェッション研究、大学教授市場研究、科学社会学研究を中心に三つの主要なアプローチを提案したことがある⁽¹⁵⁾。そこではこれら三者は研究領域を示すと同時にパラダイムとしての接近法として位置づけた。ここでのテーマは大学教授職研究であるが、この研究は上述した三者のアプローチと不可分の関係にあるので欠くことのできない柱だろう。ここでは、こうした社会学ないしは教育社会学などアプローチを中心に、我が国の影響や研究者集団と関連づけながら新たな展開を試みたい。

さて、こうした大学教授職研究の系譜は、古くは20世紀初頭の米国において重複しながらかつ次第に相互に影響しながら学際的に展開されたと言ってよいだろう。例えば、アカデミック・プロフェッション研究の前史は、H. スペンサーやE. デュルケームに求めることができるが、古典的業績はA. カーサンダース=P. ウィルソンの『プロフェッション』（1933年）と言われる⁽¹⁶⁾。こうした系譜においてアカデミック・プロフェッション研究をいち早く、かつ最も体系的に展開したのは、ウィルソンの『アカデミック・マン』（1942年）である⁽¹⁷⁾。他方、大学教授市場研究の歴史は、それよりもやや早く1930年代にはP. ソローキンらによって大学教授の移動研究がなされている⁽¹⁸⁾。しかし、最も体系的に実証化したのは、キャブロー=マッギーの大学教授市場の研究（1958年）である。これらの研究で中心的概念になるのは威信（prestige）である。これがアプローチの根幹を形成する。大学教授、大学教授市場も威信を媒介に接近される。これは、大学教授市場とはさまざまな威信の交換である、と定義されるところに端的に表現されている⁽¹⁹⁾。アカデミック・プロフェッション研究と大学教授市場研究は、その後、相互に交流を重ねながら学際化し、多くの研究者によって研究業績が積み重ねられるところとなるが、最近ではH. ボーエン=J. シュウスター（1986年）、パーク（1988年）らの研究に継承されている⁽²⁰⁾。この間の経緯については別途の文献を参照されたい⁽²¹⁾。

さて、こうした米国において先鞭をつけられた大学教授の社会学的研究は、西欧や我が国にも導入されることになるが、我が国のこうした社会学的アプローチにいち早く着目したのは、新堀通也を中心にした教育社会学のグループである。新堀は『日本の大学教授市場—学閥の研究—』（1966年）でネポティズム（身内主義）としての学閥に収斂して実証化を試みた⁽²²⁾。この研究を契機として教育社会学グループでも大学教授職研究が展開され、一つの研究者共同体を形成してきた。こうした教育社会学に触発されつつ、個別的是ではあるが社会学者や経済学者によって大学教授職研究や大学教授市場研究が展開されてきているが、科学者共同体を形成するほどのまとまりや継続性はなく、これらの分野ではこれからの課題となっている⁽²³⁾。

以上のような接近法に比較して、大学教授の社会学的研究において科学社会学のアプローチは、歴史においても、分野においても、国際的な視野においても、広範な基礎的広がりを展開している。科学社会学の前史は、言うまでもなく知識社会学として伝統的な社会学の中核的な課題として、西洋において19世紀以来、すでに展開されてきた歴史をもっている⁽²⁴⁾。周知のように科学社会学の始祖とも称されるのは、R. K. マートンだが、1930年代に科学社会学の可能性をすでに見い出している。科学史の領域ではT. クーンが1962年に科学革命の構造に関する書物を著している。その他の研究者によっても優れた科学社会学論が展開され、多様な領域と接近法を展開することになるが、両者はマートン学派とクーン学派と称せられるように、人脈、分野、地域的な広がりにおいて多様な影響力をもった。先発隊であった前者は、1960年代に科学社会学の社会学的蓄積を経て、1970年代には高等教育を対象とした研究と結節されて大きく展開されることになる。後者は、科学者共

同体の認知的側面と社会構造に焦点が置かれ、高等教育というより科学者共同体を対象に、その認知的側面に力点が置かれる。1980年代には高等教育研究、とりわけ研究者としての大学教授の研究において双方の接近法を採り入れた研究も散見されるが、両者の理論を止揚しさらに発展させ応用した研究はまだ十分に展開されていない。

こうした両者のニュアンスの相違は、国際的な人脈とその研究スタイルにもそのまま大きな影響をもたらすことになる。我が国を中心に概観してみると、以下のように整理できるかも知れない。

まず、マートン学派の影響は、1970年代から確認できる。我が国において、最初にマートン的手法を導入して実証研究を開始したのは新堀通也で、1971年に「科学を科学する」、「科学の科学」を日本経済新聞、朝日新聞に公表し、マートンの科学社会学の重要性を指摘している。実証研究の成果は、日本教育社会学会の課題研究で口頭発表されるとともに、1973年に「アカデミック・プロダクティビティの研究」（大学論集 1973年）として結実される⁽²⁵⁾。マートンの『社会理論と社会構造』が米国で1968年に出版され、米国でマートン学派によって科学社会学の研究が高等教育に応用されるのが、1970年代に入ってからであるから、その導入の速さが理解される。その後、我が国におけるマートンの科学社会学研究やその大学教授職研究への応用研究は、新堀グループを中心に展開されてきた。

それと重複した時期に、他方では科学史や若手社会学者を中心にクーンのパラダイム論やその科学社会学が積極的に展開されてきた。その研究者集団は、中山茂を中心とするディシプリン研究会のメンバーである。1962年にクーンの『科学革命の構造』は出版されるが、1950年代にクーンに師事し留学した中山は、同書を1971年に翻訳し、ディシプリン研究会を1970年代後半に発足させ、1984年に『パラダイム再考』を出版する⁽²⁶⁾。この間あるいはそれ以降も、科学史や社会学の分野において数多くの論文や著書が出版された。いずれにしても以上の両系譜の学風は、交流をもちながらも、米国での出発点の相違を内包しながら、我が国の高等教育の独自性を絡めて展開されている。こうした系譜に対して、自然科学を対象に社会工学の立場から、研究の研究、科学の科学に接近するのは、山田圭一を中心とするグループである。特に科学のライフサイクルという視点からディシプリンの形成過程に着目する。1975年には『科学のライフサイクル』を、1986年には『科学研究のライフ・サイクル』をそれぞれ出版している⁽²⁷⁾。このグループの中堅は、研究者の養成と流動性の研究を実施する一方、ディシプリンの形成過程に係わる関係上、上述の両系譜とりわけディシプリン研究会の若手メンバーとして交流している。

以上のアプローチと共に高等教育の接近法として重要な立場がある。これらのアプローチは大学教授職研究において直接的に大きな影響力を我が国に与えたが、今後さらに発展が期待されるものである。

その第一に挙げられる接近法は、J. ベンデービットの業績で展開されたアプローチである。その接近法の名称化は、はなはだ困難だが、比較社会制度史アプローチとでも称せられる。この接近法には、彼の業績からも理解されるように科学社会学や大学教授市場論

的発想も一部に含まれている。そのアプローチの典型的業績は、Fundamental Research and the Universities(1968)、The Scientist's Role in Society: A Comparative Study (1971)あるいはCenter of Learning (1977)である。これら一連の研究で欧米の各国のセンターとしての大学の発展史を展開した。その骨子は大学システムの移植と各国内独自の特殊性・市場性を大学センターの発展史として解析した点にある。一連の業績は新堀通也、潮木守一、天野郁夫らによって翻訳されたが、このアプローチを我が国に最も発展させたのは、潮木、天野らの東大並びに名大出身グループである。大学組織、講座制、大学教授職研究、試験制度等の諸分野ばかりでなく、ドイツ、アメリカ、日本の国際的関連性、さらには歴史的視野において、こうしたアプローチを縦横に駆使している⁽²⁸⁾。最近、アジアの大学を対象に P.アルトバックが、こうしたアプローチから接近しているが、総合的に十分に解明されていない⁽²⁹⁾。

第二のアプローチは、国際比較組織論ないしは大学構造的接近法とも称されるものである。高等教育の組織的威信構造については、すでに上述したので省略するが、現在、最も理論的に展開しているのは、B.クラークの業績による分析枠組みである⁽³⁰⁾。クラークは最終的には、国家、組織、ディシプリンを統合した視座で大学教授職研究に接近しようと試みている。現在、有本章によって関連文献が翻訳されつつあり、この研究が国際比較の普遍的枠組みを提示しているだけに、この接近法による我が国の研究も次第に関心を持たれ始めている。この接近法の大学教授職研究への応用もこれから期待されるところである。しかし我が国の高等教育の社会構造の類型化や威信の研究は、かなり以前から天野郁夫らによって蓄積されている⁽³¹⁾。こうした点については、さらに節を改めて言及したい。

最後になったが、第三の重要なアプローチとして大学の発展段階説を挙げることができる。この理論的展開は、M.トロウや D. リースマンらによって試みられた⁽³²⁾。この接近法も普遍的枠組みを提示しているだけに、国際的かつ歴史的な視野で影響力をもつ。我が国においては、前者は喜多村和之、天野郁夫、後者は喜多村和之、江原武一等によって、それぞれ翻訳されており、それらの理論的研究の検討がなされると同時に、我が国への応用研究は、大学の大衆化や消費者化の文脈のなかで展開されている⁽³³⁾。とくに大学教授職研究への展開は、これからさらに期待される接近法の一つである。

4 大学評価から見た大学教授職研究の現状

以上、大学教授職の概念、大学教授職研究のアプローチ及び研究者集団について国際的視野から我が国の動向をふまえて考察してきた。こうした展開において大学評価とか大学教授職の評価の視点や動向は、必ずしも焦点的に言及できなかった。本節においては上述したように、第一部の他節や第二部との関係において大学評価から見た大学教授職研究の現状を概観しておきたい。

前節で概観したように、我が国の大学評価の要請は国際的な動向のなかで、大学審議会、

大学設置基準の大綱化などに伴って、行政的背景から推進されつつあるが、大学教授職研究の系譜では、それに先駆けた研究の系譜がある。国際的視野で大学評価が高等教育研究のなかで展開され始めたのは、米国の1910年代に遡ると言われる。この背景にはアメリカの大学の大量化に伴う高等教育機関の増大があった⁽³⁴⁾。したがって、その評価の方式も大学のランキング化というスタイルであった。そのためには、当然、組織、施設、図書、研究、教育など全般の領域にわたって評価されたが、これらに中心的役割を果たす大学教授もファカルティの質として評価の対象とされた。こうして1910年代からおよそ10年単位で研究されることになる。すなわち、キャッテル（1910年代）、ヒューズ（1920及び30年代）、ケニストン（1957年）、カーター（1966年）、ルース＝アンダーセン（1969年）の研究があり、1970年代以降は研究者やその支援団体も多様化した。その代表例はACEの後援によるカーター（1966年）、専門大学院における職業専門教育を評価したマーグリース＝ブラウ（1973年）、研究博士課程プログラムを評価したジョーンズ等（1982年）、歴史的、国際的視野から分析したウェブスター（1986年）、ゴーマン（1987年）等の研究がある⁽³⁵⁾。我が国では、江原武一、奥川義尚等を中心に、これら米国大学の評価分析が試みられている⁽³⁶⁾。いずれにしても、米国においては、上述したように、こうした研究と並行してアカデミック・プロフェッション研究、大学教授市場研究、科学社会学を中心に大学教授職研究は大きく前進させられるところとなるが、ここでは重複を避けるため割愛する。

大学評価から見た大学教授職研究は、こうした大学ランキング、アカデミック・プロフェッション研究、大学教授市場研究、科学社会学研究の系譜の流れと連携しながら、行政レベル、アカウントビリティ、大学社会の相互の基準維持の視点から接近される系譜がある。すなわち、それらはチャータリング、アクレディテーション、大学設置基準等による大学評価から見た大学教授職研究である。こうした大学評価の歴史は、古くは大学のはじまりと共に歩むことになるが、その概観については他に優れた文献があるのでそれらに譲りたい⁽³⁷⁾。大事なことは、大学教授職を中心とした、こうした大学評価の課題が1980年代の西欧や我が国を中心とした国際的視野において高等教育界にあって最も重要な重点政策課題の一つとして各国で登場していることにある。1980年代の英国、最近ではフランス、ドイツ、オランダ、スウェーデンなどで何らかの形で大学を評価しようとする動きがおこっている⁽³⁸⁾。

かかる国際的動向に対応して、大学評価から見た大学教授職研究は、大学教授の研究、教育に関する研究が個人、集団（研究グループ）、組織（IDE、広島大学大学教育研究センター、国立教育研究所、大学基準協会等）で推進される一方、他方では行政レベルで大学審議会答申、大学設置基準の改正によって社会的・行政的に要請されてきたのは周知のとおりである。

これらを時代的に展望してみると、大学評価から見た大学教授職研究は、大学教授の研究機能に焦点づけられた学問的生産性やディシプリンの形成に関係して1970年代から始ま

ったと言って良いだろう。上述した科学社会的アプローチを背景に、著書、論文数、サイテーション、科学者辞典、ノミネーション、学術賞、エポニミイティ、発明、発見などを具体的な方法論として大学教授の研究機能の評価がなされた。こうした一連の科学社会的な大学教授職研究の研究系譜は、直接的には現代的な意味での大学評価を志向したものとは言い難いかも知れない。

こうした動向に対して、新たな展開となったのは1977年に出版された『大学設置基準の研究』（天城勲・慶伊富長編、東京大学出版会）である。この系譜において1984年に『大学評価の研究』（慶伊富長編、東京大学出版会）が出版され、大学評価という名称の基に、大学教授の研究機能の評価ばかりでなく、大学教授の教育機能に関する研究を含めて、高等教育界の組織的総合評価が展開されることになる。この研究集団に参加した主要メンバーが、1968年に高等教育研究機関として衣替えしたIDE（機関誌は1973年に『現代の高等教育』に改名）、1972年に発足した広島大学大学教育研究センター、大学基準協会などの関係者であったところから、これらの研究組織や団体の関係者によって大学評価の研究が強力的に推進された。『IDE－現代の高等教育』では、「大学の社会的評価」（187号、1978年）、「大学の学習と評価」（224号、1981年）、「大学評価の研究」（252号、1984年）、「大学の自己評価」（284号、1987年）、「アメリカでの大学評価」（298号、1988年）、「イギリスでの高等教育改革」（319号、1990年）、「大学の自己点検・評価」（330号、1991年）、「授業計画と授業評価」（332号、1992年）が、1970年代後半から現在まで相次いで特集が組まれている。日本私立大学連盟『私立大学の相互協力と自己点検』（1977年）、『大学活性化への提言』（1991年）、大学基準協会『大学の自己評価に関する中間報告』（1981年）、その最終的成果として『大学設置・評価の研究』（飯島宗一他編、東信堂、1990年）、『大学自己点検・評価の手引き』（1992年）、広島大学大学教育研究センター『大学評価の理論的検討』（1991年）、『大学自己評価の出発点』（1991年）、『大学評価とは何か』（喜多村和之、東信堂、1992年）などが挙げられる。こうした大学評価研究の動向において大学教授の研究機能に対応する大学教授の教授学習に関係する教育機能の研究と評価が焦点的に展開されることになる。大学評価研究が即大学教授職研究に連動するわけではないが、大学教授研究における教育評価は、大学教授職概念と深く関係しているので、ここで概観しておきたい。大学教育の一般教育や専門教育に関しては、戦後当初から散見されるが、大学教授の教授法（ティーチング）として精力的に研究され始めるのは、1980年代に入ってからである。IDEの機関誌、広島大学大学教育研究センターの『大学論集』や『大学研究ノート』、筑波大学大学研究センターの『大学研究』において大学教育や一般教育の特集、テーマが生まれ、論文が発表されると同時に、広島大学大学教育研究センターの第9・10・11回研究員集会で、「大学における教育機能（ティーチング）を考える」（1980年）、「大学における教授と学習」（1981年）、「大学教育とカリキュラム」（1982年）が相次いで開催される。こうした動きは、ファカルティ・デベロップメント（FD）研究と連動して、あるいは大学評価の研究と相まって、主要な我が国の大学教授職研究の課題を形成

した。こうした動向の中から『IDE－現代の高等教育』、『大学研究ノート』で、一般教育、各学部専門教育、カリキュラム論、ファカルティ・デベロップメント研究の成果が公表されると同時に、玉川大学出版部、東海大学出版会など民間の出版機関を通じて、大学教育の視点から見た大学教授職の教育機能研究の成果が出版されている。具体的には、『大学教授法入門』（喜多村和之他訳、1982年）を初め大学教授法に関する翻訳が1980年代前半に相次いで出版される一方、『大学教育の国際化』（喜多村、1984年）、『大学のカリキュラム』（井門富二夫、1985年）、『大学教育と何か』（喜多村、1988年）、『大学教授業の研究』（片岡徳雄・喜多村和之編、1989年）、『大学のカリキュラムと学際化』（井門、1991年）などが蓄積された。

以上、大学教授職の研究と教育に関する研究の動向を大学評価の視点から整理した。大学評価に関する大学教授の役割は、研究、教育の他に、大学教授職の概念で規定したように、大学の管理運営、さらには社会的サービスという顧問的役割が包含される。こうした研究課題は、高等教育機関の大衆化、普遍化（ユニバーサル化）、官僚化、マルチバージョン化や開かれた大学が促進されてきた米国において最も展開されてきた。1970年代の我が国においても、中央審議会答申（1971年）以来、大学の財政負担、大学の多様化、官僚化に伴う大学教授の管理運営の負担の増大などが研究課題として好んで取り挙げられた。例えば広島大学大学教育研究センターにおいても、1974年度に「大学の多様化」、1975年度に「高学歴社会」、などをめぐって研究員集會が開催されると同時に、大学の組織・運営に関する総合的研究が実施されている（『大学研究ノート』第26号、1976年）。一方、IDEでは、高等教育の財政難時代を迎えて、高等教育の計画、管理運営の特集は散見されるが、大学教授の管理運営の視点は少ない。また個人研究者レベルにおける大学教授の管理運営や社会的サービスに関する研究は、清水義弘編『地域社会と国立大学』（東京大学出版会、1975年）、江原武一の「大学の組織・運営と教員の意思決定」（江原武一『現代高等教育の研究』、東京大学出版会、1984年）などの実証研究が散見されるに過ぎない。いずれにしても、高等教育機関における管理運営、財政及び社会的サービスの研究課題は、大学全体の機能として分析する業績は比較的多いが、大学教授や大学評価の文脈で実施された研究は、我が国においてはまだほとんど蓄積されてきていない現状にある。

こうした傾向は、大学教授の国際化に関する研究も同様であって、我が国の大学の国際化は1970年代以降、各種の審議会答申における教育改革のキーワードとし重視されてきた。『IDE－我が国の高等教育』においても「大学と国際化」（163号、1975年）、「国際化を阻むもの」（230号、1982年）、「大学の外国人教員」（237号、1983年）などの特集が組まれ現在に至っている。一方、広島大学大学教育研究センターにおいても、1977年度に「大学の国際化」をめぐって第6回研究員集會が開催されると同時に、『大学研究ノート』において「大学の国際化」（第31号、1978年）、「大学の国際交流に関する文献目録」（第41号、1979年）、「日本の大学における外国人教員」（第43号、1980年）、「諸外国の大学における外国人教授の任用」（第47号、1980年）、「アジア8か国における大

学教授の日本留学観（上）、（下）、総合的考察」（第70号、1988年）、『高等教育研究叢書』（第11号、1991年、第16号、1992年）など大学教授に関する国際交流の研究が実施されている。この他に高等教育に関する国際交流の研究は、日本及び海外への留学生、海外の日本研究、海外子女教育、外国大学日本校など多彩な領域を含み、かつ多くの研究機関や個人研究者による研究が積み重ねられているが、本報告書においては内容の性格から割愛する⁽³⁹⁾。

以上、大学評価の視点から大学教授の役割である教育、研究、管理運営、社会的サービス、国際交流に関する研究動向について概観してきた。我が国において、大学教授の研究、教育に関する大学評価の基礎を形成する理論的研究は、かなり蓄積されてきたことが理解されるが、大学教授の管理運営、社会的サービス、国際交流に関する研究は、まだほとんど蓄積されていない。しかし、とりわけ大学評価の視点から見た大学教授の研究、教育、管理運営、社会的サービス、国際交流の研究は、いずれの分野においても蓄積は十分とは言い難い。最近の一連の大学改革に伴って、ほとんどの大学では、具体的に自己点検・評価の委員会を設置し、点検項目が規定され、その報告書が公表されつつある。それらの報告書によれば、大学教授の研究、教育、管理運営、社会的サービス、国際交流は、程度の差はあれ、いずれも重点項目として掲げられている。こうした実情に対応して、我が国における大学教授の評価に関する基礎研究はこれから本格的に要請されるものとなろう。

参考文献

- (1) 天野郁夫・新井郁男「高等教育に関する文献解題」『教育社会学研究』26集 1971年。
新堀通也「日本の高等教育の現状」『大学世界』第31号 1981年。
江原武一「教育社会学と大学研究」『I D E－現代の高等教育』300号 1989年。
有本章・金子元久・伊藤彰浩「高等教育研究の動向」『教育社会学研究』45集 1989年。
『I D E－現代の高等教育－特集 大学研究の動向』300号 1989年。
- (2) 有本章・金子元久・伊藤彰浩「高等教育研究の動向」『教育社会学研究』45集 1989年。
- (3) 山野井敦徳「大学教授研究の構想」新堀通也編『現代学校教育の研究』ぎょうせい 1985年。
山野井敦徳「大学教授研究のパラダイム展開」『大学教授の移動研究』東信堂 1990年。
広島大学大学教育研究センター『高等教育研究の回顧と展望』第21回研究員集会 1992年。
- (4) Carr Saunders, A.M. & Wilson, P.A. *The Professions*, Oxford University Press, 1933.
- (5) 二見剛史「教職員の名称に関する一考察」日本大学精神文化研究所、教育制度研究所 紀要、第11集、1980年。

- (6) Ben-David, J., *The Scientist's Role in Society: A Comparative Study*, Prentice Hall, New York, 1971. 潮木守一・天野郁夫訳『科学の社会学』至誠堂、1974年。
Ben-David, J., *Center of Learning*, McGraw-Hill, 1977. 天城勲監訳『学問の府』サイマル出版会、1982年。
- (7) Wilson, L., *Academic Man: A Study in the Sociology of a Profession*, Octagon Press, New York, 1942.
- (8) Light, D. Jr., "Introduction: The Structure of the Academic Professions", *Sociology of Education*, Vol. 47 1974.
- (9) Kerr, C., *The Uses of the University*, Harper & Row Publishers, New York, 1966. 茅誠司監訳『大学の効用』東京大学出版会、1969年。
- (10) M. トロウ、天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学—エリートからマスヘ—』東京大学出版会、1976年。
- (11) Parsons T. and Platt, G., *The American University*, Harvard University Press, 1973.
- (12) Clark, B. R., *The Academic Profession: National Disciplinary & Institutional Settings*, University of California Press, 1987.
Cartter, A. M., *An Assessment of Quality in Graduate Education*, American Council on Education, 1966.
Caplow, T. and McGee, R. J., *The Academic Marketplace*, Basic Book, New York, 1958.
- (13) Burke, D. L., *A New Academic Marketplace*, Greenwood Press, 1988.
- (14) Kuhn, T. S., *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press, 1962. 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房 1971年。
- (15) 山野井敦徳『大学教授の移動研究』東信堂 1990年。
- (16) Carr Saunders, A. M. & Wilson, P. A., *Ibid.*, 1933.
- (17) Wilson, L., *Ibid.*, 1942.
- (18) Sorokin, P. A. and Anderson, C. A., "Metabolism of Different Strata of Social Institutions and Institutional Continuity", *Istituto Paligrafico dello Stato*, Rome, Vol. 9, 1931.
- (19) Caplow, T. and McGee, R. J., *Ibid.*, 1958.
- (20) Bowen, H. R., and Schuster, *American Professors: A National Resource Imperiled*, Oxford University Press, 1986.
Burke, D. L., *Ibid.*, 1988.
- (21) 山野井敦徳 同上書 1990年。
- (22) 新堀通也『日本の大学教授市場—学閥の研究—』東洋館出版 1965年。
- (23) 社会学の分野では、中野秀一郎、星明、経済学分野では藤野らの研究がある。

- (24) 有本章『マートン科学社会学の研究—そのパラダイムの形成と展開—』福村出版 1987年。
- (25) 新堀通也『年譜』（非売品）ぎょうせい 1985年。
- (26) 中山茂編著『パラダイム再考』ミネルヴァ書房 1985年。
- (27) 林雄二郎・山田圭一編『科学のライフサイクル』中央公論 1975年。
山田圭一・塚原修一編『科学研究のライフ・サイクル』東京大学出版会 1986年をはじめ研究者の流動性に関する研究などが代表的業績である。
- (28) 潮木守一『近代大学の形成と変容』東京大学出版会 1973年。
潮木守一『大学と社会』第一法規 1982年。
潮木守一『京都帝国大学の挑戦—帝国大学史のひとこま—』名古屋大学出版会 1984年などが関連する代表的業績である。
天野郁夫「日本のアカデミック・プロフェッション—帝国大学における教授集団の形成と講座制」広島大学大学教育研究センター『大学研究ノート』Vol.30 1977年。
天野郁夫『試験の社会史』東京大学出版会 1983年。
天野郁夫『高等教育の日本的構造』玉川大学出版部 1986年。
天野郁夫『近代日本高等教育研究』玉川大学出版部 1989年などが関連する代表的業績である。
その他に岩田弘三、伊藤彰浩らの論考がある。
- (29) Altbach, P.G. and Selvaratnam, V., *From Dependence to Autonomy*, Kluwer Academic Publishers, 1989.
- (30) Clark, B.R., *The Higher Education System: Academic Organization in Cross National Perspective*, University of California Press, 1983.
- (31) 清水義弘編『日本の高等教育』第一法規 1968年。
慶伊富長編『大学評価の研究』東京大学出版会 1984年など。
- (32) M. トロウ著 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学—エリートからマスヘ—』東京大学出版会 1976年。
D. リースマン著 喜多村和之・江原武一他訳『高等教育論—学生消費者時代の大学』玉川大学出版部 1986年。
- (33) 喜多村和之『学生消費者の時代』リクルート出版 1986年。
江原武一『現代高等教育の研究』東京大学出版会 1984年。なお、M. トロウの大学発達論に関する論文は天野、喜多村らによって論究されている。
- (34) Webster D. S., *Academic Quality Rankings of American Colleges and Universities*, Charles, C. Thomas Publishers, 1986.
- (35) 喜多村和之『大学評価とは何か』東信堂 1992年。
- (36) 江原武一・奥川義尚『アメリカの大学院評価—大学院教育の専門分野別評価を中心に—』広島大学大学教育研究センター『高等教育研究叢書』第20号 1992年を参照さ

りたい。

- (37) 天城勲・慶伊富長編『大学設置基準の研究』東京大学出版会 1977年。
飯島宗一・戸田修三・西原春夫編『大学設置・評価の研究』東信堂 1990年。
- (38) 喜多村和之 同上書 1992年。
- (39) 大学教育の国際化に関する文献目録は喜多村和之『大学教育の国際化』玉川大学出版部 1984年を参照されたい。

第二部

大学教授職国際調査の報告 ー日本編

Ⅲ章 調査の意図と方法

有本 章

1 プロジェクトの趣旨と概要

大学の主要な社会的機能と目される教育、研究、社会サービス、国際交流、管理運営等に関する自己評価が要請されている今日、その理論、現実、展望に関する研究が不可欠である。それにもかかわらず、先行研究は必ずしも十分行われているとはいえない。本プロジェクトの目的は、こうした現状に鑑み、大学教授職の実態を明らかにすることにある。具体的には、大学教員の各種領域に対する意識や行動を、比較研究を通じて実証的に明らかにすることである。

このような趣旨に基づいて、調査の質問項目を設定する必要がある。本プロジェクトは、カーネギー教育振興財団 (The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching) が主催し、世界12か国が参加した「大学教授職国際調査」 (International Survey of the Academic Profession) と連携する関係上、質問項目の全体的な枠組みはそれに依拠した。つまり、①大学教員の自己像、②労働条件、③専門職的活動、④社会サービス、⑤管理運営、⑥アカデミック・ライフの国際交流、⑦高等教育と社会、等を踏襲し、さらに⑧大学評価を追加した。質問紙は、同上調査の日本語版を使用した。大学評価自体の質問項目は、厳密には⑧のみになるが、その他の①から⑦までの項目も、大学の教育、研究、社会サービス、管理運営、等の諸機能とかわり、これら諸機能と関係した大学教授の自己評価を問題にしている領域であることに変わりない。したがって、本調査では、これら諸項目に対する回答を通して、大学教授の意識、行動、展望、等にかかわる実態を実証的に明らかにすることを主眼とした。高等教育の転換点を迎え、大学の社会的アカウンタビリティ、レリバンス、が要請されている現時点において、大学教授職の実態を自己評価によって明らかにすることは、今後の大学のあり方を問うためにも、大学像を模索するためにも、基礎研究として欠かせないし、そのことによってこれらの問題に重要な示唆を与えるに違いない。

なお、今回の報告は、国際調査の中の日本のみを集計して、しかも素集計の段階の報告を主体として構成されているので、国際比較の観点から大学教授職の自己評価の実態を検討すること、また、各種の項目のクロス集計ならびに検討を行なうことは、それぞれ割愛されている。これらの観点からの検討は、今後持ち越される課題である。

2 質問紙調査の実施

本プロジェクトの質問紙調査実施に際しては、『平成2年度 大学一覧』（大学基準協会編）、『平成2年版 全国大学職員録』（廣潤社編）等を利用して、わが国の四年制大学を研究機能（「研究大学」と「その他の大学」）と教員規模（「大規模校」、「中規模校」、「小規模校」）により分類し、調査対象校を層化抽出した（付録1参照）⁽¹⁾。研究大学については、全教員の中から無作為抽出した教員（抽出の割合は25～37%）を、「その他の大学」については全教員をそれぞれ対象にした⁽²⁾。これらの教員を対象にして、1992（平成4年）年3月に7,634部を配布し、同年5月末までに3,397部を回収した（回収率は44.5%）。個々の質問項目についての回答状況については、巻末付録の集計表に示した通りである。

注(1) 本プロジェクトはカーネギー教育振興財団の大学教授職国際調査（代表者・有本章）の一環として実施されているので、総配布質問紙数の4,000部についてはカーネギー国際教授職調査の標本化の手順に従っており、大学教授職の国際比較が可能なるようにも設計されている。

注(2) 研究大学とその他の大学の区別は、天野分類（「大学分類の方法」慶伊富長編『大学評価の研究』東京大学出版会、1984年）に基づいた。この分類に従えば、研究機能の強い研究大学は24校で、全体の5.4%を占めている。この分類の手法を基礎にすると現在、30大学（国立16校、公立3校、私立11校）が研究大学に該当することになるので、それらの大学を研究大学に設定した。サンプリングの方法はカーネギー調査に基づいて行なわれ、研究大学4校（国立3校、私立1校）、その他の大学15校（国立4校、私立11校）が抽出された。本プロジェクトでは、カーネギー調査で抽出された研究大学をそのまま使用したが、それ以外に別途比較を企図して追加した3大学の中の2大学（いずれも国立）は上記分類による研究大学に相当するので、教員全員を調査対象にしたものの、本報告では研究大学に含めて集計している。なお、天野分類（1979年現在）による研究大学（24校）は次の構成になる。

	設置者別					編成形態別		所在地域別					
	計	国	公	私	総合	複合	単系	東	近	他	女大	医歯	国公比
研究大学	24	15	4	5	16	2	6	12	5	7	1	16	79.2%
大学院大	121	12	8	101	17	26	78	45	23	53	9	47	16.5
準大学院大	35	19	2	14	27	8	-	6	1	28	-	28	60.0
修士大	85	36	6	43	7	21	57	20	16	49	16	-	49.4
学部大	178	10	13	155	-	-	167	20	30	128	60	-	12.9
全体	443	92	33	318	67	68	308	103	75	265	86	91	28.2

3 回答者の属性

本調査のフェースシート部分には、カーネギー調査で指定された回答者の属性にかかわる質問項目が含まれており、これを分析すると、回答者のプロフィールが素描できる。項目としては、回答者の性別、誕生年、両親の最終学歴、取得最終学歴、取得最高学位の専門分野、授与国、学位取得準備、母校の教師および研究者養成機能、在職高等教育機関数、高等教育機関の在職年数、高等教育機関以外の在職年数、大学規模、職階、常勤・非常勤、所属大学の勤務年数、所属組織の教員数、所属大学以外からの給与、所属学会数、学会参加数、重要なコミットの対象、等が該当する（付録の集計表を参照）。

【性別】性別に関しては、全回答者（3,384人）の中、男性（93%）が女性（7%）にくらべて圧倒的に多い比率を示している。これは1991年（平成3年）現在の全教員（126,445人）の中、男性（90.6%）女性（9.4%）とほぼ同様の比率となっている。大学類型、専門分野、職階、等によって若干の相違が認められる。それを女性の割合でみると研究大学はその他の大学に比較して、理科系分野（理学、工学、農学）は文科系分野（人文、芸術学）に比較して、教授は助教授やさらに講師に比較して、それぞれ少なくなる傾向を示している。

【誕生年】誕生年の中央値は1941年である。1992年現在に換算すると、51歳に当たる数字である。専門分野では、芸術学系（55歳）でやや高く、医歯学系（49歳）、体育学系（48歳）でやや低くなっている以外、ほぼ同じである。職階では教授（57歳）、助教授（45歳）、講師（41歳）となる。

【職階】職階に関しては、全回答者の中、教授（54%）、助教授（34%）、講師（11%）となる。標本数は、問9より、教授（1,832人）、助教授（1,161人）、講師（374人）となる。

【学歴】学歴に関しては、両親と本人の場合について次の結果が得られる。まず、両親の場合は、父親では、高等教育（短大、大学、大学院）を卒業程度の高学歴者の割合（51%）が半数を超えている。大学・大学院卒業程度でみても、その割合（34%）は3分の1に達しており、これを大学類型で見ると、研究大学がその他よりも高い傾向を示していることが分かる。また専門分野では、医歯学系と芸術学系がともに50%近い割合を示しており、職階では、教授より助教授、助教授より講師と次第に高率になっていることが特徴として指摘できるだろう。母親の場合の高等教育の割合（21%）は半減するが、それでも父親ほど顕著な傾向は示さないとしても、ほぼ似かよった傾向が認められる。本人の学歴に関しては、ほとんど全員近く（99%）学士以上の学位を取得しており、博士取得者の割合（60%）が全体の5分の3に達している。その割合は、研究大学、理科系（理学、農学、医歯学）、教授、等において高くなる傾向を示している。特に専門分野間の差異が顕著であり、医歯学系のように96%になっている分野がある半面、社会科学系（30%）、人文科学系（17%）、体育学系（11%）とかなり低い割合となっており、

さらに、芸術学系（1%）は顕著に低い割合になっている。全体に、理科系は博士、人文科学系および社会科学系は修士、芸術学系および体育学系は学士が、現在における最頻値的な学歴を構成していることが明らかになることから、専門分野によって差異の大きいことが証明される。

【専門分野】最終学位を基にした専門分野に関しては、12分類としたが、その結果は次のようになる。人文科学系（15%）、社会科学系（12%）、理学系（20%）、工学系（20%）、農学系（7%）、医歯学系（15%）、保健学系（0.1%）、家政学系（0.6%）、教員養成系（1.4%）、芸術学系（5%）、体育学系（3.5%）、一般教養学系（0.3%）、その他（0.6%）。本調査の分析では、保健学系、家政学系、教員養成系、一般教養系の4つの専門分野を「その他学系」に一括含めて、専門分野のデータとしている。各専門分野の標本数は、問3bより、次のようになる。人文科学系（491人）、社会科学系（405人）、理学系（654人）、工学系（664人）、農学系（229人）、医歯学系（487人）、芸術学系（175人）、体育学系（127人）、その他学系（98人）。

【最終学位取得国】最終学位の取得国は、日本（94%）が圧倒的に多い。外国の学位としては、アメリカ（4%）が最大であり、それ以外ではフランス、イギリス、ドイツ、等が見られる。外国での取得率が低い、その中でやや高い傾向を示す専門分野は、人文科学、社会科学、芸術学、等で10%程度であり、その他学系（16%）ではかなり高くなっている。現在、さらに上級学位の取得のために準備している教員は、16%ほど見られる。博士学位取得率の高い理科系では、その割合は工学系を除いて数パーセントと少ない。人文科学、社会科学、その他学系では、約3分の1が準備をしていると回答している。職階では教授よりも、助教授や講師での比率が高くなる傾向を示している。

【母校の教育効果】母校で受けた教育に関しては、①大学教師として、②専門分野の研究者として、の二つの側面を評価している。これによると、①の大学教師では、「普通」を基調に「よい」が3分の1、「大変よい」が5分の1、程度見られる。つまり「よい」「大変よい」を合わせると55%近くになる。全体に「まずまず」という評価を下しているが、それでも「大変よい」の割合は多くないという印象は拭えないかもしれない。研究大学とその他の差異はほとんどないが、専門分野では、医歯学系と農学系での評価がやや低く、職階では、教授より助教授、助教授より講師と、次第に評価が低くなっている。②の専門分野の研究者では、教師の側面に比較して、「よい」「大変よい」を合わせると6割となり、全体に良好という評価が下されている。研究大学とその他の大学では、前者の評価が高い傾向を示している。専門分野では、医歯学系と体育学系での評価がやや低い。職階では、教師の場合と同様の傾向を示している。つまりこの結果は、若い教員層では、出身校の大学教員養成機能が、教師養成の側面でも、研究者養成の側面でも不満度が高いことを示唆している。

【在職年数】回答者の教員が在職した高等教育機関数は、中央値で1校、医歯学系が2

校となっている以外、大学類型、専門分野、職階に差異が認められない。在職年数の場合は20年となる。これは、専門分野では芸術学系（25年）でやや長い以外大差はない。職階では、教授（25年）、助教授（16年）、講師（10年）と差異がある。高等教育機関以外の在職年数は、中央値で1年と短い。つまり、大概の教員は大学以外の機関で働いた経験がほとんどないことを示している。研究大学、社会科学、理学、工学の各系、助教授、講師の職階では、それぞれ中央値で0年となっている。他方、その他学系（4年）や芸術学系（3年）は、大学以外の経験年数が多くなっている。

【所属大学の規模】回答者の所属大学規模を学生数で見ると、1万人～3万人未満（37%）が最頻値を示す。

【勤務形態】こうした所属大学での勤務年数は16年。常勤（99%）と非常勤（1%）の割合は、圧倒的に前者が多い。その内容は「任期がなく、定年まで勤務、昇進可能」（93%）が多く、他方、「任期がある」（2%）は若干認められる。これらの数字から、制度的にはテニユア（終身在職権）制度が存在しないとしても、回答者の大半は実質的に定年まで身分保証を享受していることが分かる。そして、そこから給与を得て生活していることになる。所属大学以外の高等教育機関には過半数（62%）が勤務していないとしている。それでも、非常勤職には4割近く（37%）が就職し給与を得ている。大学類型ではほぼ同様であるが、専門分野では人文科学系、体育学系、その他学系での比率が2分の1を超えている半面、理科系は概ね少ない。職階では上位ほど多い。高等教育機関への非常勤がかなり高い比率を占めているのにくらべて、高等教育機関以外には5分の4が常勤・非常勤を含めて就職していない。この傾向の中では、医歯学系（44%）のみが突出して高い割合を示している事実が認められる。

【学会活動】研究活動に目を転じると、所属学会数の中央値は、国内学会で4であるが、医歯学系（6）が多い。国際学会で1であるが、研究大学、理科系、教授以外は少ない傾向を示している。国内学会の参加数は3年間で7で、研究大学、理科系、でやや多い。特に医歯学系（13回）で著しく多く、芸術学系（3回）は少ない。海外の学会参加数は3年間で1回、医歯学系（2回）が多い方である。

従来の先行研究で指摘されているように、日本の大学教員は研究への生き甲斐、愛着、帰属意識が高いのが特徴である。本調査でも同様の角度からの質問がある。大学教員が、自分の専門分野、大学、学部、学科、講座・教室の中で、何を一番重要だと考えているかを尋ねた部分の回答を集計すると、「大変重要」「かなり重要」を合わせた場合次の結果が得られる。専門分野（97%）、講座・教室（89%）、学科（85%）、学部（78%）、（78%）。この結果は、極めて興味深いものである。つまり、まず自分の専攻する専門分野を中心に、講座・教室などの身近な組織を軸にして、同心円的に周辺組織へと比率が減少する傾向が認められるからである。教員は大学機関よりも専門分野に対する帰属意識があり、そこを準拠して日常の学究活動を展開していることを示唆する結果である。大学がボトムアップの力学で動く原動力はこの種の基本的意識構造に根ざしているはずで

ある。専門分野を中心に学術活動を展開する大学本来の特徴が如実に反映されている。全体に大同小異であるが、研究大学はその他の大学よりもこの傾向がやや大きく、専門分野では、理科系や社会科学系でその傾向がやや強く、人文科学、芸術学、体育学、その他の系ではやや弱い傾向が認められる。職階別では講師が最も強く、上位ほど弱まる傾向があり、教授が大学への帰属意識の点で一番高い。専門分野への意識では職階間に差異がないので、大学教員は長年同一大学に奉職する間に、大学に対する愛着が増すものと想像できよう。

【大学教授のプロフィール】以上は、ほぼ概略の説明であり、大学類型、専門分野、職階によって、教員の具体像が異なることは、上で記述したとおりである。これらのフェースシートに関係した部分の詳細なクロス分析は必要であるが、本報告においては、上で説明した理由から割愛して、最小限の指標から比較分析を行なうことにした。以上の結果、本調査の回答者である全国の大学教員のおおよそのプロフィールが素描できたのではあるまいか。簡単に繰り返すと、それは次のようなものになる。

大学教員は1941年に誕生し、比較的高い社会階層の出身者であり、大学以上の高等教育を受け、各種の専門分野を専攻して学士以上の学歴を取得した。最終学歴はほぼ日本国内で終えている。現在、上級学位取得のために準備している教員は分野によって異なるものの、2割弱見られる。大学教授職に就くまでの長い科学的社会化 (scientific socialization) の過程において、大学教授職の養成機能を問題にすると、母校の教師養成や研究者養成に関しては、まずまずの評価をしているものの、必ずしも高い評価をしているとはいえない。研究者に比して教師養成の側面における教育効果にはやや不満度が高い。

回答者のキャリアを通じて、大学以外の機関に奉職した経験は僅か1年程度にすぎず、大学に奉職して以来20年、また現在の大学に奉職して16年間、ほとんど首尾一貫して大学教授職に就いている。教授、助教授、講師の職階全体にほぼ共通して常勤職、同時に終身在職権を得ている。所属大学で給与を得て生活していると同時に、それ以外の大学でも4割近く(37%)が非常勤で勤め給与を得ている。大学以外にも2割近くが非常勤で勤め給与を得ている。特に、医歯学系の非常勤の割合(44%)は多い。

所属大学の規模は、学生数1万～3万未満または5千～1万未満層が中心である。所属大学の運営単位である組織では、5人程度の教員から構成する講座、あるいは24人程度の教員から構成する学科に所属している。これらの組織に対する帰属意識は、身近な運営単位において高い。つまり、大学教員は専門分野、講座・教室、学科、学部、大学の順で重要だと意識しており、自己の専攻する学問に対する愛着がその他の組織よりも断然大きい構造を呈するなかで、専門分野と直接関わる単位ほど帰属意識が大きいという構造になっている。それらを拠点にしている事実は、大学の機能の中では、教育よりも研究への愛着度が大きいことを物語る。大学教育の観点から、教育への愛着やコミットを大学は期待するのに対して、教員は教師としてよりも研究者として学界へのつながりを求める傾向が生じるのは、この構造に起因することになる。その学界活動を占う所属学会数を見ると、国内学会で4、国際学会で1、国内学会の参加数は3年間で7回、海外学会参加数は3年間で1回である。

IV章 仕事の状況

相原 総一郎

1 はじめに

大学教員は、日夜、学術研究に没頭しているようにも見えるし、ただ研究室で空を見つめていたり、同僚と歓談しているだけのようにも見える。実際のところ、規則正しい学究生活を送る研究者もいる傍らで、実験室にこもっている大学教員もいれば、審議会や委員会などで華々しく活躍している大学教員もいるからである。しかし水面下では、大学教員は研究者として学術活動の動向に遅れを取らないよう研鑽に務めており、それは研究成果として公表されている。本章では、大学教員の学究生活の実態について、第一には大学教員の仕事の時間配分と給与等の各種の待遇について、第二には学究生活を取り巻く諸状況の評価について明らかにする。

2 時間配分と待遇

大学教員は、平均的な一週間において学期中は46時間、休暇中は41時間働いている。大学教員の職務を教育活動(授業の準備、授業、学生指導、採点、評価など)、研究活動(読書、執筆、実験、フィールドワークなど)、社会サービス(依頼人・患者へのサービス、コンサルタント、講演、学外審議会、その他の社会サービスなど)、管理運営(学内委員会、教員会議、事務など)、その他の学術活動(学会出席など、上記項目以外の専門的活動)の5分野に分け、学期中と休暇中の時間配分をそれぞれみるなら、学期中は教育活動18時間、研究活動20時間、社会サービス2時間、管理運営4時間、その他の学術活動2時間、休暇中は教育活動5時間、研究活動30時間、社会サービス2時間、管理運営2時間、その他の学術活動2時間である。大学教員の主な仕事は教育活動と研究活動であること、休暇になると教育活動と管理運営の時間が減少する一方で研究活動が増加することがわかる(表IV-1)。

大学教員は、毎日何時間も勉学に切磋琢磨しているのであるが、さらに上級の学位や何らかの資格を取得しようとしている者は以外に少ない。上級の学位や資格の取得を目指して一日に数時間も勉学に励んでいる者はむしろ少数である。表IV-2に示したように、過半数(63.9%)の大学教員は学位や資格の取得を考慮せず、学位や資格の取得を目指している者についても、一週間あたりの学習時間は2時間未満である者が11.8%、2時間以上20時間未満の範囲にある者が約20%である。20時間以上を学位や資格の取得

表 IV-1 仕事の時間配分

主な仕事	(時間)	
	学期中	休暇中
教育活動	18	5
研究活動	20	30
社会サービス	2	2
管理運営	4	2
その他	2	2

注) 個々の時間数は中央値

表 IV-2 学位・資格の取得に費やす時間 (%)

2時間未満	11.8
2時間以上4時間未満	5.8
4時間以上8時間未満	4.4
8時間以上12時間未満	4.6
12時間以上16時間未満	3.4
16時間以上20時間未満	1.7
20時間以上	4.4
学位取得を考えていない	63.9
合計	100.0 (2,607)

表 IV-3 大学教員の総収入

総収入	%					
	全体	研究大学	その他大学	教授	助教授	講師
520万円未満	3.3	2.4	3.9	0.9	4.1	11.1
520万円～715万円未満	13.3	11.8	14.3	4.0	21.3	34.8
715万円～910万円未満	23.9	24.4	23.6	11.7	41.9	27.4
910万円～1,105万円未満	27.8	27.4	28.1	34.4	22.2	12.8
1,105万円～1,300万円未満	20.6	22.8	19.1	32.2	6.8	8.2
1,300万円以上	11.0	11.2	10.9	16.7	3.7	5.7
合計	100.0 (3,338)	100.0 (1,362)	100.0 (1,976)	100.0 (1,792)	100.0 (1,148)	100.0 (368)

表 IV-4 大学教員の給与の評価

給与の評価	%					
	全体	研究大学	その他大学	教授	助教授	講師
大変よい	1.3	0.4	1.8	1.9	0.8	0.0
よい	9.2	6.8	10.8	11.6	6.3	6.2
普通	44.1	40.1	46.9	46.9	40.4	41.6
よくない	44.0	51.5	38.8	38.2	51.0	50.3
わからない	1.5	1.2	1.7	1.4	1.5	1.9
合計	100.0 (3,376)	100.0 (1,373)	100.0 (2,003)	100.0 (1,823)	100.0 (1,155)	100.0 (370)

表 IV-5 給与改善の見通し

%	
極めて高い	1.2
高い	6.4
高くも低くもない	31.6
低い	46.3
わからない	14.5
合計	100.0 (3,356)

表 IV-6 大学教員の各種の待遇の評価

	%			
	退職関連の 処遇	有給の研究 休暇	教育研究の ための旅費	その他の福 利厚生
大変よい	0.8	1.4	0.6	0.9
よい	7.8	7.8	5.4	9.6
普通	55.7	23.0	22.4	59.4
よくない	28.1	42.5	70.3	29.0
該当しない	7.7	25.3	1.4	1.0
合計	100.0 (3,281)	100.0 (3,308)	100.0 (3,345)	100.0 (3,331)

に充てている者は4.4%だけである。学位授与の実態は専門分野によって大きく異なる(付録の集計表、問3 a 参照)が、終身在職権を既に取得した多くの大学教員にとっては、さらに上級の学位や資格は学術研究への貢献に対しての顕栄的な報償の一種とみなされているのかも知れない。

わが国の大学教員は収入を主に大学からの給与に頼っている。大学教員の収入は520万円から1,300万円の範囲に広がり、勤務する大学の類型—研究大学とその他の大学—ではほとんど変わらないが職階によって大きく変化する(表IV-3)。たとえば職階ごとに収入の分布をみると、教授は910万円から1,105万円未満である者(34.4%)と1,105万円から1,300万円未満である者(32.2%)が多いのであるが、助教授は715万円から910万円未満(41.9%)、講師は520万円から715万円未満(34.8%)である者が多いのである。

大学教員の給与に対する評価は決して芳しくない。「大変よい」と「よい」と評価する者は1割程度である(表IV-4)。ほとんどの大学教員は、彼ら/彼女らの給与を「よくない」あるいは「普通」と評価している。そして、給与に低い評価を下している大学教員は、大学類型では研究大学(51.5%)、職階では助教授(51.0%)、講師(50.3%)に多い。大学からの給与に対する不満は、大学類型では威信的地位の高い研究大学、職階では低位に位置する助教授、講師において強いのである。しかしながら、今後5年間に給与が改善される見通しを尋ねた質問には、多くの大学教員(46.3%)は給与が改善される見通しは低いと答えている(表IV-5)。

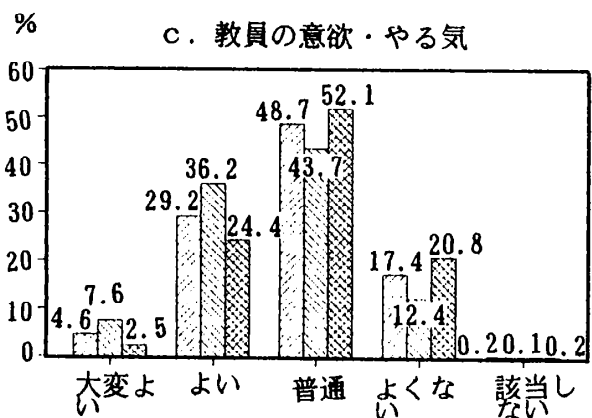
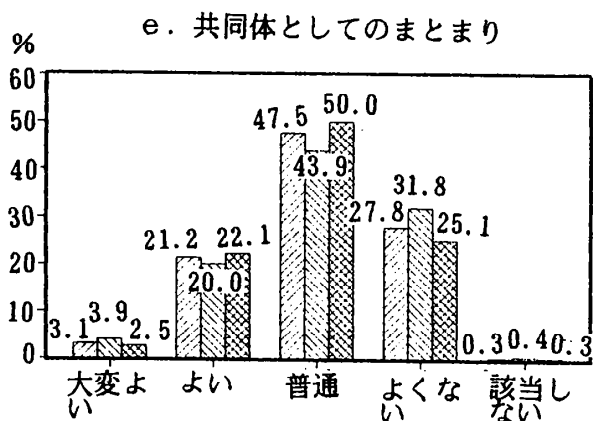
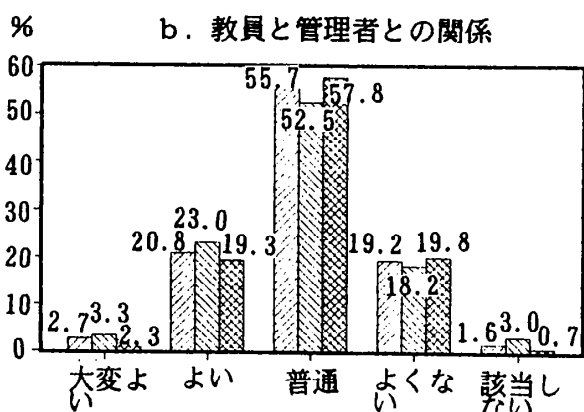
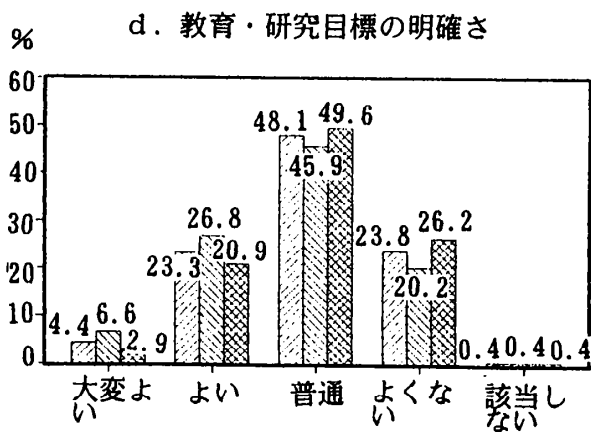
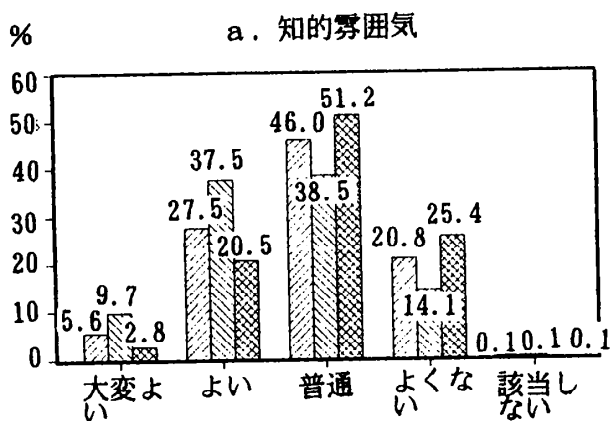
給与以外の待遇への大学教員の評価も全般によくはないが、わけても「教育研究のための旅費」(70.3%)と「有給の研究休暇」(42.5%)への評価が厳しい(表IV-6)。教育研究を遂行する上での条件となる待遇、つまり教育研究旅費や研究休暇に関して、大学教員は大きく不満を持っている。

3 学術活動の環境

大学教員の学究生活を取り巻く状況を、①教育・研究の状況、②施設・設備・スタッフの状況、③学生の学力、④大学教員の仕事自体への満足度、⑤専門分野の将来性とキャリアの5点についてみる。

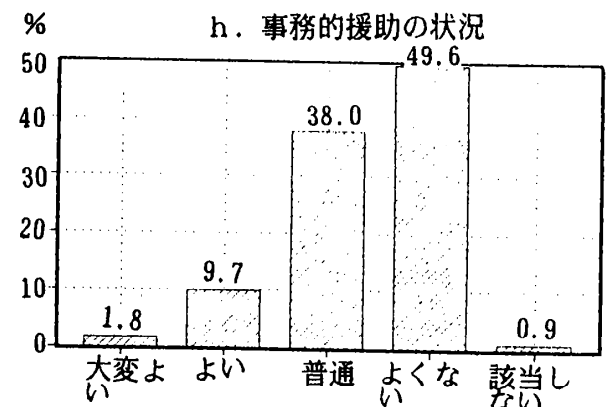
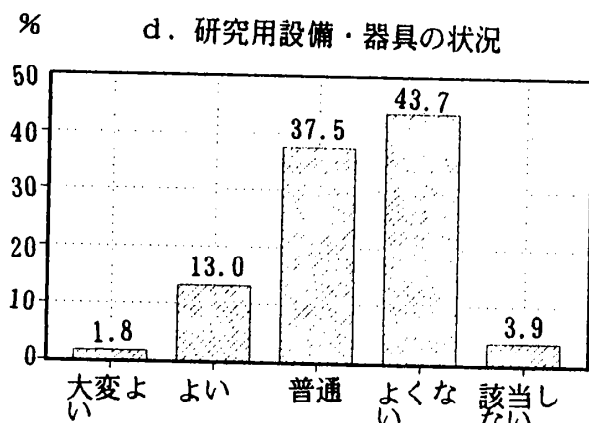
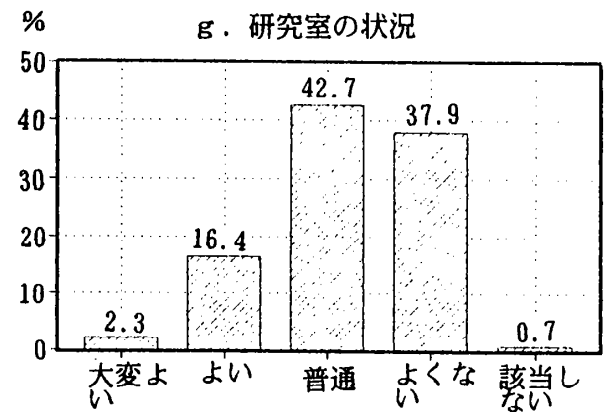
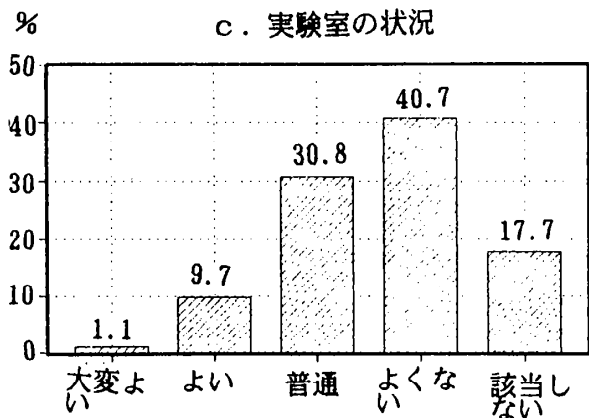
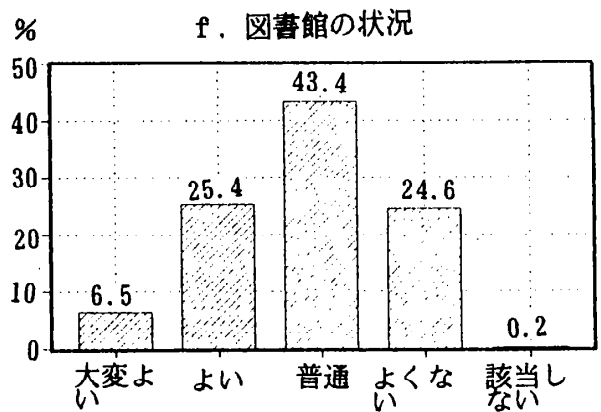
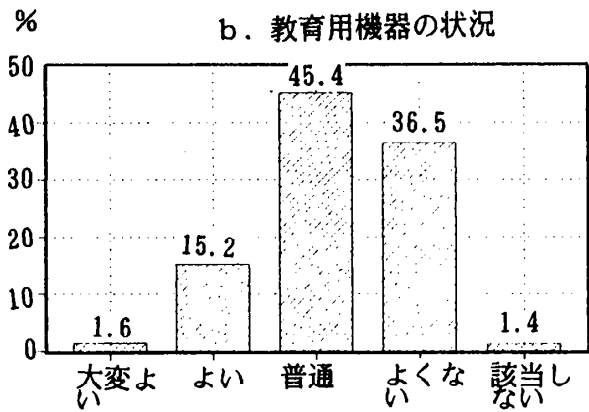
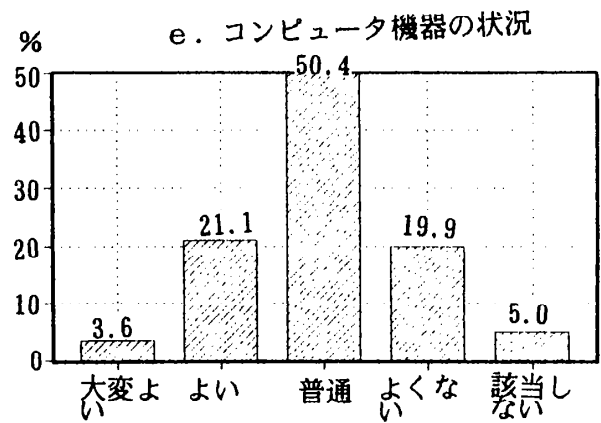
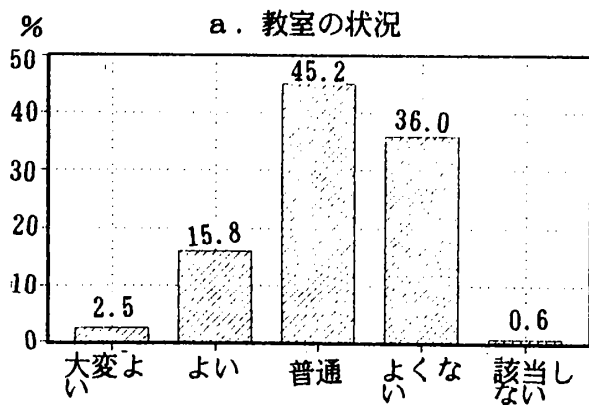
まず大学の教育・研究の状況に対する評価である。図IV-1は、大学教員の評価を大学の知的雰囲気、教員と管理者との関係、教員の意欲・やる気、教育・研究目標の明確さ、共同体としてのまとまりの各項目について、全体、研究大学、その他の大学で比較して示している。いずれの項目についても「普通」と答えた大学教員が最も多く、良いと評価する大学教員と良くないと評価する大学教員はほぼ等しく分かれている。研究大学をその他の大学と比べると、知的雰囲気(37.5%)や、教員と管理者との関係(23.0%)が良好で、教員の意欲・やる気(36.2%)が高く、教育・研究目標が明確(26.8%)である傾

図 IV-1 大学の教育・研究環境の評価



全体
 研究大学
 その他の大学

図 IV-2 施設、設備、人員の評価



向を読み取れる。

つぎに施設、設備、スタッフの状況に対する大学教員の評価を図IV-2に示した。先ほどの教育・研究の状況に比べてよくないと評価する大学教員の割合が増えている。なかでも事務的援助(49.6%)、研究用設備・器具(43.7%)、実験室(40.7%)をよくないと評価する大学教員が多い。事務官や技官の一律削減、国公立大学の施設・設備の窮状などが反映されていよう。

表IV-7に示したのは大学生の学力についての大学教員の評価である。過半数の大学教員(51.9%)は、学生の学力を「普通」と評価しており、27%は「よくない」、20%は「よい」あるいは「大変よい」と評価している。5年前の学生と比べると、現在の学生の質は変わらないと評価する大学教員は40%であるが、悪くなったと評価する大学教員も40%いる。大学類型別では研究大学で学生の学力はよいと評価する大学教員が多く(28.9%)、その他の大学ではよくないと評価する大学教員が多い(33.1%)。しかし、現在の学生を5年前の学生の質と比べると、悪くなったと評価する大学教員は研究大学の方が多いのである。研究大学は、同世代のなかの良質の学生を引きつけてはいるが、全体的には学生の質が低下しているのかも知れない。

大学教員の学術活動それ自体に対しての満足度について、表IV-8に各項目の5段階評点を挙げた。表より、大学教員は「大学の運営方針」(2.9)や「昇進の見通し」(3.1)には可もなく不可もなくの評価であるが、「教育・研究活動の自由」(3.8)と「仕事の安定性」(3.7)、「担当する授業」(3.5)にはほぼ満足していることをみれる。要約的に大学教員の心境を述べるなら、給与を初め教育研究のための旅費、研究休暇等の待遇、そして事務的援助や施設・設備、実験室といった学術活動の遂行のための条件的な処遇に不満を抱いているが、ただ教育・研究の自由と仕事の安定性、担当する授業には満足しているのである。

専門分野の将来性とキャリアの見通しについては、大学教員は、彼/彼女の専門分野が創造的で生産的であると思っており、教員自身の専門分野は若い人にも将来性があり、もし人生を繰り返すことができるならふたたび大学教員になろうと思っているのである。ただし、過半数(3.6)の大学教員は、仕事には相当な心理的緊張を伴っていると答えてもいる(表IV-9)。大学教員のうち、今後5年以内に所属大学を辞する可能性が高いと答えた者は20%、どちらでもない者20%、可能性が低い者40%である(表IV-10)。現在の所属大学を辞する条件を高い順位に挙げていくと、研究条件(3.8)、収入(3.6)、大学の立地条件(3.5)、同僚との協力関係(3.3)、大学・学科の評判(3.3)である(表IV-11)。大学教員は、同僚との協力関係や大学・学科の評判を考慮に入れなくはないが、より優れた研究条件、より高い収入、より良い立地の大学を目指して移動するのである。

4 まとめ

大学教員は、平均的な一週間に学期中は46時間、休暇中は41時間働いている。研究

表 IV-7 大学教員の学生の評価

		(%)		
		全体	研究大学	その他大学
現在の学生の学力の評価	大変よい	2.3	5.0	0.4
	よい	17.7	28.9	10.0
	普通	51.9	46.7	55.4
	よくない	26.9	17.8	33.1
	わからない	1.2	1.5	1.1
	合計	100.0 (3,326)	100.0 (1,351)	100.0 (1,975)
5年前の学生の質と比較した場合	良くなった	4.6	1.7	6.6
	↑	8.6	4.9	11.1
	ほぼ同じ	39.7	42.6	37.7
	↓	21.0	23.4	19.3
	悪くなった	19.7	21.0	18.8
	わからない	6.5	6.5	6.4
合計	100.0 (3,306)	100.0 (1,331)	100.0 (1,975)	

表 IV-10 5年以内に所属大学をやめる可能性 (%)

可能性は高い	19.8
どちらかといえば高い	5.9
どちらでもない	22.5
どちらかといえば低い	5.9
可能性は低い	40.3
わからない	5.6
合計	100.0 (3,298)

表 IV-8 大学教員の満足度

	評点
大学の運営方針	2.9
昇進の見通し	3.1
仕事全般の満足度	3.4
同僚との関係	3.4
担当する授業	3.5
仕事の安定性	3.7
教育・研究活動の自由	3.8

注) 5段階評点 (5:大変満足、3:どちらでもない、1:大変不満足)

表 IV-11 大学教員が所属大学をやめる条件

	評点
大学・学科の評判	3.3
同僚との協力関係	3.3
大学の立地条件	3.5
収入	3.6
研究条件	3.8

注) 5段階評点 (5:辞めるのに重視、3:どちらでもない、1:残るのに重視)

表 IV-9 大学教員の専門分野とキャリア観

	評点
若い人に将来性はない	2.2
再び大学教員になりたくない	2.4
相当な心理的緊張がある	3.6
大変に創造的で生産的である	3.8

注) 5段階評点 (5:全くそう思う、3:どちらでもない、1:全くそう思わない)

時間は、学期中20時間/週、休暇中30時間/週である。学位や資格の取得を目指して勉学に励んでいる大学教員もいるが、全体像としては学問研究の動向に遅れず新たな展開をもたらすべく研鑽している大学教員の姿を窺える。大学教員の主な収入は大学からの給与であり、その金額は520万円から1,300万円である。大学教員は、彼ら/彼女らの給与は低いと評価しており、この傾向は大学類型では研究大学、職階では助教授、講師に強い。しかし、今後5年間に大学の給与が改善される見通しはあまりないと思っている。給与以外の大学教員の処遇については、教育研究のための旅費や研究休暇の制度といった教育研究のための待遇についてよくないと評価する大学教員が多い。

学究生活を取り巻く状況は、まず教育・研究の環境は全般に普通と評価する大学教員が多く、大学類型別では研究大学の方がその他の大学よりも良好である。つぎに施設、設備、スタッフについては事務的援助、研究用設備、実験室をよくないと評価する大学教員が多い。学生については、過半数の大学教員は今日の学生の質を普通と評価しているが、5年前の学生に比べて質が悪くなったと評価する大学教員が40%もいる。大学教員は、彼ら/彼女らの仕事自体に概ね満足しており、専門分野は創造的で生産的であり、若い人にも未来が開かれていると思っている。しかし、仕事には相当な心理的緊張を要するとも答えている。また、大学教員は、所属大学からの移動にあたり、より優れた研究条件、より高い収入、より良い立地の大学を重視する。

V章 教育・研究活動

相原 総一郎

1 はじめに

大学教員の教育と研究に対する関心は図V-1に示すように分かれる。大学教員の関心が、主として教育活動にある者3.3%、どちらかといえば教育活動にある者21.0%、どちらかといえば研究活動にある者58.8%、主として研究活動にある者16.9%である。本章では、大学教員の主な仕事、教育と研究について、大学教員の活動の実態をより詳細に描く。第一に大学教員の教育活動について、担当する授業の教育段階、授業時間数と授業科目数、授業に登録している学生数、授業形態、単位認定の要件、教育活動に関する見解を、第二に研究活動について、研究生産の水準、研究プロジェクトと研究費、研究活動に関する大学教員の見解を明らかにする。

2 教育活動

大学教員は、学部教育の授業のみを担当する者30%、学部教育と大学院の授業を担当する者67%、大学院教育の授業のみを担当する者2.3%、本年度は授業科目を持たない者0.7%である(表V-1)。ほとんど全ての大学教員は学部教育を担当しており、約7割の大学教員が大学院の授業も担当している。そして、平均的な大学教員は、一週間に教室や実験室で授業を8時間分受け持っており、個人指導を4時間分受け持っている(表V-2)。授業科目数では、学部教養課程1科目、学部専門課程3科目、大学院課程1科目になる。授業に登録している学生数は、学部教養課程で40人から100人、学部専門課程で18人から80人、大学院課程で3人から7人の範囲である(表V-3)。

図表に示していないが、学部教養課程での大学教員の授業形態は、全般的に講義である。クラス討議や実験実習は、工学、農学、医歯学、芸術学、体育学を除いて、ほとんど実施されていない。農学や芸術学で1割程度、工学や医歯学で2割程度、体育学で4割程度、教養課程で実験実習が行われている(付録の集計表、問35を参照)。単位認定については、単位認定のための要件が学部専門課程で最も多いこと、求められる要件は教育段階ごとに変化することをみれる。大学教員は、学部教養課程では授業への出席状態を大きく考慮する(27.1%)が、学部専門課程では授業への出席状態(56.2%)の他に試験(44.2%)や小論文の提出(34.6%)を課すようになり、大学院課程になると授業への出席状態(26.0%)よりも口頭発表(27.3%)や主論文の提出(26.5%)を単位認定の要件に課す

図 V - 1 教育と研究に対する関心

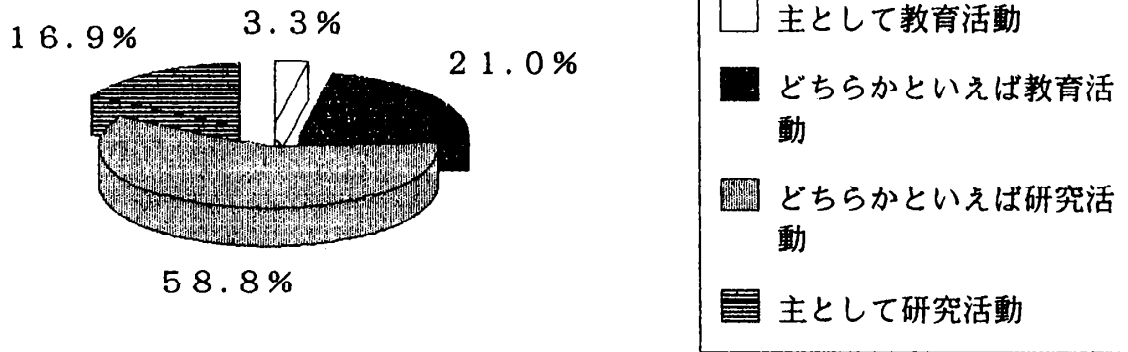


表 V - 1 担当する教育段階

	(%)
学部教育のみ	30.1
学部教育と大学院	66.9
大学院教育のみ	2.3
授業科目を持たない	0.7
合計	100.0 (3,333)

表 V - 3 受け持っている授業科目数

		(中央値)		
		教養課程	専門課程	大学院
担当する授業科目数		1科目	3科目	1科目
学 生 数	最小の授業科目	40人	18人	3人
	最大の授業科目	100人	80人	7人
	1科目だけの場合	91人	63人	5人

表 V - 2 一週間あたり授業時間数

	(中央値)
教室や実験室での授業	8時間/週
個人指導	4時間/週

表 V - 4 単位認定のための要件

	(%)		
	教養課程	専門課程	大学院
授業への出席状態	27.1	56.2	26.0
小論文の提出	13.1	34.6	19.2
主論文の提出	2.8	15.1	26.5
口頭発表	6.9	24.4	27.3
クラス討議	6.1	17.1	13.9
試験(1回)	14.2	44.2	8.4
試験(2回以上)	17.7	29.9	2.2
特別な要件はない	1.7	2.9	5.9

注) 複数回答のため合計は100%にならない。

ようになる(表V-4)。

大学教員の教育活動に与える影響の評価を5段階評点で表V-5に示した。評点は3点を中心に狭い範囲に散らばっているが、どちらかといえば教育活動に良い影響を与えていると評価されているのは研究活動への参画(3.4)であり、悪い影響を与えていると評価されているのは学内の管理運営活動(2.6)である。研究活動への参画も管理運営活動も、大幅な関与は結局のところ大学教員の労働負担を増やすのだから教育活動には悪い影響を及ぼすとの予想を立てられるが、研究活動は教育活動と単純なゼロサムゲームの関係にはないと認識されているのであろう。一方、授業に登録する学生数、指導する学生数、教育のための施設・設備、担当の授業科目数、研究資金の獲得し易さ、担当授業科目の種類、学外の専門的活動は、全般に大学教員の教育活動に何等かの強い影響を与えとは評価されていない。

表V-6に示したのは、教育評価に関するいくつかの意見への大学教員の見解である。賛同を得られたのは「教育能力を評価するためのよい方法が必要である」(4.0)と「学生の意見を教員の教育能力の評価にもちいるべきである」(3.4)である。一方、「業績主義が本学の教育の質をそこなっている」(3.0)と「教育能力が教員の昇任の基準として最も重視されるべきである」(3.1)は賛否両論にわかれた。学生による教員評価にやぶさかではないが、教育能力を評価するためのよい方法が必要である、また研究業績や教育能力の評価は慎重にすべきだというのが大凡の大学教員の見解とみれる。

学部学生の学力や実力に関する意見への大学教員の見解は、表V-7に示したようである。まとめてみれば、学生はよい成績のためにカンニングをしない(2.4)が、現在の学生は5年前の学生より勉強するわけではなく(2.5)、むしろ学生はなんとか単位を取れるだけの勉強しかしない(3.7)。大学教員は授業の時以外にも学部学生とすごすべきであろう(3.7)、というものである。また、「学生は十分な筆記及び口頭によるコミュニケーション技能を持っている」、「学生は十分な数学的・論理的能力を持っている」、に対する大学教員の見解は賛否が分かれた。

大学教員が学生に期待する学習内容を教育段階ごとに表V-8に示した。大学教員の教育期待は、学部教養課程では事実(81.2%)と理論、概念、パラダイム(84.6%)を学ぶことであり、学部専門課程では研究方法(81.9%)が加わる。そして、大学院課程では、学部課程とは異なり、事実の学習や理論、概念、パラダイム、研究方法、専門的な問題解決の全てについて学ぶことが期待され、とりわけ研究方法(95.8%)、専門的な問題解決(94.6%)、理論、概念、パラダイム(94.2%)の学習に教育目標の焦点が移動する。

3 研究活動

大学教員は、平均的には、3年間に一冊の学術書に執筆しており、学術論文5篇、モノグラフ1冊を発表している。また、口頭での学会発表は5回、新聞や雑誌記事は1篇を發

表 V-5 教育活動に与える影響

	評点
学内の管理運営活動	2.6
授業に登録する学生数	2.8
指導する学生数	2.9
教育のための施設・設備	3.0
担当する授業科目数	3.0
研究資金の獲得し易さ	3.0
担当する授業科目の種類	3.2
学外の専門的活動	3.2
研究活動への参画	3.4

注) 5段階評点(5:大変良い影響、
3:どちらでもない、1:大変悪い
影響)

表 V-6 教育評価に関する意見

	評点
業績主義が本学の教育の質をそこなっている	3.0
教育能力が教員の昇任の基準として最も重要	3.1
学生の意見を教員の教育能力評価にもちいるべき	3.4
教育能力を評価するためのよい方法が必要	4.0

注) 5段階評点(5:賛成、3:どちらでもない、1:反対)

表 V-7 学部学生の学力や実力に関する意見

	評点
学生はよい成績のためのカンニングをする	2.4
現在の学生は5年前の学生よりも勉強する	2.5
学生は十分な数学的・論理的能力を持つ	2.7
学部学生は十分な筆記・口頭の技能を持つ	2.9
学生は最低限の勉強しかしない	3.7
教員は授業以外にも学生とすごすべきである	3.7

注) 5段階評点(5:賛成、3:どちらでもない、1:反対)

表 V-8 学部学生は何を学ぶべきか

(%)

	教養課程	専門課程	大学院
事実の学習	81.2	89.2	87.5
理論、概念、パラダイム	84.6	93.0	94.2
研究方法	39.9	81.9	95.8
専門的な問題解決	24.6	78.0	94.6

注) 複数回答のため合計は100%にならない。

表している(表V-9)。学術書への執筆は単著に限っていないために、共著や寄稿論文も含まれていると思われる。また、大学教員の研究活動は、とりわけ学術論文の公表と学会での口頭発表について、大学類型-研究大学とその他の大学-と専門分野によって大きく異なる。たとえば学術論文の公表は、全体では3年間で5篇だが、研究大学が8篇であるのに対してその他の大学では4篇なのである。また専門分野ごとには、人文科学系3篇、社会科学系4篇、理学系6篇、工学系5篇、農学系7篇、医歯学系12篇、芸術学系2篇、体育学系3篇、その他学系3篇と大きく異なっている。研究条件の違いや、専門分野の研究様式の違いが、大きく研究活動の論文公表数等の差異となって現れているのであろう。

表V-9 大学教員の研究活動の状況/過去3年間

(中央値)

	全体	研究大学	その他の大学	人文科学系	社会科学系	理学系	工学系	農学系	医歯学系	芸術学系	体育学系	その他学系
学術書の執筆	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	0冊	1冊	1冊	2冊	1冊	1冊	2冊
学術書の編集	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0.5冊	0冊	0冊
学術論文の公表	5篇	8篇	4篇	3篇	4篇	6篇	5篇	7篇	12篇	2篇	3篇	3篇
モノグラフの刊行	1冊	1冊	1冊	0冊	1冊	1冊	1冊	1冊	2冊	1冊	1冊	1冊
学会での口頭発表	5回	6回	3回	1回	2回	5回	6回	6回	10回	1回	3回	3回
新聞・雑誌の記事	1篇	1篇	1篇	1篇	1篇	0篇	0.5篇	1篇	1篇	2篇	2篇	1篇

表V-10 大学教員が交付された総額研究費/過去3年間

(%)

	全体	研究大学	その他大学	人文科学系	社会科学系	理学系
65万円未満	18.3	10.4	25.7	38.7	27.7	13.8
65万円～325万円未満	38.9	34.9	42.7	44.7	45.4	39.8
325万円～650万円未満	16.6	18.8	14.5	9.8	14.5	16.6
650万円～1,300万円未満	13.7	17.0	10.5	4.3	10.0	14.1
1,300万円～3,250万円未満	8.7	13.0	4.5	2.1	2.0	10.1
3,250万円～6,500万円未満	2.3	3.5	1.2	0.0	0.4	3.4
6,500万円以上	1.5	2.4	0.8	0.4	0.0	2.6
合計	100.0 (2,272)	100.0 (1,106)	100.0 (1,166)	100.0 (235)	100.0 (249)	100.0 (495)

	工学系	農学系	医歯学系	芸術学系	体育学系	その他学系
65万円未満	9.4	9.4	7.1	72.6	29.7	33.9
65万円～325万円未満	33.8	38.9	37.6	21.9	42.2	53.6
325万円～650万円未満	19.2	25.6	18.2	5.5	20.3	7.1
650万円～1,300万円未満	18.6	13.3	20.3	0.0	7.8	1.8
1,300万円～3,250万円未満	13.0	11.1	11.8	0.0	0.0	3.6
3,250万円～6,500万円未満	3.6	1.7	2.6	0.0	0.0	0.0
6,500万円以上	2.4	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0
合計	100.0 (500)	100.0 (180)	100.0 (380)	100.0 (73)	100.0 (64)	100.0 (56)

図表には示していないが、大学教員の63%は現在、何らかの研究プロジェクトに従事しており、その内訳は個人研究プロジェクトの従事者81%、共同研究者がいる者90%である。全体の4分の3にあたる大学教員(2,276人)は、過去3年間に何らかの研究費を個人ないし共同研究グループの一員として交付された経験を有している(付録の集計表、問42から問46を参照)。表V-10には、個々の大学教員が過去3年間に交付された研究費の総額を示している。交付された金額は65万円以上325万円未満である場合が最も多い(38.9%)。一年間あたりに20万円から100万円程度の額である。しかし、研究費の交付額は専門分野によって大きく異なっている。たとえば総額研究費が65万円未満の段階は人文科学系(38.7%)と社会科学系(27.7%)で多く、650万円以上の段階では工学系や医歯学系で多くなっている。また研究費を交付する主体も大学類型や専門分野によって大きく変化する。表V-11に主な研究費の交付主体を全体と大学類型別に示したように、主な研究費の交付者は政府機関(37.5%)、所属大学(29.3%)、企業(17.5%)、財団(16.9%)であるが、研究大学へは政府機関(69.7%)、財団(30.8%)、企業(26.8%)などが交付しており、その他の大学は大学自身(30.3%)、政府機関(28.2%)などが主な交付者である。

大学教員の研究活動に与える影響を5段階評点で表V-12に示した。どちらかというど研究活動に良い影響を与えると評価されているのは、「研究資金の獲得し易さ」(3.5)、「学外の専門的活動」(3.4)、「研究のための施設や設備」(3.4)、「研究助手を務める学生の質」(3.3)である。一方、「学内の管理運営活動」(2.4)はどちらかというど悪い影響を与えると評価されている。大学教員の研究活動への影響の認識は、研究のための資金、物的条件、人的支援の得られることが重要であり、管理運営活動への関与はかえって研究活動に支障を来すというものである。

最後に学術研究に関する意見への大学教員の見解は表V-13のようである。まず「本学では、すぐれた研究業績を持つことが教員評価において重要である」に大学教員は賛成している(4.2)。以下、「継続的な研究活動が期待されている」(3.9)、「教員評価に国際的活動が重要である」(3.8)、「政治あるいはイデオロギーは出版を制約しない」(3.6)、「私の学科でテニユア(終身在職権)を得ようとするなら著書や論文を公表しなければならない」(3.3)に賛意を得られた。しかしながら、「5年前より研究費を獲得し易い」、「希望以上の研究をしなければと感じる」、「出版物は『量的』に評価されるだけ」には賛否が分かれた。大学教員の見解は、学術研究に関して、研究業績や国際的活動が大切であり、研究業績の公表に政治やイデオロギーによる制約はない、とまとめられよう。

4 まとめ

大学教員は、ほとんど全てが学部教育を担当しており、約7割が大学院の授業を担当している。平均的な大学教員は、一週間に教室や実験室で授業を8時間分受け持っており、

表 V-11 交付された研究費の財源

(%)

	全体	研究大学	その他大学
所属大学	29.3	25.6	30.3
政府機関	37.5	69.7	28.2
企業	17.5	26.8	14.8
財団	16.9	30.8	12.9
国際組織	0.9	1.7	0.7
その他	2.0	1.9	2.0

注) 複数回答のため合計は100%にならない。

表 V-12 研究活動に与える影響

	評点
学内の管理運営活動	2.4
担当する授業科目数	2.8
授業に登録する学生数	2.8
担当する授業科目の種類	2.9
指導する学生数	3.0
研究助手を務める学生の質	3.3
研究のための施設・設備	3.4
学外の専門的活動	3.4
研究資金の獲得し易さ	3.5

注) 5段階評点(5:大変良い影響、3:どちらでもない、1:大変悪い影響)

表 V-13 学術研究に関する意見

	評点
5年前より研究費を獲得し易い	2.9
希望以上の研究をしなければいけないと感じる	3.0
出版物は「量的」に評価されるだけ	3.2
終身在職権の獲得には著書や論文公表が必要である	3.3
政治やイデオロギーは出版を制約しない	3.6
教員評価には国際的活動が重要である	3.8
継続的な研究活動が期待されている	3.9
教員評価ではすぐれた研究業績が重要である	4.2

注) 5段階評点(5:賛成、3:どちらでもない、1:反対)

個人指導を4時間分受け持っている。授業科目数では、学部教養課程1科目、学部専門課程3科目、大学院課程1科目である。授業に登録している学生数は、学部教養課程で40人から100人、学部専門課程で18人から80人、大学院課程で3人から7人の範囲である。学部教養課程での大学教員の授業形態は、全般的に講義である。単位認定のための要件は、学部教養課程では授業への出席状態が大きく考慮されるが、学部専門課程では授業への出席状態の他に試験や小論文の提出が課せられるようになり、大学院課程では授業への出席状態よりも口頭発表や主論文の提出がより課せられるようになる。

大学教員は、研究活動への参画は教育活動に良い影響を及ぼすと評価しており、学内の管理運営活動は悪い影響を与えていると評価している。教育評価に関する意見については、「教育能力を評価するためのよい方法が必要である」(4.0)と「学生の意見を教員の教育能力の評価にもちいるべきである」(3.4)に大学教員の賛同を得られた。学部学生の学力や実力に関しては、学生はよい成績のためにカンニングをしないが、現在の学生は5年前の学生より勉強するわけではなく、むしろ学生はなんとか単位を取れるだけの勉強しかしない、大学教員は授業の時以外にも学部学生とすごすべきだというのが、大学教員の見解である。大学教員の教育期待は、学部教養課程では事実と理論、概念、パラダイムを学ぶことであり、学部専門課程では研究方法が加わる。さらに、大学院課程では、研究方法、専門的な問題解決、理論、概念、パラダイムを学習することが教育目標である。

大学教員は、平均的には、3年間に一冊の学術書に執筆しており、学術論文5篇、モノグラフ1冊を発表している。また、口頭での学会発表は5回、新聞や雑誌記事は1篇を発表している。大学教員の63%は現在、何らかの研究プロジェクトに従事しており、全体の4分の3にあたる大学教員は、過去3年間に何らかの研究費を個人ないし共同研究グループの一員として交付されている。研究費の総額は、過去三年間で65万円以上325万円未満である者が最も多い。主な研究費の交付者は政府機関、所属大学、企業、財団などである。ただし、研究業績の公表、研究費の交付金額や交付者などは、大学類型や専門分野により大きく異なる。

大学教員は、「研究資金の獲得し易さ」、「学外の専門的活動」、「研究のための施設や設備」、「研究助手を務める学生の質」が研究活動に良い影響を与えると評価しており、「学内の管理運営活動」はどちらかという悪い影響を与えると評価している。そして、学術研究に関しては、「本学では、すぐれた研究業績を持つことが教員評価において重要である」、「継続的な研究活動が期待されている」、「教員評価に国際的活動が重要である」、「政治あるいはイデオロギーは出版を制約しない」、「私の学科でテニユア(終身在職権)を得ようとするなら著書や論文を公表しなければならない」に賛成している。

Ⅵ章 サービス

山内 乾史

1 はじめに

本章では、大学教員のサービス活動について論じる。いうまでもなく、ここでいうサービスとは無償の奉仕活動という意味ではなく、有償の（モノを生産しない）活動も含んでいる。

サービスに関する質問は、本質問紙の中では、問18、問51、問52、問53、問54、問61の6箇所に見られる。この6箇所に対する回答全てを大学類型別、専門分野別、職階別に検討していくこととしよう。

2 サービスへの時間配分

問18では、「教育」、「研究」、「社会サービス」、「管理運営」、「その他の学術活動」の5項目について、それぞれ一週間当たり何時間を費やしているかを、学期中と休暇中に分けて聞いている。表Ⅵ-1はこれらのうち「社会サービス」に費やしている時間を専門分野別にまとめたものである。

表Ⅵ-1 社会サービスへの週当たり時間配分（中央値）

		学期中	休暇中
専門 分野	人文科学	1 h	1 h
	社会科学	2 h	2 h
	理学系	1 h	1 h
	工学系	2 h	2 h
	農学系	2 h	2 h
	医歯学系	6 h	3 h
	芸術学系	3 h	4 h
	体育学系	2 h	3 h
	その他	2 h	2 h

後掲の基礎集計表から分かるとおり、社会サービスに費やす時間については、大学類型間、職階間であまり大きな差異はみられない。ただし表Ⅵ-1から分かるとおり、専門分野別にみた場合、人文科学、理学系などの大学教員は社会サービスをほとんど行っておら

ず、医歯学系、芸術学系などの大学教員は社会サービスを最も積極的に行っているのであり、両者の間にはかなりの差異がみられる。また、学期中と休暇中との間の差異については、医歯学系以外ではほとんど差異がみられない。

本調査の結果をみる限りでは、総じて大学教員の社会サービス活動はあまり盛んではないと言えるであろう。

3 サービス活動を行った組織

問51ではサービス活動をどのような機関で行ったかについて尋ねている。表VI-2はその結果を大学類型別・専門分野別・職階別にまとめたものである。

表VI-2 サービス活動をどのような組織で行ったか (%)

		企業や 産業界	教育 機関	地方自 治体	国の政 府機関	私的な社会サ ービス機関
大学 類型	研究大学	32.9	33.6	25.6	25.8	13.3
	その他	22.2	28.6	30.7	14.1	19.0
専門 分野	人文科学	4.8	26.7	23.8	8.8	13.9
	社会科学	19.9	32.3	45.3	25.9	20.9
	理学系	17.8	25.4	17.8	16.6	13.3
	工学系	46.1	22.4	25.6	19.7	14.3
	農学系	36.6	21.1	44.7	23.6	13.8
	医歯学系	30.1	43.4	35.3	21.3	32.1
	芸術学系	10.5	29.8	22.6	4.8	18.5
	体育学系 その他	21.0 20.6	59.7 46.0	56.5 33.3	8.1 7.9	29.0 14.3
職階	教授	26.9	32.2	34.9	22.1	19.1
	助教授	21.9	29.1	24.4	10.8	14.7
	講師	22.6	21.5	21.0	8.1	22.0

後掲の基礎集計表によると、大学類型別、専門分野別、職階別いずれについても、「政府関係の国際機関」、「その他の国際機関」でサービス活動を行った大学教員は僅少であることがわかる。そこで表VI-2にはそれ以外の5項目について示した。大学類型別にみると、研究大学では、「企業や産業界」、「教育機関」、「国の政府機関」でサービス活動を行った大学教員が多いのに対して、その他の大学では「地方自治体」、「私的な社会サービス機関」でサービス活動を行った大学教員が多い。また、専門分野別にみると、「企業や産業界」では工学系、医歯学系、「教育機関」では社会科学、医歯学系、体育学系、「地方自治体」では社会科学、農学系、医歯学系、体育学系、「国の政府機関」では社会科学、農学系、医歯学系の大学教員が盛んにサービス活動を行っている。職階別にみ

て最も顕著な差がみられるのは、「国の政府機関」である。

以上をまとめると、大学類型別には比較的明確な棲み分けがある。研究大学の大学教員は比較的ナショナル・パブリックな機関でサービス活動を行うのに対し、その他の大学では、ローカル・プライベートな機関でサービス活動を行う傾向が強い。専門分野別にみると、いずれの機関でも社会科学、医歯学系の大学教員が精力的にサービス活動を行っており、人文科学、理学系の大学教員のサービス活動はどの機関でも盛んではない。職階別にみると、どの職階でも均等に参加している機関と、職階によって参加率が異なる機関がある。「教育機関」、「国の政府機関」などは後者の例である。

4 サービス活動に費やした全時間に占める有給サービスの比率

次に、問52の結果から、サービス活動に費やした全時間に占める有給サービスの比率を検討してみたい。表VI-3には中央値が示してある。ただし、大学類型別には差がみられなかったので、省略してある。この点に関しては、後継の基礎集計表を参照されたい。

まず、専門分野別にみると、かなりのばらつきがあることが分かる。最も低いのは理学系の10%である。逆に、50%を越えているのは、人文科学、社会科学、医歯学系、芸術学系である。専門分野別に見た場合、①の分析結果とあわせて考えれば、サービス活動をよく行っている分野の大学教員ほど、有給サービス活動の比率が高いということになる。一方、職階別にみると、職階を下るほど有給サービスの比率が高くなる。

表VI-3 サービス活動に費やした全時間に占める有給サービスの比率（中央値）

		%
専門 分野	人文科学	50
	社会科学	60
	理学系	10
	工学系	20
	農学系	20
	医歯学系	60
	芸術学系	50
	体育学系	30
	その他	50
職階	教授	37.5
	助教授	40
	講師	50

5 サービス活動がどのような環境によって影響を受けているか

次に、サービス活動がどのような環境によって影響を受けているか、について問53の結果から検討してみよう。質問紙では、「担当の授業科目数」、「担当授業科目の種類」、「授業に登録する学生数」、「指導する学生数」、「研究活動への参画」、「研究資金の獲得し易さ」、「学内の管理運営活動」、「学外の専門的活動」の8項目について尋ねている。これらのうち、大学類型別、専門分野別、職階別いずれについても大差がない項目が3つある。「研究活動への参画」、「指導する学生数」、「学内の管理運営活動」である。そこで残りの5項目について大学類型別、専門分野別、職階別に検討してみよう。

表VI-4には専門分野別、職階別に「良い影響を受ける」と答えた大学教員の比率、「悪い影響を受ける」と答えた大学教員の比率を上記5項目それぞれについて掲げた。

これによれば、大学類型別には、どの項目についても大差はない。敢えて言えば、「研究資金の獲得し易さ」で研究大学の大学教員の27.4%が、その他の大学の大学教員の19.6%が「良い影響を受ける」と答えている点に差がみられる程度である。

それに対して専門分野別では、かなりのばらつきがみられる。例えば、(b)担当授業科目の種類では、社会科学と体育学系では20%以上の大学教員が「良い影響を受ける」と答えているのに対して、理学系ではわずか9.5%に過ぎない。ほとんど全ての項目について人文科学、理学系では「良い影響を受ける」と答えた大学教員の比率は低い。サービス活動に

表VI-4 サービス活動がどのような環境によって影響を受けているか (%)

		担当の授業科目数		担当授業科目の種類		授業に登録する学生数		研究資金の獲得し易さ		学外の専門的活動	
		良い	悪い	良い	悪い	良い	悪い	良い	悪い	良い	悪い
大学類型	研究大学	10.5	14.2	11.4	8.3	4.3	8.1	27.4	4.9	28.9	7.5
	その他	12.7	16.4	16.5	9.6	6.5	12.0	19.6	4.7	27.6	6.6
専門分野	人文科学	12.7	12.0	18.0	7.6	7.6	9.9	11.8	4.5	22.6	7.4
	社会科学	16.8	18.6	20.4	10.9	9.2	14.3	20.3	3.6	28.8	6.0
	理学系	5.9	16.0	9.5	9.2	3.5	9.5	21.9	4.5	20.8	6.7
	工学系	11.4	19.1	11.6	10.8	4.8	11.4	33.7	3.9	33.4	5.6
	農学系	9.3	15.9	10.9	9.3	2.2	6.6	25.1	5.6	26.6	7.3
	医歯学系	11.2	10.2	12.1	6.3	3.4	5.7	26.5	5.7	28.6	8.9
	芸術学系	8.1	9.9	13.5	5.4	3.7	11.1	11.1	6.5	35.5	4.5
	体育学系	19.7	16.2	21.6	9.5	10.4	13.0	15.7	5.2	37.9	7.8
	その他	17.5	21.3	23.8	11.3	11.4	20.3	13.9	11.4	30.4	11.4
職階	教授	12.7	14.2	15.9	7.8	6.1	9.8	24.0	4.4	30.4	6.2
	助教授	10.5	18.7	12.7	11.4	4.6	12.5	21.4	5.5	25.9	8.2
	講師	11.2	13.0	11.5	8.9	5.2	7.8	20.5	5.2	22.6	7.5

精力的でない領域の大学教員はサービス活動に対する考え方自体も非常に消極的なのである。職階別には特に際だった差はない。

6 サービス活動についての考え方

問54では「社会的問題に対して専門的に貢献する義務がある」「サービス活動は教育研究の妨げとなる」「経済的な理由から有給の相談業務に就くことが必要である」「サービス活動は教員評価において重要である」の4項目について大学教員がどう考えているかを尋ねている。つまり大学教員のサービス活動に対する考え方を尋ねているのである。「はい」あるいは「いいえ」と答えた大学教員の比率をまとめたものが表VI-5である。

いずれの項目についても、大学類型別には大きな差がみられなかったので省略した。

さて、専門分野別にみると、ここでも医歯学系、社会科学の大学教員と人文科学、理学系の大学教員との間に実に対照的な回答傾向がみられる現実にサービス活動を精力的に行っている医歯学系や社会科学の大学教員はサービス活動に対して積極的、肯定的な考え方を持っているのに対して、現実にもサービス活動をあまり行っていない人文科学、理学系の大学教員はサービス活動に対して消極的、否定的な見解を持っているのである。

職階別にみると、「経済的な理由から有給の相談業務に就く必要がある」の項目以外は大きな差は認められなかった。

表VI-5 サービス活動についての考え方（はいと答えた大学教員の%）

		社会的問題に専門的に貢献する		教育研究の妨げとなる		有給の相談業務に就く必要あり		教員評価において重要	
		YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO
専門分野	人文科学	55.2	23.5	15.6	64.9	5.0	58.5	23.3	52.1
	社会科学	78.4	12.6	14.4	75.5	8.5	71.3	23.6	55.6
	理学系	54.2	21.7	23.6	55.4	5.0	65.5	17.6	56.3
	工学系	64.9	15.8	15.4	63.8	6.2	65.8	27.6	46.4
	農学系	78.8	11.1	16.8	74.2	4.2	68.2	30.5	51.6
	医歯学系	80.6	8.5	15.9	70.1	28.1	50.5	31.9	49.1
	芸術学系	53.1	14.8	8.6	73.4	5.5	52.0	27.3	37.9
	体育学系	88.0	5.1	9.5	82.8	7.8	68.7	42.2	37.9
	その他	75.0	10.7	10.7	69.0	10.8	57.8	42.2	34.9
職階	教授	68.4	15.4	16.0	67.7	6.9	64.4	26.3	49.0
	助教授	65.2	16.4	17.1	67.4	11.4	62.8	26.6	52.1
	講師	72.0	10.9	16.7	61.4	18.6	52.2	28.7	47.1

7 どんな活動が定期的に評価されているか。

最後に、問61ではどんな活動が定期的に評価されているかについて尋ねている。どの程度の大学教員が、サービス活動が評価されていると考えているのかについて分析してみよう。

表VI-6 どんな活動が定期的に評価されているか (%)

		教育活動	研究活動	サービス活動	その他
大学 類型	研究大学	10.2	32.7	3.8	0.9
	その他	22.0	43.4	8.3	1.4
専門 分野	人文科学	20.9	37.0	6.2	0.7
	社会科学	15.9	35.3	7.5	2.0
	理学系	15.4	37.6	4.4	1.2
	工学系	19.5	52.2	8.4	1.2
	農学系	9.8	35.0	4.9	0.8
	医歯学系	19.3	36.5	8.4	1.2
	芸術学系	32.3	37.9	6.5	2.4
	体育学系	33.9	46.8	19.4	4.8
	その他	28.6	58.7	11.1	0.0
職階	教授	22.4	40.9	9.1	1.5
	助教授	15.8	41.4	5.3	1.4
	講師	16.7	43.0	4.8	0.5

大学類型別にみると、教育活動が評価されていると考えている大学教員はその他の大学では22.0%に対して研究大学では10.2%に過ぎない。また、研究活動と答えた大学教員についても、その他の大学では43.4%に対して、研究大学では32.7%に過ぎない。サービス活動に関しては研究大学3.8%、その他の大学8.3%である。

専門分野別にみると、サービス活動が定期的に評価されていると考える大学教員は体育学系では19.4%と際だって多くなっている。職階別にみると、職階の高いほど評価されていると考えている大学教員が多くなっている。

8 まとめ

以上の分析を通じて明らかにされたことは、大学類型別、職階別によってもサービス活動の実態・考え方に差は認められるが、専門分野の影響力が決定的であるということである。サービス活動に積極的な専門分野 — 医歯学系や社会科学 — の大学教員は、考え方も積極的であり、サービス活動を精力的に行い、しかもその活動が評価されていると考え

ているのである。一方、サービス活動に消極的な専門分野 — 人文科学や理学系 — の大学教員は、考え方も消極的であり、サービス活動の実態は低調で、しかもその活動が評価されているとは考えていないのである。このような実に対照的な姿が本稿の分析を通じて得られたのである。

Ⅶ章 管理運営

江原 武一

1 はじめに

大学教員の仕事のなかで最も重要なのは教育と研究とあってよいだろう。実際に大学教員はこの2つの活動に多くの時間を費やしている。本研究の調査結果によれば、日本の大学教員は現在、平均的な学期中の1週間についてみると、18時間（中央値）を授業や授業の準備、学生指導、採点、評価などの教育活動に使っている。読書や執筆、実験、フィールドワークなどの研究活動に使っている時間は20時間である。それに比べると、学内委員会や教員会議、事務などといった管理運営に費やす時間は4時間だから、あまり多いとはいえない。それでも大学教員のなかには、大学の管理運営は教育や研究のような本来の役割を損なう、わずらわしい雑務だと考える人々が少なくないように思われる。

しかし教育や研究をはじめ、大学で行われているさまざまな活動は、高度に専門化された専門分野を基礎にしており、大学教員にしか理解できないことも少なくない。またどの活動も大学組織が円滑に動かなければ十分に遂行できないので、その管理運営は大学教員に課せられた重要な仕事の1つである。さらに1991（平成3）年7月の「大学設置基準」の改訂により、設置基準が大綱化し、少なくとも法令上は各大学の自主的な管理運営や改革の余地が広がったが、このことは同時に、大学における諸活動の遂行やその成果について、各大学の責任が重くなったことを意味する。それは国立大学や公立大学だけでなく、私立大学にとっても、従来からみれば大きな変化であり、どの大学でも管理運営の現状の見直しや改革の方針の検討が求められている。

ここでは、このような大学の管理運営について、今日の大学教員がどのように考えているかを、調査結果にもとづいて分析してみたい。主としてとりあげるのは、次のような問題である。

1 管理運営の権限と大学教員の影響力

(1)管理運営の権限の所在 (2)大学教員の管理運営への影響力

2 管理運営に関する意見

(1)管理運営に関する意見 (2)学問の自由の現状 (3)大学教員の仕事の評価

(4)高等教育や学術政策に対する政府の関与

分析用のクロス軸には、主に大学教員の所属する大学のタイプ（大学類型）と、調査時点での職階上の地位を使用する。いずれも大学の管理運営を分析するための基本的な変数

である。この他に大学教員の専門分野も重要だが、この報告ではスペースの制約を考慮して、部分的に使用することにした。

具体的な分析に入る前に、大学教員が所属大学の管理運営の方針にどの程度満足しているかをみると（表Ⅶ－１）、「満足している」と回答したのは25.6%で、4分の1にすぎない。本研究の調査では、大学生活の他の側面についても、同じ形式で評価を求めている。その結果によれば、大学教員の「仕事全般」については、約半数の52.5%が満足している。しかし項目別に満足度の高い順に並べると、「教育・研究の自由」（69.8%）、「仕事の安定性」（62.9%）、「担当する授業」（53.9%）、「同僚との関係」（50.0%）と続き、大学の管理運営の方針に対する満足度は、「昇進の見通し」（24.6%）とともに最も低い。したがって大多数の大学教員は、所属大学で現在行われている管理運営を批判的にみているとってよいだろう。

表Ⅶ－１ 大学の管理運営に対する満足度

(%)

		満 足	どちらでも ない	不 満 足	不 明	計
タイプ	研究大学	23.5	44.3	31.2	1.0	40.7(1,347)
	その他	27.2	42.8	29.2	0.8	59.3(1,960)
職 階	教 授	30.0	43.6	25.6	0.8	53.8(1,779)
	助 教 授	21.7	42.4	34.8	1.1	34.4(1,136)
	講 師	17.2	45.2	37.1	0.5	11.1(366)
全 体		25.6 (849)	43.5 (1,436)	30.0 (992)	0.9 (30)	100.0(3,307)

注) 職階別のクロス分析では「助手」および「その他」を除外して集計している。

さらにクロス分析の結果をみると、大学のタイプによる違いはほとんどないが、職階別では、教授（30.0%）と講師（17.2%）の満足度に大きな較差がある。ところでこの満足度には大学のタイプによる違いがほとんどなく、しかもその他の大学よりも研究大学の大学教員の方がやや低い、より具体的にみると、どのような違いがみられるのだろうか。研究大学は社会的威信や教育・研究条件の充実度などの点で優位に立つといわれているけれども、管理運営は違うのだろうか。あるいは実際の管理運営の状況やそれに対する意見と、管理運営に対する全般的な満足度は、必ずしも直線的に結びつけられないのかもしれない。また一般に職階上の地位が高くなるほど、大学生活の満足度は高くなるが、これももう少し具体的なレベルで検討する必要があるだろう。以下の分析では、こうした観点から調査結果を整理してみたい。

2 管理運営の権限と大学教員の影響力

はじめに大学の管理運営の現状を、管理運営の権限の所在と、大学教員の管理運営への影響力に注目してながめてみよう。いずれも大学教員の眼からみた管理運営の現状である。

大学関係の教育法規や各大学の通則、学内組織の形式的な意思決定の手続きなどを分析すれば、「タテマエ」として、管理運営の権限がどこにあり、大学教員の管理運営への影響力がどの程度なのかを知ることができるかもしれない。しかしその実際の運用は、歴史的に積み重ねられてきた前例や慣行に従って行われることが多く、それゆえその実態のとらえ方も、立場によって異なるはずである。その意味では、大学の管理運営は実状に即して調べる必要があり、とくに管理運営に直接参加する機会がある大学教員の意識や判断を明らかにするのは、非常に重要なことである。

大学の管理運営は、その意思決定の権限を誰が握っているかによって、「中央集権的」、「中間的」、「分権的」の3つに分けることができる。最も極端な中央集権的管理運営では、すべての重要な意思決定が大学の管理当局者（あるいは理事会）によって行われ、その反対に、最も極端な分権的管理運営では、そうした決定がすべて大学教員によって行われる。いうまでもなく実際の管理運営はこの中間に位置づけられ、意思決定の内容（項目）によっても権限の所在は異なっている。

表Ⅶ-2と表Ⅶ-3は、大学の管理運営がどの程度中央集権化しているかを、意思決定の項目毎にみたものである。2つの表から、次のことが指摘できるだろう。

第1に、大学教員の眼からみると、日本の大学の管理運営は、どちらかといえば大学教員の権限が強い、分権的な管理運営だと考えられている。7つの項目のなかで、意思決定が「中央集権化している」と回答した者の比率が最も高いのは「予算の決定」（56.4%）だが、それでも50%を越える程度にすぎない。日本の大学では伝統的に、学部教授会の意思決定が尊重され、最終的な決定を行う機関とみなされているが、それはこうした大学教員の意識にもよくあらわれている。これは、たとえば学長や理事会の権限が強いアメリカと比べると、きわめて対照的なことである。

第2に、大学のタイプ別にみると、研究大学の大学教員の方が他大学の大学教員よりも、所属大学の管理運営を分権的で、中央集権化していないとみている。それはどの項目についても例外なくいえることである。また職階別では、これも例外なくどの項目でも、地位が高くなるほど、所属大学の管理運営を分権的だとみる者が多くなる。

次に、所属大学での管理運営方針の決定に、個人的にどの程度の影響力をもっているかを尋ねると（表Ⅶ-4）、大学教員の影響力は、最小の組織単位である講座や教室のレベルで最も強く（70.3%）、組織単位が大きくなるにつれて、学科（50.7%）、学部（29.1%）と弱くなり、全学レベルではわずか11.6%である。このように意思決定の組織上のレベルが上位になるほど、大学教員の影響力が弱まるのは、意思決定機関に参加する者の資格や数が限られているからだろう。

表Ⅶ-2 管理運営の権限(1)

(%)

		大学の管理者 の選任	新任教員の採 用	教員の昇進と 終身在職権の 決定	予算の決定
タイプ	研究大学	27.3	25.2	29.2	49.6
	その他	49.6	31.4	36.9	61.0
職階	教授	38.8	22.7	28.1	53.6
	助教授	40.4	33.1	37.8	57.4
	講師	51.3	46.2	48.9	68.0
全体		40.7	28.9	33.8	56.4

注) 「中央集権化している」と回答した者の比率。

表Ⅶ-3 管理運営の権限(2)

(%)

		教員全体の教 育負担の決定	学部学生の入 学基準の設定	新たな教育課 程の承認
タイプ	研究大学	20.5	25.3	32.5
	その他	27.8	35.4	34.7
職階	教授	21.8	28.8	29.3
	助教授	24.8	30.8	35.5
	講師	40.1	46.1	50.7
全体		24.8	31.4	33.8

注) 「中央集権化している」と回答した者の比率。

表Ⅶ-4 管理運営への影響力

(%)

		講座・教室に おいて	学科において	学部において	全学において
タイプ	研究大学	75.1	51.8	32.0	10.7
	その他	66.9	49.8	27.1	12.1
職階	教授	77.3	66.0	43.7	17.8
	助教授	65.8	36.5	13.5	4.4
	講師	51.1	21.0	7.8	3.0
全体		70.3	50.7	29.1	11.6

注) 「たいへん影響力がある」、「いくぶん影響力がある」の回答者の比率。

この管理運営への影響力も、職階上の地位が高くなるほど強い。また組織のレベルが上位になるほど、教授と講師の較差は大きくなり、学部レベルでは教授43.7%、講師7.8%、全学レベルでは教授17.8%、講師3.0%で、それぞれ5.6倍、5.9倍の開きがある。ただし大学のタイプ別では、研究大学の方が他大学よりも「影響力がある」と回答した者は多いが、それほど大きな違いはない。それだけでなく全学レベルでは、他大学の方が（わずかだが）多いのである。

アメリカは理事会や学長といった大学の管理当局者の権限が、法的にも実際にも強い国である。それに比べると、日本の大学の管理運営は大学教員の権限が強い、分権的な管理運営だと考えられている。もっとも大学教員の個人的な影響力は組織単位が大きくなり、全学レベルに近づくほど弱くなる。また職階上の地位が低い大学教員ほど、大学の管理運営は中央集権化しており、個人的な影響力も弱いと回答している。さらに他大学と比べて、研究大学の大学教員は所属大学の管理運営を分権的だと考えているが、大学教員の管理運営への影響力では、大学のタイプによる違いはそれほど大きくない。

3 管理運営に関する意見

それではこのような大学の管理運営について、大学教員はどこに問題があると思っているのか（表Ⅶ-5、表Ⅶ-6）。質問項目の回答をつなぎ合わせると、次のようなイメージが浮かびあがる。

半数を越える大学教員は、「管理者（経営者）はかなりのリーダーシップを發揮している」（55.4%）とみている。ただし「管理者（経営者）はしばしば独裁的だ」（37.5%）と批判する声は、それほど多くない。しかし「学内で起こっていることの情報を絶えず与えられている」（30.1%）者は少なく、「教員と管理者（経営者）の意思疎通は貧弱だ」（41.9%）と思っている者も4割いるので、コミュニケーション・ルートの改善が求められているといっていよう。

「教員が意思決定過程に参加していないことが問題だ」（30.0%）とか、「学生に関係する政策の決定に、学生はもっと関与すべきだ」（33.5%）という意見は、それほど多くないので、大学の管理運営に参加する構成員の拡大は、あまり求められていないといっていようかもしれない。学問の自由についても、「管理者（経営者）は学問の自由を支持している」（65.4%）という意見が多数派を占めている。

ただしこれは大学教員の平均的なイメージである。あらかじめ予想されるように、大学のタイプ別では研究大学よりもその他の大学に、また職階別にみると、若手の講師に現状を批判的にながめている者が多い。大学の管理運営における意思決定は単なる多数決ではなく、構成員の協議をふまえた合意（コンセンサス）によって行われるべきだとしたら、こうした批判的な声を無視すべきではないだろう。

ところで大学の管理運営は学内だけでなく、学外の勢力によっても大きく左右される。

表Ⅶ－５ 管理運営に関する意見（１）

(%)

		管理のリーダーシップをい	かなーだ発揮している	私には情報不足	の内情をい	状態をい	と意思疎通は	教員と管理者の貧弱だ	管理者はしばしば独裁的だ
タイプ	研究大学	50.9		34.3		39.1		33.1	
	その他	58.4		27.2		43.8		40.6	
職階	教授	57.9		36.4		37.8		33.4	
	助教授	51.3		22.4		46.4		41.5	
	講師	55.7		23.0		49.4		45.9	
全体		55.4		30.1		41.9		37.5	

注) 「はい」と回答した者の比率。

表Ⅶ－６ 管理運営に関する意見（２）

(%)

		教員が意思決定に参加していない問題	学生は関係者との関係決定	管理者は学問を自由に行っている
タイプ	研究大学	25.7	31.1	64.2
	その他	33.0	35.1	66.1
職階	教授	25.4	28.9	69.1
	助教授	33.6	37.7	60.8
	講師	42.3	43.3	60.5
全体		30.0	33.5	65.4

注) 「はい」と回答した者の比率。

表Ⅶ－７ 学問の自由の現状

(%)

		日本では学問の自由が守られている	私には教育の自由がある	私には学問の自由がある
タイプ	研究大学	71.1	78.8	85.0
	その他	68.4	80.7	85.8
職階	教授	73.8	85.3	88.5
	助教授	64.8	77.1	84.1
	講師	63.1	64.0	75.1
全体		69.5	79.9	85.5

注) 「はい」と回答した者の比率。

表Ⅶ－8 大学教員の仕事の定期的な評価

(%)

		私の仕事は定期的に評価されている	定期的に評価されている活動の領域				
			教 育	研 究	サービス	そ の 他	計
タイプ	研究大学	45.5	10.2	32.7	3.8	0.9	47.6
	そ の 他	46.7	22.0	43.4	8.3	1.4	75.1
職 階	教 授	45.4	22.4	40.9	9.1	1.5	73.9
	助 教 授	46.4	15.8	41.4	5.3	1.4	63.9
	講 師	49.2	16.7	43.0	4.8	0.5	65.0
全 体		46.2	19.4	41.0	7.3	1.3	69.0

注) 「はい」と回答した者の比率。定期的に評価されている活動の領域は多重回答。

表Ⅶ－9 高等教育や学術政策に対する政府の関与

(%)

		政府は高等教育や学術政策の策定もついでに	高等の教育政策を責めついでに
		政府は高等教育や学術政策の策定もついでに	高等の教育政策を責めついでに
専 門 分 野	人文科学	13.4	47.2
	社会科学	20.3	43.7
	理 学	19.0	49.3
	工 学	22.2	42.9
	農 学	19.2	52.9
	医 歯 学	23.4	43.1
	芸 術 学	11.2	36.9
	体 育 学	21.5	35.5
	そ の 他	18.0	31.0

		政府は高等教育や学術政策の策定もついでに	高等の教育政策を責めついでに
		政府は高等教育や学術政策の策定もついでに	高等の教育政策を責めついでに
タイプ	研究大学	21.3	45.1
	そ の 他	17.9	44.4
職 階	教 授	20.9	42.6
	助 教 授	17.4	48.8
	講 師	17.2	42.9
全 体		19.3	44.8

注) 「はい」と回答した者の比率。

この問題を学問の自由の現状と、高等教育や学術政策に対する政府の関与に的を絞って、一べつしてみよう。

日本では、大学における教育や研究の自由を含む「学問の自由」(academic freedom)は、日本国憲法の第23条によって保障されている。学問の自由は大学が危機的状況に陥った時に真剣にとりあげられることが多く、普段はあまり話題にならないが、大学の自律性や大学の自治を確保するためには、欠くことのできない重要な考え方である。

大学教員の7割は、この学問の自由が日本では強力に守られていると回答している(表Ⅶ－7)。「私は教育の内容をまったく自由に決められることができる」と回答したのは8割、「私はどんな研究にも関心があればとりくむことができる」という回答は、さらに多く85

%である。この数値がどのような意味をもつかは、もう少し詳細に検討しなければならないが、ここではとりあえず、次の2点を指摘しておこう。

第1は、職階上の地位が低くなるほど、学問の自由に対する規制が強いという回答が増えることである。大学教員が学問の自由を主張するのは、学外に向けて発言する機会が多いが、学問の自由は学内でも保障されなければならない。その場合には、大学の他の構成員、たとえば学生の処遇も当然考慮する必要があるだろう。

第2は、学問の自由によって大学の自律性を確保する際には、大学の自主規制が要請されるが、それを具体的にどのように実施するかという問題である。意外なことに、46%の大学教員は現在でも、自分の大学での仕事は定期的に評価されていると回答している（表VII-8）。主に評価されているのは研究（41.0%）と教育（19.4%）である。また研究は上級管理者や学科長、学科の同僚教員、学外者などによって、教育は学生や学科長、学科の同僚教員、上級管理者などによって評価されている。現在の日本の大学では、こうした評価の実施は多くの場合、昇任人事に関連して行われているとみてよいだろう。評価の方法や形式も、それほど標準化していないかもしれない。しかし最近関心を集めている大学の自己点検や自己評価を、この学問の自由と結びつけて制度化しようとしたら、その具体的な手続きを大学関係者が自ら主体的に確立する必要があるだろう。

次に、大学教員は高等教育や学術政策に対する政府の関与を、どちらかといえば批判的にみている（表VII-9）。「政府は高等教育の目的や政策全体に対する決定をくだす責任をもつべきだ」（19.3%）と考える者は少なく、それに対して、「わが国では、重要な学術政策に政府が干渉しすぎる」（44.8%）と判断している者は、相対的に多いからである。こうした批判的な姿勢は、大学のタイプや職階によってそれほど違わない。専門分野別にみても、あまり大きな違いはないが、政府の関与に批判的な大学教員は、人文科学と理学に比較的多く、工学と体育学には少ないとみてよいだろう。

大学の管理運営を学外から左右するのは政府に限らない。産業界や子どもを大学に送る父母、地域社会、高校以下の学校なども、それぞれ独自のルートを通じて大きな力を実際には発揮している。大学の管理運営を改革するには、学内の実態だけでなく、こうした諸力を力学をはじめ、大学と外部社会のさまざまな関係を明らかにする必要があるように思われる。

Ⅷ章 アカデミック・ライフの国際交流

小方 直幸

1 はじめに

社会・経済のグローバル化にともない、教育、研究、サービスの各方面で、大学に寄せられる期待はますます高まっている。その一つの柱として位置づけられるのが、大学の国際化という問題である。そこで本章では、質問票の間64～間68を用いて、大学教員の国際交流、国際問題に対する意識、並びに取り組みの実態を概観し、その特徴と問題点を探る。その際、前章までの分析を踏襲し、大学類型別、専門分野別、大学教員の職階別にあらわれた差異に注目するかたちで分析を行う。

2 国際的な学術活動の実態

まず、国際的な学術活動に対する大学教員の参画状況から見てみよう。表Ⅷ-1は、過去10年間に行った学術活動について頻度並びに期間の中央値を示したものである。全体を見ると、「外国語による論文・著書の執筆」、「学習・研究のための海外渡航」は、それぞれ10年間で5回、3ヶ月となっており、比較的行われているといえる。その一方で、「外国での論文・著書の出版」、「留学生対象の授業」、「外国の学者との共同研究プロジェクト」、「研究休暇中に海外で滞在」については、ほとんど行われていない。

続いて、大学類型別、専門分野別、大学教員の職階別に見ていくと、職階別、あるいは「学習・研究のための海外渡航」についてはあまり差異は見られない。逆に、「外国語による論文・著書の執筆」、「外国での論文・著書の出版」という活動については、積極的に行っているのは研究大学や理科系分野であって、研究大学以外の大学や理科系以外の専門分野ではあまり行われていない。

以上からわかるように、国際的な学術活動といっても、研究大学、あるいは理科系分野を中心とした研究のための論文・著書の執筆や海外渡航といった活動が中心を占め、教育活動や外国の大学との交流、というレベルにはまだ至っていない。

続いて、各大学における国際的な活動の取り組み状況を概観してみよう。表Ⅷ-2は、過去3年間にどの程度国際的な活動が行われたかを見たものである。まず全体で見ると、「留学生の入学」、「留学生の送り出し」は6割前後が数多くあったと回答しており、頻繁に行われている一方、「国際会議・セミナーの開催」はそれほど行われていない。大学類型別には、「外国人教師による授業」以外の各項目について、研究大学ほどより頻繁に

表Ⅷ-1 大学教員の国際的な学術活動（過去10年間）

	外国語による論文・著書の執筆	外国での論文・著書の出版	留学生対象の授業	学習・研究のための海外渡航	外国の学者との共同研究プロジェクト	研究休暇中に海外で滞在
大学類型						
研究大学	10回	3回	-	4ヶ月	1ヶ月	-
その他	3回	-	-	2ヶ月	-	-
専門分野						
人文科学	-	-	-	2ヶ月	-	-
社会科学	1回	-	1回	3ヶ月	-	-
理学	12回	3回	-	3ヶ月	2ヶ月	-
工学	7回	2回	-	2ヶ月	-	-
農学	10回	2回	1回	4ヶ月	1ヶ月	-
医歯学	10回	2回	-	3ヶ月	-	-
芸術学	-	-	1回	3ヶ月	-	1ヶ月
体育学	-	-	-	2ヶ月	-	-
職階						
教授	5回	1回	1回	3ヶ月	-	-
助教授	6回	1回	-	2.5ヶ月	-	-
講師	4回	-	-	2ヶ月	-	-
全体	5回	1回	-	3ヶ月	-	-

注) 表中の数値は中央値を示す。-は0回または0ヶ月。なお、「海外で大学教員として勤務」の項目については、すべて中央値が0ヶ月であったので表中から除外した。

行われる傾向にある。専門分野別には、留学生に関しては、人文科学、社会科学、農学、体育学系でより積極的な交流が見られる。なお、「外国人教師による授業」について特に人文科学系で数多くあったという割合が高いのは、語学関連授業における需要が高いためであろう。

このことから、全体的には、各大学とも留学生交流を中心として国際的な活動に取り組んでいることがわかる。ただし、大学類型別、専門分野別にその取り組み状況にかなり格差があることも事実で、特に研究大学とその他の大学との格差は大きく、研究大学ほど積極的な取り組みの姿勢が見られる。

3 高等教育の国際交流に対する意識

これまで、大学教員あるいは大学全体としての国際的活動に対する取り組みの実態を概観してきたが、そういった取り組みの背景には、高等教育の国際交流に対する各大学教員の意識が反映されていると考えられる。そこで以下では、意識レベルにおける分析を行うことにする。

表Ⅷ-3は、高等教育の国際交流に対する意識を見たものである。全体で見ると、個々の大学教員レベルでは、「外国の書物や雑誌の購読」、「外国の学者との交流」が、大学全体レベルでは、「外国の学生や教師との交流」が重要と考えられている。こうした意識

表Ⅳ-2 大学における国際的な活動（過去3年間）

	全体		大学類型		専門分野							(%)
	研究大学	その他	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	医歯学	芸術学	体育学		
留学生の入学												
数多くあった	63.0	76.2	53.6	73.0	75.9	62.5	65.5	71.8	48.3	29.2	71.1	
時々・まれにあった	33.1	20.8	41.7	24.3	23.6	32.2	29.0	26.3	45.1	69.0	24.5	
なかった	2.2	1.7	2.6	1.8	0.0	2.5	3.0	0.5	4.6	0.6	3.5	
わからない	1.7	1.3	2.1	0.9	0.5	2.8	2.5	1.4	2.0	1.2	0.9	
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
留学生の送り出し												
数多くあった	56.9	66.8	48.0	67.4	65.8	52.4	55.9	63.0	46.7	27.9	66.4	
時々・まれにあった	35.7	27.0	42.5	27.3	31.4	35.9	32.9	32.0	42.6	69.1	27.4	
なかった	3.7	3.2	4.6	2.2	1.0	5.1	6.4	1.8	6.1	0.6	3.5	
わからない	3.7	3.0	4.9	3.1	1.8	6.6	4.8	3.2	4.6	2.4	2.7	
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
外国人教師の授業												
数多くあった	42.1	40.5	43.3	69.8	53.9	39.7	38.4	30.1	24.0	24.4	53.9	
時々・まれにあった	41.6	42.8	40.8	26.9	35.7	40.5	42.1	46.9	46.4	73.8	33.0	
なかった	9.6	9.1	9.9	2.0	7.2	11.3	12.1	13.4	16.1	0.0	7.0	
わからない	6.7	7.6	6.0	1.3	3.2	8.5	7.4	9.6	13.5	1.8	6.1	
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
国際会議・セミナーの開催												
数多くあった	23.1	33.8	15.4	24.5	26.2	23.9	23.2	24.4	22.9	8.8	28.8	
時々・まれにあった	56.0	56.0	56.0	51.4	50.5	56.6	53.7	55.4	61.4	81.2	52.3	
なかった	12.5	4.7	18.1	13.2	16.4	10.4	14.8	14.6	8.5	5.0	8.1	
わからない	8.4	5.5	10.5	10.9	6.9	9.1	8.3	5.6	7.2	5.0	10.8	
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

表Ⅳ-3 高等教育の国際交流に対する考え方

	大学類型		専門分野							(%)	
	研究大学	その他	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	医学	芸術学		体育学
外国の書物や雑誌の購読											
非常に重要	76.8	81.8	73.5	72.6	77.2	86.8	69.1	83.2	90.5	57.2	59.5
重要	16.8	14.1	18.7	14.9	17.2	11.2	23.3	13.3	8.7	28.3	30.6
どちらともいえない	4.2	3.0	5.0	5.1	4.0	1.6	6.0	3.1	0.8	10.1	7.4
重要でない・その他	2.2	1.1	2.8	7.4	1.6	0.4	1.6	0.4	0.0	4.4	2.5
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
外国の学者との交流											
非常に重要	62.3	66.2	59.5	54.0	59.5	72.1	55.8	62.5	70.4	66.2	56.2
重要	25.4	23.7	26.6	27.0	26.8	20.9	29.0	26.5	22.0	21.3	28.9
どちらともいえない	10.5	8.8	11.8	15.0	12.1	6.0	12.9	9.7	7.6	10.6	12.4
重要でない・その他	1.8	1.3	2.1	4.0	1.6	1.0	2.3	1.3	0.0	1.9	2.5
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
外国の教師、学生との交流の促進											
非常に重要	58.4	61.3	56.4	57.2	59.8	65.7	47.8	59.8	63.7	55.3	55.4
重要	29.4	27.8	30.6	28.5	29.1	22.5	37.5	27.9	26.2	34.2	35.5
どちらともいえない	11.1	10.0	11.8	12.5	10.6	10.5	13.6	11.5	9.1	9.3	9.1
重要でない・その他	1.1	0.9	1.2	1.8	0.5	1.3	1.1	0.8	1.0	1.2	0.0
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
国際的視野からのカリキュラム編成											
非常に重要	35.6	39.0	33.4	36.9	41.0	39.1	27.7	27.1	39.5	33.8	38.9
重要	30.0	28.1	31.3	28.7	27.2	27.1	31.7	36.9	29.2	28.7	32.2
どちらともいえない	30.1	28.4	31.2	28.5	29.0	28.4	37.2	30.7	26.9	32.5	28.9
重要でない・その他	4.3	4.5	4.1	5.9	2.8	5.4	3.4	5.3	4.4	5.0	0.0
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

が、研究や留学生交流を重視した国際的活動につながっていると考えられる。逆に、「国際的な視野からのカリキュラム編成」は、上述した三つの項目と比較してそれほど重要視されていない。一概には言えないものの、教育の国際化という点では重要な位置を占めると思われるカリキュラム問題への関心の低さは、教育よりも研究を重視する傾向のあらわれとも解釈できる。

これを大学類型別に見ると、重視傾向は全体と類似しているものの、実際の活動がより積極的に行われている研究大学ほど国際交流を重視する度合いは強い。また、専門分野別に見ても、国際的な研究活動をより積極的に行う傾向にあった理科系分野ほど、「外国の書物や雑誌の購読」、「外国の学者との交流」を重視していることがわかる。一方、「国際的な視野からのカリキュラム編成」に関しては、どの専門分野でも重要視する程度はおしなべて低い。なお、大学教員の職階別には目立った差異は抽出されなかった。

これまでの分析を整理すると、活動のレベルでも意識のレベルでも、国際交流は、大学教員自身にとってみれば研究活動を、大学全体にとってみれば留学生交流を軸として行われているといえる。しかしながら、研究活動にしても、外国の大学との交流という段階にまでは到達しておらず、研究活動の国際化については、まだ発展する余地が残されている。さらに注目されるのは、教育活動の側面についてであり、意識的にも実態的にも、国際化への関心はあまり高くない。留学生交流を重視する傾向は読み取れるものの、それは受入れと送り出しのレベルの話であって、大学教員の教育活動やカリキュラム編成という点に関心が持たれるには至っていない。しかもその傾向は、大学類型、専門分野、教員の職階に関係なく見られる。わが国の場合、大学の教育内容に関する議論自体が乏しいという現状を考えれば、教育活動の国際化というテーマに関心が向けられないのはある意味で当然の結果とも言えるが、大きな課題として残されよう。

4 国際問題への関心

最後に、大学教員の国際意識の一端を考察するために、政府はどのくらい地球規模の問題を重視すべきかという質問に着目したい。分析を行ったところ、程度の差こそあれ、どの項目とも95%以上の者が重要と考えており、国際問題に対する関心は非常に高い。以下では、その中でもどういった問題への関心が特に高いかを考察するために、重要度の差異に着目して分析を進めたい。具体的には最も重視すべきと回答した割合に注目した。結果は表Ⅷ-4に示している。

まず全体を見ると、「環境水準」の63%を筆頭に、「軍縮」、「人権」、「エイズその他の健康問題」については半数以上の者が最も重視すべきだと考えている。その一方で、「世界の食料供給」、「人口増加」、「基礎的教育の普及」、「人種・民族・宗教上の紛争」、「世界経済」を最も重視すべきだという意見は、3～4割にとどまる。つまり、どの項目とも重視してはいるものの、先進各国の抱える問題に対する関心はより高く、それ

表Ⅷ-4 政府が重視すべき国際問題（最も重視すべきと回答した割合）

	環境水準	軍縮	人権	エイズ 他の健康問題	世界の 食料供給	人口増加	基礎的 教育の 普及	人種・民 族・宗教 上の紛争	世界経済	(%)
大学類型										
研究大学	62.5	54.5	51.3	48.4	48.4	49.0	43.4	34.4	29.5	
その他	64.0	56.2	51.7	51.2	46.4	43.3	42.5	37.7	29.7	
専門分野										
人文科学	64.8	58.0	61.0	47.5	43.7	40.3	44.0	44.9	27.6	
社会科学	69.7	63.3	63.6	52.0	49.4	43.9	46.7	48.0	36.9	
理学	64.4	60.7	51.5	46.6	48.3	49.1	46.9	35.3	25.5	
工学	57.6	49.1	41.7	43.0	41.1	45.6	38.6	29.6	29.6	
農学	61.9	54.0	41.4	46.9	61.5	51.3	38.0	26.5	23.5	
医歯学	63.2	49.0	49.1	58.9	46.8	48.9	42.1	32.4	30.4	
芸術学	64.2	55.2	55.0	57.1	49.3	39.3	43.4	40.0	35.4	
体育学	68.5	59.2	50.5	65.0	51.7	45.8	43.3	39.5	35.5	
職階										
教授	62.1	56.5	51.5	48.7	45.9	45.9	44.1	37.6	30.0	
助教授	64.7	56.1	52.6	48.8	48.6	45.2	42.5	35.0	28.4	
講師	65.8	50.9	49.4	60.1	50.3	44.8	38.6	35.1	31.6	
全体	63.4	55.5	51.5	50.0	47.2	45.6	42.9	36.3	29.6	

以外の国々が直面している諸問題への関心はやや低い。自分達にも直接関わる問題と比較して、それ以外の地域の問題がやや軽視される傾向がないわけではない。

続いて専門分野別に見ると、各分野とも関心の高い「環境水準」を除いて、それぞれ専門分野の特徴があらわれている。最も重視すべきと回答した割合を見ると、例えば「人権」については人文科学、社会科学系で、「世界の食料供給」については農学系で、それぞれ関心が高くなっている。職階別には、「基礎的教育の普及」や「軍縮」については教授層で、逆に「環境水準」、「世界の食料供給」や「エイズその他の健康問題」については講師層で関心がより高いというように、職階の違い（恐らくここでは年齢層の違い）によって重要視する度合いが異なる項目が散見される。

最初にも述べたように、以上は、国際問題に対する政府への要望であるとともに、大学教員の関心の反映でもある。そして、その特徴としては、わが国とも関わりが深い、つまり先進諸国が直面する問題が国際問題の中心としてより意識される傾向が挙げられる。それはある意味で当然の帰結ともいえようが、真の意味でのグローバルな国際問題への関心はまだ育っていないとも解釈される。言い換えるならば、本調査のみを用いて結論づけることはできないものの、同じ国際問題を扱うにしても、研究対象などに偏りが生じる可能性が考えられる。わが国に求められているのがまさに地球規模の国際問題の解決だとすれば、わが国の大学に求められているのも地球規模の国際問題への幅広い関心であり、それらの研究なのではなからうか。

5 まとめ

勿論、本節で用いた限られた質問項目から大学の国際化の現状を論ずることはできない。しかし、その特徴と問題点の一端を垣間みることはできたように思う。即ち、大学教員は研究活動を通じて、大学は留学生交流を通じて国際交流に関わる活動を行っている。しかしそれらが国際交流を通じての学問的発展、あるいは大学の発展という段階にまで到達しているか否かは疑問視される。研究活動に関しては、外国語の文献購読や外国語による論文等の執筆といった従来からの研究パターンを踏襲したものが一般的で、しかも研究大学や理科系分野を中心に行われているというのが現状である。ましてや、海外での活動や諸外国の大学との連携を行うまでには至っていない。留学生交流にしても、量的な発展傾向はそれなりに評価に価するものの、教育活動やカリキュラムの編成の問題にまで掘り下げようとする姿勢は希薄である。さらに、幅広い国際的関心を持ち合わせつつも、やや自国あるいは先進国の問題に関心が偏向している。以上のように考えるならば、ある一定の活動に偏ることのないトータルな意味での大学人の国際化を、意識的な側面からさらに開拓していくことが必要といえよう。

Ⅸ章 大学評価

阿曾沼 明裕

1 はじめに

いうまでもなく大学評価は、学生の評価、教員の評価、組織の評価、大学（機関）の評価など、あらゆるレベルの主体の評価を含んでいる。しかし、本調査は「大学教授職国際調査」なので、ここでまず扱うのは「教員の評価」の問題である。従って、前半では「教員評価」に焦点をしばってその現状を把握したい。そして、後半では、現在大学改革の大きな柱となりつつある大学評価に対する必要性、現状、将来の展望などについての教員の意識を分析する。これによって将来の大学評価の方向の一端を垣間みることが出来るかもしれない。

なお、分析の軸には、大学教員の所属する大学のタイプ（大学類型）、教員の専門分野、職階上の地位を使用した。ただし、紙幅の関係上、部分的な分析にとどまっていることをつけ加えておく。

2 教員評価の現状について

まず、現在教員の仕事に対して定期的な評価が行われているかどうかを示したのが、表Ⅸ-1である。全体では、46.2%の教員が現在定期的に評価されている。

表Ⅸ-1 定期的な教員評価の有無

		有 (%)	無 (%)	回答者数
大学 類型	研究大学	45.5	54.5	1,305
	その他	46.7	53.3	1,887
専門 分野	人文学系	42.5	57.5	457
	社会科学系	43.2	56.8	380
	理学系	42.7	57.3	616
	工学系	54.0	46.0	637
	農学系	42.7	57.3	213
	医学系	42.4	57.6	460
	歯学系	54.2	45.8	153
	芸術学系	59.2	40.8	120
	体育学系	59.2	40.8	120
	その他	45.1	54.9	91
職階	教授	45.4	54.6	1,708
	助教授	46.4	53.6	1,098
	講師	49.2	50.8	360
全 体		46.2	53.8	3,192

注) 「職階」においては「助手」及び「その他」を除いている。

専門分野別に見れば、工学系、芸術学系、体育学系では、それぞれ54.0%、54.2%、59.2%と高く、逆に、人文科学系、社会科学系、理学系、農学系、医歯学系では、42.5%、43.2%、42.7%、42.7%、42.4%と低い。また、職階別に見れば、講師、助教授、教授の順に、定期的評価を受けている人の割合が高い。

では、どのような活動に対して、こうした定期的評価がなされているのであろうか。表Ⅸ-2を見ると、定期的評価が行われていると回答した教員の中で、実に93.9%もの人が「研究活動」と答えている。つまり、定期的評価を受けている教員のほとんどが、「研究活動」の領域で評価を受けているのである。「研究活動」について評価がなされているのは、「教育活動」（44.4%）、「サービス」（16.4%）である。研究大学の教員の97.6%が、定期的に評価される領域として「研究活動」をあげただけではなく、研究大学以外の大学でも「研究活動」と答えた教員が93.2%にのぼる。専門分野別にみると、「研究活動」と答えた人の割合が相対的に少ないのは、人文科学、芸術学系、体育学系であり、「教育活動」と答えた人も割合が相対的に多いのは、人文社会、社会科学、医歯学系、芸術学系、体育学系である。また、職階別に見ると、「教育活動」と答えた人の割合が多いのは、助教授や講師よりも教授である。

表Ⅸ-2 定期的に評価されている活動の領域

		教育	研究	サービス	その他	計
大学 類型	研究大学	31.5	97.6	11.8	0.8	127
	その他	47.0	93.2	17.3	2.6	647
専門 分野	人文科学系	49.5	89.7	12.1	0.9	107
	社会科学系	44.9	95.7	18.8	2.9	69
	理学系	39.8	98.4	11.4	3.3	123
	工学系	35.5	96.7	15.2	1.4	211
	農学系	25.5	100.0	15.4	2.6	39
	医歯学系	50.0	92.2	22.2	2.2	90
	芸術学系	72.2	79.6	13.0	5.6	54
	体育学系その他	62.5	87.5	37.5	6.3	32
職階	教授	51.6	94.2	20.4	2.4	411
	助教授	36.4	94.1	12.1	2.6	272
	講師	35.7	91.7	10.7	1.2	84
全 体		44.4	93.9	16.4	2.3	774

注) 定期的評価を受けていると回答した人数に対する百分率である。
また、多重回答なので、横軸の合計は100%にはならない。
なお、標本はカーネギー小規模調査の標本(1,889標本)を使用。

では、こうした諸活動の評価は誰によって行われているのであろうか。定期的な教員評価の担当者を表したものが表Ⅸ-3と表Ⅸ-4である。

まず、教育活動については(表Ⅸ-3)、評価の担当者として選ばれたものを多い順にあげると、「学科長」「学科の同僚」「上級管理者」「学生」「講座や教室の同僚」となる。これは、教育活動においては、カリキュラムの問題を始めとして、多くの業務が学科を単位として運営されているという事実を反映しているといえることができよう。研究活動

については（表IX-4）、同じく多い順にあげると、「上級管理者」「学科の同僚」「学科長」「講座や教室の同僚」「学外者」「他学科の教員」となる。なお、「上級管理者」とは学部長、評議員、副学長、学長などを示すものである。ここで「上級管理者」が50.6%になっているのは不思議に思われるかもしれないが、回答者の多くが、上級管理者は講座の主任や学科の長などのレベルの管理者であると理解した可能性もある。そこで、この上級管理者を除いて考えてみると、研究活動では、教育活動の場合と異なり、「学生」がわずかとなり、かわって「講座や教室の同僚」が増えている。また、教育と異なり、「学外者」や「他学科」が多いのも研究活動の特徴と言えるであろう。

表IX-3 定期的な教員評価の担当者（教育活動について）

		学科の同僚	学科長	他学科の教員	上級管理者	学生	学外者	講座や教室の同僚	回答者数
大学 類型	研究大学	35.4	11.8	3.9	11.8	18.1	2.4	15.7	127
	その他	24.0	30.4	6.6	28.4	22.6	3.2	15.6	647
全 体		25.8	27.4	6.2	25.7	21.8	3.1	15.6	774

注) 定期的評価を受けていると回答した人数に対する百分率である。
また、多重回答なので、横軸の合計は100%にはならない。
なお、標本はカーネギー小規模調査の標本（1,889標本）を使用。

表IX-4 定期的な教員評価の担当者（研究活動について）

		学科の同僚	学科長	他学科の教員	上級管理者	学生	学外者	講座や教室の同僚	回答者数
大学 類型	研究大学	56.7	27.6	15.7	28.3	5.5	16.5	34.6	127
	その他	30.8	38.3	15.5	55.0	5.9	15.5	21.6	647
全 体		35.0	36.6	15.5	50.6	5.8	15.6	23.8	774

注) 定期的評価を受けていると回答した人数に対する百分率である。
また、多重回答なので、横軸の合計は100%にはならない。
なお、標本はカーネギー小規模調査の標本（1,889標本）を使用。

3 大学評価に対する必要性、現状、将来の展望に対する意見

(1) 大学評価に対する意識の変化

ここ数年大学評価が活発に議論されるようになった。とりわけ、大学審議会答申、大学設置基準の大綱化によって一層加速された大学改革においては、大学評価が重要な柱となりつつある。以下では、このように発展途上にある大学評価に対する教員側の対応の一端を明らかにしたい。

まず、大学の自己点検・評価が省令によって要請されることになったが、このことについて教員はどのように反応しているであろうか。表IX-5によれば、大学の自己点検・評価の必要性を省令によって明確にしたことは良かったとするのは、回答者の47.4%にのぼったが、「どちらでもない」「そうは思わない」と答えた回答者を合わせると、全体の50.

表Ⅸ-5 自己点検・評価を省令化したのは良かったと思うか

		そう 思う	どちらで もない	そう思 わない	わから ない	回答者 数
大学 類型	研究大	48.7	21.1	28.5	1.7	1,340
	その他	46.5	23.6	27.0	2.9	1,945
専門 分野	人文科学	40.8	24.3	31.9	2.9	477
	社会科学	51.3	19.8	28.0	1.0	400
	理学系	46.8	20.7	31.5	0.9	634
	工学系	49.8	24.1	23.8	2.3	647
	農学系	53.6	14.0	32.4	0.0	222
	医歯学系	48.3	26.7	21.6	3.4	472
	芸術学系	34.4	30.6	25.0	10.0	160
	体育学系	50.0	21.8	25.0	3.2	124
	その他	52.7	17.2	28.0	2.2	93
職階	教授	50.1	21.3	26.8	1.9	1,770
	助教授	43.4	23.2	30.7	2.7	1,133
	講師	47.2	25.9	22.9	4.1	363
全 体		47.4	22.6	27.6	2.4	3,294

注) 回答者数に対する百分率である。

2%にもものぼる。つまり、省令化に賛成するのは半数に満たない。大学類型別では、研究大学の方が省令化に賛成する割合が高く、専門分野別では、社会科学、農学、体育学系で賛成の割合が多いのに対し、人文科学、芸術学系では賛成の割合が低い。

このように、省令化に賛成する人は半数に満たないが、自己評価とその公表によって社会からの信頼を得ることが必要と考えている人は多く、全体では回答者の75.7%にのぼる(表Ⅸ-6)。大学類型別に見ると、研究大学以外の大学の方が、自己評価が必要であると思う人の割合が高く、専門分野別に見ると、人文科学や芸術学系においてよりも、社会科学、理学系、工学系、農学系、医歯学系、体育学系で必要であるとする人の割合が多い。職階別では、教授、助教授、講師の順で、必要と思う人が多いが、あまり大きな差はない。

表Ⅸ-6 自己評価によって社会の信頼を得る必要があるか

		そう 思う	どちらで もない	そう思 わない	わから ない	回答者 数
大学 類型	研究大	73.9	16.2	8.7	1.3	1,345
	その他	77.0	15.3	6.0	1.7	1,953
専門 分野	人文科学	70.7	17.1	10.8	1.5	475
	社会科学	80.3	13.5	5.8	0.5	400
	理学系	77.0	15.1	6.9	0.9	634
	工学系	78.1	14.1	6.3	1.5	651
	農学系	77.9	13.1	8.6	0.5	222
	医歯学系	76.8	16.9	4.3	2.1	473
	芸術学系	63.2	21.3	10.0	5.6	160
	体育学系	77.6	15.2	4.8	2.4	125
	その他	69.5	20.7	8.7	1.1	92
職階	教授	76.6	15.4	6.7	1.3	1,770
	助教授	75.1	15.4	8.0	1.6	1,136
	講師	74.4	16.5	6.5	2.5	364
全 体		75.7	15.6	6.5	1.5	3,298

注) 回答者数に対する百分率である。

このように多くの教員が必要であると考えている自己評価が、将来的に大学の定着するかどうかについては、表IX-7によれば、定着すると思う人が全体で69.2%にのぼっている。つまり多くの人が自己評価が定着すると考えている。他方で、自己評価では不十分で

表IX-7 自己評価は定着すると思うか

		そう 思う	どちらで もない	そう思 わない	わから ない	回答者 数
大学 類型	研究大学	68.3	19.3	9.3	3.0	1,340
	その他	69.9	17.9	8.1	4.1	1,945
職階	教授	70.7	17.9	8.3	3.2	1,770
	助教授	68.6	18.5	8.9	4.0	1,133
	講師	64.5	20.9	10.0	4.7	363
全 体		69.2	18.5	8.6	3.7	3,283

注) 回答者数に対する百分率である。

あり、大学以外の機関などによる他者評価が必要であるという意見も少なくはない。表IX-8にあるように、回答者全体の42.8%の教員が他者評価が必要であると答えている。専門分野別にみると、人文科学、芸術学系、体育学系では他者評価に対して消極的であるのに対し、医歯学系では回答者の半数以上が他者評価が必要であると考えており、社会科学、理学系、工学系、農学系でも、全体の平均以上の割合の人が他者評価が必要であると考えている。職階別ではあまり差がない。

表IX-8 他者評価は必要と思うか

		そう 思う	どちらで もない	そう思 わない	わから ない	回答者 数
大学 類型	研究大学	42.9	28.3	26.4	2.3	1,334
	その他	42.8	28.1	25.2	4.0	1,946
専門 分野	人文科学	35.9	27.5	34.0	2.5	476
	社会科学	44.2	25.1	27.1	3.5	398
	理学系	43.9	28.1	26.0	1.9	629
	工学系	43.5	30.7	22.0	3.9	646
	農学系	45.7	28.1	25.3	0.9	221
	医歯学系	51.7	26.9	18.0	3.4	468
	芸術学系	29.4	27.5	35.0	8.1	160
	体育学系	28.3	37.9	27.4	6.5	124
	その他	45.6	27.2	25.0	3.4	92
	職階	教授	43.6	28.6	24.3	3.4
助教授		41.4	27.7	28.2	2.7	1,128
講師		42.7	27.4	25.0	5.0	361
全 体		42.8	28.2	25.7	3.3	3,280

注) 回答者数に対する百分率である。

このように、他者評価が必要と考えている人は、半数には満たないとしても、全体の4割強の人が必要と考えており、他者評価が必要ではないと考えている人の割合(全体の25.7%)を遙かに上回っていることは極めて興味深い。この点は、以下の「専門分野のことは、

同じ専門分野の同僚によって評価するの「かいちばん良い」かどうかの質問に対する回答の結果を見ると、一層興味深くなる。大学教員にとって、管理運営などと違い、専門分野の問題は当然教員仲間で決定されるべきであるという見解が大半を占めるものと想像されるが、実際はかなり違うようである。表IX-9を見ればわかるように、専門分野の問題は同僚による評価が最適だと答えた人は、回答者全体の50.6%であり、残りの49.4%は「どちらでもない」あるいは「そう思わない」あるいは「わからない」と答えている。つまり、専門分野の問題に関しても、同僚の評価が最適であると考えてる人は半数を僅かにこえるだけである。理学系、工学系、農学系、芸術学系、体育学系では、半数以下でさえある。こうした事実は何を物語るのであろうか。現在大学評価をめぐる論議が盛り上がる中で、大学教員の意識に大きな変化が訪れつつあるのであろうか。あるいは現状は過去と変わりはないのであろうか。ここでは、これらの問題を検討する余裕はないが、大学評価の将来を占う上でも今後の重要な課題となるであろう。

表IX-9 専門分野の問題に関しては同僚評価が最適であると思うか

		そう 思う	どちらで もない	そう思 わない	わか ら ない	回答者 数
大学 類型	研究大学	51.5	30.2	16.9	1.4	1,336
	その他	50.0	31.8	15.8	2.4	1,948
専門 分野	人文学系	55.7	27.2	15.2	1.9	478
	社会科学系	57.3	24.9	16.8	1.0	398
	理学系	47.8	33.7	17.4	1.1	630
	工学系	47.3	35.1	14.9	2.6	649
	農学系	49.8	32.6	17.7	0.0	221
	医学系	51.1	31.3	15.4	2.1	466
	芸術学系	32.7	39.5	20.9	6.8	162
	体育その他	45.6	36.0	14.4	4.0	125
		65.2	20.2	11.2	3.4	89
職階	教授	51.9	31.3	15.1	1.6	1,764
	助教授	49.6	30.5	17.5	2.5	1,132
	講師	47.6	31.6	18.3	2.5	361
全 体		50.6	31.2	16.2	2.0	3,248

注) 回答者数に対する百分率である。

(2) 大学評価の現状と将来の展望

大学評価の現状については、表IX-10に示す通りである。現状では、講座・教室等の組織の最小単位では、なんら取り組みをしていないと答えた人が50.9%である一方で、学科、学部、大学と組織の規模が大きくなるにつれて、取り組んでいないと答える人の割合は減り、大学という規模ではわずか9.0%である。つまり、組織の規模が小さいほど自己評価の取り組みが遅れており、特に講座や教室等の組織の最小単位で遅れていることが明かである。他方で、委員会の設置を検討中あるいは委員会を設置し取り組んでいると答えた人は、大学の規模で46.2%にのぼり、学部、学科、講座や教室と組織の規模が小さくなるにつれて、その割合は少なくなり、講座や教室等の組織の最小単位ではわずか14.2%であ

る。このように、大学のレベル等の大きな組織であればあるほど、委員会設置などによって組織的に自己評価が進められつつある。ただし、活発に取り組んでいるかどうかといえ、必ずしも現状ではそうではないようである。

表IX-10 自己評価に関する取り組み状況（現在と5年後）

	なんら組みしていない	委員会を中 設置検討	委員会を 設置し組 み取る	自己評価を 実施している	わからない	回答者数
講座・教室等の 組織の最小単位	50.9 (18.5)	12.2 (9.3)	14.7 (18.2)	9.0 (20.3)	13.1 (33.7)	2,988 (2,946)
学科	40.1 (11.2)	17.1 (11.5)	20.9 (25.4)	5.4 (20.3)	16.0 (31.6)	2,971 (2,950)
学部	20.8 (5.1)	23.5 (9.8)	33.0 (31.5)	5.6 (25.7)	17.1 (27.8)	3,129 (3,076)
大学	9.0 (3.1)	20.9 (7.8)	46.2 (33.6)	6.0 (29.3)	17.9 (26.2)	3,193 (3,130)

注) 回答者数に対する百分率である。また、括弧内は5年後を表す。

しかし、5年後については、自己評価を活発に実施しているであろうと考える人がかなり増え、なんら取り組みをしていないであろうと考える人は減っている。もちろん5年後はわからないと考える人が多いが、小規模の組織でも、自己評価の実施がかなり進んだ状況になるであろうと考える人も多い。もし多くの教員がこのように考えているとすれば、大学の自己評価は少なくとも現在よりは活発に実施されることになるであろう。

4 まとめ

まず、教員評価の現状については、定期的な教員評価が行われていると答えた人は、半数弱である。そして、定期的評価が行われている活動領域については、定期的評価が行われていると答えた人のほとんど（約94%）が、研究活動と答えている。同様に教育活動と答えた人は半数弱（約44%）であり、サービス活動と答えた人は約16%に過ぎない。つまり、今のところ定期的評価は、研究活動を中心に行われている。

次に大学評価に対する意識については、自己点検・自己評価を省令化したことは良かったと答えた人は、半数（約47%）に満たないが、自己評価によって社会の信頼を得る必要があると答えた人は、約76%にもものぼった。そして、これから自己評価が定着すると考える人は、約69%にもものぼった。また、他者評価については、他者評価が必要と思う人（約43%）は、必要と思わない人（約26%）を大きく上回っている。さらに、専門分野の問題に関して同僚の評価が最適であると考えた人は半数を僅かにこえるだけであり、その他の大部分の人は、積極的にそのようには考えていない。このように、現在他者評価を含めて

大学評価に対する認識が大きく高まっているといえるであろう。

X章 総括と展望

有本 章

1 大学評価の重要性と大学教授職の役割

本報告書では、大学評価の重要性を指摘し、その実態や問題点について論考し、さらに具体的に大学教授職の自己評価を調査によって把握することを試みた。大学評価の必要性は、再三再四論じたように、大学の社会的存在理由とかかわり、組織的論理、大学の社会的条件や機能とかかわる問題である。ともすると、「省令」によって急浮上し、制度化されたとの印象を払拭できないかもしれないし、その意味で大学人の中でうさん臭く思われたり、疑心暗鬼の空気が蔓延するのはやむを得ないかもしれない。将来的展望に関しても、依然として先行き不透明であり、十分な成果を期待できないとする観測が支持される状態に留まっていることも否めない。しかしながら、大学の歴史をひもとけば、すでにチャーターリングやアクレディテーションが存在し、曲がりなりにも大学評価が持続してきたことも偽らざる事実であり、その背景や理由を観察すれば、いまさら大学評価を否定することも阻止することも、論理的には不可能であるはずである。むしろ現在は、大学評価を否定するのではなく、従来型のチャーターリング型の評価ではなく、アクレディテーション型の評価を模索し、少なくとも、その一環に位置づく自己点検、自己評価、あるいはそれらを含めた自己研究を真剣に模索する時点に到達したことを認識せざるを得ない。

そのような状況認識からすれば、学生、事務職員、教員等の大学構成員のいずれの責任も一層高まる時代を迎えたことになる。とりわけ教員の責任は重いといえる。単なる教員ではなく、専門分野の開拓と伝達に責任を持ち、スカラシップを發揮し、学術研究活動に携わる専門職としての見識と責務に裏打ちされた役割遂行が要請されるはずである。つまり、この専門職は学問へのアイデンティティと自己の職場である所属機関へのアイデンティティの双方が認識され、機能してこそ成立するのであり、その自覚が問われることを意味する。大学教授職は知識を素材として、一方で学問、他方でその受け皿としての大学を同一視の対象とする。前者は個々の専門分野であり、後者は個々の大学である。そして「学問の府」「知の拠点」たる大学において、教育と研究を要めに社会サービス、国際交流をその職務の中枢に置き、学内の管理運営、学界のレフェリー活動、さらには社会的人材選抜機能にもなんらかの役割を遂行している。これらの中で、専門分野の研究によって学問発展に貢献し、その専門分野を基軸に成り立つ教育科目を媒介とした教育によって各種人材養成を行なうことは、あくまで活動の中心に位置づけられるはずである。専門分野を軸に研究と教育を統合する点に「知の拠点」の独自性があり、大学教授職の特色がある。

しかも、脱工業社会、情報社会、知識社会と言われる今日、知識や専門分野を扱う大学がその中枢組織と見なされ、大学教授職の役割が一層重視されるのは当然であろう。

専門分野を軸に大学の諸機能は成立する以上、大学教授職の評価を問題にする場合にも、それが原点となるのは当然である。専門分野は知識の性格を反映して、縦横無尽に分化拡大を繰り返す。それは具体的には一方で無数の専門分野の分化、他方で学際的専門分野の統合となって具現する。知識のスクラップ・アンド・ビルド現象が存在する。知識は連続的に積み上げられて発展する連続的な側面とパラダイム変換によって革命的に発展する不連続的な側面において、観察できる。いずれにしても、分化と統合、連続と不連続、の力学過程を通じて知識は発展し、専門分野は発展している。大学はそのような専門分野の性格の反射鏡さながら、縦横無尽に発展する可能性を秘めている。また、そのような発展を許容する組織、陣容、システム、信念、さらには時として無秩序なほどの自由な空気や土壌を持たない限り大学の発展は約束されないことになる。

その専門分野と組織、機関、制度としての大学の間には介入するのは、大学教授職に他ならない。専門分野の性質に精通し、それを制御し、学問の発展を追求するのが大学の専門職であると同時に、組織、機関、制度としての構造が追求する要請に適応をせまられるのが大学の専門職である。それは専門分野の論理と官僚制の論理が遭遇する交差点に立ち、学問の論理と経済や政治の論理が投影される地点に立つのもある。それだけではなく、大学外部の社会的要請や圧力が高揚している現在では、アカウンタビリティやレリバンスをはじめとする市場の論理、消費者の論理等も否応なしに大学内部に浸透し、大学教授職に各種の要請を突きつける。

こうして、大学教授職はさまざまな要請や圧力を一身に受け、緊張と葛藤に直面せざるを得ない。現代の大学人は、専門分野、官僚制、社会の各側面からの論理を調整しながら、大学本来の機能である教育研究にいかにか専念できるかを模索しなければならない時代を迎えている。専門分野は真理の探究を要請し、自由を要請する。官僚制は、組織的統制、秩序、忠誠を要請し、合理化や効率を要請する。社会はアカウンタビリティの論理から競争や卓越を要請する半面、消費者主義の論理から民主化や平等を要請する。これらの方向からの要請は、必然的に複数の価値観の競合をもたらし、それを受け止める大学教授職の価値葛藤はいやがうえにも高まらざるを得ない。こうして具体的な価値選択能力とリーダーシップが現代の大学教授職には必要とされている。

2 大学教授職の自己評価—調査結果の特徴

このような状態に置かれている現在の大学教授職が自らの立場をいかに受けとめ、いかに今後を展望するかは、社会にとっても、大学にとっても、大学教授職自身にとっても、重要な問題である。的確な自己認識と将来展望を欠如しては、方向感覚を喪失した難破船さながら、漂流するより仕方がないからである。その結果は、社会、大学、大学教授職に

次第に測り知れない影響を及ぼすに違いないと思われる。その点、現状はいかなるものかを、彼らの自己評価によって知ることが本報告での課題であった。

本報告は、全国7,634人の大学教員を対象に質問紙調査を実施、回答のあった3,397人（回収率44.5%）について分析を試みた。報告したように、種々の角度から自己評価がなされている。その詳細は各論に譲るとして、ここでは全体の総括的な特徴を私見的に素描してみよう。

第1に、専門分野へのアイデンティティ（自己同一性）は、予測通り極めて高く、大学教授職の何よりも大きな特徴を構築していることが分かる。あらゆる大学類型や領域を越えて、日本の大学教員は、自ら専攻する専門分野の学問に対して絶大の愛着と帰属意識を保持している。専門分野を中心に、講座・教室、学科、学部、というように同心円的に遠ざかるにつれ帰属意識が希薄化し、大学レベルで最も希薄化していることは、実に興味ある結果である。大学は、専門分野の論理から推論できるように、専門分野を基盤にしたボトムアップの構造と、それを支える構成員の意識や行動の構造から成り立つとみなすのは難しくない。実際にそのような構造が調査結果にも表れている。その意味では、今日省令によって要請されるようになった大学評価は大学の組織や機関レベルの評価を重視することを建前とするため、ともするとボトムよりトップの主導性を重視し易く、トップダウン式の力学が働く可能性が高い。その意味で調査結果に現れた教員層の意識や行動とは逆になる。下で見るように、大学類型、専門分野、職階によって差異があるとしても、基本的にはボトムが専門分野によって種々の文化、哲学、スタイルを持ち、トップの動きに批判的構造を持つ点でほぼ共通性が認められるから、ボトムの意向を無視しては大学は動きがとれない。トップからの統制や独断専行は運営単位のボトム部分での反発や批判を誘発する素地が常に存在する。とかく下部組織での動きがバラバラで統一が困難な風土の中で、合意をいかにとりつけるかは、必然的な課題となる公算が大きいはずであり、その点で、大学全体が統一を企図すればするほど、講座・教室や学科よりも学部や大学等の組織的上部レベルのリーダーシップがますます必要とされることになる。

第2に、大学教員の専門分野へのアイデンティティは高いが、その内実は、主として研究志向性にあり、教育志向性は必ずしも高くないことが特徴である。教員の5人中4人近くは研究志向であり、教育志向は少ない。その点では研究大学もその他の大学も大同小異である。研究偏重、教育軽視の現象は研究の側面からみれば活力があることになる半面、大衆化を来した高等教育機関としての大学にとっては、学生の指導、授業を通しての学力の向上、付加価値の付与が問題になるから、無視できない意味をもつはずである。教員は研究し、十分に教育に配慮しなくても、大学教育は成立するとする風土がそこに生じているように見える。これは大学進学人口が10%未満のエリート段階の構図だと言っても過言ではあるまい。これでは専門分野の論理に志向するあまり、消費者や社会からの要請には応えていないと批判され、アカウンタビリティやレリバンズが果たされていないと言われても反論できない。

もっとも、教員は研究活動は教育に好影響を及ぼしていると回答している。また、現実には学期中には研究よりも教育に比重を置かざるを得ない制約や構造があり、教育活動に毎週18時間を費やしている現実がある。しかしそれでも、意識的には教育志向ではなくあくまで研究志向なのである。休暇中には研究の遅れを挽回するために、多くの時間を研究に集中する傾向があることは、背後に「研究パラダイム」が支配していることの証拠でもある。研究やその成果としての業績の公表のみが任用や昇任の重要な基準になっているならば、当然教育を犠牲にしてでも研究志向にならざるを得ない。「ポスト大衆化」時代の大学で教育の質の充実が重要な課題であると認識するならば、この研究と教育の価値葛藤の調整が急務であるし、その方法として、多くの教員が賛成しているように、教育能力を評価するためのより良い方法の開発が早晚必要であろう。

第3に、教育、研究、サービスへの関与の仕方を見ると、若干の特徴が指摘できる。全体に、学部と大学院の両方の授業を担当する教員が大半を占めており、一週間に教室での授業8時間、個人指導4時間を使っている。学部の授業はほとんどが講義形態であり、クラス討議や実験実習などが少ないのが特徴である。これは一方では伝統的教育形態を温存しているとも言えるが、他方では、マンネリズムに陥っている証拠でもあろう。

研究活動への参加は教育へよい影響を及ぼすと考えられている半面、学内の管理運営活動は悪い影響を及ぼすと考えられている。その研究に目を転じると、3年間に学術書1冊（単著とは限らない）、学術論文5篇、モノグラフ1冊、学会発表5回、新聞雑誌記事1篇、が平均的である。研究大学や理科系での生産性は高くなる傾向がある。全体に、所属大学でも、研究業績、学会活動、国際的活動が重要だとみなされており、教員評価にもそれらが重視されていることが指摘されている。こうした研究パラダイムが支配的な風土の中で、自由な研究活動を支える条件が問題となるが、研究業績の公表には政治的、イデオロギー的制約はほぼないと回答されている。物的環境は下記のように悪化しているが。

教育、研究に比べると比重が低下するかもしれないが、今日では社会サービスの比重も高まっている。それはアカウンタビリティの重要な一翼を担う大学の機能と考えられるからである。しかし、専門分野間の差異が大きく、医歯学系や社会科学系の教員がサービス活動に積極的であるのに対して、人文科学系や理学系では消極的であるという結果が得られた。社会的ニーズがあるか否か、それを大学で教員評価の対象にするか否かもこの種の差異を生じる背景にあらう。社会的アカウンタビリティが強く問われる時代が到来すると見込まれる今後、消極的な専門分野においてもなんらかの対応が必要となるかもしれない。そうなると、大学が多様な専門分野のコングロマリットであることが一層鮮明になろう。

第4に、専門分野への関与は高いが、教育研究の環境は必ずしも良好とはいえないことが明確に窺える。給与は、715万円～1,105万円未満層が過半数（51%）に達するが、大学教員の給与に対する評価は研究大学、若手教員層を中心に低く、今後も改善される見込みが低いと予想されている。研究費、研究休暇、旅費、その他の待遇に対する評価も低い。また、施設・設備や事務職員等の整備に関しても軒並低い評価が行なわれている。

これは、一般に言われているように、大学教員の物的・人的環境の疲弊がかなり深刻に意識されていることを意味していると解される。いわゆるヒト・モノ・カネの中では、恐らく事務職員の数が減少し、人手不足が深刻化して、事務的な支援が欠如している事実を反映しているためと推察できるが、事務的支援の欠如が重視されている。加えて、大学において最も重要な存在ともいえる学生に関しては、全般的には、現在の学力が良好ではないとする評価となっており、「数学的・論理的能力」の不足や「最低限の勉強しかない」などの評価が下されている。しかし、研究大学では良好とする割合がやや多く、その他の大学ではよくないとする割合が多いことから、大学格差が見られる。全体に5年前に比較して学力が変化していないと指摘する層と低下していると指摘する層が分解していることを勘案すると、大学生の学力は大学内でも大学間でも分極化傾向を強めているとの意識が顕著になっていると解される。このことは今後「偏差値」ではなく、大学教育の中味によって大学進学が一段と規定される時代を迎えるにつれ、現在漠然と意識されている学生層の大学間での差異化とサブカルチャー化の進行は一層鮮明になると見込まれる。

第5に、管理運営に関しては、権限の所在、影響力、満足度、などが問題になるが、いくつかの特徴が見られる。管理運営では「予算の決定」は中央集権的だと見做されているものの、その他の「大学の管理者の選任」「新任教員の採用」「教員の昇進と終身在職権の決定」「教員全体の教育負担の決定」「学部学生の入学基準の決定」「新たな教育課程の承認」などは概ね地方分権的であるとみなされている。詳細に見ると、研究大学よりもその他の大学で、また講師を中心とした若手教員層で中央集権的だとみる見方が強い。

概して、大学よりも運営単位の講座や学科などのレベルでの権限がかなり強い構造を示唆している。実際、管理運営への影響力は、講座・教室において最大であり、学科、学部、全学になるにつれて低下している。この傾向は、研究大学や教授層で強い傾向を示す。つまり、研究大学ではその他の大学に比較して、地方分権的管理運営が行われていること、また、教授層を中心に高い職階での影響力が強いことを示す。逆に、講師を中心に若手教員層は影響力が弱く、管理運営が中央集権的だとみなす傾向が強く、管理運営参加への不満も強い傾向を示す。

管理運営の現状に対する評価をみると、概して、政府の関与や統制を批判的にみている半面、学内の管理運営に対してはかなり肯定的な結果となっている。まず、政府の高等教育や学術政策に対する関与には、「わが国では、重要な学術政策に政府が干渉しすぎる」への回答率（45%）はかなり高まっている。他方、学内の管理運営と関わって、「日本では学問の自由は強力に守られている」「教育内容をまったく自由に決めることができる」「どんな研究でも関心があれば取り組むことができる」等への支持率はいずれも7割以上と高い。さらに、管理者のリーダーシップ発揮、管理者による「学問の自由」の支持、に対しても肯定的であり、管理者が独裁的だとする割合はやや高まるとしても、ほぼ支持的な傾向を示している。学内の意思決定への参加や管理者との意思疎通、等に対しても、やや不満はあるとしても、全体の傾向としては、3分の1程度にとどまっている。ただし、

研究大学に比してその他の大学でやや不満度が高い傾向があり、職階別では講師を中心とした若手教員層において、不満度あるいは批判的見方が高まっていることを指摘する必要がある。

第6に、世界の大学や学界との交流の必要性が高揚している現在、大学教員はどのような活動や現状認識にあるかは興味のある問題である。全般に、学生の留学や受け入れは活発化している半面、肝心の教員自身の取り組みに関しては、国内の学術活動に比して、国際レベルのそれはいまだ不十分な状態に留まっているという結果が得られる。過去10年間の外国語による著作活動、教育研究のための海外渡航、等は多少見られるとしても、外国での著作活動、留学生対象の授業、外国学者との共同研究、研究休暇による海外滞在、等は不十分な状態に留まっているという印象を与える。個々の大学では、留学生の受け入れ、送り出し、外国人教師による授業は増加しているものの、国際会議・セミナーはそれらに比較して少ないのも特徴である。

高等教育の国際交流に関する教員の意識をみると、個人レベルでは外国の書物や雑誌の購読、外国学者との交流、大学全体レベルでは外国の学生や教師との交流を重要としながらも、国際的視野からのカリキュラム編成はあまり重視されていない。授業の通用性、共通性は国際交流の第一歩であることからすれば、看過できない点となろう。人の交流に比して、教育や授業の中味に対する関心の低さは、研究に比して教育への関心が低い日本の大学教員の体質と関係があると解される。国際的学術活動に比較的積極的な理科系教員も、これら教育や授業への認識では他の専門分野とかわりばえない。総じて、研究の側面は実態や意識の両面においてやや活発化している半面、教育や授業の側面はいずれにおいてもいまだに低迷している、と指摘してさしつかえあるまい。

なお、国際問題への大学教員の関心は、政府が重視すべき国際問題の肯定度において、いずれもかなり高い比率を示した。それでも、環境水準、軍縮、人権、エイズその他の健康問題、等の問題に対する関心が高い半面、世界の食料危機、人口増加、基礎的教育の普及、人種・民族・宗教上の紛争、世界経済、等への関心はやや低いという傾向が見られる。これは先進諸国の抱える問題には関心が高いのに対して、それ以外ではやや低い傾向を示すといえるかもしれない。外国の大学教授職との比較を経ないと、日本の大学教授の関心の方向が独特なのか、一人よがりの傾向があるのか、といった点に結論めいたことは言えないとしても、関心の方向には多少偏りがあることは否めない。詳細は割愛するが、職階や専門分野によっても多少の差異が存在する。総じて、地球規模の幅広い問題に対して、グローバルな視点から教育研究による国際協力が日本の大学や大学人に要請される度合が高まっている現在、大学人の関心度にはかなり振幅があり、かなりの粗密が見られるという結果となっていることは否めないだろう。

以上論じてきたことは、大学教員が大学や自己に関する評価を意識の面から探った結果であるから、それ自体が大学評価の一環を形成しており、少なくとも自己評価の一断面であることには変わりない。

そこで第7に、大学教授職の自己評価と自己像という観点から見てみると、次の特徴が描けるだろう。全体に、大学教授職をとりまく環境は厳しくなり、とくに教育研究の直接的な環境である物的・人的側面に対しては疲弊や悪化が進行していることを示唆する結果を得た。学生の学力の停滞にも憂慮の態度を隠さない。社会からも尊敬されなくなったと率直に認識している。これらの一連の環境に対しては、研究大学よりもその他の大学で、教授よりも助教授やとりわけ講師レベルでの反応がより厳しくなっている。しかし同時に、このようなヒト・モノ・カネにかかわる環境悪化の下においても、現在の状況から必ずしも逃避する態度が明確になっているとは読めない。むしろその逆である。つまりヒトの部分の大学教員自身に関しては、あまり悪化しているとは自己評価していないように見える。そのことは、専門分野に対して強い帰属意識を保持し、研究に打ち込む姿勢が、機関、専門分野、職階の各タイプを越えて共通に認められる大学教員の特徴となっているからである。その中で、研究パラダイムが支配し、研究に対する関与に比較して、教育への関与が乏しいという実態は克服される課題として残されるとしても、少なくとも研究に対する愛着がきわめて強いことが日本の大学教授職の特徴であることは紛れもない。確かに研究を持続するには環境が悪化しているにもかかわらず、しかも、政府の統制には批判的であるが、学内の「学問の自由」は保証されており、研究活動の自由を享受していると考えている。仕事全般の満足度、同僚との関係、担当する授業、仕事の安定性、教育・研究活動の自由、等に対する満足度は概して高い。現在の所属大学を5年以内にやめる可能性は5分の1程度の教員に見られ、しかもその条件は研究条件や収入であるとされているが、大半の教員は現在の所属大学に留まると考えている。概して、彼らは自己の職業に満足し、誇りすら保持していると読めるであろう。確かに、現在のように大学環境が緊張を強いられ、研究志向の圧力がかかり、社会からの批判や期待が高まる時代には、大学教授職の使命や役割は一段と厳しさを増し、職務の遂行は容易でない。自分たち自身、「相当の心理的緊張がある」と回答しているのはそのことを裏書するに相違ない。恐らく、もう一步踏み込めば、「燃えつき症候群」現象も見られるのかもしれない。しかしそれでも、回答者の大学人は自らの職に強い愛着をもっていることは強調しておく価値があろう。実際、大学教授職に若い人が就いたら将来性がないとするものは少なく、自らも再び大学教員になりたいとするものも少ない。つまり、生まれ変わってまた大学教授職に就きたいと考えている。多くの大学教授職従事者が、その職を「大変に創造的で生産的である」と自己評価している。このことは、大学存亡の鍵を握る大学教授職が必ずしも外的要因によって動くのではなく、自己の内的生命力によって動くことを示唆するし、それが自覚されている限り、大学教授職の将来はそれほど見捨てたものでも、信頼するに足りないものでもないことを強く示唆しているように思われる。こうした大学教授職の自画像が実像か虚像か、あるいはこの自画像と社会からの他者評価によって見られた大学教授職像との間にいかなる関係があるかは、別の調査を要することは言うまでもない。

第8に、これまで指摘した自己評価と関連するが、省令に指摘するような意味でのもっ

と直接的な大学評価の将来について、大学教員はいかなる展望を持つかを見ると、概して肯定的であることが分かる。大学評価はすでに実施されており、定期的な教員評価が実施されているとする回答者は約半数近くに及んでいる。領域的には、研究が主であり、教育はそれにくらべ半減するし、サービス活動はあまり評価の対象になっているとはいえない。予想されるように、研究が主であることは、任用、昇任時を中心に評価が行われる慣行と符合する。教育に関わる評価が低いのは、上記の風土から首肯できよう。興味のあるのは、評価担当者が研究でも教育でも、研究大学では同僚を中心にするのに対して、その他の大学では学科長や上級管理者の比重が高い点である。研究大学では管理運営がボトムアップ型、その他の大学ではトップダウン型にやや傾斜する事実と一致する結果である。

曲がりなりにも、すでに自己評価が存在しているとする意識からすれば、自己点検・評価の省令化に対する反発は高まるに相違ないと予想できる。事実、肯定度は半数近くに登っている中で、反対もかなり多い。政府の統制に批判的な上記の傾向からも、官僚制に距離をおく専門分野志向の体質などから、省令が必ずしも歓迎されていない事実は理解できるだろう。しかしながら、大学や大学教授職が自己評価を促進すること自体に対しては、むしろ肯定的であり、それによって社会の信頼を得る必要があると考え、しかも、自己評価は今後次第に定着すると考えているように見える。「他者評価」に対しては、やや懐疑的であるが、それでも4割強が賛成している点も注目し得る。この回答を考慮すると、将来は他者評価を導入する下地が全国の大学ないし大学教員の間ではかなり出来ていると解してよいかもしれない。他方、専門分野の評価には同僚評価が最適とする回答も過半数に達していることを注意しておく必要がある。これらの回答を総合すると、ピアレビューを軸とした他者評価を模索することが、日本の大学教授職の間では今後の課題として受けとめられている、と解釈できるだろう。

すでになんらかの形で自己評価が行われている以上、やがて定着することは必至である。問題は、今回の調査では、講座・教室等のボトムレベルの取り組みよりも大学レベルでの取り組みが先行していると、大学人自身によって受け止められている事実である。現在の大学評価はボトムよりもトップを中心に仕掛られ、進行している事実がこのことに現れている。専門分野に関与し、自己の学問に愛着をもち、生きがいをもっている教員の足元から自己評価を出発させるよりも、むしろ遠い部分から出発させている点に、省令効果と現実の改革のミスマッチ、あるいは食い違いがあるかもしれない。研究大学よりもその他の大学、教授よりも講師を中心とした若手教員層にそのような食い違いを強く意識する事実を読み取ることができる。しかし、全体には、5年後には、ボトムでの自己評価が現在よりも一層定着すると予測されているので、この食い違いは漸次解消の方向に向かうものと予測できるが、その真偽は今後の実際の展開が証明することになるはずであるから、その動きに注目せざるを得ないだろう。

3 課題と展望

最後に本研究の課題と展望に関して若干述べておきたいと思う。この報告は、最初に指摘したように、国際調査の中の日本の大学教授職に焦点を合わせたものであり、今後、国際比較をおこなう課題が残される。現在、各国で分析している調査結果とそれに基づく報告書は早晚発表されるので、その段階で本報告を継続して整理することが予定されている。外国の大学や大学教授職と日本との比較は、高等教育システムや風土の相違があり、同じ質問紙による調査でもかなりの差異が出るものと予想される。上で論じた特徴等の彼我の差異を検討することは、是非必要であろう。

第2に、大学教授職の課題としては、本報告で分析したような実態がある以上、自己評価をさらに実質的に推進する基盤整備が必要なことが課題となる。政策、管理運営、財政等の側面の条件整備はもとより、実際の評価対象である教育、研究、サービス、国際交流、管理運営、等の実際の問題点や課題も各論的に検討される必要がある。その点では、研究大学とその他の大学、専門分野、職階に関しては、一応の傾向が把握できたが、その他フューズシートの要因や質問項目相互のクロス分析によって、具体的に詳細を解明する必要があるし、これらも今後課題として残される。また、今回収録していないが、回答者の自由記述にも貴重な意見があるので、別の機会に検討することにした。

第3に、高等教育政策に直接結びつくような提言は、中間報告の現段階では明確に指摘できないし、差し控えるべきかもしれないが、それでも多少の問題点は指摘できよう。上で明らかにした、調査結果の特徴や論点は少なくとも現在の日本の大学教授職が直面している状況であり、意識されている現実に他ならないとみなせば、これらの状況や現実を踏まえた政策が国、社会、大学等の各レベルにおいて今後展開されることが望まれる。私見ながら、次の点を指摘しておきたい。

(1)大学の教育環境がすでに相当疲弊している事実には、大学の政策や計画に際して十分な考慮が必要であろう。全国の大学教員は「個人や産業界は高等教育を財政援助すべき」という項目に強く同調している。研究大学と否とを問わず、また専門分野や職階を問わず、全体に教育研究環境の悪化を意識する度合は限界に達しているとの印象は払拭できないのであり、各大学で施設、設備、人員、財政などの見直しと大幅な補強が不可欠であると言えよう。特に国立大学を中心に財政基盤の充実が焦眉の急を告げている。

(2)大学教員が研究志向であることは、日本の大学の潜在的活力であり、これは今後研究の質の向上、「学問的生産性」の高揚に十分生かす政策が必要である。今後、国際的に情報化社会の進展が予測され、研究をめぐる一方で国際協力、他方で国際競争が激化すると見込まれる時、大学の研究能力の向上は不可欠であり、大学教授の貢献が期待される度合は一段と高まる。その過程で研究大学とその他の大学の機能分化が、センター・オブ・エクセレンス構想や拠点大学の構築過程と相まって急速に推進される可能性がある中で、予算や資源の傾斜配分が大幅に導入される公算が高く、そのためいわゆるマタイ効果やハロ

一効果が作用するに違いない。問題はそのような過程が現在大学教授職の意識に見られる潜在的活力を阻害し、研究活力の幅広い裾野を消失させることのないよう政策的方策が要請される点である。研究大学間、研究大学とその他の大学間の人事交流や人材移動はその種の活力を維持し、大学教員の再生を導く重要な方法の一つであろう。

(3)本報告でも、研究に比べて教育への志向が弱いのが日本の大学教授職の特徴となっているが、諸般の事情から大学教育が重視される今後は、大学教員の任用、昇任、定年等とかかわる報償体系において研究偏重の物差しではなく、教育やサービスを考慮した物差しの活用が望まれる。大学類型、専門分野、職階、ライフサイクル、等との関係が検討される段階に来ている。

(4)管理運営組織は現在、教員の意識というフィルターを通して見る限り、概して満足すべき状態になっている。「学問の自由」はほぼ保証され、管理者や経営者のリーダーシップもほぼ適切に発揮されている。ボトムアップの意思決定過程は研究大学を中心にかなり上首尾に機能している大学が多い。しかし、今後大学評価のあり方によっては、ボトムアップではなく、トップダウンの傾向を強め、大学教員の不満が増大し士気が衰退する恐れがないとは言えない。すでに部分的にはかなりの不満が存在する。特に、政府の統制的な高等教育政策には批判的であり、慎重さを要請する声が少なくない。今回の調査結果から、大学人のモラルを高め、大学教授職の誇りや自負心を維持し、活力の再生を企図するには、大学人の自主性、主体性、自律性を尊重する方向での政策が切望されているし、実際にそのような方向での政策が今後も大学政策の基本的条件となることを示唆しているのである。

(5)大学教員の国際化に関する意識や行動には、教育よりも研究を中心とした活動に片寄りを見せている点や、グローバルな問題に対する関心の方向も独特の傾斜が見られる点で、恐らく日本的特色が表出しているはずである。それでもその中には国際化の必要性を認め、次第に活発な活動を展開する可能性が秘められている。全体には学術活動や教育活動が依然として外国からの受信型に停滞し、外国への発信型への脱皮に成功しているとは言えない。その点で今後の国際化の展開に向けての課題は大きく、大学教員の意識や行動の変革が期待される。全体には消極性が支配しているとしても、すでに拠点大学や一部の教員を中心に活発な活動が見られ、これらの層を中心に旺盛な意欲が存在していることがくみ取れる以上、将来は必ずしも悲観的とは言えないに違いない。国際化や国際交流は、21世紀に世界のリーダーシップが期待される日本において、その中枢に位置する大学にとっても重要な政策課題とならざるを得ない。その意味での、大学人の変革への動きを一層促進するための条件整備が欠かせないだろう。

(6)調査結果全体を通して、日本の大学教授職が教育研究の物的環境が次第に悪化していると受け止めながらも、同時にかなりの不満や緊張感を表明しているにもかかわらず、大学教授職に対する積極的な自己像を保持し、使命や役割を自覚して職務を遂行していると回答している点は、注目に値する。自己の職に対する並々ならぬ誇り、意欲、モラル、活

力が日本の大学教授職には随所に窺われるのである。それは、日本の大学教授職のマスター・マトリックスの中心にこの種のアイデンティティが存在していることが観察できたと表現してもよからう。このことは、今度の調査結果に現れた一つの重要な特性ではあるまいか。それが虚像か実像かは、今後の自己評価とそれをクリアーする実績の蓄積によって証明されることであると同時に、そのような潜在的活力を十分に開発するシステムの整備が大学政策においては特に要請されるに相違ないと思われる。

付 録

1 質問紙調査の方法

2 集計表

付録1 質問紙調査の方法

1 はじめに

カーネギー教育振興財団との国際共同研究「大学教授職国際調査」では、カーネギー教育振興財団が指示する調査方法に則り、日本の大学教員に対し質問紙調査を実施した。この質問紙調査の標本の抽出と質問紙の発送の手順、および質問紙の回収状況は以下のとおりである。

2 標本の抽出

「大学教授職国際調査」日本調査では、標本調査を基調にする調査(以下、カーネギー調査と呼ぶ)と悉皆調査を基調にする調査(以下、全数調査と呼ぶ)の2種類の調査を同時に進行させて実施した。これら2つの調査は、質問紙に付与された通し番号で区別される以外、質問項目等は同じである。ただし、カーネギー教育振興財団が要請したのはカーネギー調査の実施のみである。カーネギー調査は、世界12か国との国際共同調査で相互に比較検討が可能のように質問紙が設計されており、標本の抽出も考慮されている。このカーネギー調査と平行して全数調査を実施したのは、①カーネギー調査が要請する標本数が回収できなかった場合の補充、②各大学を単位とした検討ができる、の2点の理由からであった。

調査対象となった大学教員は、カーネギー教育振興財団の指示に従い、2段階層化抽出法を用いて(1)機関の選定、(2)教員の抽出の2段階を踏んで抽出した。この過程を以下に示す。

(1) 機関の選定

標本抽出の第一段階は機関の選定である。質問紙調査の対象となる高等教育機関は、①「研究大学」と「その他の大学」の分類、②機関規模の分類、③調査対象校の抽出の3つの手順を経て選定した。

①「研究大学」と「その他の大学」の分類

日本の高等教育機関は、授与する学位の水準によって、米国の学士号に相当する学位を授与する4年制高等教育機関と準学士号に相当する学位を授与する2年制高等教育機関に大きく分けられる。今回の「大学教授職国際調査」では、4年制高等教育機関が調査の対象である。カーネギー教育振興財団は、4年制高等教育機関全体として、①研究大学が約

30校になり、②研究大学に勤務する専任教員(助手は除く)数の比率が約20%になるような大学分類を要請した。本調査ではこの要請に従い、かつ1979年時点で日本の高等教育機関を体系的に分類している天野分類(「大学分類の方法」慶伊富長編『大学評価の研究』東京大学出版会,1984を参照)の分類方法に準拠して、大学を「研究大学」と「その他の大学」に分類した。なお、研究大学院大学や放送大学は他の高等教育機関と同じ基準では分類できないために、分類にあたってはどちらの範疇にも含めなかった。

大学類型の分類のために使用した資料は、信頼できる資料であり、かつ分類作業を始めた時点で最も新しかった、大学基準協会編『平成2年度版 大学一覧』である。「研究大学」と「その他の大学」との分類基準は設置者別および機関タイプ別に以下のものである。

- ・国公立大学については、天野分類に準拠し、大学院生/学生比率が14%以上であり、旧制大学の歴史をもつもの。
- ・私立大学については、天野分類に準拠し、大学院生/学生比率が2.0%以上であり、旧制大学の歴史をもつもの。
- ・医歯系大学については、天野分類に準拠し、大学院生/学生比率が20%程度以上であるもの。

この分類の結果、30校の研究大学が選ばれ、また研究大学に勤務する専任教員(学部所属、助手は除く)の比率は22.7%になった。

②機関規模の分類

「研究大学」と「その他の大学」の2つの大学類型について、学部には所属する専任教員(助手は除く)数によって4年制高等教育機関を「大規模校」、「中規模校」、「小規模校」に分類した。各分類にはそれぞれ等しい数の大学が分かれるように分類している。また、大学基準協会編『平成2年度版 大学一覧』には専任教員数が「大学・学部」、「大学院・研究科」、「大学・研究機関」、「大学・病院」等セクターごとに分けて示されている。しかし、各大学の専任教員数をセクターごとに合算するには煩雑にすぎるために、便宜的に、「大学・学部」に所属する専任教員数を比較することにした。そうして、「研究大学」と「その他の大学」の各類型ごとに機関規模を分類している。

	大規模校	中規模校	小規模校	合計
「研究大学」	2+2	2	0	4
「その他の大学」	9+1	5	1	15
合計	11+3	7	1	19+3

注) 小文字は全数調査の追加機関数

③調査対象校の抽出

大学類型と機関規模別の調査対象校数は、上に示すとおりである。これらの調査対象校は、次のように選ばれた。

まず、カーネギー教育振興財団の調査対象校の抽出に対する指示は、①専任教員比5%に1校の割合で調査対象校を選ぶこと、②「大規模校」：「中規模校」：「小規模校」に3：2：1の割合で番号を割り振り、この番号に対して無作為抽出をすること、の2点であった。カーネギー調査では、この指示に従い、研究大学4校、その他の大学15校の合計19校を調査対象校に選んだ(端数切り捨てのために20校にならなかった)。そして、各大学類型ごとに無作為抽出を行って調査対象校を選びだした。また全数調査では、大規模研究大学2校、大規模その他大学1校をカーネギー調査で選定された19校に加えて、合計22を調査対象校とした。

(2) 教員の抽出

標本抽出の第二段階は教員の抽出である。調査対象校および調査協力が得られた調査対象校の代替校(質的に調査対象校と同等な機関)に所属する大学教員に対して、カーネギー調査の被調査対象者を選んだ。

カーネギー調査は標本調査であるから、調査対象校に所属する大学教員から被調査対象者を抽出しなければならない。指示に従って次のように被調査対象者を抽出した。まず調査の総配布質問紙数を4,000通と定めた。その理由は、この総配布数が、広島大学大学教育研究センターの過去の全国調査の回収率から、カーネギー教育振興財団が目安とする2,000通の有効回答を得るに妥当な数だからである。そして次に、「研究大学」と「その他の大学」の学部にも所属する専任教員数に比例するよう大学類型ごとに配布質問紙数を割り振った(下表、「質問紙の発送と回収状況」を参照)。さらに、各大学ごとの質問紙配布数は、各大学の学部にも所属する専任教員(助手は除く)数に比例して求めた。そして、質問紙を配布する個々の大学教員を選び出すにあたっては、大学教員の個人名簿が掲載されている廣潤社『平成2年版 全国大学職員録』を用いて、被調査対象となる大学教員を無作為に抽出したのである。抽出された大学教員は、1990年6月末日の時点で専任教員として在職する教授、助教授、講師である。

一方、全数調査は悉皆調査を基調としている。カーネギー調査の調査対象校の19校と追加した3校の合計22校に質問紙を配布した。この22校のうち、カーネギー調査の調査対象となった研究大学4校については、カーネギー調査で抽出された教員だけに質問紙を配布したが、残りの18校はカーネギー調査と連動して悉皆調査となるように講師以上の職階の専任教員全てに質問紙を配布した。質問紙の発送と回収状況は以下のようである。

	カーネギー調査				全数調査			
	配布数	回収数	回収率	構成比	配布数	回収数	回収率	構成比
「研究大学」	910	422	46.3	22.3	3,357	1,381	41.1	40.7
「その他の大学」	3,090	1,467	47.4	77.7	4,277	2,016	47.1	59.3
合計	4,000	1,889	47.2	100.0	7,634	3,397	44.5	100.0

3 質問紙の発送と回収状況

質問紙は1992年3月に配布された。質問紙は、まず各調査対象校の研究協力者のもとに発送され、次に研究協力者の手により機関にある被調査者の郵便受けに投函された。質問紙は回答者より直接郵送されることを基本として回収した。督促状は質問紙配布の約1月後の4月に発送し、5月末までにカーネギー調査は1,889標本、全数調査は3,397標本の有効回答を得た。回収率はそれぞれ、カーネギー調査47.2%、全数調査44.5%である(上表を参照)。諸事情により、督促状を2回発送するという当初の予定は、調査対象となった全ての大学教員に督促状を1回だけ発送することになった。もし督促状を2回発送できていたならば、回収率は予想通り50%を越えたと思われる。結局、カーネギー調査によって回収された質問紙は目標とした2,000通にわずかに及ばなかったわけだが、全数調査の質問紙によって補充することはなく、1,889標本を検討することになった。

また回収された標本については、データの偏りについて次のようなことがいえる。まずカーネギー調査は、調査対象校を大学の規模について「大規模校」、「中規模校」、「小規模校」を3:2:1の割合で選定しているために、規模の大きな大学に所属する教員が多くなるよう標本が抽出されている。これはカーネギー教育振興財団の指示に従うところだが、比喩的にいうなら、カーネギー調査のデータはカレッジよりもユニバーシティに所属する大学教員の意見がより反映されている。つぎに全数調査については、カーネギー調査のように大学の規模による偏りがあるだけでなく、上記の表の構成比に示したように、研究大学に所属する大学教員の意見がより反映されるようになっている。つまり、母集団の構成比では20%程度しか占めていない研究大学に所属する大学教員が、全数調査の標本では40%も占めているのである。言い替えれば、全数調査のデータは規模の大きな大学、それも研究大学に所属する大学教員の意見がより反映されていることに留意が必要であろう。

(相原 総一郎)

付録2 集計表

本集計表は、カーネギー教育振興財団との国際共同研究「大学教授職国際調査」の一環として実施された全数調査について、各質問項目ごとの全体の素集計表(「全体」の列に示す)と、大学類型(研究大学その他の大学)、専門分野(人文科学・社会科学・理学系・工学系・農学系・医歯学系・芸術学系・体育学系・その他学系)、職階(教授・助教授・講師)の3軸についての集計表である。回答の分布は百分率で示されており、カッコ内は有効回答数を示している。

質問項目のなかで複数の回答を求めた質問項目(問36,問45,問48,問51,問61,問62)については、全数調査では多重回答処理をしていないため、多重回答処理をしているカーネギー調査の該当項目の集計結果を挿入した。

	全体	研究大	その他	人文科	社会科学	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師
問1. あなたの性別															
1. 男	93.3%	97.1%	90.7%	91.2%	96.0%	98.6%	99.1%	98.3%	93.6%	59.5%	91.3%	70.4%	95.2%	92.0%	88.5%
2. 女	6.7%	2.9%	9.3%	8.8%	4.0%	1.4%	0.9%	1.7%	6.4%	40.5%	8.7%	29.6%	4.8%	8.0%	11.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,384)	(1,376)	(2,008)	(490)	(404)	(652)	(664)	(229)	(486)	(173)	(127)	(98)	(1,822)	(1,160)	(373)
問2 a. あなたの誕生日															
中央値	1941年	1941年	1941年	1941年	1941年	1941年	1941年	1941年	1943年	1937年	1944年	1940年	1935年	1947年	1951年
問2 b. ご両親の最終学歴															
(1)父親															
1. 小学校卒業程度	10.8%	9.2%	11.8%	13.8%	11.6%	10.6%	10.0%	12.3%	6.2%	9.2%	16.0%	9.3%	12.8%	9.1%	5.7%
2. 中学校卒業程度	18.5%	16.0%	20.3%	23.8%	18.9%	17.9%	20.2%	24.7%	11.4%	8.1%	16.0%	26.8%	18.8%	19.3%	15.3%
3. 高等学校卒業程度	19.4%	19.0%	19.7%	19.7%	24.0%	19.9%	19.3%	15.9%	18.8%	15.6%	18.4%	22.7%	20.0%	19.0%	18.3%
4. 短期大学卒業程度	17.6%	18.5%	17.0%	15.7%	16.7%	20.5%	15.8%	20.3%	15.9%	20.2%	18.4%	18.6%	18.0%	17.7%	15.3%
5. 大学・大学院卒業程度	33.7%	37.2%	31.2%	27.0%	28.8%	31.2%	34.7%	26.9%	47.6%	46.8%	31.2%	22.7%	30.5%	35.0%	45.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,335)	(1,356)	(1,979)	(478)	(396)	(644)	(652)	(227)	(483)	(173)	(125)	(97)	(1,802)	(1,137)	(367)
(2)母親															
1. 小学校卒業程度	12.9%	10.4%	14.6%	15.7%	14.4%	11.7%	13.3%	16.4%	7.1%	9.9%	17.2%	13.3%	15.2%	11.8%	4.1%
2. 中学校卒業程度	17.9%	16.1%	19.2%	23.3%	19.1%	17.4%	19.7%	19.0%	11.3%	10.5%	19.7%	20.4%	19.0%	16.7%	16.6%
3. 高等学校卒業程度	48.5%	50.2%	47.3%	44.4%	48.4%	50.0%	44.5%	50.4%	55.3%	54.1%	43.4%	50.0%	46.4%	50.3%	52.8%
4. 短期大学卒業程度	13.9%	15.6%	12.7%	10.9%	12.1%	15.4%	15.4%	9.7%	15.4%	16.3%	13.1%	14.3%	14.1%	14.0%	13.5%
5. 大学・大学院卒業程度	6.8%	7.7%	6.2%	5.7%	6.0%	5.5%	7.2%	4.4%	10.9%	9.3%	6.6%	2.0%	5.3%	7.3%	13.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,329)	(1,358)	(1,971)	(477)	(397)	(642)	(656)	(226)	(479)	(172)	(122)	(98)	(1,799)	(1,139)	(362)
問3 a. 取得された最終学歴															
1. 学士	14.2%	5.8%	20.0%	14.7%	12.9%	6.3%	8.6%	8.8%	3.1%	62.5%	53.2%	38.8%	16.2%	12.0%	12.6%
2. 修士	24.1%	15.1%	30.2%	67.9%	56.1%	7.6%	8.5%	1.8%	0.4%	29.2%	34.7%	40.8%	19.7%	29.0%	28.9%
3. 博士	60.2%	78.4%	47.7%	16.6%	29.8%	85.4%	81.6%	88.5%	96.1%	1.2%	10.5%	16.3%	62.3%	58.3%	56.1%
4. その他	1.5%	0.7%	2.0%	0.8%	1.2%	0.8%	1.2%	0.9%	0.4%	7.1%	1.6%	4.1%	1.8%	0.6%	2.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,358)	(1,371)	(1,987)	(489)	(403)	(649)	(659)	(227)	(486)	(168)	(124)	(98)	(1,805)	(1,150)	(374)
問3 b. 取得された最高学位の専門分野															
1. 人文科学系	14.7%	11.3%	17.1%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	15.8%	14.0%
2. 社会科学系	12.2%	11.2%	12.8%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	15.0%	10.0%
3. 理学系	19.6%	25.4%	15.7%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	21.5%	13.3%
4. 工学系	19.9%	19.3%	20.4%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.6%	20.8%	13.8%
5. 農学系	6.9%	7.8%	6.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.9%	7.8%	4.3%
6. 医学系	14.6%	18.4%	12.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.6%	13.0%	38.2%
7. 保健学系	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.0%
8. 家政学系	0.6%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.4%	0.6%	0.5%	1.1%

9. 教員養成系	1.4%	0.7%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	45.9%	1.3%	1.8%	0.5%	
10. 芸術学系	5.3%	1.8%	7.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.0%	6.0%	4.1%	
11. 体育学系	3.8%	3.3%	4.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	3.9%	6.2%	
12. 一般教養学系	0.3%	0.1%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.2%	0.2%	0.4%	0.5%	
13. その他	0.6%	0.7%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.4%	0.7%	0.4%	0.3%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,330)	(1,355)	(1,975)	(491)	(405)	(654)	(664)	(229)	(487)	(175)	(127)	(98)	(1,791)	(1,142)	(368)				
問3 c. 取得された最高学位の授与国																			
1. 日本	94.0%	94.5%	93.7%	89.9%	89.2%	94.3%	96.9%	97.8%	98.8%	98.6%	98.3%	84.2%	93.7%	94.6%	94.5%				
2. アメリカ	4.0%	3.9%	4.1%	6.8%	9.5%	4.3%	1.7%	0.0%	0.0%	3.7%	1.7%	13.7%	4.6%	3.3%	3.0%				
3. ドイツ	0.2%	0.1%	0.2%	0.2%	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%				
4. イギリス	0.2%	0.1%	0.3%	0.6%	0.0%	0.2%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.1%	0.3%	0.8%				
5. フランス	0.3%	0.4%	0.2%	0.6%	0.3%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%	0.3%	0.4%	0.0%				
6. その他	1.3%	0.9%	1.5%	1.9%	1.0%	0.5%	0.9%	2.2%	1.2%	4.3%	0.0%	1.1%	1.1%	1.3%	1.6%				
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%				
	(3,326)	(1,356)	(1,970)	(485)	(398)	(644)	(655)	(228)	(482)	(164)	(119)	(95)	(1,797)	(1,141)	(366)				
問3 d. 上級の学位取得のための準備																			
1. はい	16.3%	11.6%	19.5%	30.6%	35.9%	7.4%	14.8%	6.8%	2.5%	4.7%	20.8%	34.4%	11.7%	21.3%	24.2%				
2. いいえ	83.7%	88.4%	80.5%	69.4%	64.1%	92.6%	85.2%	93.2%	97.5%	95.3%	79.2%	65.6%	88.3%	78.7%	75.8%				
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%				
	(3,281)	(1,337)	(1,944)	(477)	(396)	(631)	(633)	(222)	(476)	(170)	(120)	(86)	(1,763)	(1,134)	(364)				
問4. 受けられた教育の評価																			
a) 大学での教師として																			
1. 大変よい	18.7%	19.7%	18.0%	20.3%	22.5%	20.9%	19.7%	14.0%	10.5%	22.0%	19.4%	19.6%	23.8%	13.9%	8.1%				
2. よい	34.9%	33.8%	35.6%	37.1%	37.3%	34.1%	35.0%	33.9%	27.3%	37.5%	41.1%	42.3%	36.2%	34.2%	30.4%				
3. 普通	36.5%	35.5%	37.1%	34.2%	31.8%	36.5%	34.4%	39.4%	45.8%	34.5%	33.1%	32.0%	33.4%	38.8%	43.7%				
4. よくない	8.9%	9.9%	8.2%	6.1%	7.8%	7.9%	9.3%	10.9%	15.7%	6.0%	6.5%	4.1%	5.7%	11.7%	15.9%				
5. 該当しない	1.1%	1.2%	1.1%	2.3%	0.8%	0.6%	1.6%	1.8%	0.6%	0.0%	0.0%	2.1%	0.8%	1.3%	1.9%				
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%				
	(3,291)	(1,333)	(1,958)	(477)	(400)	(633)	(645)	(221)	(465)	(168)	(124)	(97)	(1,779)	(1,133)	(359)				
b) 専門分野の研究者として																			
1. 大変よい	22.6%	24.0%	21.6%	24.9%	29.7%	25.0%	24.3%	16.7%	11.7%	22.2%	20.5%	25.3%	26.7%	19.5%	11.5%				
2. よい	37.7%	38.7%	37.0%	40.1%	37.8%	39.6%	34.4%	47.1%	36.0%	39.5%	29.5%	30.5%	37.6%	39.0%	34.6%				
3. 普通	30.7%	27.7%	32.8%	29.3%	26.4%	26.6%	31.6%	25.8%	38.2%	29.3%	41.8%	36.8%	29.6%	30.8%	36.0%				
4. よくない	7.9%	8.5%	7.5%	4.9%	5.3%	7.8%	7.5%	10.4%	13.4%	7.2%	7.4%	5.3%	5.0%	9.8%	16.5%				
5. 該当しない	1.1%	1.1%	1.2%	0.8%	0.8%	1.0%	2.3%	0.0%	0.7%	1.8%	0.8%	2.1%	1.1%	1.0%	1.4%				
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%				
	(3,268)	(1,325)	(1,943)	(474)	(397)	(627)	(643)	(221)	(461)	(167)	(122)	(95)	(1,767)	(1,124)	(358)				
問5. 在職された高等教育機関数																			
中央値	1校	2校	1校	1校	1校	1校	1校	1校	2校	1校	1校	1校	1校	1校	1校				
問6. 高等教育機関の在職年数																			
中央値	20年	20年	20年	20年	20年	22年	20年	22年	18年	25年	20年	20年	19年	25年	16年				

b. 身分はつぎのどれですか	(3,383)	(1,376)	(2,007)	(488)	(405)	(653)	(662)	(228)	(483)	(173)	(126)	(98)	(1,828)	(1,160)	(374)
1. 任期がなく、定年まで勤務、昇進可能	93.0%	93.8%	92.5%	94.3%	95.5%	92.8%	92.1%	95.6%	89.4%	95.3%	92.0%	93.8%	92.6%	95.5%	88.6%
2. 任期がなく、定年まで勤務、昇進不可能	3.4%	3.4%	3.5%	1.4%	1.2%	3.5%	4.6%	2.2%	6.2%	3.5%	4.8%	2.1%	3.6%	2.9%	4.3%
3. 任期がある	2.4%	1.4%	3.1%	3.7%	2.7%	2.6%	2.6%	1.3%	1.2%	0.6%	1.6%	3.1%	3.2%	0.6%	3.2%
4. その他	1.2%	1.4%	1.0%	0.6%	0.5%	1.1%	0.8%	0.9%	3.1%	0.6%	1.6%	1.0%	0.6%	1.0%	3.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,365)	(1,370)	(1,995)	(487)	(401)	(651)	(656)	(229)	(481)	(172)	(125)	(97)	(1,820)	(1,153)	(370)	
c. 任期を更新できませんか															
1. 必ず更新できる	27.4%	26.4%	27.7%	25.0%	41.7%	23.3%	23.1%	14.3%	30.3%	20.0%	16.7%	37.5%	28.0%	29.2%	25.0%
2. ↑	10.4%	11.3%	10.1%	21.9%	16.7%	3.3%	10.3%	14.3%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	6.4%	12.5%	25.0%
3. どちらとも	19.4%	11.3%	22.3%	9.4%	8.3%	26.7%	28.2%	28.6%	15.2%	10.0%	50.0%	25.0%	20.0%	14.6%	25.0%
4. ↓	1.0%	1.9%	0.7%	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	2.1%	0.0%
5. 全く更新できない	22.9%	39.6%	16.9%	28.1%	16.7%	26.7%	15.4%	14.3%	36.4%	30.0%	16.7%	12.5%	28.0%	18.8%	4.2%
6. わからない	18.9%	9.4%	22.3%	15.6%	16.7%	16.7%	23.1%	21.4%	9.1%	40.0%	16.7%	25.0%	16.8%	22.9%	20.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(201)	(53)	(148)	(32)	(24)	(30)	(39)	(14)	(33)	(10)	(6)	(8)	(125)	(48)	(24)	
問12. 所属大学での勤務年数															
中央値	16年	15年	17年	14年	13年	16年	17年	17年	14年	25年	17年	15年	19年	14年	9年
問13. 所属組織の教員数															
学科(中央値)	24人	35人	20人	24人	25人	24人	20人	23人	140人	47.5人	26人	23人	24人	24人	35.5人
講座・教室など(中央値)	5人	4人	5人	6人	6人	4人	4人	4人	7人	9人	3人	5人	5人	5人	7人
問14. 所属大学以外からの給与															
a) 他の高等教育機関															
1. 常勤職	1.1%	0.9%	1.2%	1.5%	1.8%	0.6%	1.0%	1.4%	0.7%	1.9%	0.8%	0.0%	1.4%	0.8%	0.3%
2. 非常勤職	36.5%	41.6%	32.9%	61.6%	47.7%	26.0%	24.3%	26.8%	31.2%	27.7%	58.2%	50.0%	40.3%	32.7%	29.5%
3. ついていない	62.4%	57.5%	65.9%	36.9%	50.5%	73.3%	74.7%	71.8%	68.1%	70.3%	41.0%	50.0%	58.2%	66.5%	70.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,231)	(1,338)	(1,893)	(482)	(390)	(634)	(629)	(220)	(445)	(155)	(122)	(92)	(1,745)	(1,113)	(353)	
b) 高等教育機関以外															
1. 常勤職	1.3%	0.3%	2.0%	0.9%	1.2%	0.7%	1.2%	0.5%	1.8%	2.9%	1.1%	3.9%	1.5%	0.8%	1.2%
2. 非常勤職	16.7%	17.2%	16.3%	12.6%	21.0%	7.7%	10.4%	4.5%	44.1%	11.8%	17.0%	14.3%	16.4%	14.6%	24.2%
3. ついていない	82.0%	82.5%	81.8%	86.5%	77.8%	91.6%	88.4%	95.0%	54.1%	85.3%	81.9%	81.8%	82.0%	84.6%	74.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(2,862)	(1,174)	(1,688)	(349)	(334)	(581)	(595)	(199)	(444)	(136)	(94)	(77)	(1,498)	(1,008)	(339)	
問15 a. 所属する国内学会数															
中央値	4つ	4つ	3つ	3つ	4つ	3つ	4つ	4.5つ	6つ	2つ	3つ	4つ	4つ	4つ	4つ
問15 b. 所属する国際学会数															
中央値	1つ	1つ	0つ	0つ	0つ	1つ	1つ	1つ	1つ	0つ	0つ	0つ	1つ	0つ	0つ

	全体	研究大 学	その他 の大学	人文科 学系	社会科学 学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学 系	体育学 系	その他 学系	教授	助教授	講師
問16 a. 学会参加回数(過去3年間)															
	中央値	7回	9回	6回	6回	6回	7回	8回	7回	13回	3回	6回	6回	7回	7回
問16 b. 海外の学会参加回数(過去3年間)															
	中央値	1回	1回	0回	0回	1回	1回	1回	1回	2回	0回	0回	1回	1回	1回
問17. あなたにとって重要なのは															
a) 自分の専門分野															
1. 大変重要	70.9%	78.3%	65.9%	68.8%	77.1%	71.8%	68.2%	75.4%	74.3%	65.2%	64.3%	67.0%	69.6%	73.9%	68.9%
2. かなり重要	26.1%	20.3%	30.1%	28.5%	21.4%	23.7%	28.6%	22.3%	23.4%	29.3%	33.3%	33.0%	27.2%	23.8%	27.8%
3. あまり重要でない	2.7%	1.2%	3.8%	2.1%	1.5%	4.4%	2.9%	2.2%	1.9%	5.5%	2.4%	0.0%	3.0%	2.2%	2.7%
4. 全く重要でない	0.2%	0.1%	0.3%	0.6%	0.0%	0.2%	0.3%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	0.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,313)	(1,348)	(1,965)	(480)	(398)	(638)	(650)	(224)	(474)	(164)	(126)	(94)	(1,782)	(1,136)	(367)
b) 自分の大学															
1. 大変重要	30.8%	30.1%	31.3%	30.3%	33.8%	24.8%	32.4%	29.1%	27.7%	41.9%	36.8%	43.2%	35.3%	26.5%	22.3%
2. かなり重要	47.5%	45.6%	48.7%	56.1%	42.5%	47.0%	45.1%	45.3%	46.8%	45.8%	53.6%	45.3%	47.1%	48.0%	47.4%
3. あまり重要でない	19.5%	21.8%	18.0%	13.1%	20.9%	25.3%	19.5%	23.3%	22.3%	12.3%	9.6%	11.6%	16.1%	22.5%	27.0%
4. 全く重要でない	2.2%	2.4%	2.0%	0.4%	2.8%	2.8%	2.9%	2.2%	3.2%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	2.9%	3.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,275)	(1,332)	(1,943)	(472)	(393)	(632)	(645)	(223)	(470)	(155)	(125)	(95)	(1,757)	(1,127)	(363)
c) 自分の学部															
1. 大変重要	30.3%	30.9%	29.9%	27.5%	32.6%	24.8%	27.5%	28.8%	36.0%	42.2%	41.7%	35.2%	35.1%	25.4%	22.8%
2. かなり重要	48.1%	47.0%	48.9%	55.5%	44.7%	45.9%	48.6%	48.4%	47.5%	42.2%	46.7%	51.6%	47.6%	48.5%	49.2%
3. あまり重要でない	19.5%	19.8%	19.3%	15.1%	19.8%	26.4%	22.0%	20.1%	14.8%	14.9%	11.7%	13.2%	15.8%	23.0%	26.4%
4. 全く重要でない	2.0%	2.3%	1.9%	1.9%	2.8%	2.9%	1.9%	2.7%	1.7%	0.6%	0.0%	0.0%	1.4%	3.1%	1.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,223)	(1,303)	(1,920)	(465)	(389)	(614)	(640)	(219)	(467)	(154)	(120)	(91)	(1,726)	(1,109)	(360)
d) 自分の学科															
1. 大変重要	39.0%	39.1%	38.9%	36.5%	39.5%	32.9%	40.7%	37.9%	43.0%	44.8%	48.3%	38.6%	43.7%	34.1%	32.6%
2. かなり重要	45.9%	45.9%	45.9%	49.2%	41.4%	50.0%	44.8%	41.6%	44.6%	46.9%	44.9%	51.1%	44.2%	47.4%	48.3%
3. あまり重要でない	13.5%	13.2%	13.7%	12.2%	15.5%	14.8%	13.6%	20.1%	10.6%	8.3%	6.8%	10.2%	10.6%	16.7%	17.2%
4. 全く重要でない	1.7%	1.8%	1.6%	2.0%	3.5%	2.2%	0.9%	0.5%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	1.4%	1.8%	2.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,090)	(1,253)	(1,837)	(449)	(367)	(586)	(632)	(214)	(433)	(145)	(118)	(88)	(1,662)	(1,058)	(344)
e) 自分の講座・教室															
1. 大変重要	56.0%	62.1%	51.5%	50.7%	49.3%	54.4%	55.7%	59.8%	67.7%	56.8%	60.7%	47.2%	61.3%	49.7%	51.3%
2. かなり重要	33.0%	27.9%	36.7%	40.2%	34.3%	31.4%	32.4%	31.3%	25.2%	37.0%	32.1%	42.7%	30.3%	36.4%	34.5%
3. あまり重要でない	9.0%	7.9%	9.8%	8.4%	11.2%	10.9%	10.1%	7.9%	6.2%	4.8%	6.3%	10.1%	6.9%	10.9%	12.1%
4. 全く重要でない	2.1%	2.1%	2.1%	0.7%	5.2%	3.3%	1.8%	0.9%	0.9%	1.4%	0.9%	0.0%	1.5%	3.0%	2.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,959)	(1,257)	(1,702)	(418)	(347)	(551)	(553)	(214)	(468)	(146)	(112)	(89)	(1,580)	(1,014)	(339)

問18 a. 仕事の時間配分

教育	18時間	15時間	20時間	20時間	20時間	15時間	8時間	24時間	23時間	20時間	18時間	18時間	12.5時間
学期中(中央値)	5時間	5時間	5時間	5時間	5時間	5.5時間	8時間	7.5時間	10時間	6時間	5時間	5時間	3時間
休暇中(中央値)	20時間	20時間	20時間	20時間	20時間	20時間	20時間	14時間	15時間	16時間	20時間	20時間	20時間
研究	30時間	30時間	30時間	30時間	30時間	25時間	30時間	20時間	20時間	30時間	30時間	30時間	28時間
社会	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	3時間	2時間	2時間	2時間	1時間	2時間
サービ	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	4時間	3時間	2時間	2時間	1時間	1時間
学期中(中央値)	4時間	5時間	4時間	4時間	4時間	4時間	5時間	3時間	4時間	5時間	5時間	4時間	3時間
休暇中(中央値)	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	3時間	3時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間
管理運営	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間
その他の学術活動	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間
学期中(中央値)	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間
休暇中(中央値)	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間
学位・資格の取得に費やす時間	11.8%	11.9%	11.7%	12.8%	13.7%	10.7%	11.8%	10.6%	10.1%	15.7%	12.5%	10.6%	11.8%
1. 2時間未満	5.8%	3.2%	7.5%	7.7%	7.8%	3.1%	6.0%	2.3%	6.4%	12.0%	5.0%	5.4%	6.3%
2. 2時間以上4時間未満	4.4%	2.8%	5.6%	7.2%	8.4%	2.3%	3.7%	2.5%	4.6%	3.7%	10.0%	3.6%	5.0%
3. 4時間以上8時間未満	4.6%	3.5%	5.3%	6.6%	9.0%	1.9%	3.7%	1.7%	4.6%	9.3%	7.5%	3.6%	4.6%
4. 8時間以上12時間未満	3.4%	2.8%	3.9%	6.1%	4.4%	1.4%	3.3%	2.5%	5.5%	2.8%	6.3%	3.0%	4.2%
5. 12時間以上16時間未満	1.7%	0.8%	2.4%	2.6%	0.9%	1.2%	1.5%	1.1%	1.8%	0.9%	6.3%	1.6%	2.5%
6. 16時間以上20時間未満	4.4%	2.9%	5.4%	5.6%	5.9%	2.7%	5.8%	3.5%	0.0%	5.6%	6.3%	3.0%	6.0%
7. 20時間以上	63.9%	72.2%	58.3%	51.4%	49.8%	76.7%	64.4%	73.6%	67.0%	50.0%	46.3%	69.3%	60.4%
8. 学位取得を考えてない	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	(2,607)	(1,051)	(1,556)	(391)	(321)	(484)	(519)	(367)	(109)	(108)	(80)	(1,343)	(931)
	(314)												

問19. あなたの総額収入

1. 6.5万円未満	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.5%	0.2%	0.8%	0.0%	0.2%	0.1%
2. 6.5万円～130万円未満	0.1%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	0.3%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.1%
3. 130万円～325万円未満	0.4%	0.2%	0.6%	0.0%	1.0%	0.5%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.8%
4. 325万円～520万円未満	2.6%	2.0%	3.1%	3.1%	3.3%	2.9%	1.7%	3.6%	0.6%	6.4%	5.3%	0.3%	3.7%
5. 520万円～715万円未満	13.3%	11.8%	14.3%	16.9%	14.5%	15.7%	12.5%	16.2%	6.3%	5.9%	16.8%	18.9%	4.0%
6. 715万円～910万円未満	23.9%	24.4%	23.6%	26.7%	20.8%	28.8%	21.4%	27.0%	16.1%	27.6%	23.2%	11.7%	21.3%
7. 910万円～1,105万円未満	27.8%	27.4%	28.1%	20.0%	25.0%	29.1%	34.2%	25.1%	35.9%	28.0%	24.2%	34.4%	27.4%
8. 1,105万円～1,300万円未満	20.6%	22.8%	19.1%	21.1%	19.8%	18.8%	21.1%	18.9%	25.3%	20.6%	11.2%	20.0%	32.2%
9. 1,300万円～1,500万円未満	6.0%	5.9%	6.1%	8.3%	7.5%	2.0%	4.9%	2.7%	12.3%	4.1%	4.0%	6.3%	9.1%
10. 1,500万円以上	5.0%	5.3%	4.8%	3.9%	8.3%	1.9%	3.4%	1.4%	13.4%	2.9%	3.2%	2.1%	7.6%
合計	(3,338)	(1,362)	(1,976)	(484)	(400)	(645)	(655)	(222)	(479)	(170)	(125)	(95)	(1,148)
	(368)												

	全体	研究大学の他の大学										助教授	講師
		学	学	学	学	学	学	学	学	学	学		
問20. 総収入の構成割合 (中央値)													
a) 大学	95%	95%	93%	90%	99%	97%	99%	80%	90%	95%	95%	96%	93%
b) 大学外の学術活動	2%	3%	1%	5%	0%	0%	1%	5%	5%	5%	3%	1%	1%
c) 学術活動以外	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%
問21 a. 給与の評価													
1. 大変よい	1.3%	0.4%	1.8%	2.2%	0.6%	1.7%	0.4%	0.6%	1.7%	1.6%	1.9%	0.8%	0.0%
2. よい	9.2%	6.8%	10.8%	12.3%	8.8%	8.2%	7.0%	7.5%	12.8%	4.8%	11.6%	6.3%	6.2%
3. 普通	44.1%	40.1%	46.9%	45.2%	43.0%	45.1%	43.7%	33.0%	50.6%	50.8%	46.9%	40.4%	41.6%
4. よくない	44.0%	51.5%	38.8%	37.9%	46.9%	43.4%	47.2%	57.5%	31.4%	40.5%	38.2%	51.0%	50.3%
5. わからない	1.5%	1.2%	1.7%	0.7%	0.8%	1.7%	1.5%	3.5%	2.4%	1.0%	1.4%	1.5%	1.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,376)	(1,373)	(2,003)	(488)	(651)	(661)	(482)	(172)	(126)	(98)	(1,823)	(1,155)	(370)
問21 b. 給与の改善見通し													
1. 極めて高い	1.2%	1.4%	1.1%	1.2%	0.9%	2.1%	1.3%	0.6%	0.0%	1.6%	0.9%	1.6%	1.6%
2. 高い	6.4%	5.0%	7.4%	6.6%	6.5%	6.5%	6.6%	4.8%	6.5%	8.7%	5.5%	7.3%	8.2%
3. 高くも低くもない	31.6%	26.0%	35.4%	33.9%	27.2%	32.2%	26.4%	25.3%	40.6%	35.4%	32.5%	30.8%	29.3%
4. 低い	46.3%	56.3%	39.5%	45.8%	51.9%	44.3%	50.7%	57.2%	27.6%	42.5%	46.6%	45.7%	46.7%
5. わからない	14.5%	11.3%	16.7%	11.4%	13.5%	14.9%	15.0%	12.1%	25.3%	11.8%	14.5%	14.6%	14.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,356)	(1,359)	(1,997)	(483)	(644)	(659)	(479)	(170)	(127)	(98)	(1,806)	(1,154)	(368)
問22. 大学の待遇の評価													
a) 退職関連の処遇													
1. 大変よい	0.8%	1.0%	0.7%	2.0%	1.0%	1.1%	0.0%	0.4%	0.0%	0.8%	0.9%	0.8%	0.6%
2. よい	7.8%	7.2%	8.1%	9.5%	7.8%	7.0%	7.3%	5.9%	7.4%	7.3%	7.9%	7.3%	7.9%
3. 普通	55.7%	51.5%	58.5%	54.6%	55.4%	58.8%	56.8%	48.3%	62.3%	58.1%	56.6%	55.2%	53.9%
4. よくない	28.1%	31.3%	25.8%	28.2%	27.8%	25.3%	26.8%	36.9%	27.2%	25.0%	27.6%	28.9%	28.1%
5. 該当しない	7.7%	9.0%	6.8%	6.1%	8.1%	7.9%	9.1%	8.5%	3.1%	8.9%	7.0%	7.8%	9.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,281)	(1,327)	(1,954)	(394)	(630)	(645)	(472)	(162)	(124)	(93)	(1,777)	(1,119)	(356)
b) 有給の研究休暇													
1. 大変よい	1.4%	1.0%	1.6%	1.3%	1.4%	1.5%	0.4%	0.8%	0.0%	2.4%	1.4%	1.5%	0.8%
2. よい	7.8%	4.5%	10.1%	8.8%	5.8%	7.1%	4.9%	9.6%	9.3%	10.5%	7.1%	8.4%	9.2%
3. 普通	23.0%	12.7%	30.0%	19.9%	16.8%	27.5%	15.2%	18.7%	34.6%	33.1%	24.2%	21.5%	21.9%
4. よくない	42.5%	50.6%	37.0%	40.8%	44.6%	37.9%	45.1%	49.5%	32.1%	34.7%	39.3%	45.1%	51.4%
5. 該当しない	25.3%	31.1%	21.3%	20.4%	31.4%	26.1%	34.4%	21.4%	24.1%	19.4%	28.0%	23.6%	16.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,308)	(1,343)	(1,965)	(485)	(624)	(652)	(477)	(162)	(124)	(97)	(1,784)	(1,136)	(360)
c) 教育研究のための旅費													
1. 大変よい	0.6%	0.2%	0.8%	1.7%	0.5%	0.5%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.5%	0.7%	0.5%
2. よい	5.4%	1.8%	7.8%	10.6%	4.3%	4.5%	0.4%	3.3%	5.8%	9.5%	5.7%	4.2%	7.7%

3. 普通	22.4%	8.9%	31.7%	29.0%	26.1%	21.7%	23.3%	9.3%	14.0%	32.7%	21.4%	28.9%	25.4%	18.2%	20.8%
4. よくない	70.3%	88.4%	57.7%	58.8%	66.5%	72.8%	71.0%	89.4%	81.6%	45.5%	68.3%	62.9%	67.1%	75.5%	69.9%
5. 該当しない	1.4%	0.6%	1.9%	0.0%	0.5%	0.8%	0.8%	0.9%	0.8%	16.0%	0.8%	0.0%	1.3%	1.4%	1.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,345)	(1,367)	(1,978)	(483)	(403)	(646)	(662)	(226)	(479)	(156)	(126)	(97)	(1,802)	(1,149)	(366)
d) その他の福利厚生															
1. 大変よい	0.9%	1.1%	0.8%	0.8%	1.2%	1.6%	0.9%	0.0%	0.6%	0.6%	0.8%	1.1%	0.7%	1.0%	1.9%
2. よい	9.6%	10.0%	9.4%	11.2%	13.9%	8.5%	8.5%	5.4%	9.2%	8.1%	12.9%	11.6%	9.5%	9.3%	11.5%
3. 普通	59.4%	55.4%	62.2%	64.7%	57.3%	59.3%	61.8%	60.3%	54.5%	61.5%	56.5%	55.8%	62.5%	55.9%	55.7%
4. よくない	29.0%	32.6%	26.6%	22.9%	26.8%	29.7%	28.2%	32.1%	34.7%	27.3%	28.2%	31.6%	26.1%	33.2%	29.8%
5. 該当しない	1.0%	1.0%	1.0%	0.4%	0.7%	0.9%	0.6%	2.2%	1.0%	2.5%	1.6%	0.0%	1.1%	0.7%	1.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,331)	(1,356)	(1,975)	(481)	(403)	(639)	(659)	(224)	(479)	(161)	(124)	(95)	(1,792)	(1,145)	(366)
問23. 大学の教育・研究の環境の評価															
a) 知的雰囲気															
1. 大変よい	5.6%	9.7%	2.8%	2.9%	9.5%	4.6%	5.8%	5.8%	6.4%	9.2%	2.4%	4.2%	5.8%	5.3%	5.9%
2. よい	27.5%	37.5%	20.5%	30.2%	31.8%	23.5%	24.9%	22.6%	30.1%	34.1%	28.6%	25.3%	28.9%	24.0%	31.7%
3. 普通	46.0%	38.5%	51.2%	46.7%	40.3%	46.5%	48.9%	45.6%	44.4%	46.8%	49.2%	45.3%	46.2%	47.0%	41.1%
4. よくない	20.8%	14.1%	25.4%	20.0%	18.5%	25.2%	20.3%	25.7%	19.1%	9.8%	19.8%	25.3%	19.0%	23.7%	21.0%
5. 該当しない	0.1%	0.1%	0.1%	0.2%	0.0%	0.2%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,360)	(1,369)	(1,991)	(486)	(400)	(647)	(659)	(226)	(482)	(173)	(126)	(95)	(1,808)	(1,152)	(372)
b) 教員と管理者との関係															
1. 大変よい	2.7%	3.3%	2.3%	2.5%	4.3%	2.6%	2.6%	1.3%	1.5%	4.7%	2.4%	4.2%	2.8%	2.4%	3.0%
2. よい	20.8%	23.0%	19.3%	22.8%	26.6%	16.3%	18.0%	18.2%	24.6%	26.9%	16.5%	17.9%	23.1%	17.6%	19.3%
3. 普通	55.7%	52.5%	57.8%	58.8%	51.0%	55.9%	56.6%	59.1%	50.4%	52.0%	61.4%	61.1%	56.4%	55.6%	52.2%
4. よくない	19.2%	18.2%	19.8%	14.5%	17.1%	22.0%	20.8%	19.6%	22.3%	16.4%	19.7%	15.8%	16.3%	22.2%	24.7%
5. 該当しない	1.6%	3.0%	0.7%	1.4%	1.0%	3.1%	2.0%	1.8%	1.3%	0.0%	0.0%	1.1%	1.4%	2.3%	0.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,344)	(1,363)	(1,981)	(483)	(398)	(644)	(654)	(225)	(480)	(171)	(127)	(95)	(1,802)	(1,146)	(368)
c) 教員の意欲・やる気															
1. 大変よい	4.6%	7.6%	2.5%	3.3%	6.8%	4.7%	6.1%	4.9%	3.3%	4.6%	1.6%	2.1%	5.2%	4.0%	3.5%
2. よい	29.2%	36.2%	24.4%	30.8%	30.6%	27.2%	28.6%	25.4%	30.1%	38.2%	26.0%	22.3%	30.5%	27.7%	26.6%
3. 普通	48.7%	43.7%	52.1%	50.4%	44.9%	48.8%	49.7%	48.2%	45.5%	45.7%	55.9%	59.6%	48.0%	48.6%	51.9%
4. よくない	17.4%	12.4%	20.8%	15.2%	17.8%	19.1%	15.3%	21.0%	21.1%	11.6%	15.7%	16.0%	16.1%	19.5%	18.0%
5. 該当しない	0.2%	0.1%	0.2%	0.2%	0.0%	0.2%	0.3%	0.4%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,344)	(1,363)	(1,981)	(480)	(399)	(643)	(658)	(224)	(479)	(173)	(127)	(94)	(1,805)	(1,139)	(372)

	全体	研究大	その他	人文科	社会科学	理学系	工学系	農学系	医歯学	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師
	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学
d) 教育・研究目標の明確さ															
1. 大変よい	4.4%	6.6%	2.9%	3.8%	2.3%	3.6%	5.7%	4.9%	3.3%	7.7%	2.4%	1.1%	5.2%	3.2%	4.3%
2. よい	23.3%	26.8%	20.9%	21.9%	19.7%	20.3%	21.7%	20.1%	24.1%	34.9%	27.0%	28.0%	25.0%	21.5%	20.9%
3. 普通	48.1%	45.9%	49.6%	51.6%	47.2%	47.7%	48.3%	45.5%	48.5%	45.6%	46.8%	46.2%	49.5%	46.2%	46.3%
4. よくない	23.8%	20.2%	26.2%	22.3%	29.0%	27.5%	24.0%	29.5%	24.1%	11.8%	22.2%	23.7%	19.9%	28.7%	28.2%
5. 該当しない	0.4%	0.4%	0.4%	0.4%	1.8%	0.9%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	1.6%	1.1%	0.4%	0.4%	0.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,338)	(1,360)	(1,978)	(479)	(396)	(644)	(654)	(224)	(482)	(169)	(126)	(93)	(1,799)	(1,142)	(369)
e) 共同体としてのまとまり															
1. 大変よい	3.1%	3.9%	2.5%	4.0%	5.6%	2.3%	3.4%	1.3%	2.1%	4.7%	0.8%	0.0%	2.9%	3.3%	3.2%
2. よい	21.2%	20.0%	22.1%	21.8%	26.0%	17.8%	19.2%	16.8%	21.0%	33.1%	21.0%	24.5%	23.7%	18.3%	18.3%
3. 普通	47.5%	43.9%	50.0%	51.9%	44.0%	48.7%	47.1%	44.2%	47.9%	47.9%	43.5%	47.9%	49.3%	45.8%	44.2%
4. よくない	27.8%	31.8%	25.1%	22.1%	23.7%	30.8%	30.0%	37.6%	28.6%	14.2%	33.9%	27.7%	23.7%	32.4%	34.2%
5. 該当しない	0.3%	0.4%	0.3%	0.2%	0.8%	0.3%	0.3%	0.0%	0.4%	0.0%	0.8%	0.0%	0.5%	0.3%	0.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,315)	(1,352)	(1,963)	(476)	(393)	(639)	(646)	(226)	(482)	(169)	(124)	(94)	(1,774)	(1,143)	(371)
問24. 施設、設備、人員の状況															
a) 教室															
1. 大変よい	2.5%	3.2%	2.0%	2.3%	2.3%	1.9%	1.8%	3.6%	4.2%	3.5%	0.8%	3.1%	2.7%	2.3%	2.2%
2. よい	15.8%	18.3%	14.1%	18.6%	17.3%	13.9%	14.6%	12.4%	18.5%	16.2%	11.9%	16.7%	16.4%	14.5%	15.7%
3. 普通	45.2%	41.3%	47.8%	45.6%	46.1%	41.5%	46.5%	43.6%	42.6%	55.5%	49.2%	45.8%	46.5%	42.8%	46.2%
4. よくない	36.0%	36.0%	35.9%	33.2%	34.3%	42.0%	36.3%	40.4%	33.7%	24.3%	38.1%	33.3%	34.0%	39.6%	35.7%
5. 該当しない	0.6%	1.1%	0.2%	0.4%	0.0%	0.8%	0.8%	0.0%	1.0%	0.6%	0.0%	1.0%	0.5%	0.8%	0.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,351)	(1,362)	(1,989)	(485)	(393)	(641)	(658)	(225)	(481)	(173)	(126)	(96)	(1,804)	(1,149)	(370)
b) 教育用機器															
1. 大変よい	1.6%	2.1%	1.2%	1.7%	2.3%	1.3%	0.8%	1.3%	1.7%	4.2%	0.8%	2.1%	1.5%	1.6%	1.6%
2. よい	15.2%	17.0%	13.9%	18.4%	19.7%	10.9%	13.4%	11.1%	15.6%	19.9%	15.9%	20.2%	15.0%	14.7%	16.8%
3. 普通	45.4%	42.2%	47.5%	49.2%	47.2%	44.5%	43.0%	36.9%	45.9%	51.2%	46.8%	46.8%	46.9%	43.8%	43.5%
4. よくない	36.5%	36.8%	36.3%	28.5%	29.0%	41.4%	41.8%	50.2%	35.9%	22.9%	36.5%	30.9%	35.2%	38.4%	37.5%
5. 該当しない	1.4%	1.9%	1.0%	2.3%	1.8%	1.9%	1.1%	0.4%	1.0%	1.8%	0.0%	0.0%	1.4%	1.6%	0.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,332)	(1,359)	(1,973)	(478)	(396)	(640)	(658)	(225)	(482)	(166)	(126)	(94)	(1,795)	(1,142)	(368)
c) 実験室															
1. 大変よい	1.1%	1.4%	0.8%	0.2%	0.3%	1.4%	0.6%	1.3%	1.9%	2.9%	0.8%	0.0%	0.9%	1.2%	1.4%
2. よい	9.7%	10.6%	9.1%	7.1%	7.8%	8.4%	10.6%	8.4%	14.9%	13.6%	5.6%	12.2%	10.4%	8.5%	10.0%
3. 普通	30.8%	29.8%	31.6%	24.4%	29.9%	29.9%	33.0%	37.3%	36.3%	17.1%	29.4%	35.6%	32.9%	27.7%	31.6%
4. よくない	40.7%	44.4%	38.0%	15.3%	24.7%	48.7%	53.2%	50.7%	45.3%	19.3%	58.7%	26.7%	38.8%	43.1%	41.6%
5. 該当しない	17.7%	13.8%	20.5%	53.0%	37.4%	11.7%	2.6%	2.2%	1.7%	47.1%	5.6%	25.6%	16.9%	19.6%	15.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

d) 研究用設備・器具	(3,175)(1,323)(1,852)(406)(361)(633)(654)(225)(477)(140)(126)(90)(1,700)(1,099)(351)
1. 大変よい	1.8% 2.7% 1.2% 0.9% 1.6% 2.7% 1.1% 2.2% 1.5% 5.8% 0.8% 1.1% 1.5% 2.4% 1.9%
2. よい	13.0% 15.3% 11.5% 13.7% 15.4% 12.4% 9.9% 8.0% 16.2% 20.0% 10.3% 16.0% 13.3% 12.0% 15.4%
3. 普通	37.5% 37.2% 37.8% 47.0% 48.3% 30.8% 31.9% 29.3% 40.7% 40.0% 34.1% 39.4% 39.8% 34.6% 35.8%
4. よくない	43.7% 42.5% 44.5% 28.6% 27.9% 49.7% 56.3% 60.4% 40.7% 28.4% 53.2% 38.3% 41.3% 47.5% 43.0%
5. 該当しない	3.9% 2.4% 4.9% 9.8% 6.8% 4.4% 0.9% 0.0% 0.8% 5.8% 1.6% 5.3% 4.1% 3.6% 3.9%
合計	100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0%
e) コンピュータ機器	(3,273)(1,349)(1,924)(451)(383)(636)(656)(225)(481)(155)(126)(94)(1,760)(1,125)(363)
1. 大変よい	3.6% 4.1% 3.2% 4.2% 5.4% 2.7% 2.9% 1.8% 3.5% 8.1% 2.4% 2.2% 3.3% 4.1% 3.3%
2. よい	21.1% 22.9% 19.7% 16.0% 26.9% 21.2% 22.0% 14.7% 22.9% 17.4% 23.2% 21.7% 21.2% 20.9% 20.9%
3. 普通	50.4% 51.8% 49.5% 45.7% 45.6% 53.8% 54.5% 55.1% 53.4% 31.5% 54.4% 50.0% 52.1% 47.1% 52.3%
4. よくない	19.9% 18.7% 20.8% 18.8% 15.6% 21.2% 20.3% 27.6% 19.8% 14.8% 18.4% 20.7% 18.1% 22.4% 21.5%
5. 該当しない	5.0% 2.4% 6.8% 15.3% 6.4% 1.1% 0.3% 0.9% 0.4% 28.2% 1.6% 5.4% 5.4% 5.4% 1.9%
合計	100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0%
f) 図書館	(3,271)(1,352)(1,919)(451)(390)(636)(655)(225)(481)(149)(125)(92)(1,755)(1,127)(363)
1. 大変よい	6.5% 5.3% 7.3% 6.2% 4.8% 3.1% 2.1% 4.4% 5.8% 49.4% 1.6% 2.1% 6.3% 6.8% 6.5%
2. よい	25.4% 30.9% 21.6% 23.6% 25.1% 23.5% 25.8% 27.4% 29.6% 26.5% 26.0% 22.1% 24.2% 25.2% 31.9%
3. 普通	43.4% 39.0% 46.3% 43.5% 36.1% 41.7% 50.2% 54.0% 44.7% 15.9% 45.7% 48.4% 46.2% 39.9% 39.2%
4. よくない	24.6% 24.7% 24.5% 26.3% 34.1% 31.3% 21.5% 14.2% 19.8% 8.2% 25.2% 27.4% 22.9% 27.9% 22.4%
5. 該当しない	0.2% 0.1% 0.3% 0.4% 0.0% 0.3% 0.3% 0.0% 0.0% 0.0% 1.6% 0.0% 0.3% 0.3% 0.0%
合計	100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0%
g) 研究室	(3,347)(1,362)(1,985)(483)(399)(642)(659)(226)(479)(170)(127)(95)(1,800)(1,149)(370)
1. 大変よい	2.3% 2.2% 2.3% 3.9% 3.0% 1.7% 1.1% 1.8% 1.7% 3.1% 0.8% 4.2% 2.6% 1.9% 1.9%
2. よい	16.4% 17.5% 15.6% 20.7% 26.6% 15.3% 12.8% 11.1% 15.6% 16.1% 9.4% 16.7% 16.8% 15.6% 17.3%
3. 普通	42.7% 41.2% 43.7% 44.2% 46.2% 42.3% 41.7% 41.2% 41.4% 36.6% 44.9% 44.8% 43.4% 41.0% 43.9%
4. よくない	37.9% 38.7% 37.4% 31.0% 24.1% 39.8% 44.1% 45.1% 41.0% 37.3% 44.9% 34.4% 36.6% 40.8% 36.0%
5. 該当しない	0.7% 0.4% 0.9% 0.2% 0.0% 0.8% 0.3% 0.9% 0.4% 6.8% 0.0% 0.0% 0.7% 0.7% 0.8%
合計	100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0%
h) 事務的援助	(3,336)(1,363)(1,973)(484)(398)(640)(657)(226)(481)(161)(127)(96)(1,794)(1,147)(369)
1. 大変よい	1.8% 2.2% 1.5% 3.1% 3.0% 1.1% 0.5% 0.4% 1.7% 3.6% 0.0% 4.2% 1.8% 1.6% 2.2%
2. よい	9.7% 9.7% 9.8% 14.3% 12.3% 9.6% 6.7% 5.8% 6.4% 18.3% 7.1% 11.6% 9.4% 9.7% 11.6%
3. 普通	38.0% 32.3% 41.9% 43.5% 37.3% 32.7% 38.3% 35.0% 33.5% 43.8% 51.2% 47.4% 39.4% 36.2% 36.1%
4. よくない	49.6% 55.2% 45.7% 38.1% 46.4% 56.1% 53.8% 58.4% 57.4% 30.8% 40.9% 36.8% 48.8% 51.2% 49.6%
5. 該当しない	0.9% 0.6% 1.1% 1.0% 1.0% 0.5% 0.8% 0.4% 1.0% 3.6% 0.8% 0.0% 0.7% 1.4% 0.5%
合計	100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0% 100.0%
	(3,348)(1,367)(1,981)(483)(399)(643)(658)(226)(481)(169)(127)(95)(1,801)(1,149)(371)

問25. 学生の学力の評価	研究大学の他の大学											講師			
	全体	工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系	教授	助教授	講師					
1. 大変よい	2.3%	5.0%	0.4%	1.2%	2.2%	2.1%	2.4%	1.8%	4.2%	2.3%	1.6%	1.1%	1.7%	2.7%	3.3%
2. よい	17.7%	28.9%	10.0%	18.0%	20.7%	16.3%	14.3%	13.9%	22.0%	26.2%	8.7%	15.8%	18.1%	16.6%	18.5%
3. 普通	51.9%	46.7%	55.4%	55.2%	50.9%	48.8%	49.1%	52.9%	52.1%	57.6%	56.3%	61.1%	52.0%	51.4%	52.4%
4. よくない	26.9%	17.8%	33.1%	24.7%	25.7%	31.3%	32.9%	30.5%	20.1%	11.6%	30.2%	22.1%	27.0%	28.1%	23.6%
5. わからない	1.2%	1.5%	1.1%	0.8%	0.5%	1.6%	1.2%	0.9%	1.5%	2.3%	3.2%	0.0%	1.1%	1.1%	2.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,326)	(1,351)	(1,975)	(482)	(401)	(633)	(656)	(223)	(472)	(172)	(126)	(95)	(1,799)	(1,131)	(368)
問26. 5年前と比べて現在の質															
1. 良くなった	4.6%	1.7%	6.6%	6.3%	6.8%	1.7%	2.8%	1.3%	5.7%	13.0%	7.1%	3.2%	5.0%	4.0%	4.6%
2. ↑	8.6%	4.9%	11.1%	11.7%	10.9%	4.6%	8.9%	3.1%	9.1%	13.6%	5.6%	9.5%	9.8%	6.8%	8.7%
3. ほぼ同じ	39.7%	42.6%	37.7%	36.8%	40.8%	39.4%	39.6%	40.4%	45.2%	39.6%	31.0%	36.8%	41.0%	37.6%	38.0%
4. ↓	21.0%	23.4%	19.3%	19.2%	17.0%	25.3%	23.3%	24.7%	15.9%	14.2%	27.8%	22.1%	20.6%	22.5%	18.6%
5. 悪くなった	19.7%	21.0%	18.8%	17.8%	17.0%	22.3%	20.1%	25.1%	18.5%	16.6%	16.7%	20.0%	18.7%	22.0%	18.0%
6. わからない	6.5%	6.5%	6.4%	8.2%	7.6%	6.6%	5.4%	5.4%	5.5%	3.0%	11.9%	8.4%	4.8%	7.1%	12.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,306)	(1,331)	(1,975)	(478)	(395)	(632)	(652)	(223)	(471)	(169)	(126)	(95)	(1,788)	(1,124)	(366)
問27. あなたの満足度															
a) 担当する授業															
1. 大変満足	9.1%	8.6%	9.4%	8.3%	13.8%	6.8%	8.3%	9.7%	7.5%	15.2%	9.4%	9.4%	11.0%	7.8%	4.1%
2. ↑	44.8%	44.0%	45.4%	46.8%	50.9%	42.4%	45.7%	44.5%	36.5%	52.0%	47.2%	46.9%	48.2%	42.7%	35.3%
3. どちらでもない	33.6%	35.0%	32.6%	34.5%	25.3%	34.5%	34.4%	33.0%	40.7%	25.1%	33.1%	35.4%	31.8%	33.1%	42.9%
4. ↓	9.3%	8.1%	10.1%	7.9%	8.8%	12.3%	8.6%	11.5%	9.6%	5.3%	8.7%	2.1%	7.0%	12.4%	11.4%
5. 大変不満足	2.1%	2.4%	2.0%	2.5%	1.0%	2.4%	1.8%	0.9%	3.1%	1.8%	1.6%	5.2%	1.3%	2.6%	4.6%
6. 該当しない	1.1%	2.0%	0.5%	0.0%	0.3%	1.7%	1.2%	0.4%	2.5%	0.6%	0.0%	1.0%	0.7%	1.4%	1.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,336)	(1,354)	(1,982)	(481)	(399)	(635)	(654)	(227)	(479)	(171)	(127)	(96)	(1,797)	(1,143)	(368)
b) 同僚との関係															
1. 大変満足	8.4%	7.7%	8.8%	10.4%	11.9%	6.4%	8.7%	4.4%	6.5%	10.5%	8.7%	9.5%	9.6%	6.8%	7.0%
2. ↑	41.6%	42.3%	41.1%	47.1%	45.5%	40.7%	36.1%	38.9%	42.8%	43.3%	43.7%	34.7%	44.2%	37.8%	40.9%
3. どちらでもない	37.8%	37.0%	38.3%	33.0%	32.1%	39.7%	43.7%	42.5%	35.5%	38.0%	35.7%	33.7%	36.7%	39.8%	36.6%
4. ↓	7.5%	7.2%	7.7%	6.0%	6.6%	7.4%	6.5%	9.3%	10.2%	5.8%	9.5%	11.6%	5.8%	9.1%	11.4%
5. 大変不満足	4.4%	5.5%	3.6%	3.3%	3.5%	5.5%	4.4%	4.9%	4.8%	2.3%	2.4%	10.5%	3.4%	6.2%	4.1%
6. 該当しない	0.3%	0.2%	0.4%	0.2%	0.5%	0.3%	0.6%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.3%	0.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,337)	(1,358)	(1,979)	(482)	(396)	(639)	(657)	(226)	(479)	(171)	(126)	(95)	(1,798)	(1,142)	(369)
c) 仕事の安定性															
1. 大変満足	13.6%	14.0%	13.3%	16.5%	20.9%	10.0%	13.2%	15.5%	9.0%	18.1%	8.7%	10.4%	17.0%	10.6%	6.0%
2. ↑	49.3%	50.0%	48.8%	53.3%	51.8%	49.0%	47.4%	50.9%	43.7%	50.3%	50.8%	54.2%	51.5%	47.2%	46.2%
3. どちらでもない	29.7%	28.1%	30.8%	25.8%	23.4%	32.8%	33.4%	26.1%	32.2%	26.3%	34.9%	27.1%	26.5%	33.7%	33.2%

4.	↓	4.4%	4.7%	4.3%	2.3%	1.5%	5.4%	3.1%	4.4%	9.6%	3.5%	5.6%	6.3%	2.2%	5.9%	10.9%
5.	大変不満足	1.8%	2.2%	1.6%	1.0%	1.3%	1.6%	1.1%	2.7%	4.6%	1.2%	0.0%	2.1%	1.0%	2.4%	3.8%
6.	該当しない	1.1%	1.0%	1.2%	1.0%	1.3%	1.1%	1.8%	0.4%	0.8%	0.6%	0.0%	0.0%	1.7%	0.3%	0.0%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,319)	(1,347)	(1,972)	(480)	(398)	(628)	(650)	(226)	(478)	(171)	(126)	(96)	(1,782)	(1,142)	(368)
d)	昇進の見通し															
1.	大變満足	4.5%	3.9%	4.9%	7.2%	9.8%	3.4%	2.8%	2.3%	2.7%	2.5%	4.9%	6.7%	5.3%	4.1%	2.2%
2.	↑	20.1%	18.2%	21.4%	27.3%	23.7%	16.3%	19.7%	17.1%	15.1%	23.5%	21.1%	23.6%	16.2%	25.9%	20.2%
3.	どちらでもない	38.3%	35.6%	40.1%	34.5%	35.6%	40.0%	40.0%	40.5%	41.6%	38.9%	43.9%	40.4%	34.9%	42.2%	42.6%
4.	↓	8.6%	9.7%	7.9%	7.9%	4.1%	10.6%	8.3%	9.5%	10.7%	9.9%	8.1%	7.9%	2.7%	14.7%	18.3%
5.	大變不満足	6.4%	8.9%	4.7%	1.7%	3.1%	8.1%	6.9%	5.0%	11.6%	6.8%	7.3%	7.9%	1.6%	11.4%	13.7%
6.	該当しない	22.0%	23.6%	20.9%	21.3%	23.7%	25.7%	22.3%	25.7%	18.3%	18.5%	14.6%	13.5%	39.4%	1.7%	3.0%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,249)	(1,320)	(1,929)	(469)	(388)	(615)	(640)	(222)	(476)	(162)	(123)	(89)	(1,715)	(1,142)	(366)
e)	教育・研究活動の自由															
1.	大變満足	21.6%	24.2%	19.8%	22.8%	30.9%	21.9%	20.7%	23.6%	17.1%	22.2%	11.1%	17.7%	24.3%	19.4%	14.2%
2.	↑	48.2%	48.2%	48.2%	50.7%	48.4%	46.4%	50.7%	47.6%	43.3%	47.3%	56.3%	44.8%	50.6%	47.4%	40.6%
3.	どちらでもない	20.2%	17.7%	22.0%	17.1%	14.7%	21.6%	20.5%	21.8%	22.7%	19.2%	20.6%	29.2%	18.2%	21.4%	25.9%
4.	↓	7.0%	6.7%	7.3%	7.9%	4.8%	6.8%	6.1%	5.8%	9.8%	7.2%	8.7%	7.3%	5.3%	8.2%	12.3%
5.	大變不満足	2.6%	3.0%	2.4%	1.3%	1.0%	2.7%	1.7%	1.3%	6.9%	3.6%	3.2%	1.0%	1.3%	3.4%	6.8%
6.	該当しない	0.3%	0.2%	0.4%	0.2%	0.3%	0.6%	0.3%	0.0%	0.2%	0.6%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%	0.3%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,321)	(1,353)	(1,968)	(479)	(395)	(631)	(657)	(225)	(480)	(167)	(126)	(96)	(1,788)	(1,140)	(367)
f)	大学の運営方針															
1.	大變満足	3.0%	2.3%	3.5%	4.0%	4.5%	1.1%	2.7%	2.3%	2.5%	7.3%	1.6%	5.3%	3.7%	2.2%	1.9%
2.	↑	22.6%	21.2%	23.7%	25.6%	27.1%	18.9%	21.2%	27.0%	18.8%	27.9%	24.8%	23.4%	26.3%	19.5%	15.3%
3.	どちらでもない	43.4%	44.3%	42.8%	42.1%	40.7%	41.4%	47.0%	39.6%	45.4%	42.4%	44.8%	41.5%	43.6%	42.4%	45.1%
4.	↓	19.0%	19.5%	18.6%	18.9%	16.6%	23.2%	15.7%	21.2%	19.5%	16.4%	20.8%	18.1%	16.2%	21.8%	24.3%
5.	大變不満足	11.0%	11.7%	10.6%	8.8%	10.6%	14.3%	11.6%	8.1%	13.2%	6.1%	8.0%	10.6%	9.4%	13.0%	12.8%
6.	該当しない	0.9%	1.0%	0.8%	0.6%	0.5%	1.0%	1.7%	1.8%	0.6%	0.0%	0.0%	1.1%	0.8%	1.1%	0.5%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,307)	(1,347)	(1,960)	(477)	(398)	(628)	(655)	(222)	(478)	(165)	(125)	(94)	(1,779)	(1,136)	(366)
g)	仕事全般の満足度															
1.	大變満足	6.7%	6.7%	6.7%	6.2%	10.3%	4.7%	6.7%	8.4%	4.8%	12.5%	1.6%	8.3%	8.3%	5.4%	3.0%
2.	↑	45.8%	49.5%	43.2%	47.3%	51.9%	43.5%	46.6%	39.6%	43.6%	46.4%	24.8%	40.6%	48.4%	44.2%	38.6%
3.	どちらでもない	32.3%	28.4%	34.9%	34.9%	29.1%	31.9%	32.5%	37.3%	29.9%	29.8%	44.8%	35.4%	31.8%	32.0%	35.1%
4.	↓	11.9%	11.1%	12.4%	9.8%	7.0%	15.9%	11.3%	12.0%	14.2%	9.5%	20.8%	11.5%	9.3%	13.9%	18.2%
5.	大變不満足	3.2%	4.0%	2.6%	1.5%	1.5%	4.1%	2.4%	2.7%	7.1%	1.8%	8.0%	4.2%	2.0%	4.3%	5.2%
6.	該当しない	0.2%	0.2%	0.3%	0.4%	0.3%	0.0%	0.5%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%	0.0%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,331)	(1,357)	(1,974)	(482)	(399)	(637)	(655)	(225)	(479)	(168)	(125)	(96)	(1,793)	(1,144)	(368)

問28. 専門分野やキャリアに関する意見	全体											講師		
	研究大	その他の大学	人文科学系	社会科学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系		教授	助教授
a) 非常に創造的で生産的である														
1. 全くそう思う	24.2%	20.0%	12.7%	20.0%	27.4%	22.8%	20.3%	23.7%	24.9%	18.3%	20.0%	22.3%	21.8%	19.4%
2. ↑	41.3%	39.8%	36.8%	45.3%	42.1%	45.9%	44.9%	39.7%	33.1%	39.7%	31.6%	42.9%	40.5%	36.7%
3. どちらでもない	27.8%	31.1%	36.2%	26.3%	23.2%	25.5%	26.9%	27.0%	27.2%	35.7%	32.6%	26.7%	28.4%	31.0%
4. ↓	5.9%	5.9%	8.7%	5.5%	4.5%	4.6%	6.2%	5.8%	6.5%	4.0%	10.5%	4.8%	6.4%	8.4%
5. 全くそう思わない	2.2%	1.9%	4.0%	2.0%	2.2%	0.8%	0.9%	3.1%	0.6%	2.4%	5.3%	2.1%	2.1%	3.2%
6. 該当しない	1.1%	0.9%	1.7%	1.0%	0.6%	0.5%	0.9%	0.6%	7.7%	0.0%	0.0%	1.2%	0.9%	1.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,347)	(1,981)	(481)	(400)	(643)	(658)	(227)	(481)	(169)	(126)	(95)	(1,801)	(1,147)	(371)
b) 若い人に将来性はない														
1. 全くそう思う	2.0%	1.4%	2.5%	1.3%	1.7%	1.7%	0.9%	2.9%	4.8%	1.6%	2.2%	1.9%	2.1%	2.4%
2. ↑	10.4%	10.3%	12.1%	11.5%	8.3%	9.9%	10.6%	7.9%	11.4%	12.6%	18.3%	12.6%	8.2%	6.8%
3. どちらでもない	24.7%	22.7%	33.3%	21.0%	21.3%	22.1%	23.5%	21.4%	36.7%	30.7%	29.0%	24.5%	24.1%	28.1%
4. ↓	26.9%	29.1%	25.5%	29.5%	28.3%	28.5%	29.6%	25.8%	19.3%	32.3%	25.8%	26.4%	27.4%	27.6%
5. 全くそう思わない	34.2%	35.1%	33.6%	35.8%	38.9%	36.3%	34.5%	41.0%	21.7%	22.8%	24.7%	32.8%	37.2%	31.9%
6. 該当しない	1.7%	1.4%	1.9%	1.0%	1.4%	1.5%	0.9%	1.0%	6.0%	0.0%	0.0%	1.8%	1.0%	3.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,335)	(1,359)	(1,976)	(400)	(642)	(656)	(226)	(481)	(166)	(127)	(93)	(1,790)	(1,147)	(370)
c) 大学教員にはなりたくない														
1. 全くそう思う	6.5%	7.1%	6.2%	4.2%	4.4%	5.0%	8.4%	11.7%	10.1%	4.8%	8.8%	6.3%	6.3%	8.4%
2. ↑	9.2%	9.5%	9.1%	9.4%	8.1%	10.9%	11.6%	8.6%	10.7%	7.9%	12.1%	8.9%	8.6%	12.7%
3. どちらでもない	28.3%	28.4%	28.3%	23.4%	28.6%	29.1%	25.3%	33.4%	37.3%	27.8%	22.0%	27.9%	29.3%	27.8%
4. ↓	22.8%	23.6%	22.3%	22.1%	24.4%	23.5%	28.0%	18.2%	14.8%	27.8%	25.3%	21.8%	22.9%	26.8%
5. 全くそう思わない	30.6%	29.7%	31.3%	37.8%	33.3%	28.1%	25.3%	24.8%	23.7%	31.7%	30.8%	32.1%	30.9%	23.5%
6. 該当しない	2.4%	1.8%	2.9%	3.1%	2.2%	2.3%	1.3%	3.3%	3.6%	0.0%	1.1%	3.1%	2.0%	0.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,331)	(1,354)	(1,977)	(398)	(643)	(654)	(225)	(479)	(169)	(126)	(91)	(1,788)	(1,145)	(370)
d) 相当な心理的緊張がある														
1. 全くそう思う	22.0%	25.0%	20.0%	14.3%	18.2%	16.3%	18.9%	38.1%	49.1%	14.2%	15.1%	22.5%	20.1%	24.0%
2. ↑	33.7%	35.4%	32.6%	33.5%	33.9%	34.7%	35.7%	35.0%	32.0%	37.0%	35.5%	32.4%	35.8%	34.2%
3. どちらでもない	29.2%	24.6%	32.3%	33.3%	29.4%	33.5%	29.5%	20.4%	10.1%	34.6%	34.4%	30.0%	28.6%	28.3%
4. ↓	9.6%	9.2%	9.8%	12.3%	10.0%	11.6%	9.7%	4.2%	5.9%	8.7%	10.8%	9.4%	10.1%	8.9%
5. 全くそう思わない	4.6%	5.0%	4.3%	5.4%	3.0%	4.7%	5.3%	2.1%	3.0%	5.5%	4.3%	4.8%	4.4%	4.0%
6. 該当しない	0.9%	0.8%	1.0%	1.2%	1.5%	1.4%	0.9%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	1.0%	0.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,344)	(1,360)	(1,984)	(481)	(642)	(657)	(227)	(480)	(169)	(127)	(93)	(1,797)	(1,148)	(371)
問29. 5年以内に所属大学をやめる可能性														
1. 可能性は高い	19.8%	22.9%	17.7%	18.2%	20.9%	16.4%	19.8%	27.7%	12.4%	10.4%	19.8%	25.6%	11.2%	18.7%
2. ↑	5.9%	7.4%	4.8%	4.7%	6.6%	5.7%	2.3%	10.5%	4.1%	4.0%	4.2%	3.8%	8.3%	8.7%

3. どちらでもない	22.5%	22.9%	22.2%	23.0%	26.0%	23.6%	20.2%	18.0%	27.9%	14.8%	24.8%	16.7%	16.2%	28.3%	35.0%
4. ↓	5.9%	5.0%	6.5%	3.8%	5.3%	6.6%	7.1%	9.0%	4.6%	4.7%	7.2%	6.3%	5.7%	6.5%	5.7%
5. 可能性は低い	40.3%	36.0%	43.2%	43.3%	36.0%	36.0%	44.8%	46.8%	24.8%	59.8%	50.4%	46.9%	44.1%	38.7%	26.3%
6. わからない	5.6%	5.7%	5.5%	7.0%	4.6%	6.9%	6.4%	4.1%	4.4%	4.1%	3.2%	6.3%	4.7%	7.1%	5.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,298)	(1,329)	(1,969)	(473)	(393)	(636)	(645)	(222)	(476)	(169)	(125)	(96)	(1,756)	(1,147)	(369)	
問30. 大学教員を辞職する条件															
a) 収入															
1. 辞職するのに重要	21.0%	22.7%	19.9%	25.2%	22.7%	20.4%	19.3%	16.7%	20.8%	22.7%	18.7%	17.8%	21.1%	21.0%	20.2%
2. ↑	21.0%	21.4%	20.7%	24.7%	25.4%	20.4%	20.9%	22.2%	19.7%	10.4%	17.1%	21.1%	19.7%	22.7%	22.2%
3. どちらでもない	43.6%	45.2%	42.5%	34.8%	39.5%	44.8%	45.8%	44.9%	48.8%	44.8%	46.3%	47.8%	42.6%	44.1%	46.5%
4. ↓	3.9%	2.5%	4.9%	5.7%	3.2%	3.5%	4.4%	4.5%	1.6%	3.2%	8.1%	3.3%	4.6%	3.5%	
5. 残るのに重要	4.0%	2.6%	5.0%	4.1%	2.2%	4.0%	3.4%	3.5%	4.4%	9.1%	3.3%	5.6%	4.2%	3.7%	
6. わからない	6.4%	5.6%	7.0%	5.5%	7.0%	7.0%	6.2%	8.1%	4.7%	6.5%	4.4%	7.8%	5.0%	4.4%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,042)	(1,233)	(1,809)	(437)	(370)	(574)	(585)	(198)	(451)	(154)	(123)	(90)	(1,557)	(1,098)	(361)	
b) 研究条件															
1. 辞職するのに重要	41.7%	46.6%	38.5%	43.6%	44.5%	49.0%	40.3%	41.6%	38.3%	33.6%	32.3%	28.4%	39.0%	45.8%	41.7%
2. ↑	19.9%	20.1%	19.7%	21.6%	21.3%	18.0%	21.8%	21.8%	19.2%	14.8%	16.9%	22.7%	19.1%	21.7%	18.3%
3. どちらでもない	15.6%	11.3%	18.6%	12.8%	12.1%	12.8%	16.8%	12.2%	17.6%	23.5%	23.4%	26.1%	17.6%	11.7%	18.0%
4. ↓	5.8%	4.8%	6.5%	7.6%	4.6%	4.4%	6.0%	5.6%	6.9%	4.7%	10.5%	4.5%	5.8%	5.7%	
5. 残るのに重要	10.8%	12.3%	9.8%	9.6%	10.8%	9.8%	9.3%	11.2%	13.1%	12.8%	10.5%	12.5%	11.4%	10.4%	
6. わからない	6.1%	5.0%	6.9%	4.8%	6.7%	6.0%	5.8%	7.6%	4.9%	10.7%	6.5%	5.7%	7.1%	4.8%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,028)	(1,224)	(1,804)	(436)	(371)	(571)	(583)	(197)	(449)	(149)	(124)	(88)	(1,555)	(1,094)	(355)	
c) 大学・学科の評判															
1. 辞職するのに重要	13.1%	15.7%	11.3%	16.0%	14.9%	12.9%	13.2%	9.6%	10.6%	12.3%	12.2%	14.8%	12.2%	14.1%	13.5%
2. ↑	19.9%	20.8%	19.3%	20.9%	27.4%	20.0%	20.6%	18.3%	14.8%	15.8%	15.4%	23.9%	19.9%	20.8%	17.4%
3. どちらでもない	49.2%	45.8%	51.5%	45.7%	40.1%	51.1%	47.6%	53.3%	59.6%	44.5%	49.6%	43.2%	48.9%	48.5%	52.5%
4. ↓	5.7%	5.8%	5.7%	6.5%	6.2%	6.0%	6.4%	2.5%	4.5%	4.8%	10.6%	5.7%	5.9%	5.6%	
5. 残るのに重要	5.1%	6.2%	4.3%	5.6%	4.6%	2.8%	4.8%	7.1%	5.2%	10.3%	5.7%	6.8%	4.6%	5.6%	
6. わからない	7.0%	5.7%	7.9%	5.3%	6.8%	7.1%	7.4%	9.1%	5.4%	12.3%	6.5%	5.7%	8.5%	5.4%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,005)	(1,219)	(1,786)	(431)	(369)	(564)	(582)	(197)	(445)	(146)	(123)	(88)	(1,537)	(1,090)	(356)	
d) 同僚との協力関係															
1. 辞職するのに重要	16.2%	20.6%	13.3%	16.4%	19.3%	18.3%	11.5%	13.7%	19.1%	12.8%	17.1%	16.7%	14.9%	17.7%	18.4%
2. ↑	23.0%	25.3%	21.5%	24.5%	22.1%	24.5%	24.5%	24.4%	20.7%	13.5%	20.3%	25.6%	22.0%	23.8%	25.5%
3. どちらでもない	37.7%	33.4%	40.5%	36.8%	36.5%	36.3%	42.2%	35.0%	36.9%	42.6%	39.8%	26.7%	39.0%	37.2%	32.3%
4. ↓	8.0%	6.6%	9.0%	9.0%	7.1%	7.9%	8.1%	7.1%	7.6%	6.8%	12.2%	11.1%	7.8%	8.5%	
5. 残るのに重要	8.1%	8.0%	8.1%	8.1%	8.7%	6.3%	5.7%	11.2%	10.6%	11.5%	3.3%	13.3%	8.0%	7.4%	
6. わからない	7.0%	6.1%	7.6%	5.1%	6.3%	6.7%	8.1%	8.6%	5.2%	12.8%	7.3%	6.7%	8.3%	5.4%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,013)	(1,220)	(1,793)	(432)	(367)	(568)	(583)	(197)	(445)	(148)	(123)	(90)	(1,542)	(1,095)	(353)	

	全体	研究大	その大	学	学系										助教授	講師	
					文学系	理学系	工学系	農学系	医学系	歯学系	芸術学系	体育学系	その他学系				
e) 大学の立地条件																	
1. 辞職するのに重要	19.6%	23.2%	17.1%	26.6%	28.0%	19.8%	15.3%	14.2%	16.0%	14.8%	15.3%	23.9%	20.4%	19.8%	16.0%		
2. ↑	22.1%	24.6%	20.3%	24.1%	27.2%	24.2%	23.7%	20.8%	16.6%	12.1%	16.9%	22.7%	21.3%	23.6%	20.4%		
3. どちらでもない	38.9%	34.0%	42.3%	30.8%	27.5%	39.5%	39.8%	41.6%	48.5%	47.7%	50.8%	33.0%	37.6%	38.9%	44.8%		
4. ↓	6.2%	5.8%	6.5%	7.4%	5.7%	5.0%	7.9%	5.6%	5.2%	5.4%	4.0%	8.0%	6.5%	5.6%	6.4%		
5. 残るのに重要	6.3%	6.7%	6.1%	6.3%	5.4%	5.2%	5.8%	8.6%	7.9%	7.4%	5.6%	6.8%	6.1%	6.5%	6.7%		
6. わからない	6.9%	5.8%	7.7%	4.9%	6.2%	6.3%	7.5%	9.1%	5.8%	12.8%	7.3%	5.7%	8.1%	5.6%	5.6%		
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		
	(3,025)	(1,231)	(1,794)	(432)	(371)	(575)	(583)	(197)	(445)	(149)	(124)	(88)	(1,547)	(1,098)	(357)		
問3 1. あなたの担当する教育段階																	
1. 学部教育のみ	30.1%	8.8%	44.6%	53.5%	30.9%	20.4%	18.0%	10.7%	21.3%	60.4%	62.7%	53.3%	21.5%	35.0%	54.2%		
2. 学部教育と大学院	66.9%	84.8%	54.7%	46.3%	66.3%	73.5%	79.3%	85.3%	74.9%	39.1%	37.3%	45.7%	76.2%	61.2%	41.5%		
3. 大学院教育のみ	2.3%	5.0%	0.4%	0.0%	2.5%	4.7%	1.8%	4.0%	2.5%	0.6%	0.0%	0.0%	1.8%	3.2%	1.9%		
4. 授業科目を持たない	0.7%	1.3%	0.3%	0.2%	0.3%	1.4%	0.9%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%	1.1%	0.4%	0.6%	2.4%		
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		
	(3,333)	(1,355)	(1,977)	(486)	(398)	(642)	(656)	(224)	(474)	(169)	(126)	(92)	(1,793)	(1,142)	(371)		
問3 2. 1週間あたり授業時間数(中央値)																	
a) 教室や実習室での授業	8時間	6時間	11時間	9時間	9時間	7時間	8時間	6時間	3時間	12時間	12時間	12時間	9時間	8時間	6時間		
b) 個人指導	4時間	5時間	4時間	2時間	3時間	5時間	6時間	8時間	3時間	16時間	4時間	4時間	4時間	5時間	3時間		
問3 3. あなたの担当する授業科目数(中央値)																	
a) 学部教養課程	1科目	1科目	1科目	2科目	1科目	1科目	0科目	1科目	0科目	1科目	2科目	1科目	1科目	1科目	1科目		
b) 学部専門課程	1科目	2科目	3科目	3科目	3科目	2科目	3科目	3科目	1科目	2科目	4科目	4科目	3科目	3科目	2科目		
c) 大学院課程	1科目	1科目	1科目	1科目	2科目	1科目	2科目	2科目	1科目	1科目	1科目	2科目	1科目	1科目	1科目		
問3 4. 授業科目に登録している学生数(中央値)																	
a) 学生数が最小	40人	40人	40人	30人	30人	50人	50人	27.5人	50人	30人	40人	40人	40人	40人	30人		
学部教養課程	18人	20人	16人	10人	14.5人	20人	40人	20人	60人	10.5人	10人	10人	20人	17人	15人		
学部専門課程	3人	5人	2人	3人	2人	4人	5人	3人	3人	3人	3人	2人	3人	3人	4人		
b) 学生数が最大	100人	110人	100人	65人	150人	120人	100人	120人	100人	100人	103人	70人	110人	100人	80人		
学部教養課程	80人	70人	94人	50人	110人	60人	100人	54.5人	100人	48人	72.5人	70人	90人	74人	100人		
学部専門課程	7人	10人	5人	6人	7人	8人	10人	6人	6人	5人	8人	6人	7人	8人	5人		
c) 授業科目は1科目だけ	91人	86.5人	100人	89.5人	130人	100人	88人	100人	55人	33人	53人	16人	100人	90人	50人		
学部教養課程	63人	70人	60人	20人	75人	50人	51人	40人	100人	30人	30人	40人	60人	60人	100人		
学部専門課程	5人	10人	3人	4人	4人	8人	10人	5人	4人	3人	2人	1人	5人	6人	5人		
問3 5. 学部教養課程の授業形態の比率(中央値)																	
a) 講義	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	60%	40%	25%	67.5%	80%	70%	50%		
b) クラス討議	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%		
c) 実験実習	0%	0%	0%	0%	0%	0%	20%	10%	20%	10%	40%	0%	0%	0%	15%		

d) その他	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	
問36. あなたが求める単位認定の要件(注:1,889票本について)																				
a) 授業への出席状態																				
学部教養課程	27.1%	17.8%	29.8%	56.0%	28.4%	32.5%	13.1%	16.3%	11.2%	17.7%	69.4%	30.2%	28.9%	25.0%	26.3%					
学部専門課程	56.2%	40.5%	60.7%	47.6%	64.7%	45.0%	69.7%	67.5%	48.6%	45.2%	64.5%	73.0%	59.2%	56.9%	41.9%					
大学院課程	26.0%	33.6%	23.8%	17.6%	37.8%	30.2%	38.4%	39.8%	8.8%	9.7%	4.8%	20.6%	32.3%	21.9%	8.6%					
合計	(2,065)	(388)	(1,677)	(331)	(263)	(364)	(492)	(152)	(171)	(90)	(86)	(78)	(1,241)	(664)	(143)					
b) 小論文の提出																				
学部教養課程	13.1%	10.0%	14.0%	22.7%	17.9%	19.2%	8.4%	4.1%	2.4%	5.6%	27.4%	19.0%	14.2%	12.0%	12.4%					
学部専門課程	34.6%	27.5%	36.6%	36.6%	44.8%	33.4%	39.9%	31.7%	18.5%	18.5%	45.2%	58.7%	35.2%	37.0%	24.7%					
大学院課程	19.2%	22.0%	18.4%	9.9%	22.4%	18.3%	30.3%	21.1%	15.3%	9.7%	12.9%	25.4%	24.2%	15.0%	9.1%					
合計	(1,263)	(251)	(1,012)	(189)	(171)	(240)	(319)	(70)	(90)	(42)	(53)	(65)	(758)	(410)	(86)					
c) 主論文の提出																				
学部教養課程	2.8%	2.4%	2.9%	6.2%	4.5%	2.1%	1.7%	1.6%	0.4%	2.4%	1.6%	6.3%	2.9%	2.7%	2.7%					
学部専門課程	15.1%	10.9%	16.3%	26.7%	23.4%	13.3%	9.1%	17.1%	5.6%	8.1%	27.4%	20.6%	16.2%	14.1%	14.0%					
大学院課程	26.5%	36.7%	23.6%	17.2%	30.8%	29.9%	29.3%	40.7%	31.7%	11.3%	14.5%	17.5%	33.4%	21.1%	10.8%					
合計	(838)	(211)	(627)	(137)	(118)	(153)	(163)	(73)	(94)	(27)	(27)	(28)	(541)	(242)	(51)					
d) 口頭発表																				
学部教養課程	6.9%	4.5%	7.6%	25.6%	10.0%	2.1%	1.7%	0.8%	0.8%	4.0%	4.8%	19.0%	7.8%	5.3%	8.1%					
学部専門課程	24.4%	16.8%	26.5%	39.6%	44.8%	18.6%	14.0%	17.1%	21.7%	11.3%	25.8%	38.1%	24.4%	26.7%	17.7%					
大学院課程	27.3%	32.7%	25.8%	16.1%	37.3%	34.3%	32.3%	38.2%	25.7%	8.1%	9.7%	19.0%	33.4%	22.8%	13.4%					
合計	(1,106)	(228)	(878)	(222)	(185)	(186)	(195)	(69)	(120)	(29)	(25)	(48)	(676)	(351)	(73)					
e) クラス討議																				
学部教養課程	6.1%	4.3%	6.7%	18.7%	10.0%	3.6%	1.2%	3.3%	2.4%	2.4%	4.8%	15.9%	6.0%	5.5%	10.2%					
学部専門課程	17.1%	10.0%	19.2%	27.8%	35.3%	10.9%	6.2%	10.6%	16.9%	12.9%	22.6%	33.3%	17.7%	18.1%	11.8%					
大学院課程	13.9%	16.8%	13.0%	11.4%	25.9%	13.9%	13.5%	23.6%	6.8%	8.9%	6.5%	17.5%	16.8%	12.2%	5.9%					
合計	(701)	(131)	(570)	(158)	(143)	(96)	(85)	(46)	(65)	(30)	(21)	(42)	(417)	(229)	(52)					
f) 試験(1回)																				
学部教養課程	14.2%	14.9%	14.0%	17.2%	16.9%	17.5%	6.2%	14.6%	13.7%	9.7%	41.9%	17.5%	14.5%	13.8%	15.6%					
学部専門課程	44.2%	46.9%	43.4%	22.3%	46.3%	35.5%	52.0%	60.2%	46.6%	63.7%	46.8%	54.0%	42.6%	48.0%	45.2%					
大学院課程	8.4%	15.2%	6.5%	3.3%	6.5%	7.7%	17.2%	8.1%	4.8%	6.5%	3.2%	7.9%	9.8%	7.2%	5.9%					
合計	(1,262)	(325)	(937)	(117)	(140)	(205)	(306)	(102)	(162)	(99)	(57)	(50)	(689)	(441)	(124)					

	全体	研究学	その学	人文学	社会科学	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師
g) 試験(2回以上)															
学部教養課程	17.7%	10.0%	19.9%	45.1%	18.9%	27.2%	7.1%	5.7%	4.4%	7.3%	12.9%	17.5%	18.2%	16.9%	18.3%
学部専門課程	29.9%	13.7%	34.6%	33.0%	31.3%	29.3%	36.7%	27.6%	32.5%	13.7%	17.7%	19.0%	33.0%	28.0%	21.5%
大学院課程	2.2%	1.9%	2.3%	1.5%	1.5%	2.4%	3.7%	1.6%	1.6%	0.8%	1.6%	4.8%	2.7%	1.9%	1.1%
合計	49.8%	25.6%	56.8%	79.5%	51.7%	58.9%	47.5%	35.0%	38.6%	21.8%	43.5%	41.3%	53.9%	46.7%	40.9%
	(941)	(108)	(833)	(217)	(104)	(199)	(193)	(43)	(96)	(27)	(20)	(26)	(556)	(299)	(76)
h) 特別な要件はない															
学部教養課程	1.7%	2.4%	1.5%	1.8%	1.5%	1.8%	1.2%	2.4%	2.0%	2.4%	1.6%	1.6%	1.9%	1.4%	1.6%
学部専門課程	2.9%	4.7%	2.4%	0.7%	2.0%	3.0%	3.2%	1.6%	8.0%	2.4%	0.0%	0.0%	1.9%	3.1%	7.5%
大学院課程	5.9%	9.0%	5.0%	1.1%	3.5%	7.1%	4.9%	12.2%	15.3%	0.8%	1.6%	1.6%	5.5%	6.7%	4.8%
合計	10.5%	29.6%	8.9%	3.7%	7.0%	11.8%	9.4%	16.3%	25.3%	5.6%	11.3%	3.2%	9.4%	11.3%	14.0%
	(198)	(68)	(130)	(10)	(40)	(40)	(38)	(20)	(63)	(7)	(2)	(2)	(97)	(72)	(26)
問3 7. 教育活動が受ける影響															
a) 担当の授業科目数															
1. 大変良い影響	7.5%	7.9%	7.3%	7.8%	10.0%	6.7%	6.0%	7.4%	7.4%	11.7%	8.9%	7.6%	7.2%	9.0%	4.8%
2. ↑	15.8%	15.3%	16.2%	17.5%	16.4%	10.8%	18.8%	16.7%	13.4%	19.7%	17.1%	18.5%	17.1%	13.7%	16.1%
3. どちらでもない	45.2%	47.2%	43.8%	41.0%	40.8%	47.3%	45.7%	51.6%	52.4%	36.5%	35.0%	46.7%	45.8%	43.7%	46.7%
4. ↓	18.4%	16.9%	19.4%	22.9%	19.7%	20.4%	19.6%	17.2%	8.8%	13.9%	25.2%	18.5%	16.9%	21.6%	16.4%
5. 大変悪い影響	7.8%	6.4%	8.6%	8.2%	11.3%	9.8%	7.7%	5.1%	3.0%	3.6%	10.6%	5.4%	8.1%	7.9%	6.0%
6. 該当しない	5.3%	6.4%	4.6%	2.6%	1.8%	5.1%	2.1%	1.9%	15.0%	14.6%	3.3%	3.3%	4.9%	4.1%	10.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,119)	(1,244)	(1,875)	(463)	(390)	(584)	(621)	(215)	(433)	(137)	(123)	(92)	(1,678)	(1,078)	(336)
b) 担当授業科目の種類															
1. 大変良い影響	9.2%	9.6%	8.8%	8.4%	12.6%	9.4%	7.5%	8.8%	8.8%	10.4%	11.5%	6.5%	8.6%	10.3%	8.6%
2. ↑	22.3%	23.3%	21.7%	21.2%	25.7%	19.9%	29.9%	22.2%	13.7%	23.7%	18.0%	23.9%	22.7%	22.9%	19.0%
3. どちらでもない	45.5%	45.8%	45.3%	48.9%	38.6%	49.1%	41.9%	51.4%	52.8%	30.4%	45.1%	41.3%	47.1%	42.2%	48.2%
4. ↓	13.4%	10.7%	15.2%	14.7%	14.7%	12.3%	15.9%	13.4%	7.0%	15.6%	14.8%	16.3%	12.2%	16.9%	8.9%
5. 大変悪い影響	4.1%	4.2%	4.0%	3.5%	6.4%	5.0%	3.4%	2.3%	2.1%	2.2%	7.4%	6.5%	4.1%	3.8%	5.1%
6. 該当しない	5.5%	6.4%	4.9%	3.2%	2.1%	4.3%	1.4%	1.9%	15.6%	17.8%	3.3%	5.4%	5.3%	3.8%	10.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,113)	(1,247)	(1,866)	(462)	(389)	(583)	(623)	(216)	(430)	(135)	(122)	(92)	(1,677)	(1,075)	(336)
c) 授業に登録する学生数															
1. 大変良い影響	4.6%	4.9%	4.4%	6.0%	5.4%	4.2%	3.1%	4.2%	3.5%	7.4%	8.2%	4.3%	5.0%	4.5%	3.6%
2. ↑	13.0%	13.2%	12.9%	15.6%	13.6%	11.2%	14.0%	12.1%	8.4%	17.8%	15.6%	17.0%	14.3%	11.2%	12.7%
3. どちらでもない	48.1%	52.7%	45.0%	40.8%	48.1%	48.2%	46.0%	58.6%	59.2%	38.5%	41.8%	45.7%	46.2%	49.8%	52.7%
4. ↓	19.1%	15.4%	21.5%	20.7%	19.8%	23.3%	22.6%	16.7%	9.7%	13.3%	20.5%	17.0%	19.5%	19.7%	15.4%
5. 大変悪い影響	10.5%	7.5%	12.4%	15.3%	11.8%	9.7%	11.5%	6.5%	4.9%	9.6%	12.3%	11.7%	10.5%	11.0%	8.9%
6. 該当しない	4.7%	6.3%	3.6%	1.5%	1.3%	3.4%	2.9%	1.9%	14.4%	13.3%	1.6%	4.3%	4.6%	3.8%	6.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,119)	(1,253)	(1,866)	(463)	(389)	(589)	(620)	(215)	(431)	(135)	(122)	(94)	(1,681)	(1,072)	(338)

問	研究大 学	その 他の 大学	人文科 学系	社会科 学系	理学系	工学系	農学系	医歯学 系	芸術学 系	体育学 系	その他 学系	教授	助教授	講師		
															全体	
問37	教育活動が受ける影響															
h)	研究資金の獲得し易さ															
	1. 大変良い影響	7.7%	8.2%	7.4%	6.4%	8.0%	9.4%	7.3%	6.9%	8.3%	5.1%	9.0%	4.4%	7.6%	8.4%	6.2%
	2. ↑ どちらでもない	12.5%	13.4%	11.9%	14.8%	14.5%	11.7%	13.5%	8.7%	11.7%	11.8%	4.9%	13.2%	13.5%	11.1%	11.2%
	3. ↓ どちらでもない	48.9%	47.6%	49.8%	48.5%	49.6%	48.3%	51.0%	46.8%	50.1%	40.4%	53.3%	47.3%	47.2%	50.8%	53.0%
	4. 大変悪い影響	13.3%	12.8%	13.6%	11.9%	12.9%	10.8%	13.4%	20.6%	10.6%	14.0%	22.1%	16.5%	14.1%	13.1%	10.7%
	5. 該当しない	8.0%	7.6%	8.2%	8.0%	6.7%	8.0%	7.2%	11.0%	8.3%	8.1%	7.4%	11.0%	8.1%	8.5%	6.8%
	6. 該当しない	9.6%	10.4%	9.1%	10.4%	8.3%	11.8%	7.7%	6.0%	11.0%	20.6%	3.3%	7.7%	9.6%	8.2%	12.1%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,090)	(1,243)	(1,847)	(452)	(387)	(574)	(614)	(218)	(435)	(136)	(122)	(91)	(1,650)	(1,075)	(338)
i)	学外の専門的活動															
	1. 大変良い影響	9.2%	9.0%	9.4%	9.7%	11.3%	7.9%	7.5%	5.6%	7.9%	24.0%	9.0%	8.7%	9.9%	8.7%	7.4%
	2. ↑ どちらでもない	18.8%	19.5%	18.4%	21.4%	21.6%	14.4%	20.1%	17.3%	14.8%	20.5%	21.3%	29.3%	21.9%	16.2%	12.1%
	3. ↓ どちらでもない	50.0%	49.0%	50.8%	50.6%	51.8%	52.1%	52.0%	48.6%	52.7%	30.1%	47.5%	44.6%	46.8%	53.8%	55.6%
	4. 大変悪い影響	10.0%	10.3%	9.8%	6.4%	6.2%	9.9%	10.2%	17.8%	10.2%	11.0%	17.2%	8.7%	10.2%	10.0%	10.1%
	5. 該当しない	2.8%	2.4%	3.0%	2.6%	1.5%	2.8%	2.9%	3.3%	3.0%	5.5%	2.5%	1.1%	2.8%	2.7%	3.0%
	6. 該当しない	9.1%	9.8%	8.6%	9.3%	7.5%	12.9%	7.3%	7.5%	11.5%	8.9%	2.5%	7.6%	8.5%	8.7%	11.8%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,093)	(1,240)	(1,853)	(453)	(388)	(568)	(617)	(214)	(433)	(146)	(122)	(92)	(1,655)	(1,073)	(338)
問38	教育条件に関する意見について															
a)	学生の意見を教員の教育能力評価にもちいるべきである															
	1. 賛成(はい)	21.8%	21.8%	21.7%	20.2%	23.1%	20.3%	18.2%	22.3%	29.6%	25.1%	22.0%	12.6%	20.9%	22.6%	23.5%
	2. ↑ どちらでもない	27.4%	27.7%	27.2%	22.9%	28.1%	27.1%	30.3%	24.1%	30.0%	22.8%	26.8%	32.6%	26.8%	27.7%	30.1%
	3. ↓ どちらでもない	27.3%	24.9%	28.8%	28.7%	26.6%	24.4%	30.8%	25.4%	22.5%	30.5%	33.1%	26.3%	27.8%	27.3%	24.9%
	4. 反対(いいえ)	8.2%	8.9%	7.8%	8.5%	7.5%	10.9%	8.3%	7.1%	6.0%	6.6%	10.2%	7.4%	8.3%	7.3%	9.9%
	5. 該当しない	14.0%	15.2%	13.3%	18.6%	13.9%	16.1%	11.7%	18.3%	10.3%	13.2%	7.9%	17.9%	15.0%	14.0%	10.2%
	6. 該当しない	1.3%	1.4%	1.2%	1.2%	0.7%	1.1%	0.8%	2.7%	1.7%	1.8%	0.0%	3.2%	1.2%	1.1%	1.4%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,317)	(1,341)	(1,976)	(485)	(402)	(634)	(650)	(224)	(467)	(167)	(127)	(95)	(1,787)	(1,139)	(362)
b)	業績主義が本学の教育の質をそなっている															
	1. 賛成(はい)	14.4%	17.3%	12.5%	10.3%	8.3%	14.4%	17.1%	15.2%	18.1%	13.5%	18.9%	20.2%	11.0%	18.7%	16.8%
	2. ↑ どちらでもない	17.4%	20.5%	15.4%	14.9%	12.8%	17.7%	19.7%	17.4%	21.3%	12.9%	21.3%	19.1%	17.2%	17.2%	20.4%
	3. ↓ どちらでもない	37.6%	34.2%	39.9%	43.8%	41.0%	33.7%	38.3%	37.9%	30.8%	42.3%	35.4%	34.0%	39.9%	35.7%	32.0%
	4. 反対(いいえ)	11.0%	9.5%	12.1%	11.6%	14.2%	11.1%	9.7%	9.8%	9.7%	8.6%	15.7%	10.6%	10.8%	11.0%	12.7%
	5. 該当しない	15.6%	16.1%	15.3%	15.1%	20.0%	18.8%	12.0%	17.0%	16.3%	14.1%	8.7%	12.8%	16.8%	14.2%	14.0%
	6. 該当しない	3.9%	2.5%	4.9%	4.3%	3.8%	4.3%	3.2%	2.7%	3.9%	8.6%	0.0%	3.2%	4.2%	3.2%	4.1%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,304)	(1,338)	(1,966)	(484)	(400)	(632)	(650)	(224)	(465)	(163)	(127)	(94)	(1,775)	(1,137)	(363)
c)	教育能力を評価するためのよい方法が必要															
	1. 賛成(はい)	36.5%	35.2%	37.4%	32.4%	32.1%	36.0%	36.4%	45.1%	41.2%	39.0%	36.5%	36.2%	34.9%	38.1%	39.2%

2. どちらでもない	35.1%	37.0%	33.8%	33.5%	37.1%	34.7%	37.9%	31.3%	34.1%	31.1%	39.7%	37.2%	36.0%	34.5%	33.7%
3. どちらでもない	21.3%	20.0%	22.2%	25.6%	21.6%	21.4%	20.5%	18.8%	18.5%	23.2%	18.3%	19.1%	22.0%	20.4%	21.3%
4. 反対(いいえ)	2.3%	2.6%	2.0%	2.9%	3.0%	2.5%	1.8%	2.2%	1.9%	0.6%	0.0%	2.1%	2.4%	1.9%	2.5%
5. 反対(いいえ)	2.9%	3.4%	2.6%	3.7%	4.0%	3.8%	2.0%	1.3%	2.8%	1.2%	4.0%	3.2%	2.8%	3.6%	1.9%
6. 該当しない	1.8%	1.8%	1.9%	1.9%	2.3%	1.6%	1.4%	1.3%	1.5%	4.9%	1.6%	2.1%	2.0%	1.6%	1.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,300)	(1,337)	(1,963)	(484)	(399)	(631)	(649)	(224)	(464)	(164)	(126)	(94)	(1,774)	(1,135)	(362)
d) 教育能力が教員の昇任の基準として最も重要															
1. 賛成(はい)	9.3%	7.0%	10.8%	8.5%	9.9%	5.8%	7.2%	8.0%	9.9%	27.5%	10.2%	11.8%	8.5%	10.4%	9.4%
2. どちらでもない	26.8%	24.4%	28.4%	24.3%	26.3%	25.0%	29.1%	21.7%	24.5%	30.5%	38.6%	40.9%	27.7%	25.9%	25.7%
3. どちらでもない	37.5%	36.2%	38.3%	38.0%	33.0%	37.3%	40.6%	40.3%	39.9%	28.1%	35.4%	29.0%	37.6%	36.9%	39.2%
4. 反対(いいえ)	11.7%	13.6%	10.3%	13.7%	12.9%	12.8%	11.2%	13.7%	11.6%	5.4%	5.5%	9.7%	10.9%	12.3%	13.3%
5. 反対(いいえ)	13.2%	17.2%	10.4%	14.3%	16.4%	17.5%	10.3%	15.0%	12.9%	6.0%	7.9%	4.3%	13.8%	12.7%	10.8%
6. 該当しない	1.6%	1.6%	1.7%	1.2%	1.5%	1.6%	1.5%	1.3%	1.3%	2.4%	2.4%	4.3%	1.4%	1.8%	1.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,315)	(1,342)	(1,973)	(482)	(403)	(635)	(650)	(226)	(466)	(167)	(127)	(93)	(1,782)	(1,142)	(362)
問39 a) 学部学生の学力や実力について															
a) 学部学生は十分な筆記・口頭の技能を持つ															
1. 賛成(はい)	9.5%	14.1%	6.5%	7.6%	13.0%	6.8%	3.9%	8.4%	18.6%	16.4%	7.4%	6.4%	8.8%	10.0%	10.8%
2. どちらでもない	22.0%	28.3%	17.9%	24.7%	21.7%	20.7%	19.5%	17.2%	26.3%	21.4%	18.2%	26.6%	22.5%	20.7%	23.1%
3. どちらでもない	26.1%	22.6%	28.4%	28.1%	26.3%	24.2%	25.3%	30.2%	22.1%	26.4%	33.9%	31.9%	28.6%	22.9%	23.9%
4. 反対(いいえ)	28.2%	23.1%	31.4%	27.9%	26.1%	30.9%	36.6%	27.9%	20.1%	18.9%	32.2%	24.5%	26.5%	30.7%	29.1%
5. 反対(いいえ)	12.9%	10.3%	14.6%	11.6%	12.3%	15.7%	14.3%	15.8%	11.3%	7.5%	7.4%	10.6%	12.6%	14.2%	11.1%
6. 該当しない	1.3%	1.6%	1.1%	0.0%	0.5%	1.7%	0.5%	0.5%	1.5%	9.4%	0.8%	0.0%	0.9%	1.6%	2.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,203)	(1,258)	(1,945)	(473)	(391)	(599)	(637)	(215)	(452)	(159)	(121)	(94)	(1,742)	(1,083)	(351)
b) 学生は十分な数学的・論理的能力を持つ															
1. 賛成(はい)	4.7%	8.6%	2.2%	2.1%	4.1%	3.8%	3.4%	2.3%	13.3%	3.2%	3.3%	2.1%	4.0%	5.3%	6.3%
2. どちらでもない	18.4%	28.4%	11.9%	14.9%	16.5%	19.0%	17.2%	17.1%	29.7%	10.9%	10.8%	19.1%	18.6%	17.7%	19.7%
3. どちらでもない	32.8%	32.0%	33.2%	38.5%	34.4%	30.1%	31.8%	32.9%	25.9%	35.3%	38.3%	41.5%	34.3%	29.9%	33.3%
4. 反対(いいえ)	28.7%	21.4%	33.4%	25.7%	29.2%	31.4%	34.8%	32.9%	20.4%	21.2%	35.8%	22.3%	27.9%	30.4%	27.4%
5. 反対(いいえ)	11.8%	6.8%	15.0%	11.3%	12.4%	13.9%	12.2%	13.9%	8.0%	9.6%	10.0%	10.6%	12.0%	12.4%	9.4%
6. 該当しない	3.7%	2.8%	4.2%	7.4%	3.4%	1.8%	0.5%	0.9%	2.7%	19.9%	1.7%	4.3%	3.1%	4.3%	4.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,193)	(1,255)	(1,938)	(470)	(387)	(599)	(638)	(216)	(451)	(156)	(120)	(94)	(1,736)	(1,079)	(351)

	全体	研究大	その大	人文科	社会科	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師
	学	学	学系	学系	学系	学系	学系	学系	学系	学系	学系	学系	学系	学系	学系
c) 学生は最低限の勉強しかしない															
1. 賛成 (はい)	24.2%	21.6%	25.9%	21.1%	25.9%	22.9%	29.8%	28.2%	22.7%	10.6%	27.0%	21.9%	23.1%	26.4%	24.4%
2. どちらでもない	35.9%	33.9%	37.2%	31.9%	38.7%	40.4%	38.5%	37.5%	30.7%	25.5%	43.4%	37.5%	35.8%	35.8%	36.1%
3. どちらでもない	24.5%	25.1%	24.1%	30.4%	20.8%	22.9%	20.9%	22.2%	26.1%	33.5%	18.9%	24.0%	25.2%	23.0%	25.8%
4. 反対 (いいえ)	9.1%	11.5%	7.6%	11.4%	10.0%	8.2%	7.4%	9.3%	10.0%	10.6%	9.0%	9.4%	10.0%	7.8%	9.2%
5. 反対 (いいえ)	5.0%	6.1%	4.3%	4.7%	4.4%	3.5%	2.5%	2.3%	8.7%	18.6%	0.8%	4.2%	4.8%	5.5%	4.0%
6. 該当しない	1.2%	1.8%	0.9%	0.4%	0.3%	2.0%	0.9%	0.5%	1.8%	1.2%	0.8%	3.1%	1.1%	1.5%	0.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,203)	(1,256)	(1,947)	(476)	(390)	(597)	(637)	(216)	(449)	(161)	(122)	(96)	(1,744)	(1,084)	(349)
d) 学生はよい成績のためにカンニングする															
1. 賛成 (はい)	3.9%	4.0%	3.8%	2.3%	3.9%	5.4%	3.0%	3.7%	4.7%	1.3%	8.2%	3.3%	3.2%	4.9%	4.3%
2. どちらでもない	13.4%	14.1%	13.0%	11.2%	15.2%	14.8%	13.6%	17.5%	12.3%	3.8%	20.5%	14.1%	13.3%	13.3%	14.9%
3. どちらでもない	30.5%	27.2%	32.6%	27.1%	30.2%	28.6%	37.7%	28.6%	30.6%	20.3%	36.1%	30.4%	30.2%	29.3%	36.4%
4. 反対 (いいえ)	18.3%	20.1%	17.1%	18.2%	18.8%	19.7%	19.5%	19.8%	17.0%	12.7%	18.9%	14.1%	18.6%	18.4%	15.8%
5. 反対 (いいえ)	27.9%	28.8%	27.4%	35.4%	28.6%	26.4%	22.6%	27.6%	30.8%	32.3%	13.9%	28.3%	28.4%	28.0%	25.2%
6. 該当しない	5.9%	5.8%	6.0%	5.7%	3.4%	5.1%	3.6%	2.8%	4.7%	29.7%	2.5%	9.8%	6.3%	6.1%	3.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,185)	(1,249)	(1,936)	(472)	(388)	(594)	(632)	(217)	(448)	(158)	(122)	(92)	(1,727)	(1,084)	(349)
e) 現在の学生は5年前より勉強する															
1. 賛成 (はい)	2.7%	1.6%	3.3%	2.5%	4.4%	0.7%	1.1%	1.4%	5.6%	4.3%	3.3%	2.1%	2.8%	2.2%	3.1%
2. どちらでもない	7.2%	4.8%	8.7%	9.3%	8.7%	4.2%	6.8%	3.2%	10.7%	6.8%	6.6%	5.3%	7.6%	6.0%	8.6%
3. どちらでもない	45.4%	47.6%	44.1%	42.9%	44.7%	43.7%	44.2%	45.4%	49.1%	56.2%	45.9%	41.1%	46.2%	43.4%	47.1%
4. 反対 (いいえ)	20.1%	20.6%	19.8%	19.2%	17.0%	24.1%	23.9%	22.7%	13.8%	11.7%	21.3%	23.2%	19.4%	21.7%	18.6%
5. 反対 (いいえ)	20.7%	21.7%	20.0%	20.3%	19.5%	23.3%	21.1%	24.5%	17.8%	18.5%	18.0%	23.2%	21.2%	21.8%	15.4%
6. 該当しない	4.0%	3.7%	4.2%	5.7%	5.7%	4.0%	3.0%	2.8%	3.1%	2.5%	4.9%	5.3%	2.7%	4.9%	7.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,198)	(1,251)	(1,947)	(473)	(389)	(593)	(636)	(216)	(450)	(162)	(122)	(95)	(1,743)	(1,079)	(350)
f) 教員は授業以外にも学生と話すべきである															
1. 賛成 (はい)	22.6%	20.4%	24.0%	21.2%	18.0%	20.7%	21.3%	28.6%	23.9%	31.7%	30.3%	23.2%	23.4%	22.1%	20.0%
2. どちらでもない	35.2%	34.7%	35.5%	26.7%	37.3%	37.2%	35.8%	39.6%	35.3%	29.2%	37.7%	41.1%	36.7%	32.0%	37.1%
3. どちらでもない	32.3%	33.5%	31.5%	38.8%	31.1%	32.3%	34.7%	25.8%	30.4%	29.2%	25.4%	28.4%	31.4%	33.9%	32.0%
4. 反対 (いいえ)	4.2%	4.0%	4.4%	6.4%	6.9%	2.3%	4.1%	1.8%	4.2%	3.7%	4.1%	3.2%	3.6%	5.1%	4.6%
5. 反対 (いいえ)	4.3%	5.3%	3.7%	6.1%	5.7%	5.0%	2.7%	3.2%	4.7%	5.0%	0.8%	4.2%	3.8%	4.9%	5.4%
6. 該当しない	1.4%	2.1%	1.0%	0.8%	1.0%	2.5%	1.4%	0.9%	1.6%	1.2%	1.6%	0.0%	1.1%	2.0%	0.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,208)	(1,262)	(1,946)	(472)	(389)	(600)	(639)	(217)	(451)	(161)	(122)	(95)	(1,743)	(1,088)	(350)
問39b. 学部学生は何を学ぶべきか															
(1) 学部教養課程															
a) 専攻															
1. 期待する	81.2%	79.6%	82.4%	83.6%	82.3%	82.4%	81.6%	83.2%	78.5%	74.7%	79.3%	68.6%	80.8%	82.5%	81.0%

2. 期待しない	10.9%	12.5%	9.9%	9.2%	11.3%	12.0%	9.8%	12.0%	9.8%	10.1%	14.1%	14.3%	12.4%	8.7%	10.9%
3. 該当しない	7.8%	8.0%	7.7%	7.2%	6.4%	5.6%	8.5%	4.8%	11.7%	15.2%	6.5%	17.1%	6.8%	8.8%	8.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,450)	(1,004)	(1,446)	(390)	(311)	(518)	(468)	(167)	(316)	(79)	(92)	(70)	(1,274)	(864)	(294)
b) 理論、概念、パラダイム															
1. 期待する	84.6%	85.6%	83.8%	80.4%	82.6%	86.5%	89.5%	89.5%	82.0%	75.6%	86.3%	75.7%	84.4%	86.8%	80.1%
2. 期待しない	9.6%	8.6%	10.3%	11.9%	13.2%	10.1%	6.9%	5.2%	7.8%	10.3%	9.5%	11.4%	10.1%	7.8%	12.0%
3. 該当しない	5.9%	5.8%	5.9%	7.7%	4.2%	3.4%	3.6%	5.2%	10.2%	14.1%	4.2%	12.9%	5.6%	5.4%	7.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,475)	(1,028)	(1,447)	(388)	(310)	(524)	(477)	(172)	(322)	(78)	(95)	(70)	(1,291)	(871)	(292)
c) 研究方法															
1. 期待する	39.9%	36.5%	42.2%	59.4%	53.0%	36.2%	24.1%	31.5%	30.4%	57.0%	40.2%	43.5%	43.2%	37.0%	34.3%
2. 期待しない	45.5%	49.9%	42.4%	27.8%	35.9%	51.2%	56.3%	58.2%	51.6%	27.8%	39.1%	43.5%	41.8%	48.7%	52.6%
3. 該当しない	14.7%	13.5%	15.4%	12.8%	11.2%	12.6%	19.6%	10.3%	18.0%	15.2%	20.7%	13.0%	15.0%	14.4%	13.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,430)	(991)	(1,439)	(392)	(304)	(514)	(464)	(165)	(316)	(79)	(92)	(69)	(1,268)	(855)	(289)
d) 専門的な問題解決															
1. 期待する	24.6%	21.4%	26.8%	26.5%	26.6%	19.2%	19.7%	20.7%	22.9%	49.4%	42.4%	34.8%	26.3%	22.6%	23.7%
2. 期待しない	56.7%	61.4%	53.4%	53.4%	58.2%	63.9%	58.8%	61.6%	54.9%	34.9%	42.4%	46.4%	54.5%	58.6%	61.2%
3. 該当しない	18.7%	17.2%	19.8%	20.1%	15.1%	16.9%	21.5%	17.7%	22.3%	15.7%	15.2%	18.8%	19.1%	18.8%	15.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,413)	(986)	(1,427)	(378)	(304)	(510)	(461)	(164)	(319)	(83)	(92)	(69)	(1,260)	(845)	(291)
(2) 学部専門課程															
a) 事実															
1. 期待する	89.2%	89.3%	89.2%	88.3%	89.0%	88.1%	88.6%	91.9%	93.2%	78.4%	93.8%	88.6%	89.4%	89.0%	89.9%
2. 期待しない	7.2%	7.5%	6.9%	7.3%	8.6%	8.5%	7.8%	6.2%	4.3%	7.5%	4.5%	6.8%	6.9%	7.5%	6.4%
3. 該当しない	3.6%	3.2%	3.9%	4.4%	2.4%	3.4%	3.6%	1.9%	2.5%	14.2%	1.8%	4.5%	3.7%	3.5%	3.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,000)	(1,201)	(1,799)	(410)	(374)	(562)	(612)	(210)	(443)	(134)	(112)	(88)	(1,629)	(1,020)	(328)
b) 理論、概念、パラダイム															
1. 期待する	93.0%	95.0%	91.6%	92.3%	93.9%	94.0%	93.3%	92.0%	94.9%	82.7%	94.0%	92.0%	93.1%	92.9%	92.7%
2. 期待しない	4.6%	3.3%	5.6%	5.0%	4.3%	4.0%	5.4%	5.6%	2.9%	8.3%	3.4%	3.4%	4.5%	4.8%	4.3%
3. 該当しない	2.4%	1.8%	2.8%	2.6%	1.9%	1.9%	1.3%	2.3%	2.2%	9.0%	2.6%	4.5%	2.4%	2.2%	3.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,044)	(1,228)	(1,816)	(417)	(376)	(571)	(627)	(213)	(447)	(133)	(116)	(88)	(1,660)	(1,034)	(327)
c) 研究方法															
1. 期待する	81.9%	81.1%	82.4%	92.1%	86.7%	83.8%	75.4%	88.4%	64.2%	91.2%	93.2%	87.5%	82.8%	82.5%	76.6%
2. 期待しない	14.7%	15.7%	14.1%	6.5%	9.6%	12.7%	20.5%	10.7%	31.1%	4.8%	4.3%	8.0%	13.6%	14.6%	19.8%
3. 該当しない	3.4%	3.2%	3.5%	1.4%	3.7%	3.5%	4.0%	0.9%	4.7%	4.1%	2.6%	4.5%	3.6%	2.9%	3.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,059)	(1,229)	(1,830)	(418)	(375)	(573)	(623)	(215)	(447)	(147)	(117)	(88)	(1,664)	(1,038)	(334)

	全体	研究大学の他の大学の学系										助教授	講師		
		社会学系	文学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系	教授				
d) 専門的な問題解決															
1. 期待する	78.0%	74.9%	80.1%	80.4%	79.7%	74.1%	72.8%	78.4%	76.8%	88.1%	90.6%	88.8%	78.8%	77.7%	75.4%
2. 期待しない	18.3%	21.5%	16.2%	16.5%	16.6%	22.1%	22.9%	19.2%	20.0%	7.9%	6.8%	6.7%	17.7%	18.3%	21.7%
3. 該当しない	3.6%	3.6%	3.6%	3.1%	3.7%	3.8%	4.3%	2.3%	3.1%	4.0%	2.6%	4.5%	3.5%	4.0%	3.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,069)	(1,226)	(1,843)	(418)	(374)	(575)	(625)	(213)	(449)	(151)	(117)	(89)	(1,664)	(1,045)	(337)
問39c. 大学院生は何を学ぶべきか															
a) 事実															
1. 期待する	87.5%	89.1%	86.3%	84.8%	85.9%	88.8%	87.5%	91.0%	90.0%	84.2%	92.2%	71.4%	88.7%	86.9%	84.4%
2. 期待しない	7.0%	8.1%	6.2%	5.2%	8.2%	7.2%	8.3%	6.0%	6.3%	3.2%	4.4%	14.3%	6.3%	7.7%	8.1%
3. 該当しない	5.5%	2.9%	7.5%	10.1%	5.9%	4.0%	4.2%	3.0%	3.7%	12.6%	3.3%	14.3%	5.0%	5.3%	7.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,742)	(1,189)	(1,553)	(368)	(340)	(545)	(578)	(200)	(410)	(95)	(90)	(70)	(1,510)	(919)	(295)
b) 理論、概念、パラダイム															
1. 期待する	94.2%	96.6%	92.4%	89.8%	94.4%	95.3%	96.6%	96.6%	95.2%	89.6%	92.6%	81.9%	94.8%	94.0%	92.6%
2. 期待しない	2.3%	2.2%	2.4%	2.7%	0.6%	2.7%	1.5%	2.0%	2.9%	1.0%	6.4%	6.9%	2.3%	2.7%	1.7%
3. 該当しない	3.4%	1.2%	5.1%	7.5%	5.0%	2.0%	1.8%	1.5%	1.9%	9.4%	1.1%	11.1%	2.9%	3.3%	5.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,794)	(1,218)	(1,576)	(374)	(342)	(554)	(595)	(205)	(413)	(96)	(94)	(72)	(1,546)	(934)	(296)
c) 研究方法															
1. 期待する	95.8%	98.1%	94.1%	91.0%	94.2%	97.0%	97.5%	99.0%	97.4%	91.4%	99.0%	89.5%	96.2%	95.9%	94.3%
2. 期待しない	1.1%	0.9%	1.3%	1.8%	0.9%	1.2%	1.0%	0.0%	1.4%	2.9%	0.0%	0.0%	1.3%	1.1%	0.7%
3. 該当しない	3.0%	1.0%	4.6%	7.1%	4.9%	1.8%	1.5%	1.0%	1.2%	5.7%	1.0%	10.5%	2.5%	3.1%	5.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,841)	(1,232)	(1,609)	(379)	(344)	(564)	(602)	(207)	(418)	(105)	(96)	(76)	(1,572)	(950)	(300)
d) 専門的な問題解決															
1. 期待する	94.6%	97.3%	92.5%	91.0%	93.5%	96.3%	93.8%	98.6%	96.7%	92.5%	97.9%	88.2%	94.9%	95.0%	92.7%
2. 期待しない	2.2%	1.6%	2.7%	1.3%	2.1%	1.8%	4.3%	1.0%	1.7%	2.8%	1.0%	1.3%	2.4%	2.0%	2.3%
3. 該当しない	3.2%	1.1%	4.8%	7.7%	4.4%	2.0%	1.8%	0.5%	1.7%	4.7%	1.0%	10.5%	2.7%	3.0%	5.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,837)	(1,231)	(1,606)	(376)	(340)	(563)	(601)	(207)	(418)	(107)	(96)	(76)	(1,568)	(949)	(301)
問40. あなたの主な関心は教育か研究															
1. 主とした教育	3.3%	1.4%	4.6%	3.4%	2.3%	2.2%	2.3%	1.8%	2.0%	9.3%	14.5%	6.3%	2.9%	3.7%	4.0%
2. どちらかといえば教育	21.0%	12.4%	26.8%	24.1%	19.9%	15.1%	20.6%	12.9%	13.1%	37.3%	49.2%	39.6%	24.2%	16.8%	17.3%
3. どちらかといえば研究	58.8%	63.0%	56.0%	60.8%	62.4%	58.8%	61.8%	67.3%	60.8%	43.5%	29.8%	52.1%	59.2%	58.7%	56.8%
4. 主として研究	16.9%	23.3%	12.6%	11.6%	15.4%	23.9%	15.4%	18.0%	24.2%	9.9%	6.5%	2.1%	13.6%	20.7%	21.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,261)	(1,320)	(1,941)	(464)	(396)	(628)	(651)	(217)	(459)	(161)	(124)	(96)	(1,759)	(1,124)	(352)
問41. あなたの研究活動の状況/過去3年間(中央値)															
a) 執筆した学術書															
	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	0冊	1冊	1冊	2冊	1冊	1冊	2冊	1冊	1冊	70冊

b) 編集した学術書	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊	0冊
c) 発表した学術論文	5篇	8篇	4篇	6篇	5篇	7篇	12篇	0篇	3篇	3篇	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	5篇
d) ノンペーパー	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	2冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊	1冊
e) 学会発表	5回	6回	3回	1回	3回	6回	10回	10回	3回	3回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	5回
f) 新聞や雑誌の記事	1篇	1篇	1篇	0篇	0篇	0篇	1篇	0篇	1篇	1篇	2篇	0篇	0篇	0篇	0篇	0篇	0篇	0篇	0篇
g) 特許権	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件
h) コンピュータ・ブログ	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件
i) 公演会・展示会	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回
j) ビデオやフィルム作成	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回
k) その他	1回	1回	2回	1回	1回	2回	1回	1回	1回	1回	3回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	0回	1回
あなたは研究を必要としない職ですか																			
1. はい																			
2. いいえ																			
合計 100.0% (2,992) (1,217) (1,775) (432) (339) (582) (609) (196) (438) (140) (112) (84) (1,605) (1,030) (332)																			
問 4 2. 研究プロジェクトに従事しているか																			
1. はい																			
2. いいえ																			
合計 100.0% (3,030) (1,281) (1,749) (422) (366) (589) (623) (208) (435) (130) (112) (85) (1,590) (1,071) (347)																			
問 4 3. 個人研究プロジェクトに従事しているか																			
1. はい																			
2. いいえ																			
合計 100.0% (1,886) (921) (965) (213) (219) (395) (382) (140) (338) (53) (59) (53) (1,016) (641) (212)																			
問 4 4. 共同研究者はいますか																			
1. はい																			
2. いいえ																			
合計 100.0% (1,888) (922) (966) (210) (220) (396) (380) (140) (341) (52) (59) (55) (1,023) (637) (211)																			
問 4 5. あなたの共同研究プロジェクトでの役割(注：1, 8 9 標本について)																			
1. 単独責任者																			
2. 共同責任者																			
3. 一員(責任者はいる)																			
4. 一員(責任者はいない)																			
5. その他																			
合計 68.1% (1,286) (435) (851) (103) (127) (279) (284) (111) (244) (32) (36) (43) (703) (445) (129)																			
問 4 6. 研究費を個人ないし共同で交付された/過去3年間																			
1. はい																			
2. いいえ																			
合計 100.0% (3,051) (1,292) (1,759) (424) (364) (598) (625) (211) (443) (135) (107) (85) (1,594) (1,086) (349)																			

問	全体	研究大	その他の大学	人文科学系	社会科学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系	教授	助教授	講師		
																研究費の総額/過去3年間	
4	7.	交付された研究費の総額/過去3年間															
	1.	65万円未満	18.3%	10.4%	25.7%	38.7%	27.7%	13.3%	9.4%	9.4%	7.1%	72.6%	29.7%	33.9%	16.3%	19.7%	21.5%
	2.	65万円～325万円未満	38.9%	34.9%	42.7%	44.7%	45.4%	39.8%	33.8%	38.9%	37.6%	21.9%	42.2%	53.6%	34.6%	43.4%	45.2%
	3.	325万円～650万円未満	16.6%	18.8%	14.5%	9.8%	14.5%	16.6%	19.2%	25.6%	18.2%	5.5%	20.3%	7.1%	16.6%	16.2%	17.6%
	4.	650万円～1,300万円未満	13.7%	17.0%	10.5%	4.3%	10.0%	14.1%	18.6%	13.3%	20.3%	0.0%	7.8%	1.8%	16.2%	11.9%	8.4%
	5.	1,300万円～3,250万円未満	8.7%	13.0%	4.5%	2.1%	2.0%	10.1%	13.0%	11.1%	11.8%	0.0%	0.0%	3.6%	10.4%	7.1%	5.7%
	6.	3,250万円～6,500万円未満	2.3%	3.5%	1.2%	0.0%	0.4%	3.4%	3.6%	1.7%	2.6%	0.0%	0.0%	0.0%	3.5%	1.1%	0.8%
	7.	6,500万円以上	1.5%	2.4%	0.8%	0.4%	0.0%	2.6%	2.4%	0.0%	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	0.6%	0.8%
		合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
			(2,272)	(1,106)	(1,166)	(235)	(249)	(495)	(500)	(180)	(380)	(73)	(64)	(56)	(1,172)	(822)	(261)
4	8.	交付された研究費の財源(注:1,889標本について)															
	1.	所属大学	29.3%	25.6%	30.3%	33.3%	24.9%	32.5%	29.3%	22.0%	24.9%	35.5%	17.7%	36.5%	30.2%	29.4%	28.0%
	2.	政府機関	37.5%	69.7%	28.2%	16.5%	28.4%	57.7%	39.7%	47.2%	59.0%	4.0%	19.4%	23.8%	34.2%	43.6%	37.6%
	3.	企業	17.5%	26.8%	14.8%	0.7%	5.5%	12.7%	37.2%	25.2%	32.9%	0.0%	3.2%	3.2%	19.5%	15.3%	16.1%
	4.	財団	16.9%	30.8%	12.9%	5.1%	19.4%	17.8%	19.5%	19.5%	31.7%	3.2%	9.7%	14.3%	15.9%	18.6%	17.2%
	5.	国際組織	0.9%	1.7%	0.7%	0.0%	2.0%	1.5%	0.7%	0.0%	0.4%	0.8%	0.0%	1.6%	0.9%	0.9%	1.1%
	6.	その他	2.0%	1.9%	2.0%	1.5%	3.5%	1.2%	3.0%	2.4%	1.2%	2.4%	0.0%	1.6%	2.3%	1.4%	2.7%
		合計	104.0%	156.4%	89.0%	57.1%	83.6%	123.4%	129.3%	116.3%	150.2%	46.0%	50.0%	81.0%	103.0%	109.2%	102.7%
			(1,965)	(660)	(1,305)	(156)	(168)	(417)	(525)	(143)	(374)	(57)	(31)	(51)	(1,062)	(699)	(191)
4	9.	研究活動が受ける影響															
	a)	研究資金の獲得し易さ															
	1.	大変良い影響	25.3%	29.6%	22.1%	17.5%	21.4%	28.2%	25.6%	27.9%	36.2%	14.7%	17.0%	18.8%	25.3%	24.7%	27.1%
	2.	↑	23.0%	25.7%	21.0%	17.3%	26.6%	24.7%	25.5%	23.5%	22.4%	12.1%	23.0%	18.8%	22.2%	24.5%	21.7%
	3.	どちらでもない	30.5%	25.3%	34.4%	43.6%	36.5%	24.4%	29.6%	23.5%	20.2%	43.1%	36.0%	37.6%	33.6%	26.2%	30.4%
	4.	↓	9.8%	9.9%	9.7%	7.8%	7.7%	11.2%	10.7%	12.3%	10.1%	4.3%	15.0%	10.6%	8.3%	12.2%	9.5%
	5.	大変悪い影響	7.4%	7.3%	7.5%	5.0%	4.1%	8.6%	6.7%	10.8%	8.9%	9.5%	7.0%	11.8%	6.3%	8.4%	9.5%
	6.	該当しない	3.9%	2.1%	5.3%	8.8%	3.6%	2.9%	2.0%	2.0%	2.1%	16.4%	2.0%	2.4%	4.4%	4.0%	1.8%
		合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
			(2,934)	(1,255)	(1,679)	(399)	(364)	(575)	(609)	(204)	(425)	(116)	(100)	(85)	(1,527)	(1,051)	(336)
	b)	研究のための施設や設備															
	1.	大変良い影響	23.7%	28.3%	20.2%	12.4%	12.7%	29.1%	27.8%	26.3%	33.9%	21.0%	12.9%	14.0%	22.8%	24.4%	25.4%
	2.	↑	23.2%	26.1%	21.0%	17.9%	27.5%	23.8%	24.5%	18.0%	24.6%	16.8%	21.8%	25.6%	23.7%	21.6%	24.9%
	3.	どちらでもない	29.1%	24.1%	32.8%	48.0%	41.6%	21.7%	21.5%	27.3%	19.2%	33.6%	32.7%	34.9%	31.5%	26.9%	25.1%
	4.	↓	13.7%	12.2%	14.8%	12.4%	8.8%	14.6%	14.9%	17.1%	13.0%	10.1%	22.8%	19.8%	11.7%	16.0%	15.6%
	5.	大変悪い影響	7.8%	7.4%	8.1%	4.5%	5.2%	9.1%	9.9%	10.2%	8.1%	7.6%	8.9%	4.7%	6.9%	9.0%	7.8%
	6.	-該当しない	2.6%	1.9%	3.1%	4.7%	4.1%	1.7%	1.5%	1.0%	1.2%	10.9%	1.0%	1.2%	3.3%	2.1%	1.2%
		合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

c) 担当の授業科目数															
	(2,946)	(1,259)	(1,687)	(402)	(363)	(584)	(609)	(205)	(422)	(119)	(101)	(86)	(1,542)	(1,049)	(334)
1. 大変良い影響	4.0%	3.4%	4.4%	4.9%	6.8%	3.6%	2.5%	3.9%	2.6%	7.6%	1.9%	6.0%	3.8%	4.8%	2.7%
2. どちらでもない	8.8%	7.9%	9.5%	9.6%	15.1%	7.3%	7.9%	4.9%	6.9%	9.3%	12.5%	9.5%	9.9%	7.3%	8.4%
3. どちらでもない	46.7%	50.6%	43.8%	38.9%	38.1%	45.2%	50.5%	52.4%	59.5%	37.3%	44.2%	46.4%	48.6%	43.0%	49.1%
4. 大変悪い影響	25.9%	23.8%	27.5%	33.5%	27.1%	27.0%	27.3%	29.6%	14.0%	22.0%	26.9%	21.4%	24.4%	29.1%	22.9%
5. 該当しない	10.0%	8.4%	11.1%	11.0%	12.8%	8.2%	8.2%	7.8%	5.9%	6.8%	13.5%	13.1%	8.9%	11.3%	10.5%
6. 該当しない	4.6%	5.9%	3.7%	2.0%	1.9%	4.2%	3.6%	1.5%	11.1%	16.9%	1.0%	3.6%	4.4%	4.5%	6.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,947)	(1,250)	(1,697)	(406)	(365)	(578)	(608)	(206)	(422)	(118)	(104)	(84)	(1,530)	(1,063)	(332)
d) 担当授業科目の種類															
1. 大変良い影響	3.9%	3.4%	4.4%	4.7%	4.9%	3.6%	3.6%	3.9%	2.1%	7.6%	3.8%	4.7%	4.0%	4.3%	2.4%
2. どちらでもない	12.6%	11.5%	13.4%	14.8%	19.7%	10.9%	12.6%	8.3%	8.6%	10.2%	15.2%	14.1%	13.2%	11.9%	12.3%
3. どちらでもない	54.6%	57.1%	52.8%	49.9%	44.9%	55.3%	56.4%	62.9%	62.9%	43.2%	56.2%	55.3%	56.1%	52.6%	54.4%
4. 大変悪い影響	17.6%	15.7%	19.0%	22.0%	20.5%	18.5%	18.0%	19.0%	10.0%	14.4%	18.1%	12.9%	16.2%	19.6%	17.1%
5. 該当しない	5.5%	5.3%	5.7%	5.7%	7.4%	6.4%	4.8%	4.4%	3.6%	3.4%	5.7%	7.1%	4.9%	6.4%	5.4%
6. 該当しない	5.8%	7.1%	4.8%	3.0%	2.5%	5.2%	4.6%	1.5%	12.9%	21.2%	1.0%	5.9%	5.6%	5.2%	8.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,946)	(1,248)	(1,698)	(405)	(365)	(577)	(610)	(205)	(420)	(118)	(105)	(85)	(1,535)	(1,056)	(333)
e) 授業に登録する学生数															
1. 大変良い影響	2.4%	1.7%	2.9%	3.0%	3.3%	2.2%	1.3%	2.0%	1.0%	7.6%	2.9%	4.7%	2.3%	2.5%	2.4%
2. どちらでもない	6.1%	5.9%	6.2%	9.4%	8.8%	5.2%	4.8%	4.4%	3.6%	6.8%	8.7%	5.9%	6.6%	6.0%	3.9%
3. どちらでもない	60.9%	65.9%	57.2%	48.4%	61.6%	61.0%	61.1%	74.0%	70.6%	45.8%	62.5%	55.3%	61.7%	58.8%	63.9%
4. 大変悪い影響	17.9%	14.2%	20.7%	25.4%	17.3%	19.2%	21.0%	12.7%	7.4%	18.6%	17.3%	21.2%	17.0%	19.8%	16.9%
5. 該当しない	7.0%	4.9%	8.6%	10.9%	7.4%	7.3%	6.6%	5.4%	3.6%	5.9%	7.7%	8.2%	7.0%	7.7%	5.4%
6. 該当しない	5.7%	7.4%	4.5%	3.0%	1.6%	5.2%	5.3%	1.5%	13.9%	15.3%	1.0%	4.7%	5.5%	5.4%	7.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,942)	(1,243)	(1,699)	(405)	(365)	(579)	(609)	(204)	(418)	(118)	(104)	(85)	(1,532)	(1,057)	(332)
f) 研究助手を務める学生の質															
1. 大変良い影響	8.6%	11.3%	6.6%	3.1%	3.7%	12.4%	12.9%	11.0%	8.6%	3.7%	5.0%	2.4%	9.2%	8.4%	6.9%
2. どちらでもない	17.2%	22.1%	13.5%	5.2%	12.4%	20.2%	26.6%	26.5%	14.1%	9.2%	13.9%	12.2%	17.5%	17.4%	14.7%
3. どちらでもない	30.5%	27.9%	32.5%	26.1%	29.9%	28.0%	27.4%	34.0%	37.2%	22.9%	48.5%	35.4%	30.5%	28.2%	37.8%
4. 大変悪い影響	7.4%	6.6%	8.1%	2.1%	4.0%	8.3%	11.9%	13.5%	4.8%	1.8%	9.9%	9.8%	7.4%	8.2%	5.7%
5. 該当しない	2.4%	2.0%	2.7%	1.8%	1.7%	1.6%	3.5%	2.0%	2.6%	0.9%	4.0%	4.9%	2.3%	2.9%	1.5%
6. 該当しない	33.8%	30.1%	36.6%	61.8%	48.3%	29.6%	17.6%	13.0%	32.6%	61.5%	18.8%	35.4%	33.1%	34.9%	33.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,866)	(1,228)	(1,638)	(387)	(354)	(565)	(595)	(200)	(417)	(109)	(101)	(82)	(1,486)	(1,028)	(333)

問	研究大 の大学	研究大 の大学	人文科 学系	社会科学 学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学 系	体育学 系	その他 学系	教授	助教授	講師	
															全体
問49	研究活動が受ける影響														
g)	指導する学生数														
	1. 大変良い影響	5.1%	6.3%	4.3%	3.5%	5.8%	7.8%	3.8%	7.4%	4.8%	7.1%	5.3%	5.4%	3.3%	
	2. ↑	16.0%	20.1%	13.1%	10.4%	20.4%	22.8%	8.9%	6.6%	17.3%	10.6%	16.7%	16.4%	12.6%	
	3. どちらでもない	45.7%	44.5%	46.6%	46.2%	40.1%	41.3%	41.0%	44.6%	47.1%	52.9%	46.6%	42.8%	50.2%	
	4. ↓	18.5%	15.9%	20.5%	23.2%	19.3%	20.5%	18.5%	20.7%	14.4%	16.5%	17.8%	20.7%	15.6%	
	5. 大変悪い影響	6.1%	4.0%	7.5%	8.1%	4.7%	6.0%	3.9%	2.9%	6.7%	9.4%	5.6%	6.8%	5.7%	
	6. 該当しない	8.5%	9.2%	8.0%	8.6%	9.7%	3.6%	2.9%	9.1%	9.6%	3.5%	7.9%	8.0%	12.6%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(2,921)	(1,236)	(1,685)	(396)	(569)	(605)	(205)	(417)	(121)	(104)	(85)	(1,523)	(1,044)	(333)
h)	学外の専門的活動														
	1. 大変良い影響	12.1%	11.2%	12.8%	11.8%	10.3%	12.5%	8.8%	9.5%	31.1%	10.8%	12.3%	11.7%	12.5%	
	2. ↑	24.2%	25.1%	23.5%	23.8%	27.7%	28.0%	23.0%	24.8%	16.8%	26.5%	25.2%	23.9%	20.2%	
	3. どちらでもない	44.1%	45.5%	43.1%	42.4%	44.2%	45.0%	49.5%	44.2%	33.6%	46.1%	43.9%	43.4%	47.6%	
	4. ↓	6.7%	7.0%	6.5%	4.3%	7.7%	6.4%	7.4%	6.7%	7.6%	12.7%	6.1%	6.9%	6.0%	
	5. 大変悪い影響	1.7%	2.0%	1.4%	1.3%	2.1%	0.7%	2.5%	2.4%	0.8%	2.0%	2.4%	1.4%	1.5%	
	6. 該当しない	11.1%	9.2%	12.6%	15.5%	15.5%	7.4%	8.8%	12.4%	10.1%	2.0%	7.3%	10.3%	12.2%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(2,928)	(1,245)	(1,683)	(399)	(575)	(607)	(204)	(419)	(119)	(102)	(82)	(1,520)	(1,051)	(336)
i)	管理運営活動														
	1. 大変良い影響	2.6%	2.5%	2.6%	3.0%	1.9%	1.1%	3.9%	3.5%	2.6%	2.0%	2.7%	2.5%	2.4%	
	2. ↑	5.4%	6.2%	4.9%	5.0%	4.7%	4.6%	3.4%	9.0%	2.6%	4.0%	4.9%	5.8%	4.8%	
	3. どちらでもない	34.9%	31.9%	37.1%	31.4%	33.8%	41.3%	30.7%	34.9%	33.3%	54.5%	43.2%	31.7%	37.3%	
	4. ↓	27.6%	28.9%	26.7%	27.7%	29.3%	28.7%	31.7%	24.5%	25.6%	20.8%	21.0%	29.3%	22.2%	
	5. 大変悪い影響	19.5%	22.6%	17.1%	20.7%	22.2%	16.1%	25.4%	16.3%	9.4%	13.9%	17.3%	21.6%	15.0%	
	6. 該当しない	10.0%	7.9%	11.6%	12.2%	10.7%	8.2%	4.9%	11.8%	26.5%	5.0%	9.9%	8.9%	14.7%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(2,939)	(1,252)	(1,687)	(401)	(580)	(610)	(205)	(424)	(117)	(101)	(81)	(1,528)	(1,055)	(334)
問50	学術研究条件に関する意見について														
a)	教員評価ではすぐれた研究業績が重要														
	1. 賛成 (はい)	51.0%	61.1%	43.9%	46.6%	46.5%	54.2%	50.7%	55.6%	50.0%	44.4%	54.7%	53.9%	48.3%	
	2. ↑	30.4%	27.9%	32.1%	28.0%	35.4%	27.6%	32.8%	33.0%	25.1%	28.8%	32.6%	29.7%	30.3%	
	3. どちらでもない	12.2%	7.5%	15.4%	19.2%	9.6%	11.3%	8.1%	11.8%	12.8%	11.3%	8.4%	11.2%	12.5%	
	4. ↓	2.7%	1.2%	3.8%	2.9%	4.3%	3.4%	1.5%	2.5%	1.9%	2.4%	0.0%	2.1%	3.5%	
	5. 反対 (いいえ)	3.3%	2.1%	4.2%	3.1%	3.8%	3.4%	4.5%	4.6%	3.2%	2.4%	3.2%	2.7%	4.5%	
	6. 該当しない	0.5%	0.1%	0.7%	0.2%	0.5%	0.0%	0.0%	0.4%	3.2%	0.8%	1.1%	0.3%	0.0%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,285)	(1,354)	(1,941)	(479)	(396)	(638)	(221)	(475)	(156)	(124)	(95)	(1,763)	(1,137)	(368)
b)	終身在職権を得るには著書や論文公表が必要														
	1. 賛成 (はい)	23.3%	31.6%	17.6%	16.5%	25.1%	29.7%	25.6%	24.7%	25.1%	6.7%	12.3%	24.4%	21.2%	

2.	↑	12.5%	13.4%	11.8%	10.8%	17.5%	8.7%	12.9%	9.8%	14.9%	11.4%	15.6%	12.8%	12.2%	12.5%	14.5%	
3.	どちらでもない	16.2%	11.5%	19.4%	20.5%	11.9%	12.0%	15.4%	13.5%	16.2%	22.1%	32.0%	17.0%	16.6%	14.8%	19.6%	
4.	↓	2.5%	1.7%	3.1%	2.7%	3.7%	1.6%	2.9%	3.7%	1.5%	2.0%	4.1%	3.2%	2.8%	2.2%	2.2%	
5.	反対(いいえ)	17.5%	14.6%	19.5%	23.3%	15.9%	17.0%	13.4%	17.7%	16.0%	26.8%	14.8%	18.1%	15.9%	19.7%	18.2%	
6.	該当しない	28.0%	27.2%	28.6%	26.2%	25.9%	31.0%	29.8%	30.7%	26.3%	30.9%	21.3%	22.3%	28.1%	29.6%	22.1%	
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,205)	(1,317)	(1,888)	(473)	(378)	(619)	(628)	(215)	(463)	(149)	(122)	(94)	(1,721)	(1,101)	(358)	
c) 出版物は「基的」に評価されるだけ																	
1.	賛成(はい)	18.5%	15.9%	20.2%	16.4%	13.3%	18.5%	25.1%	30.4%	15.3%	6.1%	19.5%	16.3%	14.5%	23.6%	22.7%	
2.	↑	24.6%	24.8%	24.5%	23.5%	21.0%	28.2%	25.2%	23.5%	26.1%	11.5%	24.4%	34.8%	23.4%	25.3%	28.5%	
3.	どちらでもない	27.6%	25.8%	28.8%	29.4%	30.8%	25.8%	25.9%	23.5%	29.7%	31.8%	26.0%	21.7%	28.5%	25.4%	29.3%	
4.	↓	9.9%	12.6%	8.1%	9.5%	10.8%	10.0%	10.3%	8.3%	10.8%	6.1%	11.4%	7.6%	11.2%	8.6%	7.5%	
5.	反対(いいえ)	14.8%	18.7%	12.1%	18.3%	20.8%	13.4%	10.0%	12.4%	13.2%	19.6%	16.3%	16.3%	17.7%	12.4%	8.0%	
6.	該当しない	4.6%	2.2%	6.3%	2.9%	3.3%	4.0%	3.4%	1.8%	4.9%	25.0%	2.4%	3.3%	4.7%	4.6%	4.1%	
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,245)	(1,338)	(1,907)	(476)	(390)	(627)	(638)	(217)	(471)	(148)	(123)	(92)	(1,735)	(1,122)	(362)	
d) 希望以上の研究をしなければと感じる																	
1.	賛成(はい)	14.3%	15.6%	13.4%	10.6%	10.2%	16.1%	16.4%	15.2%	17.0%	8.1%	15.4%	19.4%	10.8%	17.9%	20.2%	
2.	↑	22.7%	24.6%	21.4%	16.7%	18.3%	23.4%	25.0%	24.0%	28.8%	12.8%	22.0%	30.1%	21.0%	22.7%	30.7%	
3.	どちらでもない	30.2%	27.3%	32.2%	32.3%	31.6%	27.4%	31.5%	30.0%	27.3%	31.8%	37.4%	24.7%	31.7%	28.5%	28.5%	
4.	↓	10.3%	11.4%	9.6%	9.9%	13.1%	11.8%	11.0%	10.6%	8.0%	6.8%	8.9%	8.6%	10.5%	10.6%	8.8%	
5.	反対(いいえ)	20.3%	19.6%	20.8%	29.2%	25.1%	18.8%	14.5%	19.4%	17.0%	31.1%	15.4%	15.1%	23.5%	18.2%	11.9%	
6.	該当しない	2.1%	1.5%	2.6%	1.3%	1.8%	2.4%	1.6%	0.9%	1.9%	9.5%	0.8%	2.2%	2.5%	2.1%	0.0%	
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,228)	(1,334)	(1,894)	(473)	(383)	(627)	(635)	(217)	(465)	(148)	(123)	(93)	(1,721)	(1,120)	(362)	
e) 政治あるいはイデオロギーは出版を制約しない																	
1.	賛成(はい)	30.3%	31.2%	29.7%	24.2%	30.8%	30.5%	34.1%	37.2%	29.8%	33.8%	24.4%	23.4%	33.1%	28.2%	24.9%	
2.	↑	21.1%	21.1%	21.1%	21.0%	27.5%	20.1%	20.5%	20.9%	19.2%	13.1%	25.2%	20.2%	22.0%	20.3%	18.6%	
3.	どちらでもない	24.7%	23.3%	25.7%	24.8%	20.3%	24.4%	25.7%	21.9%	24.1%	24.8%	33.3%	33.0%	25.4%	22.4%	28.5%	
4.	↓	11.6%	13.0%	10.6%	15.7%	11.3%	11.9%	9.9%	9.8%	12.7%	10.3%	7.3%	7.3%	8.7%	14.7%	16.2%	
5.	反対(いいえ)	6.4%	6.2%	6.6%	11.3%	7.5%	6.9%	3.8%	4.7%	5.5%	4.8%	6.5%	4.3%	4.8%	8.8%	6.8%	
6.	該当しない	5.9%	5.3%	6.3%	3.0%	2.6%	6.1%	6.1%	5.6%	8.7%	13.1%	3.3%	7.4%	6.0%	5.6%	4.9%	
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,234)	(1,331)	(1,903)	(471)	(389)	(622)	(639)	(215)	(473)	(145)	(123)	(94)	(1,725)	(1,117)	(365)	
f) 5年前より研究費を獲得し易い																	
1.	賛成(はい)	9.9%	11.6%	8.7%	4.5%	10.5%	10.2%	11.3%	12.3%	11.2%	10.0%	8.9%	12.6%	9.0%	11.0%	10.7%	
2.	↑	14.5%	16.9%	12.9%	9.1%	15.4%	14.2%	19.1%	13.7%	15.2%	11.3%	11.4%	14.7%	14.6%	13.3%	17.5%	
3.	どちらでもない	46.3%	43.3%	48.4%	53.2%	46.3%	44.8%	45.3%	42.9%	41.8%	44.7%	56.1%	49.5%	47.9%	45.3%	41.6%	
4.	↓	9.7%	11.1%	8.8%	7.7%	8.7%	10.5%	10.4%	14.2%	11.4%	4.0%	12.2%	3.2%	8.9%	10.9%	10.7%	
5.	反対(いいえ)	14.8%	15.1%	14.6%	16.2%	12.6%	17.9%	11.8%	16.0%	18.1%	12.0%	7.3%	13.7%	14.8%	15.1%	13.7%	
6.	該当しない	4.7%	2.0%	6.6%	9.4%	6.4%	2.4%	2.2%	0.9%	2.3%	18.0%	4.1%	6.3%	4.8%	4.3%	5.8%	
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,256)	(1,340)	(1,916)	(470)	(389)	(627)	(645)	(219)	(474)	(150)	(123)	(95)	(1,740)	(1,124)	(366)	

問	学	研究大	その他	人文科	社会科	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師	
																学系
問50.	学術研究条件に関する意見について															
g)	継続的な研究活動が期待されている															
	1. 賛成 (はい)	34.1%	42.1%	28.5%	32.6%	31.5%	37.0%	35.2%	33.0%	36.3%	37.3%	19.5%	28.4%	35.6%	30.5%	
	2. 賛成 (いい)	29.3%	29.6%	29.0%	22.8%	37.2%	28.7%	28.9%	27.1%	33.1%	24.8%	29.3%	35.8%	29.5%	32.4%	
	3. どちらでもない	26.4%	21.5%	29.8%	30.9%	22.2%	23.3%	27.2%	28.4%	24.3%	24.2%	38.2%	24.2%	25.1%	27.8%	
	4. 反対 (いいえ)	3.4%	2.5%	4.0%	4.9%	3.1%	3.3%	3.9%	4.1%	1.7%	2.0%	3.3%	3.2%	3.1%	3.0%	
	5. 反対 (悪い)	4.4%	3.2%	5.2%	5.3%	4.4%	5.4%	3.0%	5.5%	3.6%	3.9%	4.1%	4.2%	3.8%	5.2%	
	6. 該当しない	2.5%	1.1%	3.5%	3.6%	1.6%	2.2%	1.9%	1.8%	1.1%	7.8%	5.7%	4.2%	2.8%	1.1%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,254)	(1,337)	(1,917)	(473)	(387)	(627)	(640)	(218)	(474)	(153)	(123)	(95)	(1,734)	(1,127)	(367)
h)	教員評価に国際的活動が重要															
	1. 賛成 (はい)	31.6%	38.6%	26.7%	24.3%	24.7%	37.6%	32.1%	31.1%	37.8%	30.0%	25.2%	28.0%	31.4%	36.3%	
	2. 賛成 (いい)	32.8%	33.2%	32.6%	28.3%	33.9%	31.7%	32.1%	36.1%	35.2%	27.3%	48.8%	33.3%	33.2%	33.1%	
	3. どちらでもない	24.6%	21.1%	27.1%	31.5%	29.0%	20.8%	26.2%	20.1%	20.7%	25.3%	19.5%	28.0%	25.0%	23.2%	
	4. 反対 (いいえ)	3.6%	2.6%	4.3%	5.1%	5.4%	3.8%	3.4%	4.1%	1.1%	2.7%	1.6%	4.3%	3.2%	3.3%	
	5. 反対 (悪い)	5.4%	4.1%	6.3%	7.9%	5.4%	5.4%	4.0%	7.8%	4.2%	5.3%	4.1%	4.3%	5.2%	6.7%	
	6. 該当しない	1.9%	0.4%	3.0%	3.0%	1.5%	0.6%	2.0%	0.9%	1.1%	9.3%	0.8%	2.2%	1.9%	1.4%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		(3,256)	(1,342)	(1,914)	(470)	(389)	(630)	(644)	(219)	(474)	(150)	(123)	(93)	(1,737)	(1,126)	(366)
問51.	どの組織でサービスタクティブ活動をしましたか (注: 1, 8, 8, 9 標本について)															
	1. 企業や産業界	24.6%	32.9%	22.2%	4.8%	19.9%	17.8%	46.1%	36.6%	30.1%	10.5%	21.0%	20.6%	26.9%	21.9%	
	2. 教育機関	29.8%	33.6%	28.6%	26.7%	32.3%	25.4%	22.4%	21.1%	43.4%	29.8%	59.7%	46.0%	32.2%	29.1%	
	3. 地方自治体	29.6%	25.6%	30.7%	23.8%	45.3%	17.8%	25.6%	44.7%	35.3%	22.6%	56.5%	33.3%	34.9%	24.4%	
	4. 国の政府機関	16.7%	25.8%	14.1%	8.8%	25.9%	16.6%	19.7%	23.6%	21.3%	4.8%	8.1%	7.9%	22.1%	10.8%	
	5. 私的関係の国際機関	17.7%	13.3%	19.0%	13.9%	20.9%	13.3%	14.3%	13.8%	32.1%	18.5%	29.0%	14.3%	19.1%	14.7%	
	6. 政府関係の国際機関	2.3%	4.7%	1.6%	1.1%	5.0%	1.2%	3.7%	3.3%	2.4%	0.0%	0.0%	1.6%	3.0%	1.9%	
	7. その他の国際機関	3.5%	5.0%	3.1%	1.8%	2.5%	3.3%	4.4%	4.1%	5.6%	1.6%	6.5%	3.2%	4.6%	2.2%	
	8. その他	5.0%	6.2%	4.6%	5.9%	6.0%	5.3%	4.7%	4.1%	5.6%	5.6%	1.6%	1.6%	4.3%	6.4%	
	合計	129.2%	147.2%	124.1%	86.8%	157.7%	100.6%	140.9%	151.2%	175.9%	93.5%	182.3%	128.6%	147.0%	111.3%	103.2%
		(2,441)	(621)	(1,820)	(237)	(317)	(340)	(572)	(186)	(438)	(116)	(113)	(81)	(1,516)	(712)	(192)
問52.	有給のサービスタクティブ活動は何%															
	(中央値)	40%	40%	40%	50%	60%	10%	20%	20%	60%	50%	30%	50%	37.5%	40%	50%
問53.	サービスタクティブ活動が受ける影響															
a)	担当の授業科目数															
	1. 大変良い影響	4.3%	3.1%	5.2%	4.4%	5.6%	2.4%	3.5%	3.8%	4.4%	0.9%	9.4%	7.5%	4.7%	3.6%	
	2. 大変良い影響	7.5%	7.4%	7.5%	8.2%	11.2%	3.5%	7.9%	5.5%	6.8%	7.2%	10.3%	10.0%	8.0%	6.9%	
	3. どちらでもない	59.0%	60.3%	58.0%	59.8%	57.2%	59.0%	59.1%	68.7%	60.0%	56.8%	54.7%	51.2%	61.3%	55.8%	
	4. どちらでもない	10.8%	10.3%	11.1%	9.2%	13.6%	10.1%	12.5%	11.5%	7.5%	8.1%	12.0%	15.0%	10.2%	12.2%	
	5. 大変悪い影響	4.7%	3.8%	5.2%	2.8%	5.0%	5.9%	6.6%	4.4%	2.7%	1.8%	4.3%	6.3%	3.9%	6.5%	
	6. 該当しない	13.8%	15.1%	12.9%	15.5%	7.4%	19.1%	10.4%	6.0%	18.7%	25.2%	9.4%	10.0%	11.8%	15.3%	

問	全体	研究大学の学系										講師											
		工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系	教授	助教授	講師													
問53. サービス活動が受ける影響																							
f) 研究資金の獲得し易さ																							
1. 大変良い影響	6.4%	6.8%	6.1%	2.9%	6.6%	6.7%	10.3%	6.1%	5.4%	3.7%	5.2%	3.8%	7.3%	5.3%	4.9%								
2. ↑	16.5%	20.5%	13.5%	8.9%	13.7%	15.2%	23.4%	19.0%	21.1%	7.4%	10.4%	10.1%	16.7%	16.1%	15.7%								
3. どちらでもない	57.2%	53.8%	59.7%	59.1%	63.9%	52.7%	52.8%	63.1%	55.0%	52.8%	66.1%	62.0%	57.3%	57.2%	56.0%								
4. ↓	3.4%	3.3%	3.6%	3.5%	2.4%	2.9%	3.1%	4.5%	2.9%	6.5%	4.3%	8.9%	3.2%	3.8%	3.7%								
5. 大変悪い影響	1.3%	1.6%	1.2%	1.0%	1.2%	1.7%	0.8%	1.1%	2.7%	0.0%	0.9%	2.5%	1.2%	1.6%	1.5%								
6. 該当しない	15.2%	14.0%	16.0%	24.6%	12.2%	20.9%	9.7%	6.1%	12.8%	29.6%	13.0%	12.7%	14.2%	15.9%	18.3%								
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%								
	(2,526)	(1,066)	(1,460)	(313)	(335)	(421)	(517)	(179)	(407)	(108)	(115)	(79)	(1,432)	(807)	(268)								
g) 学内の管理運営活動																							
1. 大変良い影響	1.9%	2.0%	1.8%	1.9%	2.4%	1.4%	1.7%	1.1%	2.0%	1.9%	4.3%	2.5%	2.5%	0.9%	1.9%								
2. ↑	5.3%	5.5%	5.2%	6.4%	6.3%	4.8%	5.0%	4.5%	6.9%	0.9%	2.6%	6.3%	5.4%	4.7%	6.7%								
3. どちらでもない	54.5%	53.7%	55.1%	50.8%	50.0%	50.1%	60.0%	64.6%	54.3%	51.9%	60.0%	50.6%	55.0%	54.4%	52.4%								
4. ↓	14.9%	16.2%	14.0%	12.5%	19.6%	16.4%	13.4%	13.5%	13.3%	15.7%	13.9%	20.3%	15.4%	14.9%	12.4%								
5. 大変悪い影響	7.6%	8.3%	7.0%	8.0%	9.2%	7.4%	8.3%	10.7%	5.2%	1.9%	5.2%	7.6%	8.1%	7.7%	4.5%								
6. 該当しない	15.8%	14.3%	16.8%	20.4%	12.5%	20.0%	11.5%	5.6%	18.4%	27.8%	13.9%	12.7%	13.6%	17.5%	22.1%								
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%								
	(2,523)	(1,061)	(1,462)	(313)	(336)	(421)	(515)	(178)	(407)	(108)	(115)	(79)	(1,430)	(807)	(267)								
h) 学外の専門的活動																							
1. 大変良い影響	7.8%	7.5%	8.1%	8.1%	8.1%	4.5%	9.9%	7.9%	5.9%	16.4%	7.8%	7.6%	9.1%	6.3%	5.6%								
2. ↑	20.3%	21.4%	19.5%	14.5%	20.7%	16.2%	23.5%	18.6%	22.7%	19.1%	30.2%	22.8%	21.3%	19.6%	16.9%								
3. どちらでもない	51.4%	51.3%	51.4%	51.3%	53.8%	52.7%	51.3%	61.0%	48.3%	42.7%	47.4%	48.1%	51.5%	51.3%	50.8%								
4. ↓	5.5%	5.7%	5.4%	5.5%	5.1%	4.8%	4.3%	6.8%	6.4%	4.5%	7.8%	8.9%	4.8%	6.6%	6.0%								
5. 大変悪い影響	1.5%	1.9%	1.2%	1.9%	0.9%	1.9%	1.4%	0.6%	2.5%	0.0%	0.0%	2.5%	1.5%	1.6%	1.5%								
6. 該当しない	13.5%	12.3%	14.4%	18.7%	11.4%	19.8%	9.7%	5.1%	14.3%	17.3%	6.9%	10.1%	11.9%	14.6%	19.2%								
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%								
	(2,517)	(1,060)	(1,457)	(310)	(333)	(419)	(515)	(177)	(406)	(110)	(116)	(79)	(1,425)	(807)	(266)								
問54. サービス活動に関する意見について																							
a) 社会問題に専門的に貢献する義務がある																							
1. はい	67.7%	69.7%	66.3%	55.2%	78.4%	54.2%	64.9%	78.8%	80.6%	53.1%	88.0%	75.0%	68.4%	65.2%	72.0%								
2. いいえ	15.3%	14.5%	15.8%	23.5%	12.6%	21.7%	15.8%	11.1%	8.5%	14.8%	5.1%	10.7%	15.4%	16.4%	10.9%								
3. 該当しない	17.0%	15.8%	17.8%	21.3%	9.0%	24.1%	19.2%	10.1%	10.8%	32.0%	6.8%	14.3%	16.2%	18.3%	17.1%								
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%								
	(2,772)	(1,150)	(1,622)	(362)	(357)	(489)	(556)	(189)	(434)	(128)	(117)	(84)	(1,546)	(912)	(293)								
b) サービス活動は教育研究の妨げになる																							
1. はい	16.4%	18.3%	15.0%	15.6%	14.4%	23.6%	15.4%	16.8%	15.9%	8.6%	9.5%	10.7%	16.0%	17.1%	16.7%								
2. いいえ	66.9%	65.9%	67.6%	64.9%	75.5%	55.4%	63.8%	74.2%	70.1%	73.4%	82.8%	69.0%	67.7%	67.4%	61.4%								
3. 該当しない	16.7%	15.8%	17.4%	19.5%	10.1%	20.9%	20.8%	8.9%	14.0%	18.0%	7.8%	20.2%	16.3%	15.5%	21.8%								
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%								

c) 経済的理由からサービス活動が必要である															
1. はい	9.7%	9.2%	10.1%	5.0%	8.5%	5.0%	6.2%	4.2%	28.1%	5.5%	7.8%	10.8%	6.9%	11.4%	18.6%
2. いいえ	62.4%	64.9%	60.6%	58.5%	71.3%	65.5%	65.8%	68.2%	50.5%	52.0%	68.7%	57.8%	64.4%	62.8%	52.2%
3. 該当しない	27.9%	25.9%	29.3%	36.5%	20.2%	29.5%	28.0%	27.6%	21.4%	42.5%	23.5%	31.3%	28.7%	25.9%	29.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,762)	(1,147)	(1,615)	(365)	(355)	(487)	(547)	(190)	(435)	(128)	(116)	(84)	(1,538)	(911)	(293)
d) 教員評価にサービス活動は重要である															
1. はい	26.6%	24.7%	28.0%	23.3%	23.6%	17.6%	27.6%	30.5%	31.9%	27.3%	42.2%	42.2%	26.3%	26.6%	28.7%
2. いいえ	49.9%	53.0%	47.6%	52.1%	55.6%	56.3%	46.4%	51.6%	49.1%	37.9%	37.9%	34.9%	49.0%	52.1%	47.1%
3. 該当しない	23.5%	22.3%	24.4%	24.7%	20.8%	26.1%	26.0%	17.9%	19.1%	34.8%	19.8%	22.9%	24.8%	21.2%	24.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,763)	(1,151)	(1,612)	(365)	(351)	(490)	(550)	(190)	(430)	(132)	(116)	(83)	(1,534)	(913)	(293)
問5 5. あなたの大学では次の決定はどこで下されるか															
a) 大学の管理者の選任															
1. 中央集権化	30.9%	13.6%	42.5%	34.0%	21.1%	24.0%	36.7%	18.8%	33.1%	49.0%	45.2%	29.5%	29.8%	30.5%	37.7%
2. ↑	9.8%	13.7%	7.1%	11.3%	10.9%	8.6%	9.1%	6.9%	13.0%	8.9%	10.5%	3.2%	9.0%	9.9%	13.6%
3. どちらでもない	10.8%	15.0%	8.0%	10.0%	9.7%	12.8%	7.1%	8.3%	11.0%	16.6%	11.3%	21.1%	10.8%	10.6%	11.4%
4. ↓	9.6%	13.0%	7.2%	8.5%	10.7%	9.7%	9.2%	12.8%	12.3%	3.8%	3.2%	8.4%	9.6%	10.2%	8.0%
5. 分権化	34.3%	41.8%	29.2%	31.2%	43.3%	41.8%	32.4%	50.0%	25.5%	13.4%	25.8%	34.7%	37.7%	33.2%	21.1%
6. わからない	4.7%	2.8%	6.0%	5.1%	4.3%	3.1%	5.5%	3.2%	5.0%	8.3%	4.0%	3.2%	3.2%	5.7%	8.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,241)	(1,303)	(1,938)	(471)	(393)	(617)	(638)	(218)	(462)	(157)	(124)	(95)	(1,742)	(1,113)	(361)
b) 新任教員の採用															
1. 中央集権化	15.6%	11.5%	18.4%	11.0%	8.1%	13.3%	17.2%	8.2%	25.5%	29.5%	26.6%	7.4%	11.6%	18.1%	27.1%
2. ↑	13.3%	13.7%	13.0%	11.4%	9.4%	11.9%	15.9%	11.9%	16.7%	12.8%	14.5%	14.7%	11.1%	15.0%	19.1%
3. どちらでもない	16.0%	16.2%	15.9%	16.9%	10.4%	17.2%	16.7%	13.2%	15.2%	22.4%	16.9%	17.9%	17.0%	15.0%	15.5%
4. ↓	13.1%	15.8%	11.2%	12.3%	14.2%	13.2%	15.0%	13.2%	10.0%	9.6%	15.3%	14.7%	14.1%	12.4%	10.5%
5. 分権化	37.2%	40.1%	35.3%	42.8%	54.5%	41.6%	30.8%	48.9%	25.3%	16.7%	24.2%	42.1%	43.4%	33.4%	18.2%
6. わからない	4.7%	2.7%	6.1%	5.5%	3.3%	2.7%	4.4%	4.6%	7.4%	9.0%	2.4%	3.2%	2.8%	6.2%	9.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,249)	(1,310)	(1,939)	(472)	(393)	(622)	(640)	(219)	(462)	(156)	(124)	(95)	(1,745)	(1,117)	(362)
c) 昇任と終身在職の決定															
1. 中央集権化	18.6%	14.0%	21.7%	14.6%	9.7%	15.7%	19.5%	9.8%	30.6%	32.7%	29.8%	11.6%	15.3%	20.1%	30.3%
2. ↑	15.2%	15.2%	15.2%	14.0%	10.2%	12.3%	19.2%	15.0%	17.4%	16.0%	19.4%	18.9%	12.8%	17.7%	18.6%
3. どちらでもない	16.0%	16.6%	15.6%	15.2%	13.5%	17.7%	15.4%	14.5%	16.1%	14.7%	20.2%	18.9%	17.0%	14.4%	15.6%
4. ↓	11.7%	14.0%	10.1%	13.3%	14.3%	12.3%	14.1%	9.8%	6.5%	10.3%	8.1%	9.5%	12.2%	11.7%	9.2%
5. 分権化	31.2%	33.7%	29.5%	36.4%	47.2%	35.9%	24.6%	43.0%	17.4%	16.0%	19.4%	38.9%	36.9%	27.9%	13.9%
6. わからない	7.3%	6.5%	7.9%	6.6%	5.1%	6.1%	7.2%	7.9%	12.1%	10.3%	3.2%	2.1%	5.7%	8.2%	12.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,227)	(1,299)	(1,928)	(473)	(392)	(610)	(637)	(214)	(461)	(156)	(124)	(95)	(1,731)	(1,111)	(360)

問55. あなたの大学の決定は次で下されるか	d) 予算の決定	研究大学の学系														
		全体	研究学	他の大学の学系	人文科学系	社会科学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系	教授	助教授	講師
	1. 中央集権化	37.4%	28.1%	43.7%	40.2%	38.8%	29.9%	38.4%	21.4%	46.5%	52.3%	37.9%	27.7%	35.3%	38.1%	46.1%
	2. ↑	19.0%	21.5%	17.3%	18.9%	18.3%	18.2%	19.7%	23.7%	19.8%	14.6%	18.5%	22.3%	18.3%	19.3%	21.9%
	3. どちらでもない	15.9%	20.0%	13.1%	14.7%	15.7%	19.3%	15.4%	15.8%	12.8%	11.3%	16.9%	23.4%	17.6%	14.7%	12.2%
	4. ↓	7.6%	10.0%	6.0%	6.0%	7.2%	8.6%	8.3%	9.8%	5.4%	6.0%	13.7%	6.4%	8.3%	7.3%	5.6%
	5. 分権化	13.6%	14.9%	12.7%	13.2%	14.7%	18.2%	12.3%	24.2%	6.7%	4.6%	9.7%	17.0%	15.9%	13.0%	3.6%
	6. わからない	6.5%	5.5%	7.2%	7.0%	5.4%	5.8%	6.0%	5.1%	8.7%	11.3%	3.2%	3.2%	4.6%	7.7%	10.6%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,221)	(1,299)	(1,922)	(470)	(389)	(616)	(636)	(215)	(460)	(151)	(124)	(94)	(1,726)	(1,110)	(360)
	e) 教員全体の教育負担の決定															
	1. 中央集権化	12.6%	8.8%	15.2%	15.3%	12.5%	8.5%	8.3%	6.6%	20.6%	23.2%	17.7%	8.5%	11.2%	12.1%	20.9%
	2. ↑	22.2%	11.7%	12.6%	13.4%	8.1%	9.8%	11.3%	9.4%	19.5%	10.3%	15.3%	11.7%	10.6%	12.7%	19.2%
	3. どちらでもない	22.5%	22.6%	22.5%	23.4%	18.1%	22.4%	22.8%	23.0%	23.0%	22.6%	26.6%	25.5%	23.3%	21.9%	20.6%
	4. ↓	14.4%	17.3%	12.4%	11.1%	16.3%	17.1%	17.6%	15.0%	9.8%	9.7%	14.5%	14.9%	14.8%	14.8%	10.9%
	5. 分権化	32.0%	34.9%	30.0%	30.4%	40.2%	37.6%	34.4%	40.8%	18.0%	23.9%	21.0%	34.0%	35.4%	31.7%	16.4%
	6. わからない	6.3%	4.8%	7.3%	6.4%	4.8%	4.7%	5.7%	5.2%	9.1%	10.3%	4.8%	5.3%	4.7%	6.8%	12.0%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,228)	(1,302)	(1,926)	(470)	(393)	(615)	(637)	(213)	(461)	(155)	(124)	(94)	(1,735)	(1,109)	(359)
	f) 学部学生の入学基準の設定															
	1. 中央集権化	18.5%	13.8%	21.6%	17.4%	13.5%	14.7%	18.4%	10.2%	33.1%	18.1%	20.5%	14.7%	16.0%	18.7%	29.7%
	2. ↑	12.9%	11.5%	13.8%	13.4%	9.2%	11.2%	15.2%	7.9%	18.0%	7.1%	11.5%	18.9%	12.8%	12.1%	16.4%
	3. どちらでもない	18.2%	20.1%	16.8%	16.2%	14.5%	20.6%	20.7%	18.5%	13.0%	18.1%	23.0%	25.3%	18.7%	17.5%	18.3%
	4. ↓	11.7%	14.0%	10.2%	12.1%	16.3%	11.3%	11.2%	16.7%	7.1%	10.3%	14.8%	7.4%	12.6%	11.6%	8.1%
	5. 分権化	30.9%	32.4%	29.9%	33.4%	41.5%	35.0%	26.6%	42.6%	15.4%	36.8%	23.8%	29.5%	34.5%	30.7%	13.9%
	6. わからない	7.9%	8.1%	7.7%	7.4%	5.1%	7.3%	7.9%	4.2%	13.4%	9.7%	6.6%	4.2%	5.4%	9.4%	13.6%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,228)	(1,302)	(1,926)	(470)	(393)	(618)	(632)	(216)	(462)	(155)	(122)	(95)	(1,735)	(1,109)	(360)
	g) 新たな教育課程の承認															
	1. 中央集権化	18.8%	17.3%	19.8%	17.9%	13.0%	16.3%	17.3%	14.2%	33.8%	17.4%	17.9%	14.6%	15.1%	20.3%	31.6%
	2. ↑	15.0%	15.2%	14.9%	15.3%	13.3%	13.8%	16.2%	12.8%	18.0%	12.9%	14.6%	13.5%	14.2%	15.2%	19.1%
	3. どちらでもない	19.3%	19.2%	19.3%	21.7%	16.6%	20.9%	20.9%	15.1%	14.3%	20.0%	24.4%	21.9%	20.3%	18.1%	18.8%
	4. ↓	11.5%	13.3%	10.4%	10.4%	13.5%	11.2%	12.1%	15.6%	7.6%	12.3%	15.4%	11.5%	12.5%	11.7%	6.4%
	5. 分権化	27.5%	27.8%	27.3%	27.9%	38.3%	30.7%	25.3%	37.2%	13.9%	27.1%	22.0%	32.3%	32.7%	25.0%	10.8%
	6. わからない	7.9%	7.3%	8.3%	6.8%	5.4%	7.1%	8.2%	5.0%	12.6%	10.3%	5.7%	6.3%	5.2%	9.8%	13.3%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,235)	(1,304)	(1,931)	(470)	(392)	(618)	(636)	(218)	(462)	(155)	(123)	(96)	(1,736)	(1,114)	(361)
	問56. 大学の管理運営にどの程度の影響を持つか															
	a) 講座：教室において															
	1. 大変影響力がある	32.4%	40.3%	26.9%	21.4%	25.4%	33.0%	36.9%	48.6%	43.5%	23.2%	23.0%	20.4%	43.0%	21.9%	13.2%

2. いくぶん	37.9%	34.8%	40.0%	45.4%	40.8%	39.5%	34.2%	30.6%	30.6%	34.2%	43.4%	46.2%	34.3%	43.9%	37.9%
3. ほんの少し	16.5%	15.8%	16.9%	19.7%	17.4%	15.3%	14.7%	11.1%	14.4%	21.9%	23.0%	25.8%	12.3%	19.8%	25.8%
4. 全く影響がない	7.5%	5.7%	8.8%	8.4%	9.0%	6.2%	6.3%	5.1%	8.8%	13.5%	5.7%	5.4%	5.0%	8.8%	15.4%
5. 該当しない	5.8%	3.4%	7.4%	5.2%	7.4%	6.0%	7.9%	4.6%	2.6%	7.1%	4.9%	2.2%	5.4%	5.5%	7.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,198)	(1,314)	(1,884)	(463)	(390)	(613)	(620)	(216)	(464)	(155)	(122)	(93)	(1,714)	(1,100)	(356)
b) 学科において															
1. 大変影響がある	10.5%	12.0%	9.4%	9.5%	9.7%	10.5%	15.1%	10.6%	8.3%	8.8%	4.9%	6.5%	16.6%	3.5%	2.5%
2. いくぶん	40.2%	39.8%	40.4%	38.7%	40.7%	46.1%	43.2%	47.7%	27.9%	32.0%	40.2%	42.4%	49.4%	33.0%	18.5%
3. ほんの少し	28.9%	28.9%	28.9%	33.1%	27.9%	27.7%	26.3%	30.6%	28.3%	26.5%	36.9%	30.4%	21.0%	39.4%	34.7%
4. 全く影響がない	15.1%	15.3%	15.0%	13.8%	16.9%	11.5%	11.2%	6.9%	29.6%	16.3%	13.1%	16.3%	7.8%	19.4%	37.0%
5. 該当しない	5.3%	4.0%	6.3%	4.9%	4.9%	4.2%	4.2%	4.2%	5.9%	16.3%	4.9%	4.3%	5.2%	4.7%	7.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,212)	(1,313)	(1,899)	(465)	(391)	(620)	(643)	(216)	(456)	(147)	(122)	(92)	(1,723)	(1,105)	(357)
c) 学部において															
1. 大変影響がある	4.6%	5.8%	3.7%	4.5%	5.6%	4.0%	3.7%	4.1%	6.1%	5.2%	4.1%	4.3%	7.4%	1.3%	1.4%
2. いくぶん	24.5%	26.2%	23.4%	23.6%	30.4%	24.9%	22.3%	31.5%	22.1%	23.4%	19.5%	20.4%	36.3%	12.2%	6.4%
3. ほんの少し	37.1%	35.0%	38.6%	40.6%	35.5%	39.6%	36.7%	43.8%	28.8%	35.1%	45.5%	40.9%	36.7%	40.6%	28.7%
4. 全く影響がない	29.6%	30.7%	28.9%	26.8%	26.0%	27.8%	33.1%	19.2%	40.0%	24.0%	25.2%	30.1%	16.0%	41.9%	57.7%
5. 該当しない	4.1%	2.3%	5.4%	4.5%	2.6%	3.7%	4.2%	1.4%	3.0%	12.3%	5.7%	4.3%	3.7%	4.0%	5.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,241)	(1,318)	(1,923)	(470)	(392)	(623)	(641)	(219)	(462)	(154)	(123)	(93)	(1,737)	(1,117)	(359)
d) 全学において															
1. 大変影響がある	1.8%	1.8%	1.7%	1.7%	2.0%	1.3%	1.4%	1.4%	1.5%	1.3%	4.0%	3.2%	2.5%	0.7%	0.8%
2. いくぶん	9.8%	8.9%	10.4%	9.6%	13.0%	9.1%	10.1%	11.1%	6.5%	12.8%	7.3%	10.5%	15.3%	3.7%	2.2%
3. ほんの少し	27.7%	25.2%	29.5%	31.2%	27.6%	29.3%	26.4%	30.4%	24.1%	33.6%	19.4%	29.5%	34.9%	21.6%	12.3%
4. 全く影響がない	54.9%	60.2%	51.2%	51.4%	53.7%	55.5%	55.6%	52.5%	62.7%	38.9%	63.7%	48.4%	41.2%	69.0%	78.3%
5. 該当しない	5.8%	3.9%	7.2%	6.2%	3.6%	4.9%	6.5%	4.6%	5.2%	13.4%	5.6%	8.4%	6.0%	5.1%	6.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,248)	(1,323)	(1,925)	(471)	(391)	(629)	(644)	(217)	(464)	(149)	(124)	(95)	(1,740)	(1,121)	(359)
問57. 管理や意思決定に関する意見について															
a) 管理者はかなりリーダーシップを発揮している															
1. はい	27.5%	18.8%	33.4%	34.0%	22.0%	19.8%	29.0%	22.2%	28.8%	49.7%	33.9%	20.2%	28.0%	26.3%	29.5%
2. ↑	27.9%	32.1%	25.0%	23.5%	32.4%	26.0%	26.0%	28.3%	30.5%	28.6%	29.0%	37.2%	29.9%	25.0%	26.2%
3. どちらでもない	23.2%	27.8%	20.1%	23.9%	23.6%	26.8%	20.5%	26.9%	21.2%	14.9%	23.4%	26.6%	22.4%	24.4%	24.2%
4. ↓	7.8%	7.8%	7.7%	8.5%	9.3%	9.0%	8.5%	7.1%	6.5%	3.1%	5.6%	5.3%	7.2%	8.5%	8.4%
5. いいえ	10.7%	9.6%	11.5%	7.7%	10.6%	13.7%	13.3%	10.4%	10.6%	3.1%	5.6%	9.6%	10.1%	12.4%	8.9%
6. 該当しない	2.9%	4.0%	2.2%	2.4%	2.1%	4.7%	2.8%	5.2%	2.4%	0.6%	2.4%	1.1%	2.5%	3.4%	2.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,230)	(1,304)	(1,926)	(468)	(386)	(620)	(639)	(212)	(462)	(161)	(124)	(94)	(1,738)	(1,106)	(359)

問	5	7.	管理や意思決定に関する意見について b) 学内の状況について十分な情報を得ている	研究大学の全体										講師				
				研究学	他の大学	人文科学系	社会科学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系		その他学系	教授	助教授	
			1. はい	6.1%	6.2%	6.0%	6.8%	4.7%	5.4%	5.4%	7.0%	6.3%	8.8%	7.2%	6.3%	7.9%	3.6%	4.4%
			2. ↑	24.0%	28.1%	21.2%	24.0%	26.2%	22.4%	21.9%	29.6%	25.3%	21.9%	25.6%	24.2%	28.5%	18.8%	18.6%
			3. どちらでもない	32.0%	29.1%	33.9%	33.8%	32.5%	31.5%	32.2%	28.2%	30.9%	35.6%	32.8%	31.6%	33.2%	31.6%	27.2%
			4. ↓	18.0%	18.1%	17.9%	16.1%	20.3%	19.4%	20.5%	16.9%	15.8%	13.1%	14.4%	17.9%	14.7%	22.5%	20.3%
			5. いいえ	18.2%	17.1%	18.9%	17.4%	15.1%	18.9%	18.0%	15.0%	21.0%	20.0%	17.6%	18.9%	13.9%	22.0%	26.9%
			6. 該当しない	1.8%	1.4%	2.1%	1.9%	1.3%	2.4%	1.9%	3.3%	0.9%	0.6%	2.4%	1.1%	1.7%	1.5%	2.5%
			合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
				(3,244)	(1,931)	(471)	(385)	(625)	(643)	(213)	(463)	(160)	(125)	(95)	(1,742)	(1,114)	(360)	
			c) 教員と管理者との意思疎通は貧弱だ															
			1. はい	19.9%	18.2%	21.0%	22.6%	19.6%	18.5%	20.9%	17.0%	20.0%	19.4%	21.6%	14.6%	17.1%	22.9%	24.7%
			2. ↑	22.0%	20.9%	22.8%	23.0%	22.2%	21.9%	23.5%	21.7%	17.4%	21.3%	24.0%	30.2%	20.7%	23.5%	24.7%
			3. どちらでもない	34.8%	33.7%	35.5%	33.8%	35.5%	37.2%	31.9%	33.0%	36.9%	38.1%	32.0%	33.3%	37.0%	33.6%	27.8%
			4. ↓	13.3%	13.9%	12.8%	13.4%	13.8%	11.4%	12.4%	14.6%	15.4%	13.1%	14.4%	13.5%	15.3%	10.2%	12.2%
			5. いいえ	4.8%	5.6%	4.3%	3.8%	5.2%	4.2%	4.6%	5.7%	5.6%	6.9%	3.2%	6.3%	5.4%	3.4%	5.8%
			6. 該当しない	5.2%	7.6%	3.6%	3.4%	3.7%	6.8%	6.8%	8.0%	4.8%	1.3%	4.8%	2.1%	4.4%	6.3%	4.7%
			合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
				(3,228)	(1,308)	(1,920)	(470)	(383)	(621)	(637)	(212)	(461)	(160)	(125)	(96)	(1,736)	(1,104)	(360)
			d) 管理者はしばしば独裁的である															
			1. はい	17.0%	14.1%	19.0%	14.8%	14.9%	16.1%	18.8%	13.1%	20.6%	26.4%	18.4%	8.5%	14.4%	19.8%	21.8%
			2. ↑	20.5%	19.0%	21.6%	19.7%	17.8%	21.0%	23.2%	16.0%	18.0%	21.4%	21.6%	29.8%	19.0%	21.7%	24.1%
			3. どちらでもない	32.3%	32.0%	32.5%	34.8%	30.0%	31.3%	30.8%	35.7%	33.8%	31.4%	31.2%	28.7%	33.2%	31.4%	31.4%
			4. ↓	10.7%	12.4%	9.5%	10.5%	15.4%	11.2%	9.7%	10.3%	8.2%	8.2%	13.6%	10.6%	12.1%	9.3%	7.6%
			5. いいえ	13.9%	14.4%	13.6%	15.7%	18.5%	13.4%	10.2%	17.8%	13.4%	10.7%	10.4%	19.1%	16.2%	11.1%	10.1%
			6. 該当しない	5.7%	8.2%	3.9%	4.5%	3.4%	7.0%	7.4%	7.0%	5.9%	1.9%	4.8%	3.2%	5.0%	6.7%	5.0%
			合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
				(3,217)	(1,308)	(1,909)	(466)	(383)	(614)	(639)	(213)	(461)	(159)	(125)	(94)	(1,731)	(1,101)	(357)
			e) 教員が意思決定過程に参加していないことが問題															
			1. はい	13.5%	10.8%	15.4%	15.4%	12.9%	11.7%	13.9%	10.3%	15.1%	14.6%	19.4%	7.5%	11.5%	15.0%	19.3%
			2. ↑	16.5%	14.9%	17.6%	19.4%	13.6%	14.4%	16.6%	14.6%	15.7%	23.6%	16.9%	22.6%	13.9%	18.6%	23.0%
			3. どちらでもない	33.5%	32.6%	34.2%	29.2%	30.2%	32.8%	34.0%	28.6%	39.1%	38.9%	38.7%	34.4%	32.7%	33.8%	37.0%
			4. ↓	11.6%	13.2%	10.5%	13.0%	13.9%	11.9%	11.5%	11.7%	9.6%	9.6%	9.7%	11.8%	12.6%	11.1%	9.0%
			5. いいえ	15.3%	17.5%	13.9%	13.6%	19.7%	17.4%	14.2%	21.1%	13.3%	10.2%	9.7%	14.0%	18.4%	12.9%	7.0%
			6. 該当しない	9.5%	10.9%	8.5%	9.4%	9.7%	11.9%	9.8%	13.6%	7.2%	3.2%	5.6%	9.7%	10.7%	8.6%	4.8%
			合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
				(3,207)	(1,301)	(1,906)	(469)	(381)	(616)	(633)	(213)	(458)	(157)	(124)	(93)	(1,724)	(1,099)	(357)
			f) 学生は関係する政策の決定に関与すべき															
			1. はい	11.4%	9.8%	12.4%	14.0%	9.7%	11.2%	8.0%	14.0%	12.3%	11.5%	18.7%	9.7%	8.9%	13.9%	15.4%
			2. ↑	22.1%	21.3%	22.7%	23.6%	26.4%	22.8%	18.3%	16.8%	23.8%	19.1%	24.4%	24.7%	20.0%	23.8%	27.9%

3. どちらでもない	37.9%	36.3%	39.0%	38.4%	37.5%	40.5%	36.0%	34.0%	42.0%	39.0%	43.0%	39.9%	35.3%	36.3%
4. ↓	12.0%	13.1%	11.3%	10.7%	10.5%	15.2%	13.1%	11.9%	11.5%	9.8%	9.7%	12.0%	13.0%	8.7%
5. いいえ	13.5%	16.5%	11.4%	11.9%	14.2%	15.2%	15.9%	14.1%	13.4%	5.7%	7.5%	15.8%	11.0%	8.9%
6. 該当しない	3.2%	3.1%	3.3%	2.8%	3.7%	3.0%	4.2%	3.9%	2.5%	2.4%	5.4%	3.3%	3.0%	2.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,224)	(1,309)	(1,915)	(470)	(383)	(618)	(214)	(462)	(157)	(123)	(93)	(1,732)	(1,106)	(358)
g) 管理者は学問の自由を支持している														
1. はい	34.1%	34.7%	33.6%	33.7%	30.0%	33.9%	39.6%	33.5%	45.5%	26.6%	38.9%	38.9%	28.6%	27.0%
2. ↑	31.3%	29.5%	32.5%	32.7%	29.7%	30.9%	20.8%	31.7%	30.1%	34.7%	31.6%	30.2%	32.2%	33.5%
3. どちらでもない	22.7%	21.9%	23.3%	21.7%	23.5%	22.4%	27.4%	21.7%	18.6%	31.5%	18.9%	20.1%	25.5%	27.6%
4. ↓	3.6%	3.8%	3.5%	3.6%	5.4%	3.3%	2.8%	5.4%	1.9%	2.4%	3.2%	3.2%	3.7%	5.4%
5. いいえ	2.9%	2.5%	3.1%	3.1%	3.9%	2.8%	1.4%	3.3%	1.9%	1.6%	3.2%	2.5%	3.6%	2.5%
6. 該当しない	5.5%	7.5%	4.1%	4.7%	7.5%	6.8%	8.0%	4.3%	1.9%	3.2%	4.2%	5.1%	6.4%	3.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,215)	(1,302)	(1,913)	(471)	(383)	(616)	(212)	(460)	(156)	(124)	(95)	(1,735)	(1,098)	(355)
問58. 教育や研究に対する規制に関する意見について														
a) 教育内容を全く自由に決めることができる														
1. はい	50.8%	49.8%	51.5%	58.9%	66.2%	47.3%	43.1%	56.7%	39.3%	54.2%	50.8%	59.4%	44.9%	33.2%
2. ↑	29.1%	29.0%	29.2%	25.5%	23.8%	31.0%	36.2%	28.1%	27.5%	30.1%	29.8%	20.8%	26.9%	30.8%
3. どちらでもない	11.0%	10.5%	11.3%	8.8%	5.1%	10.8%	13.3%	9.2%	14.4%	9.6%	12.1%	16.7%	9.0%	12.4%
4. ↓	4.8%	5.4%	4.5%	3.8%	3.1%	6.8%	3.5%	4.6%	8.8%	3.0%	2.4%	2.1%	3.0%	6.7%
5. いいえ	3.5%	4.1%	3.0%	2.9%	1.8%	2.8%	3.2%	1.4%	7.9%	2.4%	4.8%	1.0%	2.2%	3.0%
6. 該当しない	0.7%	1.2%	0.4%	0.2%	0.0%	1.3%	0.6%	0.0%	2.1%	0.6%	0.0%	0.0%	0.6%	1.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,283)	(1,333)	(1,950)	(479)	(391)	(632)	(649)	(217)	(466)	(166)	(124)	(86)	(1,765)	(1,126)
b) どんな関心ある研究にも取り組める														
1. はい	59.3%	60.1%	58.7%	69.3%	71.9%	58.5%	53.4%	57.1%	48.6%	61.2%	56.8%	56.3%	65.5%	44.1%
2. ↑	26.2%	24.9%	27.1%	20.5%	18.9%	27.5%	31.5%	29.5%	28.0%	20.6%	26.4%	34.4%	23.0%	29.4%
3. どちらでもない	8.4%	8.2%	8.6%	6.7%	4.1%	8.1%	8.9%	8.3%	12.7%	11.5%	11.2%	5.2%	7.2%	7.8%
4. ↓	3.2%	3.5%	3.0%	2.3%	2.6%	3.6%	3.7%	2.8%	4.9%	1.8%	2.4%	0.0%	2.2%	4.5%
5. いいえ	2.3%	2.6%	2.1%	1.0%	1.5%	1.7%	2.0%	1.4%	4.7%	3.6%	3.2%	4.2%	1.5%	3.0%
6. 該当しない	0.6%	0.6%	0.7%	0.2%	1.0%	0.6%	0.5%	0.9%	1.1%	1.2%	0.0%	0.0%	0.7%	0.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,285)	(1,335)	(1,950)	(479)	(392)	(633)	(650)	(217)	(465)	(165)	(125)	(96)	(1,765)	(1,127)
問59. 日本では学問の自由は守られているか														
1. はい	69.5%	71.1%	68.4%	64.6%	73.1%	65.1%	75.2%	70.9%	69.0%	70.0%	66.7%	71.3%	73.8%	64.8%
2. いいえ	17.4%	17.5%	17.3%	22.8%	17.7%	20.6%	11.2%	17.4%	17.3%	12.5%	19.5%	14.9%	13.0%	22.0%
3. 該当しない	13.1%	11.4%	14.3%	12.6%	9.2%	14.3%	13.6%	11.7%	13.6%	17.5%	13.8%	13.8%	13.1%	13.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,202)	(1,310)	(1,892)	(461)	(379)	(621)	(633)	(213)	(462)	(160)	(123)	(87)	(1,719)	(1,097)

問	全体	研究大の他の大学										講師				
		学	学	学	学	学	学	学	学	学	学					
問60. あなたの仕事は定期的に評価されているか																
1.	はい	46.2%	45.5%	46.7%	42.5%	43.2%	42.7%	54.0%	42.7%	42.4%	54.2%	59.2%	45.1%	45.4%	46.4%	49.2%
2.	いいえ	53.8%	54.5%	53.3%	57.5%	56.8%	57.3%	46.0%	57.3%	57.6%	45.8%	40.8%	54.9%	54.6%	53.6%	50.8%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,192)	(1,305)	(1,887)	(457)	(380)	(616)	(637)	(213)	(460)	(153)	(120)	(91)	(1,708)	(1,098)	(360)
問61. どんな活動が評価されているか (注: 1, 8 8 9 標本について)																
1.	教育活動	19.4%	10.2%	22.0%	20.9%	15.9%	15.4%	19.5%	9.8%	19.3%	32.3%	33.9%	28.6%	22.4%	15.8%	16.7%
2.	研究活動	41.0%	32.7%	43.4%	37.0%	35.3%	37.6%	52.2%	35.0%	36.5%	37.9%	46.8%	58.7%	40.9%	41.4%	43.0%
3.	サービスタ活動	7.3%	3.8%	8.3%	6.2%	7.5%	4.4%	8.4%	4.9%	8.4%	6.5%	19.4%	11.1%	9.1%	5.3%	4.8%
4.	その他	1.3%	0.9%	1.4%	0.7%	2.0%	1.2%	1.2%	0.8%	1.2%	2.4%	4.8%	0.0%	1.5%	1.4%	0.5%
合計		69.0%	47.6%	75.1%	64.8%	60.7%	58.6%	81.3%	50.4%	65.5%	79.0%	104.8%	98.4%	73.9%	63.9%	65.1%
		(1,303)	(201)	(1,102)	(177)	(122)	(198)	(330)	(62)	(163)	(98)	(65)	(62)	(762)	(409)	(121)
問62. あなたの教育と研究を評価するのは誰か (注: 1, 8 8 9 標本について)																
a) 学科の同僚教員																
1.	教育	11.5%	11.6%	11.5%	11.0%	11.9%	11.8%	9.6%	8.9%	10.4%	18.5%	17.7%	14.3%	12.4%	10.2%	11.3%
2.	研究	15.3%	18.0%	14.5%	13.6%	17.9%	14.2%	16.0%	18.7%	13.7%	13.7%	16.1%	17.5%	15.9%	14.5%	15.1%
合計		26.8%	29.6%	26.0%	24.5%	29.9%	26.0%	25.6%	27.6%	24.1%	32.3%	33.9%	31.7%	28.3%	24.7%	26.3%
		(506)	(125)	(381)	(67)	(60)	(88)	(104)	(34)	(60)	(40)	(21)	(20)	(292)	(158)	(49)
b) 他学科の教員																
1.	教育	12.0%	3.6%	14.4%	11.0%	5.0%	9.2%	15.3%	9.8%	12.4%	15.3%	22.6%	17.5%	12.7%	10.8%	12.9%
2.	研究	15.9%	8.5%	18.0%	13.6%	10.0%	10.9%	23.2%	13.0%	17.7%	13.7%	21.0%	25.4%	14.5%	17.3%	20.4%
合計		27.9%	12.1%	32.4%	24.5%	14.9%	20.1%	38.4%	22.8%	30.1%	29.0%	43.5%	42.9%	27.2%	28.1%	33.3%
		(526)	(51)	(475)	(67)	(30)	(68)	(156)	(28)	(75)	(36)	(27)	(27)	(280)	(180)	(62)
c) 他学科の教員																
1.	教育	2.8%	1.2%	3.2%	3.3%	2.5%	2.7%	1.7%	1.6%	2.4%	7.3%	6.5%	1.6%	2.3%	3.1%	4.3%
2.	研究	6.8%	5.0%	7.4%	6.2%	7.5%	6.5%	7.6%	7.3%	4.8%	8.1%	6.5%	7.9%	6.9%	7.0%	7.0%
合計		9.6%	6.2%	10.6%	9.5%	10.0%	9.2%	9.4%	8.9%	7.2%	15.3%	12.9%	9.5%	9.2%	10.2%	11.3%
		(181)	(26)	(155)	(26)	(20)	(31)	(38)	(11)	(18)	(19)	(8)	(6)	(95)	(65)	(21)
d) 上級管理者																
1.	教育	11.3%	4.0%	13.4%	12.5%	9.5%	8.6%	8.4%	8.1%	13.7%	21.0%	21.0%	12.7%	12.2%	9.5%	12.9%
2.	研究	21.5%	8.8%	25.2%	23.4%	15.9%	14.8%	31.0%	14.6%	17.7%	25.8%	22.6%	27.0%	20.6%	23.0%	24.2%
合計		32.8%	12.8%	38.7%	35.9%	25.4%	23.4%	39.4%	22.8%	31.3%	46.8%	43.5%	39.7%	32.8%	32.5%	37.1%
		(621)	(54)	(567)	(98)	(51)	(79)	(160)	(28)	(78)	(58)	(27)	(25)	(338)	(208)	(69)
e) 学生																
1.	教育	10.3%	6.2%	11.5%	12.1%	6.5%	7.1%	9.6%	7.3%	13.7%	13.7%	14.5%	19.0%	11.3%	9.2%	9.7%
2.	研究	2.7%	1.9%	2.9%	1.8%	3.0%	1.8%	3.2%	3.3%	0.8%	6.5%	8.1%	1.6%	3.5%	1.6%	1.6%
合計		13.0%	8.1%	14.5%	13.9%	9.5%	8.9%	12.8%	10.6%	14.5%	20.2%	22.6%	20.6%	14.7%	10.8%	11.3%
		(246)	(34)	(212)	(38)	(19)	(30)	(52)	(13)	(36)	(25)	(14)	(13)	(152)	(69)	(21)
f) 学外者																
1.	教育	1.5%	0.7%	1.7%	2.2%	0.5%	0.9%	1.0%	0.0%	2.4%	1.6%	6.5%	3.2%	1.6%	0.9%	2.7%

2. 研究	7.5%	5.2%	8.2%	7.7%	8.0%	5.9%	7.1%	5.7%	8.4%	8.1%	11.3%	9.5%	9.2%	4.7%	8.1%
合計	9.0%	5.9%	9.9%	9.9%	8.5%	6.8%	8.1%	5.7%	10.8%	9.7%	17.7%	12.7%	10.9%	5.6%	10.8%
	(170)	(25)	(145)	(27)	(17)	(23)	(33)	(7)	(27)	(12)	(11)	(8)	(112)	(36)	(20)
ε) 講座や教室の同僚															
1. 教育	7.0%	5.5%	7.5%	7.3%	7.5%	7.4%	4.2%	8.9%	8.4%	8.9%	9.7%	6.3%	7.1%	6.4%	10.2%
2. 研究	11.0%	11.6%	10.8%	9.5%	10.9%	10.1%	10.1%	11.4%	15.7%	8.1%	11.3%	15.9%	10.0%	11.4%	16.1%
合計	18.0%	17.1%	18.3%	16.8%	18.4%	17.5%	14.3%	20.3%	24.1%	16.9%	21.0%	22.2%	17.1%	17.8%	26.3%
	(340)	(72)	(268)	(46)	(37)	(59)	(58)	(25)	(60)	(21)	(13)	(14)	(176)	(114)	(49)
問63. 政府の高等教育や学術政策への関わりにつき															
a) 政府は高等教育の目的や政策を決定すべき															
1. 賛成 (はい)	7.6%	8.0%	7.3%	5.3%	5.9%	7.1%	8.4%	10.3%	9.9%	3.3%	9.9%	5.6%	8.5%	7.1%	4.9%
2. ↑	11.7%	13.3%	10.6%	8.1%	14.4%	11.9%	13.8%	8.9%	13.5%	7.9%	11.6%	12.4%	12.4%	10.3%	12.3%
3. どちらでもない	32.5%	32.5%	32.4%	28.0%	28.9%	30.7%	36.4%	32.2%	33.8%	33.1%	38.0%	39.3%	33.6%	29.8%	35.1%
4. ↓	13.3%	12.7%	13.8%	11.6%	13.1%	14.7%	14.6%	16.8%	12.2%	4.6%	17.4%	13.5%	12.5%	15.0%	12.3%
5. 反対 (いいえ)	33.1%	32.0%	33.9%	45.5%	36.1%	34.0%	25.5%	30.8%	28.6%	45.7%	21.5%	27.0%	31.9%	35.3%	32.9%
6. 該当しない	1.7%	1.5%	1.9%	1.5%	1.5%	1.7%	1.4%	0.9%	2.0%	5.3%	1.7%	2.2%	1.1%	2.5%	2.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,165)	(1,285)	(1,880)	(457)	(388)	(606)	(632)	(214)	(444)	(151)	(121)	(89)	(1,697)	(1,092)	(350)
b) 政府は学術政策に干渉し過ぎ															
1. 賛成 (はい)	23.6%	22.1%	24.5%	28.2%	26.2%	27.5%	19.3%	25.5%	20.2%	22.1%	15.7%	12.6%	23.1%	25.1%	21.0%
2. ↑	21.2%	23.0%	19.9%	19.0%	17.5%	21.8%	23.6%	27.4%	22.9%	14.8%	19.8%	18.4%	19.5%	23.7%	21.9%
3. どちらでもない	40.6%	40.5%	40.7%	37.0%	40.1%	37.9%	43.0%	35.4%	40.2%	42.3%	56.2%	48.3%	42.1%	37.2%	43.8%
4. ↓	6.3%	6.8%	6.0%	6.1%	7.7%	5.9%	7.2%	4.7%	6.5%	4.0%	2.5%	12.6%	7.2%	5.2%	4.8%
5. 反対 (いいえ)	5.2%	5.7%	4.9%	5.9%	6.4%	4.4%	4.5%	5.2%	6.1%	5.4%	3.3%	4.6%	5.5%	5.6%	2.6%
6. 該当しない	3.2%	2.0%	4.0%	3.7%	2.1%	2.5%	2.5%	1.9%	4.0%	11.4%	2.5%	3.4%	2.6%	3.2%	6.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,163)	(1,285)	(1,878)	(457)	(389)	(610)	(628)	(212)	(445)	(149)	(121)	(87)	(1,702)	(1,084)	(352)
問64. 以下の活動を何回したか (中央値)															
a) 海外で論文や著書の出版															
3年間	0回	1回	0回	0回	0回	1回	1回	1回	1回	0回	0回	0回	1回	0回	0回
10年間	1回	3回	0回	0回	0回	3回	2回	2回	2回	0回	0回	0回	1回	1回	0回
b) 外国語で論文や著書の執筆															
3年間	2回	4回	1回	0回	1回	4回	3回	3回	4回	0回	0回	0回	2回	3回	2回
10年間	5回	10回	3回	0回	1回	12回	7回	10回	10回	0回	0回	1回	5回	6回	4回
c) 留学生対象の授業															
3年間	0回	0回	0回	0回	1回	0回	0回	1回	0回	1回	0回	0回	0回	0回	0回
10年間	0回	0回	0回	0回	1回	0回	0回	1回	0回	1回	0回	0回	1回	0回	0回
問65. 以下の活動を何回したか (中央値)															
a) 海外共同研究プロジェクト															
3年間	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月
10年間	0ヶ月	1ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	2ヶ月	0ヶ月	1ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月

	全体	研究大 学	その他の大学の学系										助教授	講師			
			工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系	教授	助教授	講師						
問65. 以下の活動を何回したか(中央値)																	
b) 研究のために海外渡航																	
3年間	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	0ヶ月
10年間	3ヶ月	2ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	3ヶ月	2ヶ月
c) 海外で大学教員として勤務																	
3年間	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月
10年間	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月
d) 研究休暇に海外滞在																	
3年間	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月
10年間	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月	0ヶ月
問66. 以下の事柄はどの程度あったか																	
a) 外国人教師の授業																	
1. 数多くあった	42.2%	40.6%	43.4%	69.8%	53.9%	39.7%	38.4%	30.1%	24.0%	24.4%	53.9%	44.5%	41.0%	36.5%			
2. 時々あった	31.0%	32.2%	30.2%	23.6%	25.6%	29.7%	27.5%	32.1%	31.4%	70.7%	27.8%	32.0%	30.2%	28.8%			
3. まれにあった	10.6%	10.6%	10.6%	3.3%	10.1%	10.8%	14.6%	14.8%	15.0%	3.0%	5.2%	6.8%	11.0%	10.3%			
4. なかった	9.6%	9.1%	9.9%	2.0%	7.2%	11.3%	12.1%	13.4%	16.1%	0.0%	7.0%	8.0%	10.1%	13.1%			
5. わからない	6.7%	7.6%	6.0%	1.3%	3.2%	8.5%	7.4%	9.6%	13.5%	1.8%	6.1%	1.1%	7.8%	11.4%			
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%			
	(3,120)	(1,287)	(1,833)	(454)	(375)	(600)	(610)	(209)	(446)	(164)	(115)	(88)	(1,654)	(1,091)	(351)		
b) 国際会議やセミナーの開催																	
1. 数多くあった	23.1%	33.8%	15.4%	24.5%	26.2%	23.9%	23.2%	24.4%	22.9%	8.8%	28.8%	16.0%	22.8%	24.1%	22.9%		
2. 時々あった	37.7%	44.7%	32.6%	35.7%	33.6%	40.7%	36.9%	40.4%	46.5%	25.8%	35.1%	27.2%	38.3%	35.0%	41.5%		
3. まれにあった	18.3%	11.2%	23.4%	15.7%	16.9%	16.0%	16.9%	15.0%	14.8%	55.3%	17.1%	14.8%	17.8%	19.6%	16.9%		
4. なかった	12.5%	4.7%	18.1%	13.2%	16.4%	10.4%	14.8%	14.6%	8.5%	5.0%	8.1%	25.9%	14.3%	10.8%	9.7%		
5. わからない	8.4%	5.5%	10.5%	10.9%	6.9%	9.1%	8.3%	5.6%	7.2%	5.0%	10.8%	16.0%	6.8%	10.5%	8.9%		
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		
	(3,121)	(1,308)	(1,813)	(440)	(378)	(607)	(616)	(213)	(458)	(159)	(111)	(81)	(1,655)	(1,093)	(349)		
c) 留学生の入学																	
1. 数多くあった	63.0%	76.2%	53.7%	73.0%	75.9%	62.6%	65.5%	71.9%	48.4%	29.2%	71.1%	57.8%	63.5%	64.3%	57.5%		
2. 時々あった	24.9%	18.2%	29.6%	17.5%	20.3%	26.1%	23.3%	23.1%	36.7%	20.8%	21.9%	36.7%	25.2%	23.7%	26.1%		
3. まれにあった	8.2%	2.6%	12.1%	6.8%	3.3%	6.1%	5.7%	3.2%	8.5%	48.2%	2.6%	5.6%	7.8%	8.4%	9.6%		
4. なかった	2.2%	1.7%	2.6%	1.8%	0.0%	2.5%	3.0%	0.5%	4.6%	0.6%	3.5%	0.0%	1.9%	2.1%	4.2%		
5. わからない	1.7%	1.3%	2.1%	0.9%	0.5%	2.8%	2.5%	1.4%	2.0%	1.2%	0.9%	0.0%	1.6%	1.5%	2.5%		
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		
	(3,202)	(1,322)	(1,880)	(456)	(390)	(610)	(632)	(221)	(461)	(168)	(114)	(90)	(1,713)	(1,109)	(353)		
d) 留学生の送りだし																	
1. 数多くあった	55.8%	66.8%	48.0%	67.3%	65.7%	52.4%	56.0%	63.0%	46.7%	27.9%	66.4%	55.1%	56.9%	54.8%	54.1%		
2. 時々あった	25.7%	22.0%	28.3%	20.2%	25.2%	25.7%	23.7%	27.4%	34.3%	19.4%	22.1%	33.7%	26.2%	25.3%	24.4%		
3. まれにあった	10.4%	5.0%	14.2%	7.1%	6.2%	10.2%	9.2%	4.6%	8.3%	49.7%	5.3%	7.9%	9.5%	11.5%	11.3%		
4. なかった	4.0%	3.2%	4.6%	2.2%	1.0%	5.1%	6.4%	1.8%	6.1%	0.6%	3.5%	2.2%	3.7%	4.0%	5.7%		

5. わからない	4.1%	3.0%	4.9%	3.1%	1.8%	6.6%	4.8%	3.2%	4.6%	2.4%	2.7%	1.1%	3.7%	4.3%	4.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,177)	(1,316)	(1,861)	(450)	(385)	(607)	(629)	(219)	(460)	(165)	(113)	(89)	(1,693)	(1,105)	(353)
問67. 国際交流に関する意見について															
a) 私には国際交流は非常に重要だ															
1. 賛成 (はい)	62.3%	66.2%	59.6%	54.0%	59.6%	72.1%	55.8%	62.4%	70.4%	66.3%	56.2%	48.9%	61.6%	63.2%	63.1%
2. ↑	25.4%	23.7%	26.6%	27.0%	26.8%	20.9%	29.0%	26.5%	22.0%	21.3%	28.9%	38.0%	25.5%	25.8%	23.7%
3. どちらでもない	10.5%	8.8%	11.8%	15.0%	12.1%	6.0%	12.9%	9.7%	7.6%	10.6%	12.4%	9.8%	11.1%	9.0%	12.1%
4. ↓	0.9%	0.7%	1.0%	1.9%	0.8%	0.5%	1.2%	0.9%	0.0%	0.6%	0.8%	1.1%	0.8%	0.9%	0.8%
5. 反対 (いいえ)	0.5%	0.3%	0.6%	1.3%	0.5%	0.3%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.6%	0.4%	0.0%
6. 該当しない	0.4%	0.3%	0.5%	0.8%	0.3%	0.2%	0.3%	0.4%	0.0%	1.3%	1.7%	1.1%	0.3%	0.6%	0.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,290)	(1,344)	(1,946)	(474)	(396)	(635)	(649)	(226)	(473)	(160)	(121)	(92)	(1,772)	(1,128)	(363)
b) 海外の書物や論文の講読は重要															
1. 賛成 (はい)	76.9%	81.7%	73.5%	72.6%	77.3%	86.9%	69.2%	83.2%	90.5%	57.2%	59.5%	57.0%	75.3%	77.9%	81.1%
2. ↑	16.8%	14.1%	18.7%	14.9%	17.2%	11.2%	23.3%	13.3%	8.7%	28.3%	30.6%	28.0%	18.1%	15.5%	14.2%
3. どちらでもない	4.2%	3.0%	5.0%	5.1%	4.0%	1.6%	6.0%	3.1%	0.8%	10.1%	7.4%	11.8%	4.3%	4.3%	3.8%
4. ↓	0.9%	0.5%	1.1%	2.9%	0.8%	0.2%	0.8%	0.0%	0.0%	1.3%	0.8%	2.2%	0.9%	0.9%	0.5%
5. 反対 (いいえ)	0.7%	0.3%	0.9%	3.2%	0.3%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	0.7%	0.0%
6. 該当しない	0.6%	0.3%	0.8%	1.3%	0.5%	0.0%	0.2%	0.4%	0.0%	3.1%	1.7%	1.1%	0.6%	0.7%	0.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,291)	(1,346)	(1,945)	(475)	(396)	(635)	(649)	(226)	(473)	(159)	(121)	(93)	(1,771)	(1,128)	(365)
c) 国際交流はもっと活発にすべき															
1. 賛成 (はい)	58.4%	61.2%	56.4%	57.1%	59.7%	65.7%	47.8%	59.7%	63.6%	55.3%	55.4%	53.3%	57.5%	59.4%	60.2%
2. ↑	29.4%	27.8%	30.6%	28.5%	29.1%	22.5%	37.5%	27.9%	26.2%	34.2%	35.5%	34.4%	30.5%	28.2%	27.2%
3. どちらでもない	11.1%	10.0%	11.8%	12.5%	10.6%	10.5%	13.6%	11.5%	9.1%	9.3%	9.1%	11.1%	10.7%	11.6%	11.3%
4. ↓	0.4%	0.3%	0.5%	0.8%	0.0%	0.8%	0.3%	0.4%	0.0%	0.6%	0.0%	1.1%	0.5%	0.4%	0.3%
5. 反対 (いいえ)	0.2%	0.1%	0.2%	0.4%	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.1%	0.3%
6. 該当しない	0.5%	0.5%	0.5%	0.6%	0.5%	0.2%	0.8%	0.4%	0.8%	0.6%	0.0%	0.0%	0.6%	0.3%	0.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,287)	(1,346)	(1,941)	(473)	(395)	(636)	(648)	(226)	(473)	(161)	(121)	(90)	(1,771)	(1,125)	(364)
d) カリキュラムは国際的にすべき															
1. 賛成 (はい)	35.7%	38.9%	33.5%	36.9%	41.0%	39.1%	27.7%	27.1%	39.4%	33.8%	38.8%	33.7%	34.6%	36.8%	37.3%
2. ↑	30.0%	28.1%	31.3%	28.7%	27.2%	27.1%	31.7%	36.9%	29.2%	28.7%	32.2%	37.1%	31.9%	27.5%	28.5%
3. どちらでもない	30.1%	28.4%	31.2%	28.5%	29.0%	28.4%	37.2%	30.7%	26.9%	32.5%	28.9%	25.8%	29.4%	30.9%	30.7%
4. ↓	1.7%	1.3%	1.9%	3.0%	0.5%	2.2%	1.7%	1.8%	0.6%	2.5%	0.0%	2.2%	1.6%	2.0%	0.8%
5. 反対 (いいえ)	0.9%	1.3%	0.7%	2.1%	1.3%	1.1%	0.3%	1.3%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	1.0%	1.1%
6. 該当しない	1.7%	1.9%	1.5%	0.8%	1.0%	2.1%	1.4%	2.2%	3.0%	2.5%	0.0%	1.1%	1.6%	1.8%	1.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,270)	(1,342)	(1,928)	(471)	(393)	(631)	(647)	(225)	(472)	(157)	(121)	(89)	(1,760)	(1,122)	(362)

問68. 政府は以下をどの程度重視すべきか	全体	研究大	その他の大学	人文科学系	社会科学系	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学系	体育学系	その他学系	教授	助教授	講師	
																学
a) 人権																
1. もっとも重視	51.5%	51.3%	51.6%	61.1%	63.5%	51.5%	41.7%	41.4%	49.1%	54.9%	50.4%	49.5%	51.5%	52.6%	49.4%	
2. かなり重視	34.1%	33.9%	34.2%	29.7%	27.1%	33.9%	39.4%	40.1%	35.4%	32.7%	35.5%	35.5%	33.2%	33.8%	38.1%	
3. 適度に重視	13.6%	14.0%	13.4%	8.6%	8.3%	13.8%	17.8%	18.0%	15.1%	12.3%	13.2%	14.0%	14.4%	13.1%	11.9%	
4. あまり重視せず	0.8%	0.8%	0.7%	0.7%	1.0%	0.8%	1.1%	0.5%	0.4%	0.0%	0.8%	1.1%	0.9%	0.5%	0.6%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,188)	(1,290)	(1,898)	(455)	(384)	(602)	(629)	(222)	(458)	(162)	(121)	(93)	(1,706)	(1,102)	(354)	
b) 基礎的教育の普及																
1. もっとも重視	42.9%	43.4%	42.5%	43.9%	46.6%	46.9%	38.6%	38.0%	42.0%	43.4%	43.3%	43.5%	4.4%	42.5%	38.6%	
2. かなり重視	39.2%	38.2%	39.9%	37.5%	37.0%	38.4%	41.6%	42.1%	37.9%	40.3%	43.3%	40.2%	3.9%	39.8%	40.3%	
3. 適度に重視	16.6%	17.0%	16.3%	18.1%	14.5%	13.9%	17.7%	19.0%	18.3%	15.7%	11.7%	15.2%	1.6%	16.5%	19.7%	
4. あまり重視せず	1.3%	1.4%	1.3%	0.4%	1.8%	0.8%	2.1%	0.9%	1.7%	0.6%	1.7%	1.1%	0.1%	1.2%	1.4%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	10.0%	100.0%	100.0%	
	(3,190)	(1,297)	(1,893)	(453)	(386)	(604)	(634)	(221)	(459)	(159)	(120)	(92)	(1,709)	(1,100)	(355)	
c) 世界経済																
1. もっとも重視	29.6%	29.5%	29.7%	27.6%	36.9%	25.5%	29.6%	23.5%	30.4%	35.4%	35.5%	28.1%	30.0%	28.4%	31.6%	
2. かなり重視	43.0%	43.2%	42.9%	45.5%	40.3%	41.9%	42.6%	45.2%	44.8%	36.7%	45.5%	52.8%	42.3%	44.5%	40.7%	
3. 適度に重視	26.1%	25.8%	26.3%	26.5%	21.3%	30.7%	26.1%	30.0%	24.6%	27.2%	18.2%	15.7%	26.5%	25.9%	25.9%	
4. あまり重視せず	1.3%	1.5%	1.1%	0.4%	1.6%	2.0%	1.7%	1.4%	0.2%	0.6%	0.8%	3.4%	1.2%	1.2%	1.7%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,167)	(1,288)	(1,879)	(446)	(385)	(597)	(632)	(217)	(460)	(158)	(121)	(89)	(1,693)	(1,097)	(351)	
d) 環境水準																
1. もっとも重視	63.4%	62.5%	64.0%	64.8%	69.7%	64.4%	57.6%	61.9%	63.1%	64.2%	68.6%	68.1%	62.1%	64.7%	65.8%	
2. かなり重視	28.8%	29.1%	28.5%	28.6%	23.8%	28.0%	33.8%	28.7%	27.6%	28.4%	24.0%	27.5%	29.5%	28.1%	27.4%	
3. 適度に重視	7.1%	7.6%	6.8%	5.5%	6.0%	6.4%	8.6%	8.1%	8.6%	7.4%	5.8%	3.3%	7.6%	6.6%	6.5%	
4. あまり重視せず	0.7%	0.8%	0.7%	1.1%	0.5%	1.2%	0.0%	1.3%	0.6%	0.0%	1.7%	1.1%	0.8%	0.6%	0.3%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,209)	(1,304)	(1,905)	(454)	(386)	(607)	(639)	(223)	(464)	(162)	(121)	(91)	(1,721)	(1,108)	(354)	
e) 人口増加																
1. もっとも重視	45.7%	49.1%	43.3%	40.3%	44.0%	49.2%	45.6%	51.4%	48.9%	39.4%	45.8%	37.9%	45.9%	45.2%	44.8%	
2. かなり重視	34.9%	32.6%	36.5%	36.0%	36.4%	31.0%	37.5%	34.1%	34.2%	34.4%	34.2%	43.7%	34.0%	35.5%	38.5%	
3. 適度に重視	17.0%	16.2%	17.5%	19.9%	17.3%	16.7%	15.3%	13.2%	15.6%	22.5%	16.7%	14.9%	17.6%	16.6%	15.0%	
4. あまり重視せず	2.5%	2.2%	2.7%	3.8%	2.4%	3.2%	1.6%	1.4%	1.3%	3.8%	3.3%	3.4%	2.5%	2.7%	1.7%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,174)	(1,294)	(1,880)	(447)	(382)	(600)	(634)	(220)	(462)	(160)	(120)	(87)	(1,698)	(1,097)	(353)	
f) 世界の食糧供給																
1. もっとも重視	47.2%	48.3%	46.4%	43.7%	49.5%	48.3%	41.1%	61.4%	46.7%	49.4%	51.7%	53.8%	45.9%	48.5%	50.3%	
2. かなり重視	39.2%	37.2%	40.6%	43.7%	37.2%	37.5%	43.5%	30.9%	36.7%	38.8%	37.5%	39.6%	39.6%	38.6%	38.4%	
3. 適度に重視	12.3%	13.2%	11.7%	11.7%	12.6%	12.3%	13.8%	7.2%	15.2%	11.3%	8.3%	5.5%	13.0%	11.7%	10.5%	

4. あまり重視せず	1.3%	1.2%	1.3%	0.9%	0.8%	1.9%	1.6%	0.4%	1.3%	0.6%	2.5%	1.1%	1.5%	1.1%	0.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,171)	(1,294)	(1,877)	(446)	(382)	(594)	(632)	(223)	(460)	(160)	(120)	(91)	(1,691)	(1,100)	(354)	
g) エイズやその他の健康問題															
1. もっとも重視	50.1%	48.4%	51.2%	47.5%	52.1%	46.6%	43.0%	46.8%	58.9%	57.1%	65.0%	56.0%	48.8%	48.8%	60.1%
2. かなり重視	37.1%	37.2%	37.0%	37.7%	34.3%	37.8%	43.0%	38.6%	32.5%	37.9%	26.7%	34.1%	36.6%	39.5%	31.7%
3. 適度に重視	11.7%	13.3%	10.5%	13.5%	13.4%	13.6%	12.5%	13.6%	8.0%	5.0%	5.8%	8.8%	13.0%	11.1%	7.4%
4. あまり重視せず	1.2%	1.1%	1.3%	1.3%	0.3%	2.0%	1.4%	0.9%	0.6%	0.0%	2.5%	1.1%	1.7%	0.6%	0.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,174)	(1,296)	(1,878)	(446)	(382)	(596)	(632)	(220)	(462)	(161)	(120)	(91)	(1,693)	(1,102)	(353)	
h) 人種、民族、宗教上の紛争															
1. もっとも重視	36.4%	34.4%	37.8%	45.0%	48.0%	35.4%	29.6%	26.5%	32.5%	40.0%	39.5%	34.1%	37.6%	35.0%	35.1%
2. かなり重視	34.1%	34.5%	33.8%	34.0%	31.1%	32.5%	36.4%	39.7%	31.2%	35.6%	36.1%	37.5%	33.2%	35.8%	32.9%
3. 適度に重視	25.2%	26.1%	24.5%	18.6%	18.8%	26.6%	27.2%	30.6%	31.8%	20.0%	20.2%	25.0%	25.0%	24.7%	26.6%
4. あまり重視せず	4.4%	5.0%	4.0%	2.5%	2.1%	5.6%	6.8%	3.2%	4.6%	4.4%	4.2%	3.4%	4.2%	4.5%	5.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,161)	(1,289)	(1,872)	(447)	(383)	(594)	(629)	(219)	(459)	(160)	(119)	(88)	(1,685)	(1,097)	(353)	
i) 軍縮															
1. もっとも重視	55.6%	54.6%	56.2%	57.9%	63.3%	60.7%	49.1%	54.1%	49.0%	55.3%	59.2%	53.3%	56.5%	56.1%	50.8%
2. かなり重視	27.5%	28.3%	27.0%	27.8%	23.2%	23.5%	32.5%	30.5%	28.5%	28.6%	23.3%	27.8%	26.2%	28.1%	31.1%
3. 適度に重視	14.5%	14.5%	14.5%	11.8%	12.2%	13.1%	15.2%	13.2%	20.5%	13.7%	14.2%	15.6%	14.7%	13.5%	15.5%
4. あまり重視せず	2.5%	2.7%	2.3%	2.4%	1.3%	2.7%	3.2%	2.3%	2.0%	2.5%	3.3%	3.3%	2.6%	2.3%	2.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,173)	(1,292)	(1,881)	(449)	(384)	(596)	(631)	(220)	(459)	(161)	(120)	(90)	(1,691)	(1,102)	(354)	
問69. わが国の高等教育は以下をどの程度重視すべきか															
a) 指導者の養成															
1. もっとも重視	47.6%	54.9%	42.6%	38.9%	43.5%	49.1%	44.9%	46.0%	54.7%	54.9%	59.3%	52.7%	51.0%	43.6%	42.5%
2. かなり重視	35.9%	31.0%	39.3%	40.0%	32.2%	32.1%	40.3%	38.9%	34.4%	37.2%	31.7%	33.3%	35.0%	37.5%	35.5%
3. 適度に重視	14.8%	12.5%	16.3%	18.6%	21.7%	17.0%	12.9%	14.6%	10.0%	6.1%	8.9%	11.8%	12.3%	17.4%	19.0%
4. あまり重視せず	1.7%	1.7%	1.8%	2.6%	2.6%	1.8%	1.9%	0.4%	0.9%	1.8%	0.0%	2.2%	1.7%	1.4%	3.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,261)	(1,323)	(1,938)	(468)	(391)	(619)	(643)	(226)	(468)	(164)	(123)	(93)	(1752)	(1124)	(358)	
b) 職業準備教育															
1. もっとも重視	13.7%	13.2%	14.1%	13.2%	18.4%	10.4%	9.5%	9.0%	16.3%	26.7%	15.7%	21.5%	14.9%	11.8%	14.1%
2. かなり重視	37.5%	38.5%	36.8%	36.1%	38.1%	32.2%	38.6%	34.5%	40.3%	44.7%	40.5%	41.9%	39.3%	35.2%	35.5%
3. 適度に重視	40.4%	40.2%	40.6%	40.6%	37.3%	47.7%	42.9%	45.3%	36.7%	23.0%	35.5%	32.3%	38.8%	42.4%	42.3%
4. あまり重視せず	8.4%	8.1%	8.5%	10.2%	6.2%	9.7%	9.0%	11.2%	6.7%	5.6%	8.3%	4.3%	7.0%	10.6%	8.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(3,214)	(1,305)	(1,909)	(463)	(386)	(608)	(634)	(223)	(461)	(161)	(121)	(93)	(1729)	(1106)	(355)	

問69	全体	研究大	その	人文科	社会科	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師
問69. わが国の高等教育は以下をどの程度重視すべきか															
c) 成人対象の生涯教育															
1.	21.7%	18.4%	24.0%	24.4%	29.0%	17.2%	17.1%	16.5%	20.5%	27.1%	32.0%	31.9%	23.3%	19.2%	22.5%
2.	39.3%	37.7%	40.4%	40.3%	42.6%	34.0%	43.0%	37.9%	35.9%	39.2%	44.3%	47.9%	38.7%	40.5%	37.9%
3.	35.1%	39.6%	32.0%	32.7%	25.6%	43.5%	35.0%	38.8%	41.7%	27.7%	22.1%	20.2%	33.8%	36.6%	36.0%
4.	3.9%	4.3%	3.6%	2.5%	2.8%	5.2%	4.8%	6.7%	1.9%	6.0%	1.6%	0.0%	4.1%	3.7%	3.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,248)	(1,312)	(1,936)	(471)	(390)	(611)	(642)	(224)	(463)	(166)	(122)	(94)	(1,746)	(1,121)	(356)
d) 文化遺産の保護															
1.	31.0%	30.4%	31.3%	39.5%	30.9%	29.6%	21.8%	21.8%	30.8%	56.4%	35.0%	33.0%	31.7%	30.3%	29.5%
2.	39.1%	35.6%	41.4%	40.8%	39.8%	39.5%	38.6%	37.3%	38.8%	29.1%	42.5%	44.7%	39.7%	38.6%	37.4%
3.	28.0%	31.5%	25.7%	18.4%	27.3%	28.4%	37.0%	37.8%	28.7%	14.5%	22.5%	20.2%	26.6%	29.2%	31.2%
4.	2.0%	2.5%	1.6%	1.3%	2.0%	2.5%	2.5%	3.1%	1.7%	0.0%	0.0%	2.1%	2.1%	1.9%	2.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,234)	(1,309)	(1,925)	(468)	(392)	(605)	(637)	(225)	(464)	(165)	(120)	(94)	(1,736)	(1,117)	(356)
e) 知識探求の自由の擁護															
1.	41.8%	43.1%	40.8%	49.9%	50.5%	43.8%	31.7%	38.0%	39.0%	48.5%	42.1%	31.5%	41.4%	41.4%	44.9%
2.	37.4%	34.7%	39.3%	36.3%	30.6%	37.2%	40.9%	38.0%	37.9%	34.5%	38.8%	44.6%	37.6%	38.0%	34.7%
3.	19.4%	20.8%	18.5%	12.7%	18.4%	17.8%	25.4%	22.6%	21.4%	14.5%	19.0%	21.7%	19.3%	19.4%	19.5%
4.	1.4%	1.4%	1.4%	1.1%	0.5%	1.3%	2.0%	1.4%	1.7%	2.4%	0.0%	2.2%	1.7%	1.2%	0.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,226)	(1,303)	(1,923)	(463)	(392)	(608)	(638)	(221)	(462)	(165)	(121)	(92)	(1,730)	(1,117)	(354)
f) 学問と研究の促進															
1.	66.2%	71.5%	62.6%	67.1%	70.8%	72.1%	59.4%	72.2%	68.2%	54.0%	59.7%	63.2%	67.7%	65.1%	62.4%
2.	28.2%	23.3%	31.6%	29.1%	24.0%	22.2%	34.8%	22.9%	26.0%	39.9%	32.8%	27.4%	27.8%	28.2%	29.8%
3.	5.4%	5.0%	5.7%	3.6%	4.9%	5.3%	5.8%	4.9%	5.8%	5.5%	7.6%	9.5%	4.3%	6.5%	7.8%
4.	0.2%	0.2%	0.1%	0.2%	0.3%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,250)	(1,327)	(1,923)	(471)	(391)	(617)	(643)	(223)	(466)	(163)	(119)	(95)	(1,735)	(1,130)	(359)
g) 国際競争のための国力の強化															
1.	19.0%	21.6%	17.2%	12.3%	17.7%	19.5%	18.4%	18.6%	26.2%	15.5%	18.5%	23.1%	22.3%	14.3%	17.7%
2.	30.0%	29.2%	30.6%	29.7%	24.9%	23.8%	35.8%	35.0%	32.7%	31.7%	26.1%	35.2%	30.8%	29.4%	27.0%
3.	39.0%	37.2%	40.2%	38.3%	42.4%	42.8%	38.0%	35.9%	34.6%	40.4%	42.0%	36.3%	37.1%	41.9%	39.3%
4.	12.0%	12.1%	12.0%	19.7%	14.9%	14.0%	7.8%	10.5%	6.5%	12.4%	13.4%	5.5%	9.8%	14.3%	16.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,204)	(1,307)	(1,897)	(462)	(389)	(601)	(637)	(220)	(462)	(161)	(119)	(91)	(1,709)	(1,115)	(356)
h) 基本的な社会問題の解決															
1.	39.9%	39.2%	40.5%	43.2%	52.8%	36.1%	35.3%	34.5%	41.1%	42.3%	32.2%	41.3%	39.7%	39.7%	42.2%
2.	40.2%	40.4%	40.1%	40.0%	34.0%	40.7%	41.3%	45.0%	38.5%	35.0%	51.7%	45.7%	40.6%	40.8%	36.5%
3.	18.7%	19.3%	18.2%	14.5%	12.6%	21.5%	22.7%	20.0%	19.8%	20.9%	15.3%	13.0%	18.7%	18.0%	19.5%

4. あまり重視せず	1.2%	1.1%	1.2%	2.4%	0.5%	1.7%	0.8%	0.7%	1.8%	0.8%	0.0%	0.9%	1.4%	1.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,199)	(1,305)	(1,894)	(463)	(388)	(599)	(635)	(220)	(460)	(163)	(118)	(92)	(1,707)	(1,114)
問70. 若者の何%が中等教育を修了できるか														
中央値	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	77.5%	80%	80%
問71. 中等教育修了者の何%に高等教育機関の入学を許可すべきか														
中央値	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%
問72. 高等教育の地位や役割に関する意見について														
a) 最低条件を満たしているなら入学を許可すべき														
1. 賛成 (はい)	33.0%	31.6%	33.9%	30.5%	33.5%	37.5%	28.9%	35.6%	33.3%	33.5%	38.5%	31.8%	29.6%	36.6%
2. ↑	22.0%	21.6%	22.3%	20.0%	21.9%	20.6%	26.7%	20.7%	19.0%	21.7%	18.0%	29.5%	21.7%	21.7%
3. どちらでもない	20.7%	20.2%	21.1%	21.5%	21.4%	19.6%	21.4%	17.1%	22.7%	21.1%	18.9%	20.5%	22.1%	20.1%
4. ↓	10.5%	11.5%	9.9%	9.7%	10.6%	11.3%	11.9%	10.4%	8.6%	8.7%	15.6%	6.8%	11.0%	10.8%
5. 反対 (いいえ)	13.0%	14.4%	12.0%	17.6%	12.1%	10.4%	9.9%	15.8%	15.9%	14.3%	9.0%	9.1%	14.8%	10.2%
6. 該当しない	0.7%	0.7%	0.8%	0.9%	0.5%	0.7%	1.3%	0.5%	0.4%	0.6%	0.0%	2.3%	0.9%	0.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,211)	(1,305)	(1,906)	(466)	(388)	(608)	(637)	(222)	(453)	(161)	(122)	(88)	(1,721)	(1,108)
b) 経済的に恵まれない学生の入学のために水準をさげるべき														
1. 賛成 (はい)	3.4%	2.4%	4.1%	2.2%	3.6%	4.1%	2.6%	2.3%	5.5%	2.5%	4.1%	3.4%	2.3%	4.1%
2. ↑	4.8%	3.9%	5.4%	2.0%	7.0%	4.6%	4.7%	3.3%	5.7%	6.3%	5.8%	2.3%	4.1%	5.5%
3. どちらでもない	23.0%	19.6%	25.3%	22.1%	21.4%	24.0%	23.0%	27.2%	21.1%	18.4%	30.6%	21.6%	22.5%	22.5%
4. ↓	16.8%	16.9%	16.7%	16.7%	19.8%	15.0%	19.7%	15.0%	14.5%	11.4%	19.0%	17.0%	16.6%	17.9%
5. 反対 (いいえ)	43.2%	49.3%	39.1%	48.2%	42.2%	43.1%	40.0%	44.6%	42.4%	51.9%	34.7%	45.5%	45.0%	41.5%
6. 該当しない	8.9%	8.0%	9.5%	8.9%	6.0%	9.2%	10.0%	7.5%	10.8%	9.5%	5.8%	10.2%	9.5%	8.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,150)	(1,281)	(1,869)	(461)	(384)	(587)	(618)	(213)	(455)	(158)	(121)	(88)	(1,692)	(1,083)
c) 大学人はオピニオンリーダーである														
1. 賛成 (はい)	12.0%	12.6%	11.6%	10.1%	9.7%	10.4%	12.8%	10.0%	17.6%	13.5%	12.4%	10.2%	12.9%	10.8%
2. ↑	26.4%	27.7%	25.6%	22.6%	26.1%	23.9%	28.9%	30.3%	29.1%	25.2%	30.6%	28.4%	28.8%	23.7%
3. どちらでもない	44.5%	42.8%	45.6%	45.2%	41.2%	45.8%	45.1%	44.3%	40.1%	44.5%	50.4%	48.9%	42.9%	46.2%
4. ↓	7.9%	7.7%	8.0%	11.0%	10.0%	10.3%	5.4%	7.7%	4.8%	5.8%	4.1%	10.2%	6.7%	9.7%
5. 反対 (いいえ)	7.7%	7.8%	7.6%	10.3%	12.8%	7.8%	6.2%	6.3%	6.2%	7.1%	1.7%	2.3%	6.9%	8.5%
6. 該当しない	1.5%	1.5%	1.5%	0.9%	0.3%	1.8%	1.7%	1.4%	2.2%	3.9%	0.8%	0.0%	1.8%	1.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,196)	(1,298)	(1,898)	(465)	(391)	(603)	(634)	(221)	(454)	(155)	(121)	(88)	(1,717)	(1,102)

	全体	研究大	その他	人文科	社会科	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師
		学	の大学	学系	学系	学系			系	系	系	学系			
d) 大学人は尊敬されなくなっている															
1. 賛成 (はい)	28.0%	30.4%	26.4%	30.8%	31.8%	28.8%	22.6%	24.2%	34.4%	26.1%	19.8%	21.3%	26.6%	29.1%	31.3%
2. 賛成 (いいえ)	37.0%	37.9%	36.3%	35.0%	40.5%	38.5%	37.6%	46.6%	34.4%	26.1%	34.7%	37.1%	35.8%	38.6%	37.4%
3. どちらでもない	28.4%	25.9%	30.1%	26.5%	22.1%	27.2%	32.1%	25.6%	26.4%	34.8%	35.5%	36.0%	30.6%	25.5%	26.3%
4. 反対 (はい)	4.0%	3.2%	4.5%	4.9%	3.8%	3.1%	5.2%	1.4%	2.6%	4.3%	9.1%	4.5%	4.1%	4.3%	2.8%
5. 反対 (いいえ)	1.6%	2.1%	1.3%	1.9%	1.3%	1.6%	1.4%	1.8%	1.5%	3.7%	0.0%	1.1%	1.6%	1.8%	1.4%
6. 該当しない	1.1%	0.5%	1.4%	0.8%	0.5%	0.8%	1.1%	0.5%	0.6%	5.0%	0.8%	0.0%	1.3%	0.7%	0.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,227)	(1,311)	(1,916)	(471)	(390)	(611)	(638)	(219)	(462)	(161)	(121)	(89)	(1,728)	(1,115)	(358)
e) 国公立機関は無料にすべき															
1. 賛成 (はい)	18.1%	19.6%	17.1%	22.8%	19.2%	25.2%	12.9%	17.6%	14.1%	12.3%	13.7%	16.7%	17.3%	20.1%	17.4%
2. 賛成 (いいえ)	13.3%	15.3%	12.0%	12.4%	15.9%	15.0%	12.2%	14.0%	12.0%	11.1%	14.5%	10.0%	11.4%	15.8%	14.8%
3. どちらでもない	25.7%	27.9%	24.1%	21.7%	26.2%	24.1%	27.5%	26.7%	28.4%	31.5%	33.3%	33.3%	26.7%	24.7%	24.1%
4. 反対 (はい)	15.2%	15.5%	15.1%	14.7%	12.8%	12.5%	20.4%	17.6%	14.6%	8.6%	20.2%	17.8%	14.7%	15.5%	16.2%
5. 反対 (いいえ)	26.9%	21.0%	31.0%	25.2%	29.7%	20.5%	29.5%	23.4%	32.4%	37.7%	19.4%	22.2%	29.1%	23.4%	27.2%
6. 該当しない	0.6%	0.7%	0.6%	0.9%	0.8%	0.5%	0.9%	0.0%	0.2%	1.9%	0.8%	0.0%	0.8%	0.5%	0.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,236)	(1,310)	(1,926)	(469)	(391)	(614)	(638)	(222)	(460)	(162)	(124)	(90)	(1,736)	(1,117)	(357)
f) 個人や産業界は高等教育を財政援助すべき															
1. 賛成 (はい)	44.1%	44.7%	43.6%	40.0%	40.2%	43.0%	44.5%	46.8%	53.6%	48.1%	34.7%	35.2%	43.2%	45.5%	43.7%
2. 賛成 (いいえ)	32.2%	32.8%	31.8%	29.3%	35.3%	30.8%	35.4%	29.3%	30.4%	25.0%	43.5%	31.9%	32.6%	31.3%	34.2%
3. どちらでもない	18.4%	17.2%	19.2%	24.6%	18.9%	19.3%	15.8%	17.6%	12.8%	18.1%	18.5%	28.6%	18.4%	18.7%	16.2%
4. 反対 (はい)	2.5%	2.6%	2.4%	2.1%	2.8%	3.3%	2.7%	1.8%	2.2%	3.1%	0.8%	3.3%	2.6%	2.1%	3.4%
5. 反対 (いいえ)	2.4%	2.4%	2.5%	3.8%	2.3%	3.4%	0.8%	3.6%	1.1%	5.6%	2.4%	0.0%	2.7%	2.2%	2.2%
6. 該当しない	0.4%	0.3%	0.4%	0.2%	0.5%	0.2%	0.8%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.5%	0.2%	0.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,232)	(1,312)	(1,920)	(468)	(391)	(611)	(638)	(222)	(461)	(160)	(124)	(91)	(1,735)	(1,114)	(357)
g) 高等教育機関は利害集団に干渉されている															
1. 賛成 (はい)	10.9%	9.0%	12.3%	12.6%	11.8%	13.1%	7.1%	12.9%	10.7%	9.5%	11.5%	5.8%	9.6%	12.7%	11.9%
2. 賛成 (いいえ)	20.7%	20.6%	20.8%	21.3%	23.8%	23.6%	16.7%	21.2%	20.8%	16.5%	24.6%	15.1%	17.8%	24.9%	21.2%
3. どちらでもない	48.7%	48.9%	48.7%	49.0%	44.1%	44.3%	52.1%	44.2%	50.8%	50.6%	54.1%	61.6%	50.7%	44.9%	51.3%
4. 反対 (はい)	8.4%	10.1%	7.3%	7.6%	9.7%	7.7%	9.3%	11.5%	7.9%	7.6%	5.7%	8.1%	9.2%	8.0%	5.9%
5. 反対 (いいえ)	7.5%	8.6%	6.7%	5.9%	7.7%	8.2%	9.3%	7.8%	7.0%	8.2%	2.5%	7.0%	8.9%	5.9%	5.9%
6. 該当しない	3.7%	2.9%	4.2%	3.7%	2.8%	3.0%	5.5%	2.3%	2.8%	7.6%	1.6%	2.3%	3.7%	3.5%	3.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,198)	(1,303)	(1,895)	(461)	(390)	(609)	(634)	(217)	(457)	(158)	(122)	(86)	(1,715)	(1,107)	(353)
h) 高等教育は大学運営の官僚制に脅かされている															
1. 賛成 (はい)	22.9%	25.0%	21.5%	24.3%	25.0%	28.1%	19.2%	20.6%	23.6%	20.9%	12.3%	17.0%	19.9%	26.8%	26.2%
2. 賛成 (いいえ)	31.7%	31.0%	32.2%	33.3%	30.6%	31.8%	32.2%	31.7%	30.8%	29.7%	31.1%	27.3%	30.5%	32.6%	33.8%
3. どちらでもない	34.5%	32.5%	35.8%	31.0%	34.9%	30.0%	36.6%	32.1%	36.7%	37.3%	47.5%	43.2%	36.8%	32.0%	31.0%

4.	↓	5.3%	5.9%	4.9%	5.2%	5.1%	6.0%	6.0%	6.9%	4.1%	3.2%	4.1%	4.5%	6.4%	4.0%	4.2%
5.	反対(いいえ)	3.7%	4.1%	3.5%	3.7%	3.8%	2.8%	3.2%	6.9%	3.5%	5.7%	2.5%	5.7%	4.2%	3.3%	2.8%
6.	該当しない	1.9%	1.5%	2.1%	2.6%	0.5%	1.3%	2.8%	1.8%	1.3%	3.2%	2.5%	2.3%	2.1%	1.4%	2.0%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,213)	(1,305)	(1,908)	(465)	(392)	(613)	(634)	(218)	(458)	(158)	(122)	(88)	(1,722)	(1,110)	(355)
問73. 自己点検・評価に関して																
a) 自己点検・評価を省令化したのは良かった																
1.	全くそう思う	21.1%	21.8%	20.7%	18.2%	22.3%	22.4%	19.5%	26.1%	24.8%	14.4%	16.9%	22.6%	22.8%	19.3%	18.5%
2.	↑	26.3%	26.9%	25.8%	22.6%	29.0%	24.4%	30.3%	27.5%	23.5%	20.0%	33.1%	30.1%	27.3%	24.1%	28.7%
3.	どちらでもない	22.6%	21.1%	23.6%	24.3%	19.8%	20.7%	24.1%	14.0%	26.7%	30.6%	21.8%	17.2%	21.3%	23.2%	25.9%
4.	↓	11.1%	11.2%	11.1%	9.9%	11.5%	13.2%	10.0%	12.6%	8.9%	13.1%	8.9%	15.1%	10.2%	13.8%	8.0%
5.	全くそう思わない	16.5%	17.3%	15.9%	22.0%	16.5%	18.3%	13.8%	12.8%	12.7%	11.9%	16.1%	12.9%	16.6%	16.9%	14.9%
6.	わからない	2.4%	1.7%	2.9%	2.9%	1.0%	0.9%	2.3%	0.0%	3.4%	10.0%	3.2%	2.2%	1.9%	2.7%	4.1%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,294)	(1,340)	(1,954)	(477)	(400)	(634)	(647)	(222)	(472)	(160)	(124)	(93)	(1,770)	(1,133)	(363)
b) 自己評価して社会の信頼を得るべき																
1.	全くそう思う	38.7%	39.6%	38.1%	36.6%	43.0%	41.5%	37.2%	44.1%	41.9%	28.7%	28.8%	29.3%	40.6%	36.6%	36.5%
2.	↑	37.0%	34.3%	38.9%	34.1%	37.3%	35.5%	40.9%	33.8%	34.9%	34.4%	48.8%	40.2%	36.0%	38.5%	37.9%
3.	どちらでもない	15.6%	16.2%	15.3%	17.1%	13.5%	15.1%	14.1%	13.1%	16.9%	21.3%	15.2%	20.7%	15.4%	15.4%	16.5%
4.	↓	3.7%	4.4%	3.3%	5.5%	3.0%	3.6%	3.5%	5.4%	1.1%	7.5%	3.2%	3.3%	3.0%	4.8%	3.8%
5.	全くそう思わない	3.4%	4.3%	2.7%	5.3%	2.8%	3.3%	2.8%	3.2%	3.2%	2.5%	1.6%	5.4%	3.7%	3.2%	2.7%
6.	わからない	1.5%	1.3%	1.7%	1.5%	0.5%	0.9%	1.5%	0.5%	2.1%	5.6%	2.4%	1.1%	1.3%	1.6%	2.5%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,298)	(1,345)	(1,953)	(475)	(400)	(634)	(651)	(222)	(473)	(160)	(125)	(92)	(1,770)	(1,136)	(364)
c) 専門分野は同様評価がもっとも良い																
1.	全くそう思う	20.9%	21.6%	20.5%	26.2%	22.4%	21.6%	16.3%	22.2%	21.5%	15.4%	16.8%	23.6%	22.9%	19.2%	16.6%
2.	↑	29.7%	29.9%	29.5%	29.5%	34.9%	26.2%	31.0%	27.6%	29.6%	17.3%	28.8%	41.6%	29.0%	30.4%	31.0%
3.	どちらでもない	31.2%	30.2%	31.8%	27.2%	24.9%	33.7%	35.1%	32.6%	31.3%	39.5%	36.0%	20.2%	31.3%	30.5%	31.6%
4.	↓	10.4%	10.6%	10.3%	10.0%	10.8%	11.1%	9.2%	12.7%	9.4%	12.3%	8.8%	10.1%	9.9%	11.5%	10.0%
5.	全くそう思わない	5.8%	6.3%	5.5%	5.2%	6.0%	6.3%	5.7%	5.0%	6.0%	8.6%	5.6%	1.1%	5.2%	6.0%	8.3%
6.	わからない	2.0%	1.4%	2.4%	1.9%	1.0%	1.1%	2.6%	0.0%	2.1%	6.8%	4.0%	3.4%	1.6%	2.5%	2.5%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,284)	(1,336)	(1,948)	(478)	(398)	(630)	(649)	(221)	(466)	(162)	(125)	(89)	(1,764)	(1,132)	(361)
e) 大学の自己評価は定着する																
1.	全くそう思う	24.9%	24.1%	25.5%	23.4%	24.2%	25.1%	25.0%	31.8%	26.9%	18.6%	25.8%	22.8%	26.1%	24.5%	20.7%
2.	↑	44.3%	44.2%	44.4%	43.4%	48.2%	45.7%	43.5%	43.5%	42.9%	35.4%	47.6%	52.2%	44.6%	44.1%	43.8%
3.	どちらでもない	18.5%	19.3%	17.9%	17.5%	16.4%	17.3%	20.7%	13.9%	19.0%	26.7%	17.7%	16.3%	17.9%	18.5%	20.9%
4.	↓	5.1%	5.6%	4.8%	6.5%	4.3%	4.6%	5.1%	6.3%	4.9%	5.0%	2.4%	7.6%	4.8%	5.4%	6.1%
5.	全くそう思わない	3.5%	3.7%	3.3%	4.8%	4.0%	4.1%	2.3%	3.6%	2.8%	2.5%	3.2%	0.0%	3.5%	3.5%	3.9%
6.	わからない	3.7%	3.0%	4.1%	4.4%	2.8%	3.2%	3.4%	0.9%	3.6%	11.8%	3.2%	1.1%	3.2%	4.0%	4.7%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		(3,283)	(1,334)	(1,949)	(475)	(396)	(630)	(648)	(223)	(469)	(161)	(124)	(92)	(1,763)	(1,129)	(363)

	全体	研究大	その他	人文科	社会科学	理学系	工学系	農学系	医学系	芸術学	体育学	その他	教授	助教授	講師
	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学
問73. 自己点検・評価に関して															
f) 他者評価が必要である															
1. 全くそう思う	16.8%	17.3%	16.4%	14.3%	16.6%	18.0%	16.4%	20.4%	20.9%	10.0%	8.9%	16.3%	18.4%	13.7%	17.5%
2. どちらでもない	26.0%	25.6%	26.4%	21.6%	27.6%	25.9%	27.1%	25.3%	30.8%	19.4%	19.4%	29.3%	25.2%	27.7%	25.2%
3. どちらでもない	28.2%	28.3%	28.1%	27.5%	25.1%	28.1%	30.7%	28.1%	26.9%	27.5%	37.9%	27.2%	28.6%	27.7%	27.4%
4. 全くそう思わない	11.4%	11.6%	11.3%	13.0%	12.8%	10.3%	12.2%	11.3%	7.5%	15.6%	12.1%	14.1%	10.3%	13.2%	11.1%
5. 全くそう思わない	14.3%	14.8%	13.9%	21.0%	14.3%	15.7%	9.8%	14.0%	10.5%	19.4%	15.3%	10.9%	14.0%	15.0%	13.9%
6. わからない	3.3%	2.3%	4.0%	2.5%	3.5%	1.9%	3.9%	0.9%	3.4%	8.1%	6.5%	2.2%	3.4%	2.7%	5.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,280)	(1,334)	(1,946)	(476)	(398)	(629)	(646)	(221)	(468)	(160)	(124)	(92)	(1,763)	(1,128)	(361)
問74. 自己評価に関する取り組み状況について															
(1) 現在について															
a) 講座・教室															
1. 取り組んでいない	50.9%	50.2%	51.5%	55.4%	51.7%	49.3%	54.7%	61.2%	50.2%	29.7%	35.9%	50.0%	48.4%	54.1%	48.4%
2. 委員会設置を検討	12.2%	12.8%	11.8%	12.4%	12.6%	11.9%	12.8%	11.9%	11.2%	12.8%	16.2%	11.0%	13.4%	11.6%	9.1%
3. 委員会で取り組む	14.7%	14.8%	14.7%	15.2%	16.9%	17.4%	9.6%	11.9%	10.7%	20.9%	27.4%	18.3%	16.5%	13.3%	10.3%
4. 活発に自己評価	9.0%	12.2%	6.8%	4.8%	8.4%	11.0%	6.8%	8.0%	13.8%	10.1%	7.7%	7.3%	9.8%	7.5%	9.1%
5. わからない	13.1%	10.1%	15.2%	12.2%	10.4%	10.3%	16.0%	7.0%	14.0%	26.4%	12.8%	13.4%	10.8%	13.4%	22.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,988)	(1,230)	(1,758)	(435)	(356)	(562)	(570)	(201)	(456)	(148)	(117)	(82)	(1,590)	(1,034)	(340)
b) 学科															
1. 取り組んでいない	40.1%	34.1%	44.1%	46.8%	39.6%	39.5%	46.1%	49.3%	27.6%	26.5%	33.1%	40.7%	40.1%	42.0%	34.6%
2. 委員会設置を検討	17.7%	20.4%	15.9%	17.1%	19.7%	18.2%	17.2%	17.4%	17.0%	14.7%	22.9%	16.0%	19.7%	16.3%	13.5%
3. 委員会で取り組む	20.9%	23.5%	19.1%	19.0%	23.1%	22.3%	17.8%	20.4%	20.8%	22.8%	28.0%	23.5%	22.5%	19.2%	18.8%
4. 活発に自己評価	5.4%	7.7%	3.7%	3.5%	7.4%	6.7%	5.1%	4.5%	5.0%	7.4%	4.2%	1.2%	5.8%	4.6%	5.0%
5. わからない	16.0%	14.3%	17.2%	13.6%	10.3%	13.3%	13.9%	8.5%	29.7%	28.7%	11.9%	18.5%	11.8%	18.0%	28.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(2,971)	(1,205)	(1,766)	(427)	(351)	(565)	(612)	(201)	(424)	(136)	(118)	(81)	(1,595)	(1,013)	(341)
c) 学部															
1. 取り組んでいない	20.8%	15.8%	24.2%	24.7%	20.4%	20.9%	20.2%	23.5%	20.8%	11.9%	18.0%	17.2%	21.2%	19.9%	21.6%
2. 委員会設置を検討	23.5%	24.6%	22.7%	25.8%	29.5%	20.6%	24.2%	26.3%	18.9%	17.5%	27.0%	25.3%	26.0%	22.4%	15.1%
3. 委員会で取り組む	33.0%	36.9%	30.4%	31.2%	33.4%	37.1%	31.9%	36.2%	26.1%	35.0%	36.9%	40.2%	34.9%	33.3%	24.1%
4. 活発に自己評価	5.6%	7.5%	4.2%	4.3%	6.5%	5.4%	4.8%	4.7%	6.1%	9.1%	9.0%	1.1%	6.1%	4.9%	4.8%
5. わからない	17.1%	15.2%	18.5%	14.1%	10.2%	16.0%	18.9%	9.4%	28.1%	26.6%	9.0%	16.1%	11.8%	19.5%	34.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(3,129)	(1,273)	(1,856)	(446)	(383)	(593)	(624)	(213)	(456)	(143)	(122)	(87)	(1,682)	(1,072)	(352)
d) 大学															
1. 取り組んでいない	9.0%	6.7%	10.6%	7.4%	8.2%	7.8%	11.1%	7.3%	13.0%	7.4%	5.7%	5.6%	9.3%	8.3%	10.1%
2. 委員会設置を検討	20.9%	20.1%	21.5%	23.2%	21.8%	21.0%	22.8%	22.5%	16.9%	15.5%	19.5%	18.9%	24.2%	18.6%	12.3%
3. 委員会で取り組む	46.2%	47.3%	45.4%	49.7%	54.1%	49.7%	41.7%	46.8%	34.1%	40.5%	55.3%	60.0%	48.5%	45.1%	38.7%

4. 活発に自己評価	6.0%	8.4%	4.3%	6.5%	6.4%	5.5%	5.1%	6.9%	4.8%	8.1%	10.6%	1.1%	5.3%	7.3%	5.3%	
5. わからない	17.9%	17.5%	18.3%	13.2%	9.5%	16.0%	19.3%	16.5%	31.2%	28.4%	8.9%	14.4%	12.7%	20.7%	33.6%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,193)	(1,289)	(1,904)	(461)	(390)	(614)	(631)	(218)	(455)	(148)	(123)	(90)	(1,727)	(1,086)	(357)	
(2) 5年後について																
a) 講座・教室																
1. 取り組んでいない	18.5%	20.6%	17.0%	14.4%	19.7%	18.1%	19.2%	25.9%	20.4%	12.5%	9.6%	21.7%	18.0%	18.9%	20.2%	
2. 委員会設置を検討	9.3%	8.5%	9.8%	9.3%	10.1%	7.8%	10.6%	12.4%	7.5%	9.0%	13.2%	2.4%	9.6%	9.3%	7.7%	
3. 委員会でき取り組む	18.2%	16.9%	19.2%	23.9%	20.8%	14.9%	15.3%	17.9%	16.6%	23.6%	22.8%	24.1%	20.0%	16.8%	13.7%	
4. 活発に自己評価	20.3%	24.2%	17.6%	15.8%	20.3%	25.0%	18.2%	16.4%	21.2%	17.4%	32.5%	15.7%	22.3%	18.3%	17.3%	
5. わからない	33.7%	29.8%	36.4%	36.6%	29.0%	34.2%	36.7%	27.4%	34.3%	37.5%	21.9%	36.1%	30.1%	36.7%	41.1%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(2,946)	(1,221)	(1,725)	(418)	(355)	(552)	(567)	(201)	(452)	(144)	(114)	(83)	(1,569)	(1,018)	(336)	
b) 学科																
1. 取り組んでいない	11.2%	10.6%	11.5%	10.0%	12.5%	10.9%	11.6%	16.6%	9.0%	8.2%	7.1%	16.0%	11.0%	11.4%	11.4%	
2. 委員会設置を検討	11.5%	11.8%	11.3%	10.7%	11.0%	11.1%	12.5%	14.1%	10.7%	10.4%	14.3%	7.4%	11.7%	11.9%	9.9%	
3. 委員会でき取り組む	25.4%	25.9%	25.0%	28.1%	28.6%	21.5%	25.2%	26.1%	25.4%	27.6%	25.9%	30.9%	27.9%	23.2%	20.1%	
4. 活発に自己評価	20.3%	23.2%	18.4%	15.5%	21.8%	25.0%	21.2%	17.1%	100.0%	14.2%	32.1%	13.6%	21.8%	19.0%	17.7%	
5. わからない	31.6%	28.5%	33.7%	35.7%	26.1%	31.5%	29.5%	26.1%	37.8%	39.6%	20.5%	32.1%	27.6%	34.5%	40.8%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(2,950)	(1,200)	(1,750)	(420)	(353)	(559)	(614)	(199)	(421)	(134)	(112)	(81)	(1,586)	(1,009)	(333)	
c) 学部																
1. 取り組んでいない	5.1%	4.6%	5.5%	3.5%	6.2%	4.8%	4.3%	4.7%	7.8%	2.1%	1.7%	8.3%	5.1%	4.7%	6.4%	
2. 委員会設置を検討	9.8%	9.8%	9.8%	9.7%	8.9%	8.3%	10.8%	8.9%	10.0%	11.3%	13.6%	7.1%	10.1%	9.2%	10.2%	
3. 委員会でき取り組む	31.5%	31.9%	31.3%	33.6%	36.1%	30.4%	31.5%	35.7%	27.1%	34.0%	27.1%	36.9%	33.8%	30.9%	22.7%	
4. 活発に自己評価	25.7%	28.3%	24.0%	22.8%	27.0%	29.0%	26.5%	28.2%	20.6%	19.1%	39.0%	20.2%	27.4%	25.5%	18.7%	
5. わからない	27.8%	25.4%	29.5%	30.4%	21.8%	27.5%	27.0%	22.5%	34.6%	33.3%	18.6%	27.4%	23.7%	29.6%	42.0%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,076)	(1,246)	(1,830)	(434)	(371)	(579)	(623)	(213)	(451)	(141)	(118)	(84)	(1,656)	(1,053)	(343)	
d) 大学																
1. 取り組んでいない	3.1%	2.9%	3.3%	0.9%	3.4%	2.4%	3.7%	1.9%	5.5%	2.1%	1.7%	5.7%	3.1%	2.6%	4.5%	
2. 委員会設置を検討	7.8%	7.4%	8.1%	5.6%	7.3%	7.6%	8.7%	6.9%	8.6%	9.6%	7.5%	6.9%	8.5%	6.8%	7.7%	
3. 委員会でき取り組む	33.6%	33.1%	33.9%	38.1%	37.3%	35.1%	32.3%	31.5%	28.5%	34.2%	30.8%	37.9%	36.2%	32.0%	26.1%	
4. 活発に自己評価	29.3%	31.4%	27.9%	30.9%	33.3%	30.7%	28.3%	35.2%	20.4%	19.9%	43.3%	27.6%	30.3%	30.2%	22.2%	
5. わからない	26.2%	25.2%	26.8%	24.4%	18.6%	24.2%	27.0%	24.5%	36.9%	34.2%	16.7%	21.8%	21.9%	28.4%	39.5%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	(3,130)	(1,262)	(1,868)	(446)	(381)	(592)	(629)	(216)	(452)	(146)	(120)	(87)	(1,689)	(1,065)	(352)	

高等教育研究叢書 バックナンバー

旧大学研究ノート

- 第 1 号 (1971. 8) サセックス大学のカリキュラム：自然科学系ハンドブック1966-67より
 …… 大学問題調査室〔編訳〕
- 第 2 号 (1971. 9) ドイツの大学における Institute 数及び教授数に関する集計
 …… 近藤春生
- 第 3 号 (1971.10) 高等教育に関する主要外国雑誌目録 …… 岩村 聡〔編〕
- 第 4 号 (1972. 7) 欧米の医学カリキュラム …… 杉原芳夫〔編訳〕
- 第 5 号 (1972. 8) アメリカ合衆国の主要大学に関する基本資料
 …… 関 正夫・川上昭吾〔編訳〕
- 第 6 号 (1973. 2) サセックス大学のカリキュラム：人文・社会系ハンドブック1966-67より
 …… 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 7 号 (1973. 3) 諸大学学寮規程・規則集(1) …… 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 8 号 (1973. 8) ドイツ大学改革と学生生活の現況 マールブルク大学を中心として
 …… 千代田 寛・阪口修平
- 第 9 号 (1973. 9) 広島大学医学部紛争における医局・講座，大学院および学位制度問題資料
 …… 杉原芳夫〔編〕
- 第 10 号 (1974. 1) 理学部生物学科の調査－カリキュラムを中心に …… 川上昭吾
- 第 11 号 (1974. 2) 大学院・研究体制に関する文献目録 …… 喜多村和之〔編〕
- 第 12 号 (1974. 2) 大学院・学位に関する規定集 …… 喜多村和之〔編〕
- 第 13 号 (1974. 3) アメリカ工業教育協会報告書：工学系学生のための教養教育
 …… 関 正夫〔編訳〕
- 第 14 号 (1974. 3) 諸大学学寮規定・規則集(2) …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 15 号 (1974. 6) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究
 農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究
 ー普通高校生との比較ー …… 山谷洋二
- 第 16 号 (1974. 9) カリフォルニア大学の農学系カリキュラム …… 山谷洋二〔編訳〕
- 第 17 号 (1975. 1) ヨーロッパの学生宿舎を見て …… 横尾壮英
- 第 18 号 (1975. 2) 学寮の管理運営の法的検討 …… 畑 博行・村上武則
- 第 19 号 (1975. 3) 大学院・学位制度に関する資料集 …… 寺崎昌男〔編〕
- 第 20 号 (1975.10) 大学の大衆化をめぐって ー第3回(1974年度)研究員集会の記録ー
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 21 号 (1976. 1) 大学英語教育に関するアンケート調査－広島大学における学生の意見－
 …… 五十嵐二郎・稲田勝彦・岩村 聡
 …… 藤本黎時・湯浅信之
- 第 22 号 (1976. 3) 西ドイツ高等教育改革の青写真 …… 天野正治
- 第 23 号 (1976. 3) 宮城教育大学の教育改革－視察報告－ …… 教師教育プロジェクト〔編〕

- 第 24 号 (1976. 8) 広島大学学生の宿舍と生活—アンケート調査から
…… 黒川正流・上里一郎・岩村 聡
- 第 25 号 (1976. 9) 高学歴社会—その現実と将来— 第4回 (1975年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 26 号 (1976.11) 大学の組織・運営に関する総合的研究 … 組織・運営プロジェクト〔編〕
- 第 27 号 (1977. 2) 教師教育カリキュラムの研究 …………… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 28 号 (1977. 2) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する
意識の調査・研究—その2 東日本の場合— …………… 山谷 洋二
- 第 29 号 (1977. 3) 理学系学生に対する教養課程における自然科学教育に関する調査・研究
—広島大学一般教育課程における物理学教育に関するアンケートから—
…… 理科系教育研究プロジェクト (物理グループ)
- 第 30 号 (1977. 6) 日本のアカデミック・プロフェッション
—帝国大学における教授集団の形成と講座制— … 天野 郁夫
- 第 31 号 (1977. 9) 大学における専門教育 —第5回 (1976年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 32 号 (1978. 8) 大学の国際化 —第6回 (1977年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 33 号 (1978.10) 諸外国の大学における国際交流—とくにアメリカ合衆国を中心として—
…… 喜多村 和之・天野 郁夫・湯浅 信之
- 第 34 号 (1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題(I)
—広島大学の事例を中心として—
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト〔編〕
- 第 35 号 (1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題(II)
—理科系専門教育の立場から—
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト〔編〕
- 第 36 号 (1979. 2) 広島大学医学部と地域社会 …………… 大学と地域社会プロジェクト
- 第 37 号 (1979. 5) 諸外国における一般教育および科学技術教育改革の動向
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト〔編〕
- 第 38 号 (1979. 7) 高等専門学校の現状と課題 …………… 葉柳 正
- 第 39 号 (1979.10) 地域社会と大学 —第7回 (1978年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 40 号 (1979.11) 大学と地域社会の相互関連に関する調査研究(I)
—広島大学教員実態調査—
…… 大学と地域社会プロジェクト (池田秀男)
- 第 41 号 (1979.12) 大学の国際交流に関する文献目録……「大学の国際化」プロジェクト〔編〕
- 第 42 号 (1979.12) 大学と地域社会の相互関連に関する調査研究(II)
—地域住民の大学観—
…… 大学と地域社会プロジェクト (吉森 護)
- 第 43 号 (1980. 1) 日本の大学における外国人教員—全国調査結果の概要—
…… 「大学の国際化」プロジェクト〔編〕

- 第 44 号 (1980. 7) 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究(Ⅳ) —広島大学と地域社会—
…… 大学と地域社会プロジェクト (黒川正流)
- 第 45 号 (1980. 7) 大学農学教育に関する文献目録 …………… 山 谷 洋 二〔編〕
- 第 46 号 (1980. 9) 理科系学生に対する一般教育の現状と課題
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 47 号 (1980.11) 諸外国の大学における外国人教授の任用—制度と実態—
…… 喜多村 和 之
- 第 48 号 (1981. 7) 大学医学教育に関する文献目録 …………… 川 崎 尚〔編〕
- 第 49 号 (1981. 8) 科学社会学の研究 …………… 新 堀 通 也〔編〕
- 第 50 号 (1981.10) 大学における教育機能 (Teaching) を考える
—第 9 回 (1980年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 51 号 (1982. 1) 19世紀における科学の制度化と大学改革—フランス・ドイツ・英国—
…… 成 定 薫〔編〕
- 第 52 号 (1982. 2) 日本の大学院教育に関する留学生の意見調査
—全国調査結果の概要— …… 「大学の国際化」プロジェクト〔編〕
- 第 53 号 (1982. 3) 工学系大学・学部の教育改革に関する事例研究
—広島大学工学部改革調査—
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト〔編〕
- 第 54 号 (1982.10) 大学における教授と学習 —第10回 (1981年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 55 号 (1982.12) 教師教育カリキュラムの研究(2) …………… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 56 号 (1983. 3) 日本の理工系大学教育の現状と将来像
—全国大学教員意見調査結果の概要—
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト〔編〕
- 第 57 号 (1983. 8) 大学教育とカリキュラム —第11回 (1982年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 58 号 (1983.11) 高等教育に関する統計資料
—理工系分野を中心にして— …………… 前 川 力
- 第 59 号 (1984.10) 大学における教育と研究の接点を求めて
—第12回 (1983年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 60 号 (1985. 1) 外国大学における日本研究 …………… 新 堀 通 也〔編〕
- 第 61 号 (1985. 3) 明治初期専門教育成立に関する公文関係史料 …… 三 好 信 浩〔編〕
- 第 62 号 (1985. 3) 日本の大学教育の現状・課題・展望
—カリキュラムとティーチングを中心に—
…… 「大学教育に関する全国調査」プロジェクト〔編〕
- 第 63 号 (1985.10) 新制大学の35年—その功罪を考える—
—第13回 (1984年度) 研究員集会の記録—

- …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 64 号 (1986. 3) 学生の体調とやる気 …………… 石 桁 正 士・岩 崎 重 剛
- 第 65 号 (1986. 3) 研究者の流動性と研究能力の向上に関する研究
…… 小 林 信 一・塚 原 修 一・山 田 圭 一
- 第 66 号 (1986. 3) アカデミック・プロダクティビティの条件に関する国際比較研究
…… 有 本 章〔編〕
- 第 67 号 (1986. 8) 大学入試と教育改革 ―第14回 (1985年度) 研究員集会の記録―
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 68 号 (1986. 2) 将来社会における研究者の需給予測に関する研究
…… 山 田 圭 一〔編〕
- 第 69 号 (1987. 3) アジアの高等教育 …………… 馬 越 徹〔編〕
- 第 70 号 (1988. 1) アジア 8 か国における大学教授の日本留学観(上)
…… 権 藤 与志夫〔編〕
- 第 71 号 (1988. 1) 官学と私学―大学の設置形態と国公立大学の将来―
―第15回 (1986年度) 研究員集会の記録―
……大学教育研究センター〔編〕
- 第 72 号 (1988.11) 大学と政府―高等教育における役割と責任―
―第16回 (1987年度) 研究員集会の記録―
……大学教育研究センター〔編〕
- 第 73 号 (1989.10) 臨教審と高等教育改革
―第17回 (1988年度) 研究員集会の記録―
……大学教育研究センター〔編〕
- 高等教育研究叢書**
- 第 1 号 (1990. 3) 留学生受入れと大学の国際化
―全国大学における留学生受入れと教育に関する調査報告―
…… 江 淵 一 公〔編〕
- 第 2 号 (1990. 3) 大学教育改革の方法に関する研究
―Faculty Development の観点から― …… 関 正 夫〔編〕
- 第 3 号 (1990. 3) 近代日本高等教育における助手制度の研究
…… 伊 藤 彰 浩・岩 田 弘 三・中 野 実
- 第 4 号 (1990. 3) ファカルティ・デベロップメントに関する文献目録および主要文献紹介
…… 伊 藤 彰 浩〔編〕
- 第 5 号 (1990. 3) 大学教育の改善に関する調査研究―全国大学教員調査報告書―
…… 有 本 章〔編〕
- 第 6 号 (1990. 3) 「大学」外の高等教育 国際的動向とわが国の課題
…… 阿 部 美 哉・金 子 元 久〔編〕
- 第 7 号 (1990.10) 大学評価 ―その必要性と可能性―
―第18回 (1989年度) 研究員集会の記録―

- …………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 8 号 (1991. 3) 中国高等教育関係法規 (解説と正文) …………… 大塚 豊
- 第 9 号 (1991. 3) 学生の勉学のやる気の状態遷移の分析
…………… 石 桁 正 士・岩 崎 重 剛・横 山 宏
- 第 10 号 (1991. 3) 学術研究の改善に関する調査研究
—全国高等教育機関教員調査報告書— …………… 有 本 章〔編〕
- 第 11 号 (1991. 3) アジア 8 か国における大学教授の日本留学観 (下)
…………… 権 藤 与志夫〔編〕
- 第 12 号 (1991. 3) 諸外国のFD/S Dに関する比較研究 …………… 有 本 章〔編〕
- 第 13 号 (1991. 3) ヨーロッパにおける留学生受入れのシステムと現状
—独・仏・英国現地調査報告— …………… 江 淵 一 公
- 第 14 号 (1991.10) 2005年に向けてのカリキュラム改革
—食糧・農業科学の将来計画— …………… 山 谷 洋 二〔訳〕
- 第 15 号 (1991.11) 大学評価 —提案と批判—
—第19回 (1990年度) 研究員集会の記録—
…………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 16 号 (1992. 1) アジア 8 カ国における大学教授の日本留学観
—総合的考察— …………… 権 藤 与志夫〔編〕
- 第 17 号 (1992. 2) 外国留学効果の評価に関する研究
—フルブライト計画によるアメリカ大学院留学体験者を
対象とする調査研究報告書—
…………… 小 林 哲 也・星 野 命〔編〕
- 第 18 号 (1992. 3) 短期大学教育と現代女性のキャリア
—卒業生追跡調査の結果— …………… 金 子 元 久〔編〕
- 第 19 号 (1992.10) アメリカの大学院評価
—大学院教育の専門分野別評価を中心に—
…………… 江 原 武 一・奥 川 義 尚
- 第 20 号 (1992.11) 高等教育改革の新段階 — 大学審議会答申を踏まえて —
— 第20回 (1991年度) 研究員集会の記録 —
…………… 大学教育研究センター〔編〕

執筆者紹介（☆印は編者）

- ☆有本 章 広島大学 大学教育研究センター教授
（教育社会学、大学・高等教育論）
- 江原 武一 京都大学 教育学部教授
（比較教育学）
- 山野井敦徳 富山大学 教育学部教授
（教育社会学）
- 相原総一郎 広島大学 大学教育研究センター助手
（教育社会学）
- 山内 乾史 広島大学 大学教育研究センター助手
（教育計画論）
- 阿曾沼明裕 広島大学 社会科学研究科大学院生
（比較大学研究、科学論）
- 小方 直幸 広島大学 社会科学研究科大学院生
（比較大学研究、教育社会学）



大学評価と大学教授職

— 大学教授職国際調査〔1992年〕の中間報告 —

（高等教育研究叢書 21）

1993（平成5）年3月30日 発行

編 者 有本 章

発行所 広島大学 大学教育研究センター
〒730 広島市中区東千田町1丁目1-89
電話 (082)241-1221 内線 (3706)

印刷所 たくみ印刷株式会社
〒733 広島市西区井口明神2丁目1-21
電話 (082)278-2111(代)

ISBN4-938664-21-6

IRE